

奇譚クラブ



1974

12月号

新しい風俗文献誌

奇譚クラブ

1974・12

奇譚クラブ 昭和49年12月1日発行 12月号(第26巻第12号) 毎月1回1日発行 昭和31年4月20日第3種郵便物認可 昭和42年4月21日国鉄大田特別郵便承認第210号

THE KITAN CLUB

Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan

12

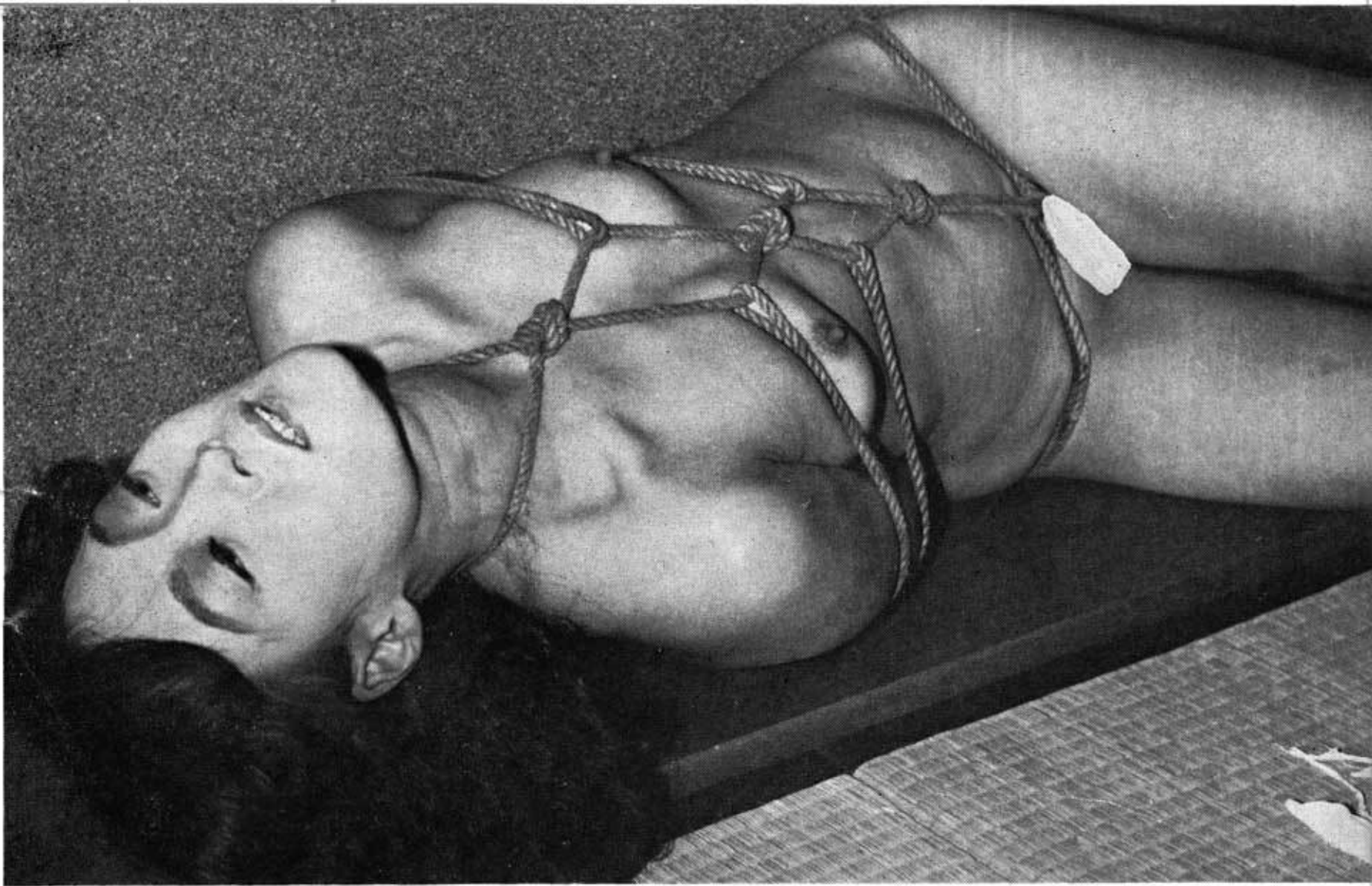
荷入新只豚白

影撮・三鉄本塚

弄びたくなる豊満さ



△山口艶子▽



フォト「私をいじめて下さい」 〔中河恵子〕……池田 勝……(29)
〔カメラ〕と「ペン」のルポルタージュ 〔山口艶子の巻〕

『獣になりたがる女』……塚本 鉄三……(30)

須崎旭様のイメージ画に寄せて……北川まりこ……(74)

贗作「真知子」……小沢 準一……(82)

連載小説『大 噴 火』 〔八七十二回〕……千葉 青鬼……(86)

連載・Mグループ作品『女の虜囚』 〔10〕……佐治 麻造……(94)

大振袖・花嫁緊縛プレイの魅力……高橋 秀樹……(105)

論評『さるぐつわ』 〔2〕……新川 裕夫……(108)

新婚愛戯生活日記……杉谷 潤二……(117)

連載時代S小説『紫蘭の門』 〔41〕……風流極道軒……(122)

論稿・縛りの美学……ロマン派生……(134)

連載・M派交友録 〔57〕『マゾと賃金』……鬼山 絢策……(142)

ハワイ・ポルノ紀行
『デープ・スロートとアメリカポルノ』……長谷田亀治……(157)

女相撲ノート 〔2〕……雄松比良彦……(162)

深田菊子さんに捧げるパレード……水江 伸……(168)

SMの旅・紀行文
嗚呼、素晴しきセブの美女……竹迫 誠也……(177)

シナリオ・スカトロジーに関する一考察……真木かおる……(184)

緊縛撮影記・女二十才の夏の経験……柚 真男……(192)

読者通信……編集部選……(260)

カラー・フォト・セクシオン (十三態)
山口艶子・渡部好美・玉木章子・堀貴代子
矢島靖子・前田真知子・深田菊子

白豚只今新入荷 (塚本鉄三・撮影)

弄びたくなる豊満さ ● 白豚の喘ぎと悶え
叩きたくなる臀部 ● 新入荷白豚の荷造
メス犬と白豚の幻想 ● 肥満体の緊縛美

責めの悦虐に泣く ● 菱縄羞恥責め

一直線に伸びた脚 ● 棒責め地獄 ● 深田 菊子
恍惚境をさまよう ● さるぐつわの悦楽

両膝吊りの羞恥 ● 白肌は縄の餌食

開股責めが終りて
椅子に晒す裸身
前田真知子
玉木 章子
堀 貴代子

イメージギャラリー

「芋虫男」「オイボレ

馬はやっぱり駄目ね」

春日田春男

「今宵の趣向」

「吊り」：岡 たかし

目次フォト

中河 恵子

矢島 靖子



奇 ク サ ロ ン (204)

S Mから見た結婚生活 田中 順三
日本国の灸 伊東 道夫
Mの女―高村浩子 江尻 助兵
「S Mの心」偶感 大月 吐志夫
手鏡の中のロマンを読んで 上田 光一
私のS M体験から 角谷 健六
妊婦雑感 鶴崎 満人
ゴム衣プレーへのいざない 黒田 了平
女臍礼讃 豊中 三郎
小生のプレイ・プラン 後野 三郎
菊花受難 仕上 太郎
愛姦会からセックス開放へ 高上 三佳
被虐の映像 汐見 剛也
妊婦腹に憑かれた男 小林 腹吉
ある車中での見聞 秋野 美水
忌憚なき奇譚クラブ読者評 林 繁三
女王様の御名のりを待つ 光林 裕二
藤田明子さんに恋うる 秋田 春夫
切腹プレイに悶える女 石井 次郎
羞恥責めの構想に寄せて 沙次 須知時

煙草責め吊り責め拷問考 城野 道一
サディストの告白を観て 舟橋 一郎
獣姦、人姦、二重奏 甲斐 千恵子
大振袖花嫁衣裳の被虐美 山本 五郎
被虐の悦び 深田 菊子
短信往来・ゴム通信 青木 順一
感想 小池 明男
S研のことども 海老名 剱策
緊縛フォトに魅せられて 嵐 竜児
編集部だより 編 集 部
パリ滞在のことなど 毛利 雪男
あなたのためのスケッチ帳 磨矢 圭太
奇クマニア撮影会 大西 弘明
マゾ女の哀感 安倍 澄子
月心寺を訪ねて 前田 真知子
神酒の戴き方について 乃美 対造
S研ニュース 塚本 鉄三
女の色香に迷って 菅 夢男
刺青マニアの女房 釜谷 一郎
読者短信・短い告白 高座 一郎
ゴム衣の好みに寄せて 縄木 縛太郎



白豚の喘ぎと悶え

＜山口 艶子＞





責めの悦虐に泣く

＜中 河 恵 子＞



叩きたくなる臀部

＜山口 艶子＞

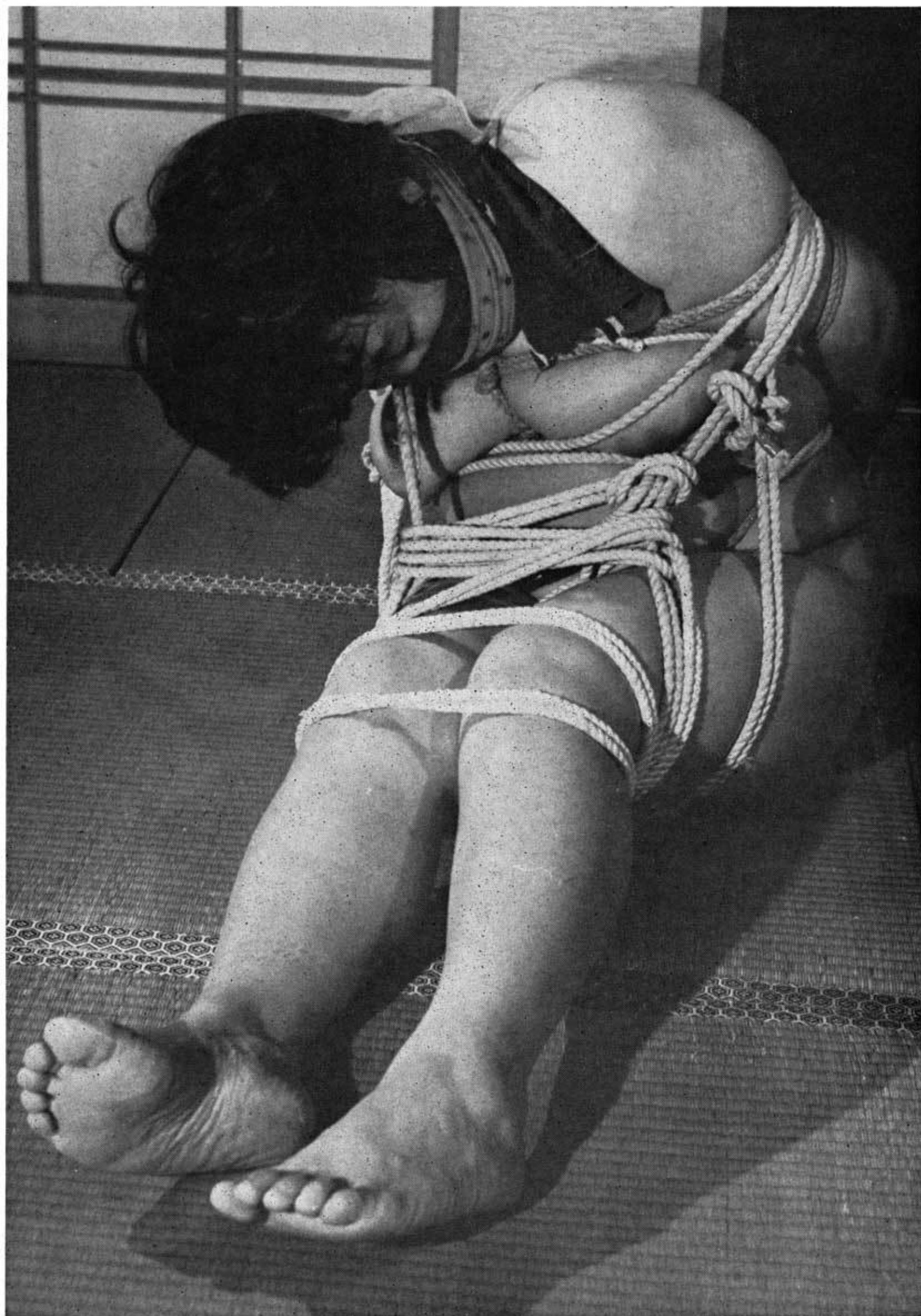


一直線に伸びた脚

＜深田菊子＞

新入荷白豚の荷造

＜山口 艶子＞





恍惚境をさまよう

＜笠井奈保子＞



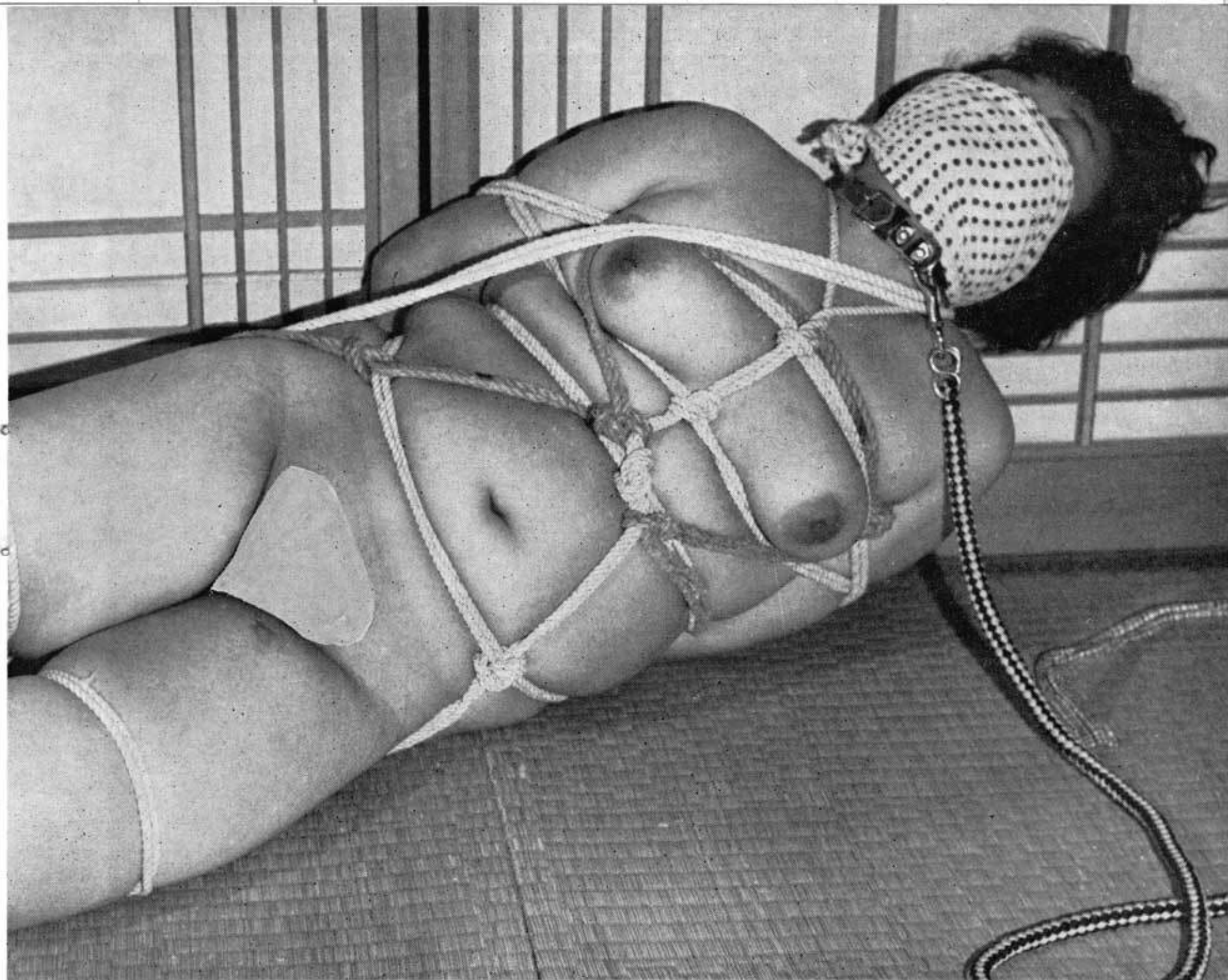
両膝吊りの羞恥

＜前田真知子＞



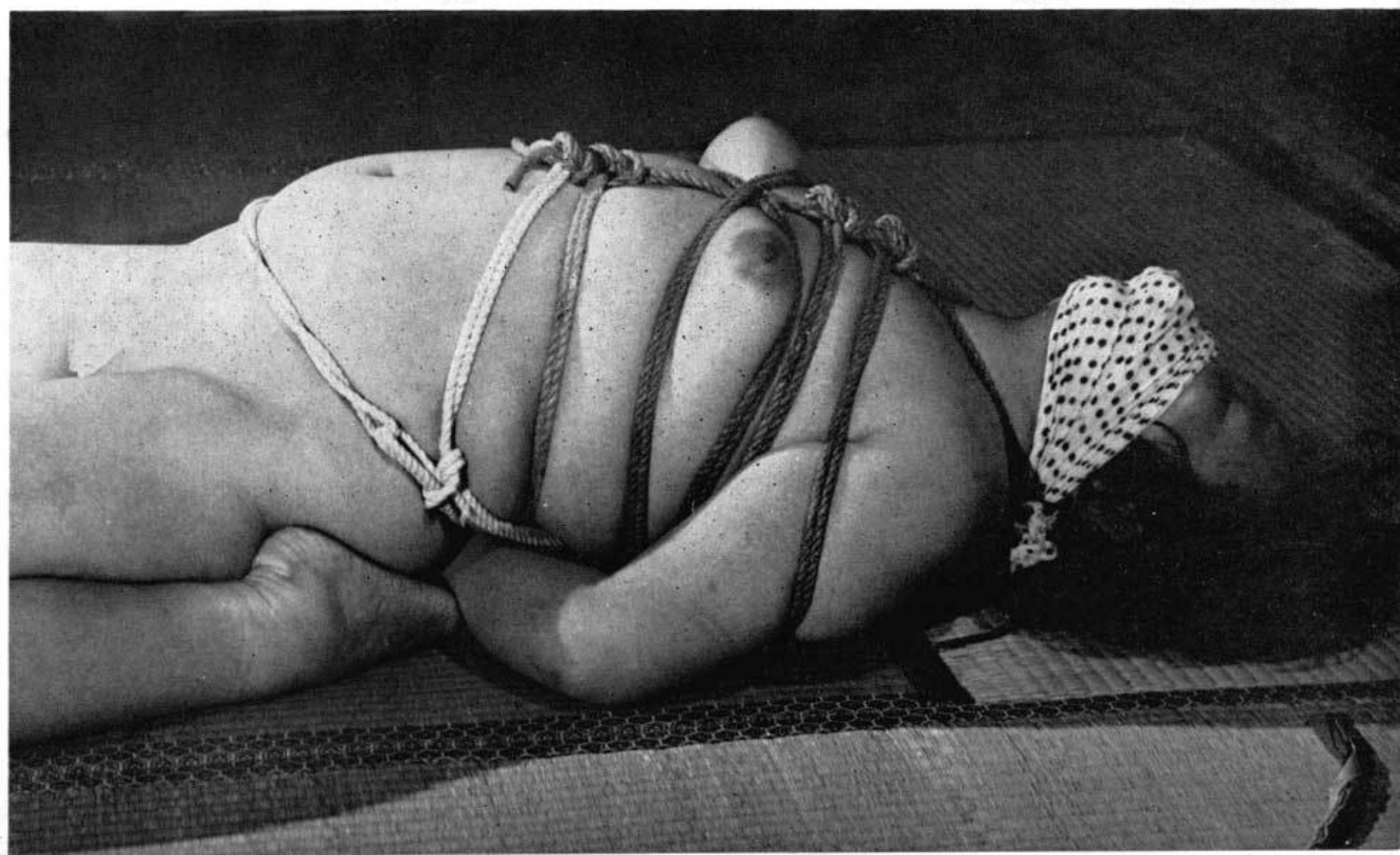
開股責めが終りて

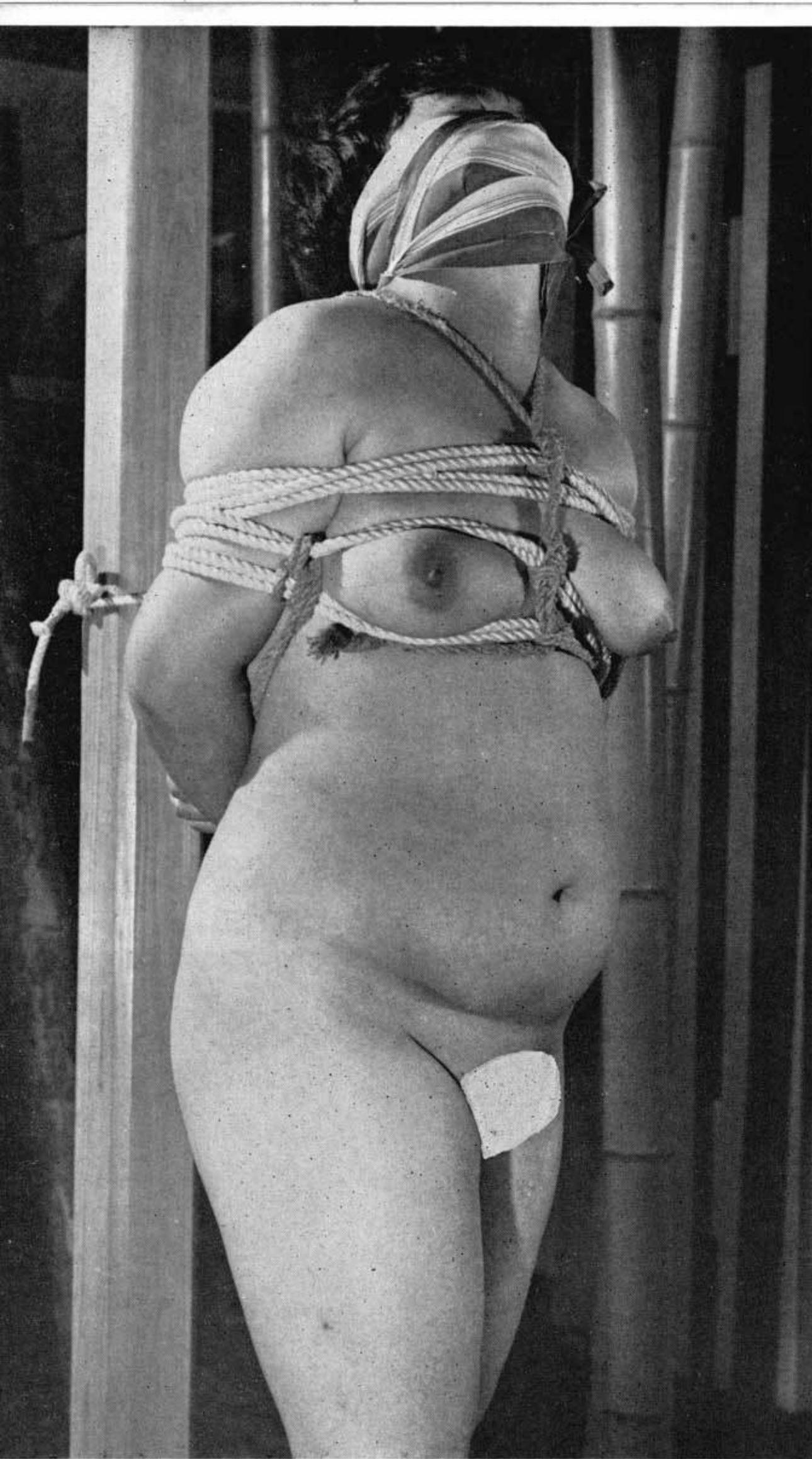
＜玉木章子＞



メス犬と白豚の幻想

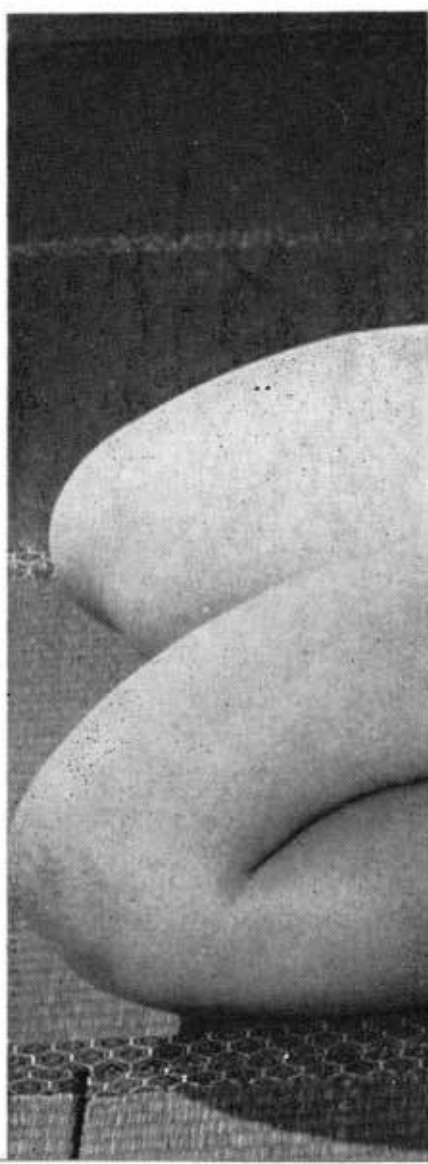
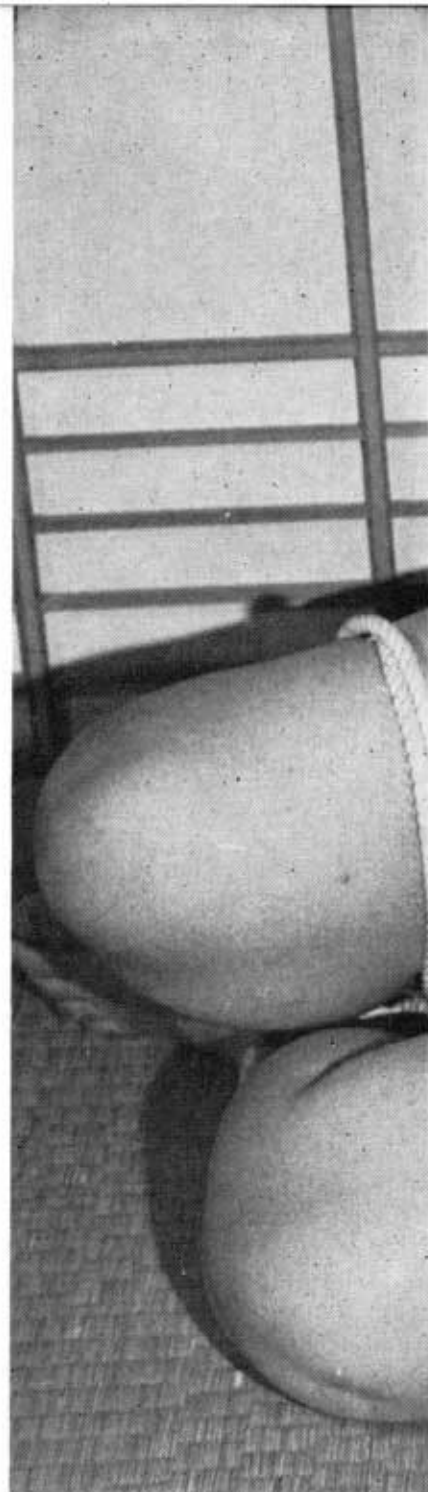
＜山口 艶子＞





肥満体の緊縛美

＜山口 艶子＞





棒 責 め 地 獄

＜深 田 菊 子＞



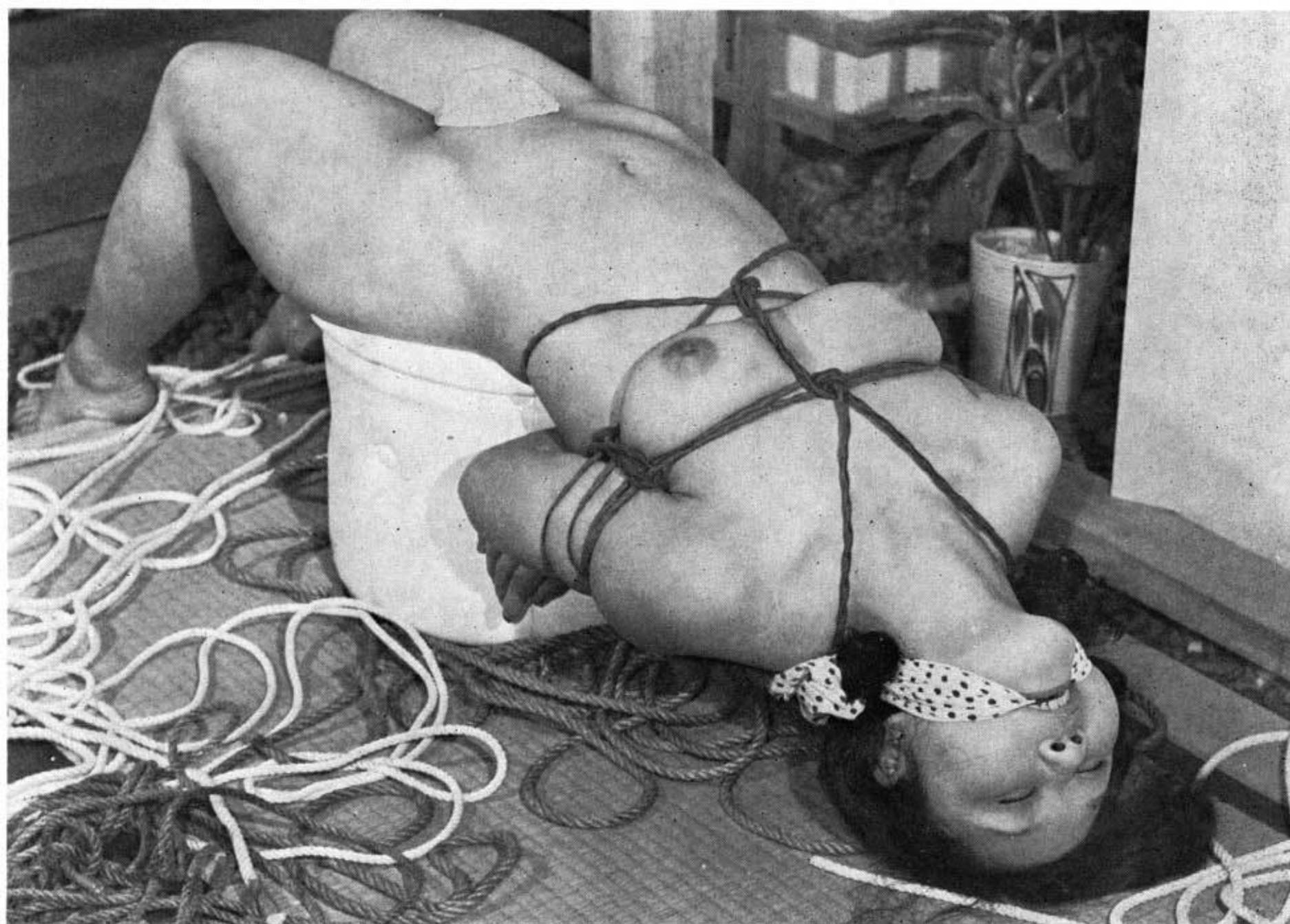
椅子に晒す裸身

＜堀 貴 代 子＞



白肌は縄の餌食

〈前田真知子〉



さるぐつわの悦楽

〈笠井奈保子〉



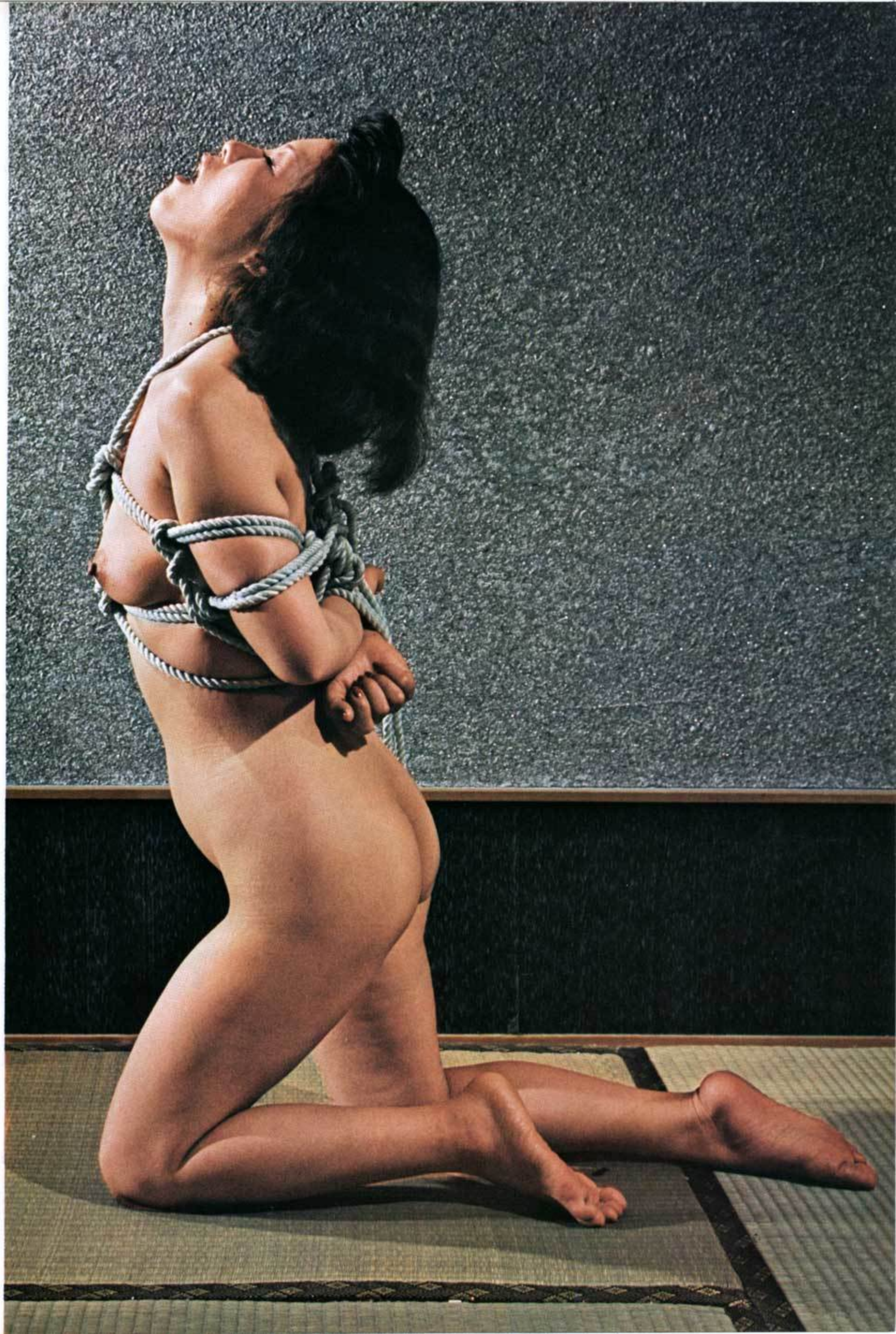
菱 縄 羞 恥 責 め

＜中 河 恵 子＞

















奇

譚

ク

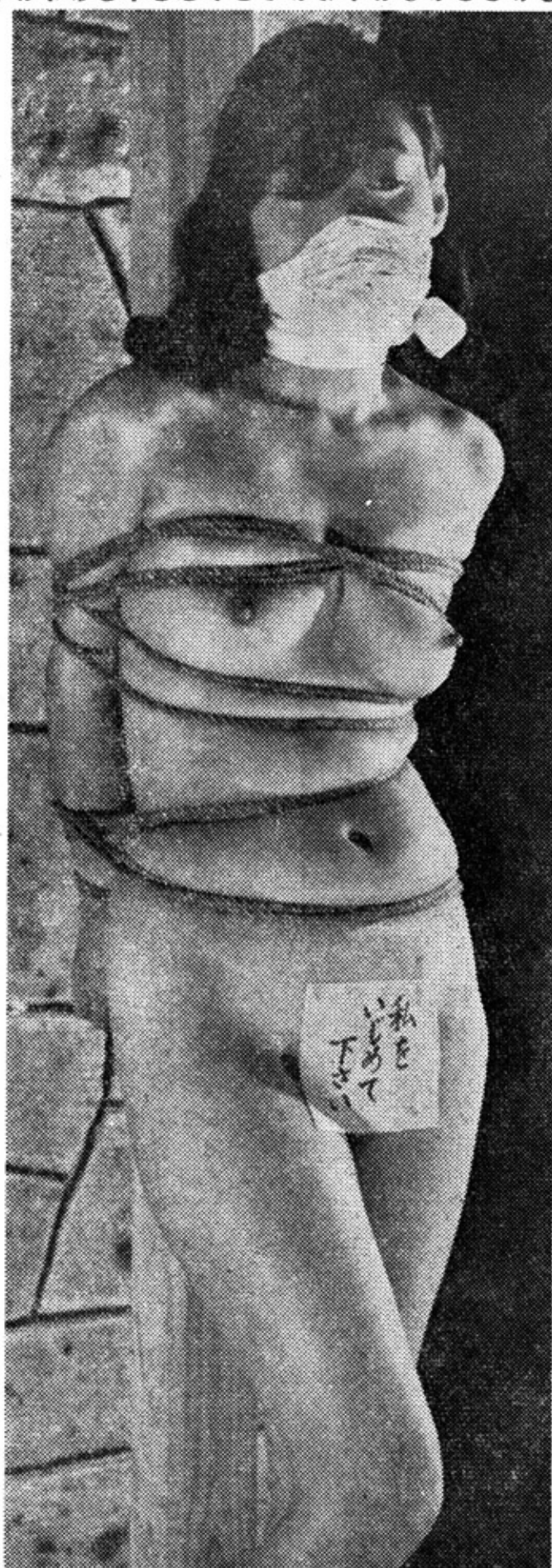
ラ

ブ

1 9 7 4

12 月 号

<第 28 卷 第 12 号 通刊第 322 号>



.....私をいじめて下さい.....モデル.....中河 恵子.....

中肉中背の、この、しなやかな肢体の持主である恵子が、私の目に、くっきりと印象づけられたのは、恵子が単なる裸のからだを縛られて誌上に晒すだけの女ではないということを知ってからだった。自己の内面的なマゾの性格を、これほど正確に且つ魅力的に告白として発表したということは、私にとっては

一つの驚異であった。恵子の縛られた美しい肢体を觀賞するばかりでなくて、彼女のその時の心の裡まで手にとるように見ることが出来るという事はSMに強い関心を持つ者にとって、痺れる様な喜びでもあった。そして、恵子の緊縛姿態が一段と美しく見えた事でもあった。

(池田 勝・記)

「カメラ」と「ペン」のS M ルポルタージュ

獣ケモノになりたがる女おんな

塚つか 本もと 鉄てつ 三ぞう

メス豚——調教飼育——日記——山口艶子の巻

私が今までに縛った女性のなかで、彼女こそは、まさに一番のキングサイズだった。バスト一〇五、ウエスト八五、ヒップ一一〇、体重七六キロ——が示すように、そのプロポーションは、驚異に値する超弩級型だった。私は、この見事な女体を思いのままに責めることが出来るという興奮で胸が躍った。そして、予想にたがわず、その素晴らしい肉体から発する無限のスタミナに惑溺した結果、私のS M 女体遍歴の記録の上に新しい一頁が付け加えられたのであった。



☆文学少女の手紙

私は、この山口艶子なる未知の女性から初めて手紙を貰ったときは、よもや、この女性とS M プレイをすることが出来るなどとは夢にも考えてもみなかった。

新潟県新井市——。

それが、彼女の住所である。日本全国各地で、新興都市が次々と誕生する昨今、私にも耳新しい、市の名前であった。まして、まだ一度も訪ねたことのない土地である。私にはそこが冬には豪雪に街中が埋もれてしまう辺境の地に思えた。

昨年の十二月号で、私は「S M 研究会の提唱」という一文を載せて貰ったが、僅か原稿

用紙にして一枚足らずのささやかなこの文章に対して、私自身、びっくりするくらい大きな反響があった。勿論、奇巧の熱心な愛読者である男性からの便りが殆どであったが、女性からの便りも、かなりあったのだ。

それからの私は大変、忙しかった。これらの手紙の返事を書くということだけでも並大抵ではなかったのに、電話での応待にも少なからず時間をとられた。

それに、毎月号のカメラ・ルポの記事。これを毎月、穴をあけずに書くということは、新聞記事並に、プレイが終ったなら即刻、ルポ記事とプレイ写真を調達しなければならなかった。だから、昼は普通の仕事に専念していても、夜ともなれば人の寝静まった頃を見はからって、ルポ記事を一気に書き上げねばならず、そこへ、更に手紙の返事を書くということは、いささか苦痛だった。

そんなところへ山口艶子なる女性から私宛に手紙が来た。

『SM研究会』の呼びかけに応じてきたのだが、同じ十二月号のカメラ・ルポ『畜化願望の女』のヒロイン苗木陽子の肥満体と被虐のポーズに共感を持ったという彼女の言葉には大変な熱が、こもっていた。

自称文学少女——だという山口艶子は、自分の体験を文章にしたいと言ってきた。そして、文章というものを、どうして書いたらいいのか、と、私に教を乞うて来たのだ。

私は、素直に、ありのままを、思った通りに書いてみなさい、と——返事した。

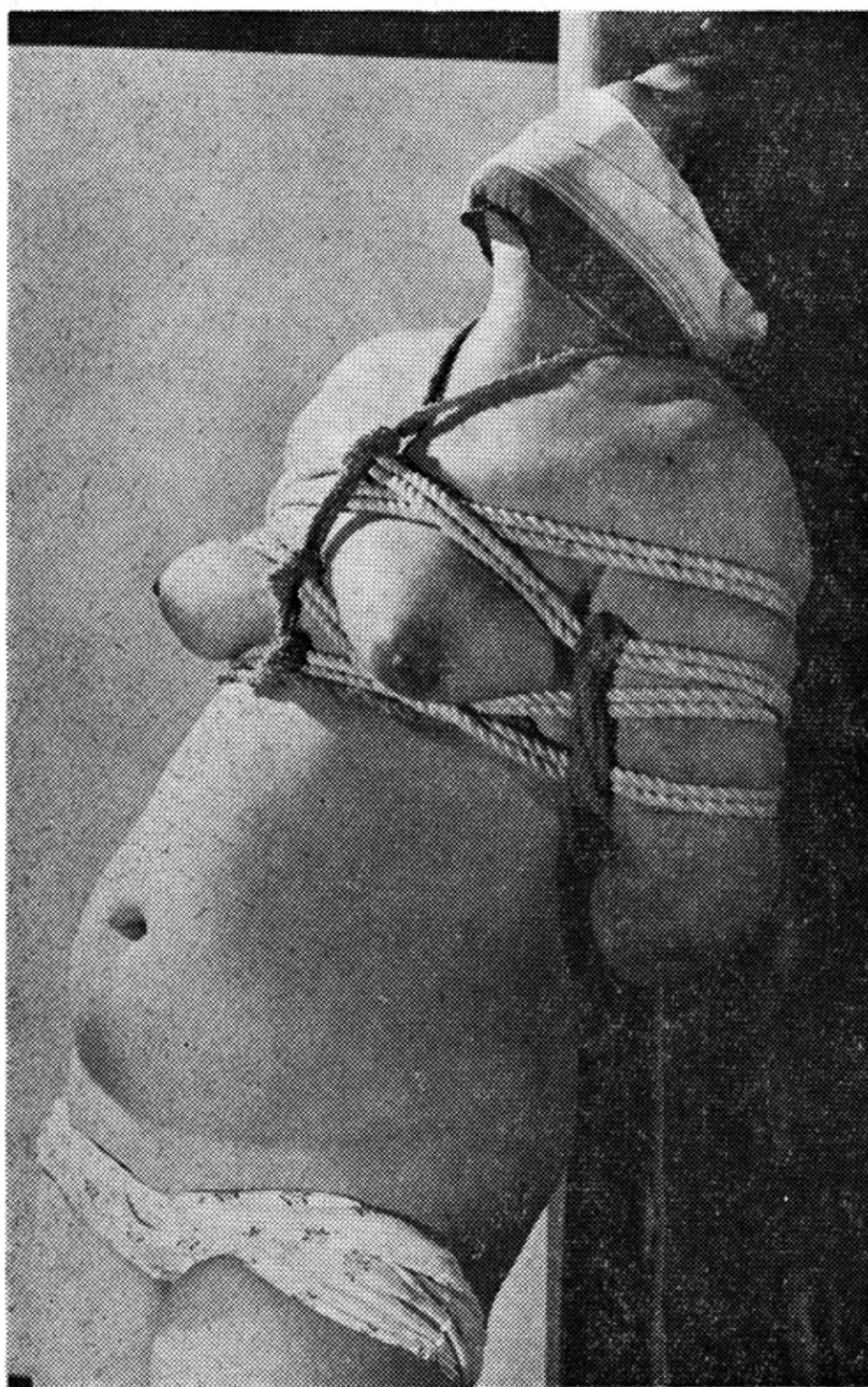
すると、折り返し、書き出しは、どうしたらいいの？ 書き出しがわからないから、書けないわ——と言ってきた。

私は、もう面倒くさくなって、それでは、

とにかく、最初に『神様』と二字書き、その次の行に、『神様、私は何もかも、正直に、告白いたします』と書きなさい。そうすると書けるんじゃないですか、と答えてやった。

それから暫くして、便箋十数枚に、びっちり書いた彼女からの手紙が来た。

その『神様』に向けて偽らざる告白をした彼女のあからさまな手紙を読んで、私は、こ



の女は、所詮、SMプレイに向くような女ではないと思った。

露骨と思われるほどの彼女の直截的な手紙（それだけに、正直といえば正直といえる）を読んで、私は一瞬、その文章が彼女の作り話ではないかと疑った。そして更に気をまわせば、女性名は使っているが、ひょっとしたら、男性ではないかとさえ思った位だった。その手紙の内容というのが、事實は小説よりも奇なり——と言われる通り、まさにショックなものであった。

これが作り話でなくて事実、本当の話なのだろうか。

手紙の文章が稚拙で、しかも露骨なので、一層、私に、そんな疑問を持たした。手紙の内容というのは、こうだ。

☆初体験が輪姦

山口艶子の告白の便りを要約すると、その話は、今から数年前に遡る。

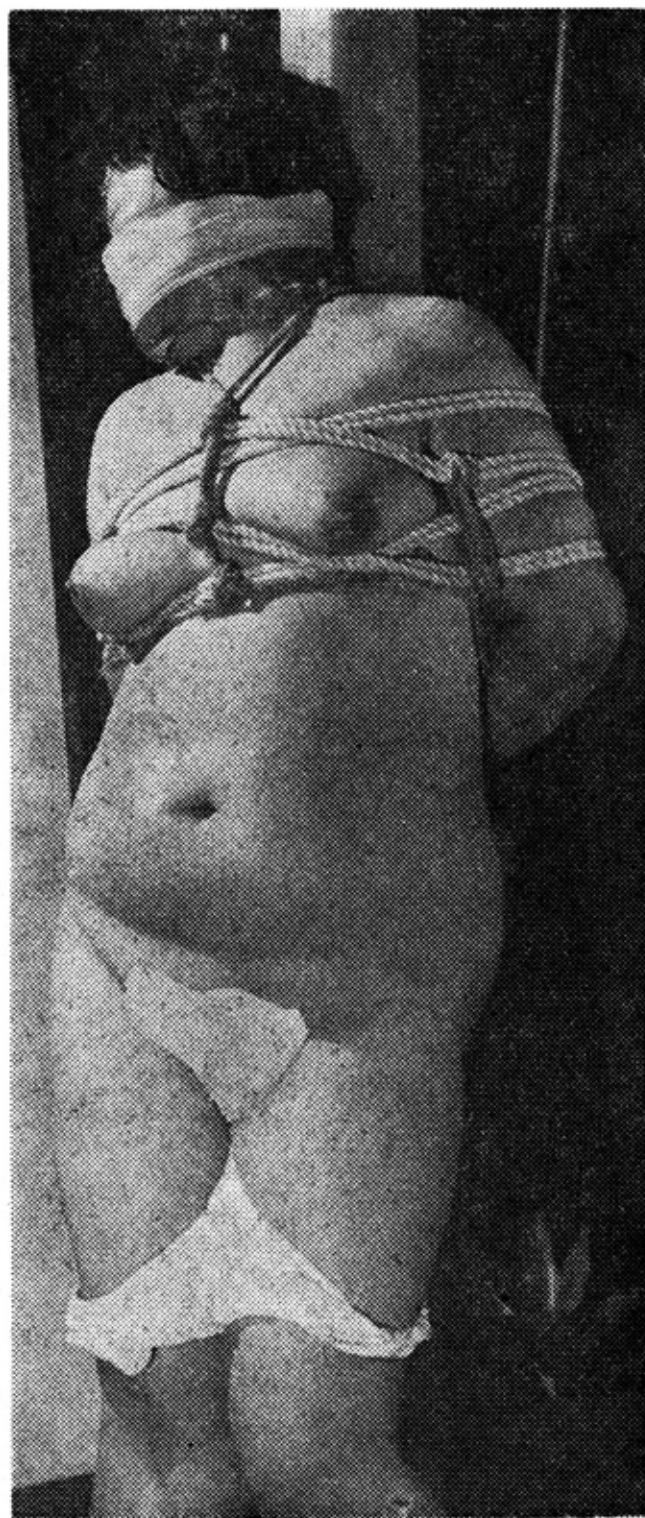
彼女が高校三年の夏、小学校の校庭で盆踊りのあった夜のことだ。浴衣、下駄ばきという盆踊り姿での帰途、人通りのとぎれた堤防の道で四人の青年に襲われたのであった。手どり足どりされて、彼女は人気のない河原へ

と運び込まれた。

いつの間にかやら、彼女は両手首を背後に回して帯で縛られて、叢の上に仰向けにころがされていた。それから、四人の青年は、まだ男を知らない青い実の彼女の上に、次々と襲いかかっていった。四人目の男が終ると、最初の男が、更にまた襲いかかってきた。

彼女は、恐怖心の余り、気も動揺して、四人の男たちのなすがままになっていた。後手に縛られていることと、疼痛のために、逃げだすどころか、声も出ない有様だった。

四人の男たちは、彼女に、それぞれ変った体位を要求した。月明りの河原で、彼女は言われるがままに、後手に縛られたままの裸身

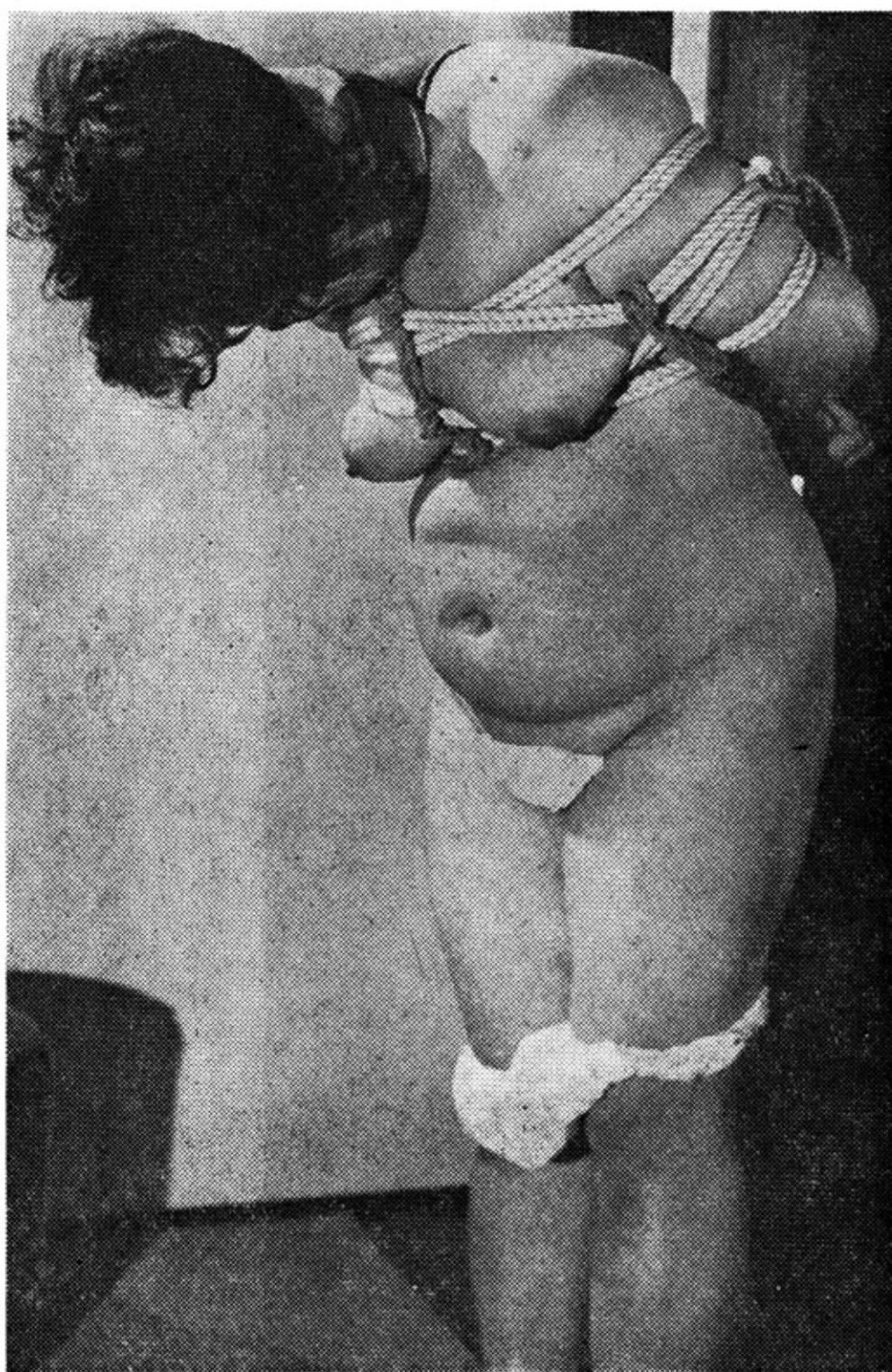


を、四人の男たちによって、好き放題に弄ばれたのであった。

そうした限らない汚辱と疼痛のなかでも、彼女が濡れた（手紙では、そういう表現していたので、今は、その文句を借りておく）のは、ケモノ（犬）のつるむような格好をさせられたときだったそう。

そんなことがあってから、彼女は間もなく高校を卒業して、近くの大セルへ勤務。それ以来、男という者は怖いものだという先入観から絶対に気を許さないで生活してきたというのだ。

それが、去年の秋、彼女が二十四才のときのことだ。はからずも、街の書店で奇譚クラ



ブの十二月号を手にしてから、急に胸の奥底に秘められていた過去のいまわしい思い出が今更のように燃えだしてきたのだ。

数年前のあの盆踊りの夜の出来事が、まざまざと彼女の胸に思い出されてきたのだ。

あのときは、恐ろしさで身もすくむ思いで一杯だったのに、今になって思い出してみると、そのときのこと、なんとも言えない懐

かしさで、身体中がむずむずとしてくる。

△あのようにして、もう一度、犯されてみたい。苗木陽子さんのようにされてみたい▽

そういった気持が、奇譚クラブを読んでは、もう、どうしようもなく、起ってきた。

そんな思いが、私の「SM研究会の提唱」によって、拍車がかけられたのだ。

ひょっとしたら、この△SM研究会▽に依

って、自分のこの胸の中の秘めたる思いが、かなえられるのではないだろうか、という期待が、むくむくと起ってきたのだ。

二月号のカメラ・ルポで『M女狂えり』三月号で『牝獣と牡獣の対決』そして、四月号で『淫らな指の秘密』を読むに及んで、山口艶子の苗木陽子に対する傾倒は、最高潮に達したようだった。

△私って、そんな経験は少しもないんですけど、奇譚クラブを読んでいたら、自分も、そんなにされてみたくなって、仕方がないんです。私、マゾでしようかしら▽

手紙の中に、そんなことを書いてくるようになった。私が返事を出すと、その返事に対して、すぐに、また返事が来た。

「私、文章も下手だし、字も下手だし……」と言いながら、彼女は、せっせと手紙を書いて寄越した。

「両足を思いきり、左右にひらかされて縛られている女の人の写真を見ると、自分が、そうされているみたいない気持ちになって、思わずゾクゾクしてしまうの」と書いたあとで、行を変えて、小さく、「私も、そうされてみたいのです」と、鉛筆で書き添えてあった。

苗木陽子さんのようにして責められたら、

どんなによいだろうか——と思った。そしてこんなカメラ・ルポの記事を毎月書き、責め写真を発表する塚本鉄三という男に、この身体を責められたら、どんなだろうか、身ぶるいするようになった。

手紙の往復をかさねるに従って、山口艶子の、そうした思いが、次第次第に燃えさかってくる、やがて、それが今にでも現実化するように手紙に書くようになってきた。

七月に入ってから来た彼女の便りに、「八月になったら夏休みが貰えそうなので、お友達と一緒に京都へ行きますから、そのときにお逢いできましたら……」と書いてあった。

そして「お差支えなければ、電話番号を、お知らせして下さい」と附記してあった。

私は電話番号を知らせると共に、はっきりした予定がきまれば迎えに行くから、連絡するように——と言ってやった。

最初、八月の八日頃と言っていたのが、お盆の十五、六日頃に延び、更に月末ということに結局、落着いた。京都駅で落合うという約束も、京都見物は友達と二人でするから、その日は友達を京都駅で見送るということだったので、翌日の午後、新大阪駅で待合わせることにきめた。

彼女から電話が掛かってきたとき、お互い

の目じるしとして、彼女は白のスーツケースを持ってゆくといったので、私は咄嗟に、サングラスをかけて、右肩にカメラをぶらさげていると答えたが、あとで気がついてみると私はサングラスを持っていなかった。

☆可愛い両えくぼ

その日、新大阪駅は混雑していた。

そして、大変、埃っぽくて残暑が殊の外、きびしかった。

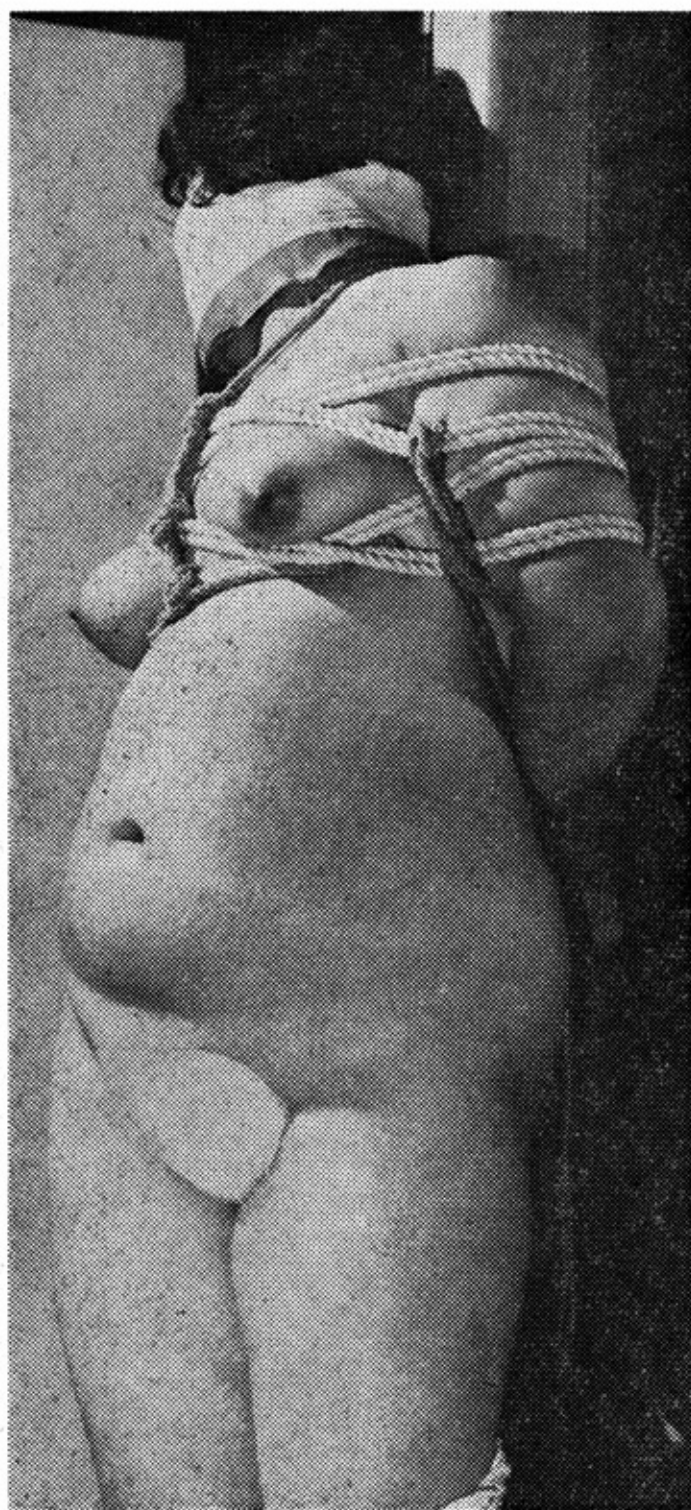
私はカメラを右肩へかけ、さっき買ってきたばかりの安物のサングラスを胸のポケットへ入れて中央コンコースへ向った。

私は近眼だから目じるしのサングラスをかけると、人の顔がぼんやりして見にくいので「白い鞆を提げた比較的太った若い女の人」という目当てで、そこら中を、うろろと歩きまわった。

「失礼ですが、山口さんでは？」

若い女の人が一人で佇んでいるのを見ると近づいて言葉をかけた。「いいえ」その女は素っ気なく立ち去った。白い鞆を提げていないのに気がつき、サングラスを近眼鏡と掛け換えて、次の女の人に近づいた。

「あのう……」と言っただけで、次の若い女



の人は、うさん臭そうに、返事もせずに、そそくさと立ち去った。いや、はや、サングラスは人相を悪くするらしい。

で、ふと気がついて時計を見たら、なあんだ。まだ約束の一時には十分も早いのだ。

サングラスだと見にくいので近眼鏡にかけ直して、とにかく、その附近に佇んでいる女性を一人一人、観察してみることにした。

そういう気で見ていると、待ち合わせている女性って案外、多いものだ。出札口のジュラルミンの柵にもたれかかっているのが一番多い。次には柱に寄りかかったり料金精算所の前に佇んだりしている。服装も千差万別、まちまちだ。まるで、水着そっくりの両腕、両足が、つけ根から丸出しになっている露出過度の若い女性も、なかにはいる。

むんむんとする人いきれだ。

蒸し暑くて、埃っぽい。私は襟首から、じつとりと汗ばんでくるのを覚えた。

白い鞆を提げた女性なんて一向に見当らない。約束の一時は、とっくに過ぎている。

「ひょっとしたら、来ないのじゃないかな」
そうした不安が、私の胸に、ふと兆した。

「いや、いや、そんな筈はない」

自分の心で打ち消して歩きまわる。

この人では？——と思って手元を見た。白い鞆ではない。私は、このとき、自分がサングラスをはずしているのに気がついた。あわてて胸のポケットから取り出してかける。

「失礼ですが……」

途端に、その女性が私に近寄ってきた。

「わあ、山口さん。よかった、よかった」

私は彼女の肩へ手をかけて大仰に喜んだ。

初対面の挨拶なんてしない。逢えただけで

よかったのだ。嬉しかったのだ。

「それにしても、目じるしの白い鞆は、提げておられませんね」

「ええ、私、あのスツーカー、大きすぎて持って来なかったんです。どうせ、塚本さんのカメラとサングラスを目じるしにしようと思って、やってきましたの」

「その僕が、サングラスをかけるのを忘れていたから、こりゃ、わからない筈だ」



「私、生まれて初めて、新大阪駅へ来ましたけれど、大変な人なんですのね」

「いつもは、こんなじゃないんですが、今日は特に人が多いようですね。早く、こんなところは出ましょう」

「あの、コインロッカーに荷物が……」

彼女は紙袋を一つとハンドバッグを提げたままだが、ロッカーから重そうな包みが二つ出てきた。私は、それを提げてやる。

ブラウスにスカートを、うまく着こなしているの、外見からは、彼女の言うような76キロの体重があるようには見えない。

「昨日は、京都で二条城を見て来られたんですね。お城に興味があるんですか？」

「ええ、お城と石垣と、それに城下町。ですから、大阪では、是非とも大阪城を見てみたいんです。お城が好きな女だなんて、一寸、変でしょ」

山口艶子は、初対面の私に対して、よく喋った。笑うと、両頬の唇の脇に、くっつき深いくぼが出来て凄く可愛いかった。

先祖が長岡藩のお侍だったので、お城や石垣や城下町が好きになったのかも知れないと言った。それで、大阪見物で一番に見たいの大阪城。そして、御堂筋、心斎橋、それか

ら通天閣だと言った。

それで私は、車を新御堂筋を南へ走らせて御堂筋の銀杏並木へ入って北から南へ進む。

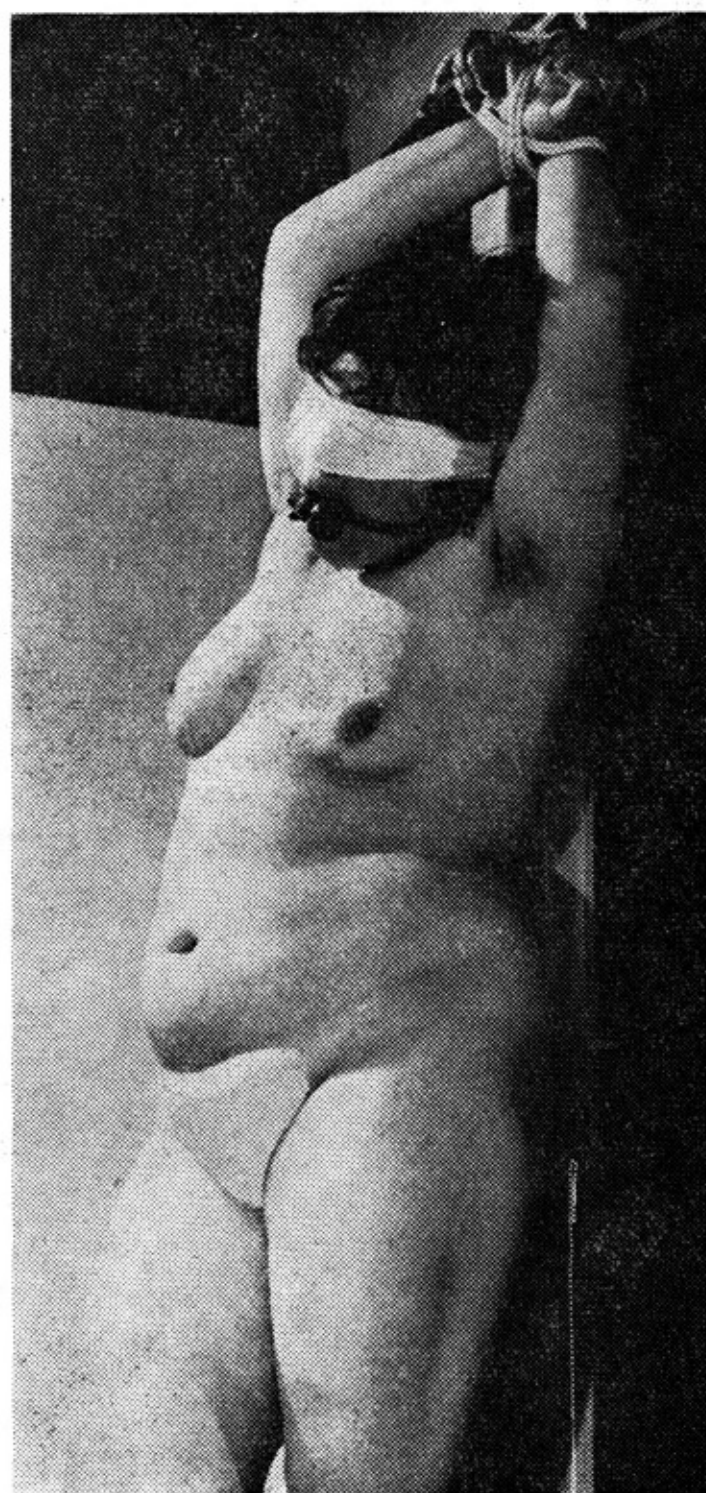
「大江橋」「淀屋橋」と書いてある標識を声を出して読みながら、彼女にとっては、何もかもが、珍しくて仕方がないようだ。

私は出来るだけ徐行したいと思ったが、南行きの一方通行の八車線で、進行方向の信号が全部「青」で流れるように動いているため自分だけ勝手に減速するわけにはいかない。

忽ちにして、新歌舞伎座の前に入る。

彼女は、その建物も珍しいらしい。

難波駅から26号線へ出て、通天閣へ向う。



それから、阪神高速道路の環状線へ入る。

「まあ、ここを通るのに二百円もいるの？」

ゲイトの料金表を見て、彼女はびっくりしたように声を上げる。天真爛漫で、かくしだてのない素朴な田舎まるだしの娘だ。

ここまで来ても、私は彼女とまだ、SMに關したことは、一言も言葉を交わしていないことに気がついた。

「この女、素裸にしたら、どんなだろう。」

あの、手紙で言ってきたようなマゾ女なんだろうかなあ。早く、素裸にひんむいて、思いつき、縄で縛ってみたいもんだ」

心の中では、そんなことを考えながら、チ

ラチラと、視線を隣席のボリュームのある女性に放つ。でも、口では至って真面目に、上品な口ぶりで附近の説明を加えていた。

環状線を二周して、大阪の街の凡そを車窓から見物すると大阪城へ向った。以前は天主閣の真下まで車で行けたのだが、現在では濠端の駐車場までしか行けない。

先ず何十疊敷もあるという正面の城壁の石の巨大さに驚き、鉄砲狭間のある石垣の巧みな配列の美しさに昔を偲んだ。

☆犯されたい女

大阪城の見物を終っても、まだ陽は高かった。その間、何一つ、SM的話題を交わして

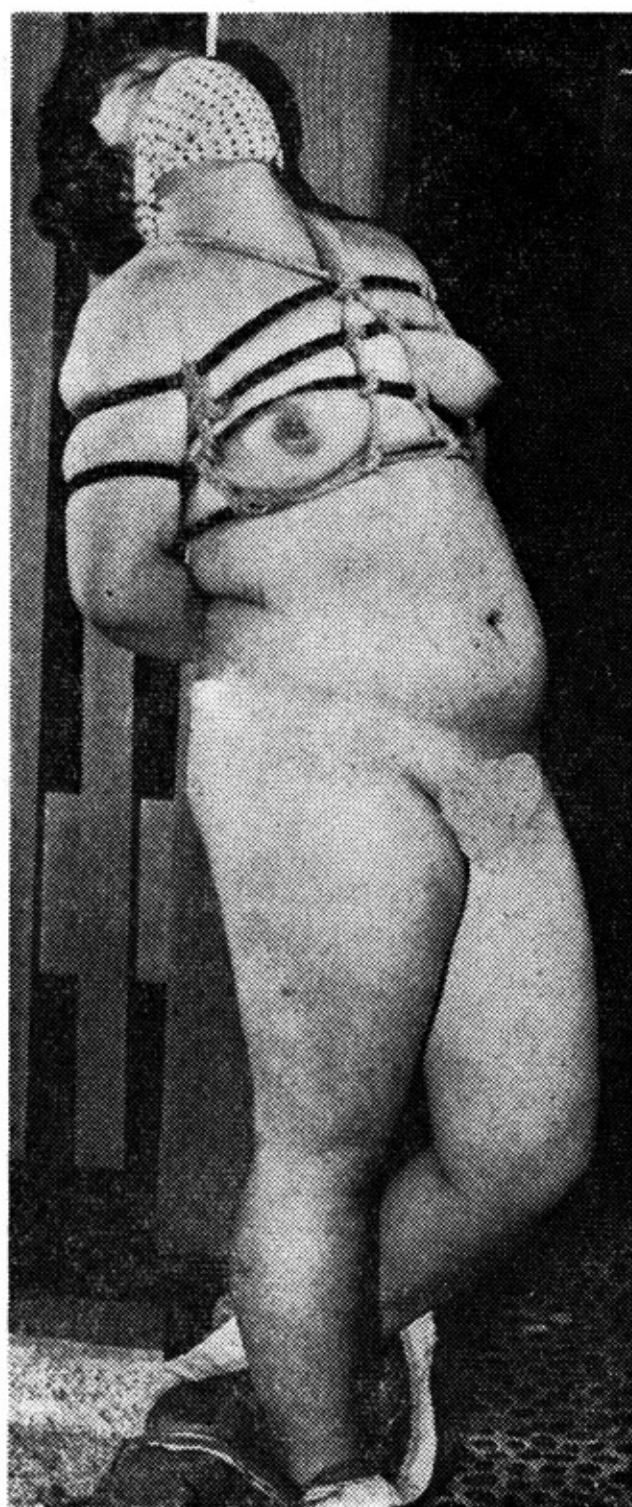
はいなかったけれど、私は一刻も早く、この肉体美の女を裸にして、縛り上げたいという思いに駆られていた。

彼女が言うように、マゾであるのか、ないのか。マゾだとしたら、どの程度に？

そして、彼女が最後に手紙で私に言ってきた『私、本当は、最初にされたように、縛られたままで犯されたいんです』という物騒な言葉が、重石のように、私の念頭にこびりついて離れなかった。

今、傍らにいるこの女性が、私に、そんな手紙を、ほんこの間、書いて寄越した本人なんだろうか。この陽気な女性が——と。

私には、とても信じられない気がした。



そこで、少し打診してみることにした。「奇譚クラブは、もう大分前から読んでいられるんですか？」

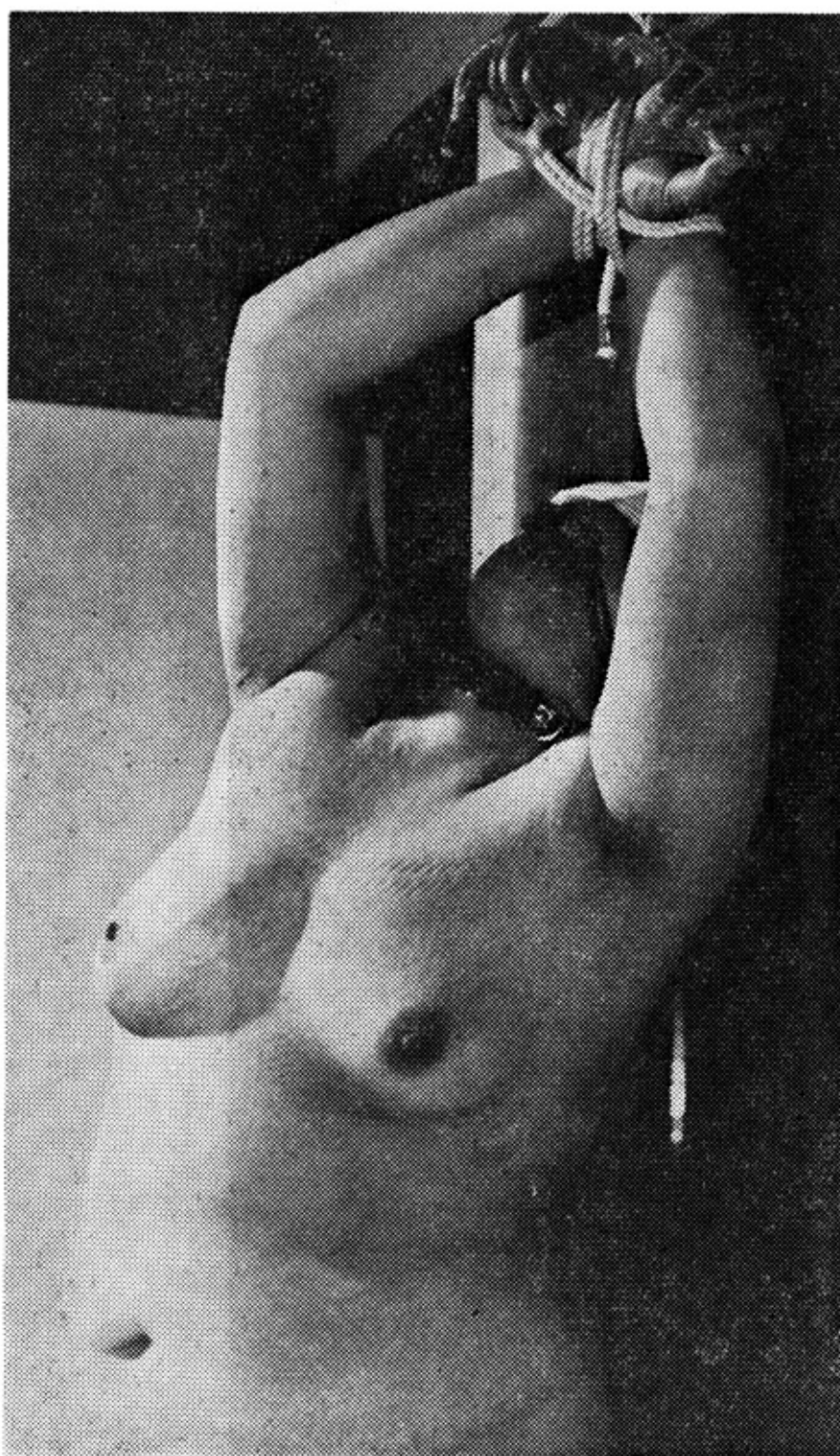
何気なく訊いてみた。

「いいえ、やっと、昨年になってからなんです。新しい本が、なかなか手に入らなくて。街へ出たとき、なんとか探し求めているんですけど、なにしろ、私の家が、バスの停留所から、自転車一台、やっと通る山道を二十五分も歩かないといけないんです。ですから、街へも、そう出られなくて、七月号までは、なんとか手に入れたんですけど、それから後の新刊が欲しくて、欲しくたまらないのに、まだ買っていないんです。京都の街を歩いているとき、十月号が出ているのを書店で見かけたんですけど、お友達と一緒に買ったものから、買えなかったんです」

彼女は至って饒舌である。

友達のこと、家族のこと、それに仕事のことなど、私が尋ねもしないのに、次々と喋りまくる。私は、その聞き役である。お蔭で、話はSMの方へは一向に進もうとはしない。

聞き上手という人がある。私は、そうではないが、まあ、初対面で相手と親しくなるのには、趣味でも何でも一番、得意とするもの



に話題を集中して、専ら相手に喋らせて、自分は聞き役に回るとというのがコツである。

ゴルフの好きな人にはゴルフ、魚釣り狂には魚釣りの話を、プロ野球のファンには、ペナントの行方を、そして酒の好きな人には酒のことを話題にすれば、初対面だって、結構親しくなれるというものだ。

山口艶子は、お城と石垣と城下町に興味があると言った。彼女は昨年、見物した姫路城の立派さについて感激した口調で話した。私

は相槌をうちながら、丹波篠山の篠山城の城壁と城下町の俤の残った街並を一度、見物するようにすすめた。

彼女は旅の雑誌などからの知識で、伊賀上野の上野城、大和郡山の郡山城などについても、よく知っていて、是非、行ってみたいものだ、と、熱心に話すのであった。

岸和田城や歌山城、それに極く近くでは淀君の住んでいた淀城が、以前の国道一号線の脇に、ひっそりと草に埋もれて、墨々たる

城壁と濠が残っているのを思い出して、そんなことを話題にした。

そんな話をしていると会話のとぎれることがない。次の機会には、奈良へ行きたいからそのときにはプレイもして欲しいと言った。

彼女の口から初めてプレイという言葉が出た。そこで、すかさず私は言った。

「これからホテルへ行ってもいいですか？」
「ええ、どうぞ。私は構いませんから……」

彼女はそう言うってから屈托のない表情で、車外へ珍しそうに、目をやっている。三層になっている高速道路のダイナミックな建設ぶりに驚いたように目を瞠っていた。ビルとビルの間を縫うように走る道路。そして、水の都の河に沿って、縦横に行き交う橋と道路。

すべて立体交叉なので何の気苦労もなく、すいすいと、大阪国際空港へでも、大阪港へでも、走って行ける。北陸から出てきた彼女にとって、大阪市内のそんなたたずまいも至極、物珍しいのであろう。

私は、今日のこの日のために、別にホテルを予約しているのではなかった。行き当りばつたりに、感じのよいガレージ付きのモーターを見つけて、そこへ滑り込んだ。

ガレージ係が走ってきて車を車庫へ入れて

くれる。荷物は後にして私たちは、二階の部屋へ落着いた。私の見たところ、彼女は至って平静だ。はにかむでもなし、恥かしがるでもなし、ハンドバッグだけを持って、さっさと、二階の部屋へ通ずる階段を自分から先に上っていったのだ。

あとで聞いたところによると、このとき、係のオバさんやガレージ係の男が出てきて、どんな部屋がいいのか——と、近寄ってきたのを見て、本当に胸がドキドキするほど、怖かったのだそうだ。

階段の入口にドアがあって、そのドアを開けるやいなや、さっとエヤコンの冷気が頬を撫でた。部屋は三部屋に分れていて、案外に広い。私はトランクから荷物を運んだ。

階段の下のドアをロックすると、もう誰も入って来ない。いわば完全な密室だ。

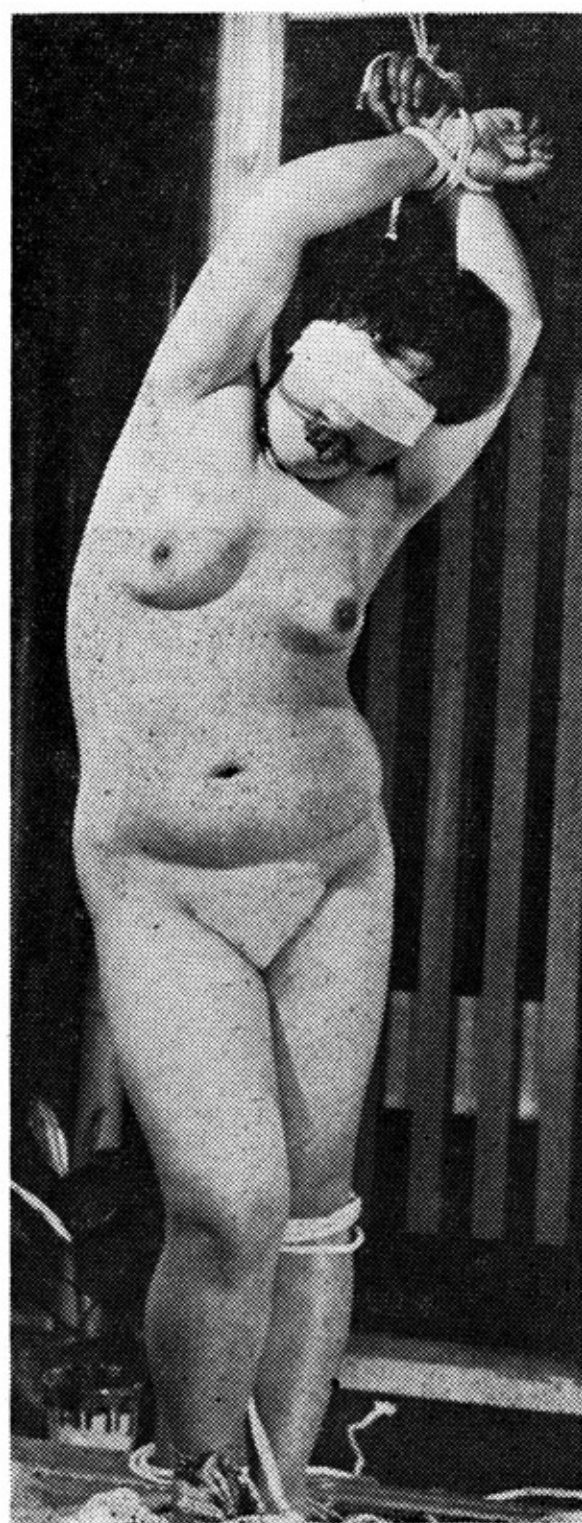
山口艶子と私と二人きりになった。この密室こそ、二人でこれから行うプレイの場だ。

彼女は歌謡曲を誦みながら、今、私が運び込んでやったスリッパから、着替えの服や下着を出して畳の上に並べている。

屈托なさそうな、その表情と仕草——。

私の眼がギラギラと光った。

私が狼になるときが近づいたのだ。



小羊を目の前にして、私の嗜虐心がフツフツと沸きあがってきた。

盆踊りの夜、この女が、四人の青年に、どのようにして襲われたのであろうか。

「その頃は、私、今よりは、ずっとスマートでしたわ」と、彼女は言っていたが、それはそうだろう、高校三年生なのだから、肥っていたって、今みたいなことはいないだろう。

それにしても、今、私の目の前で、そ知らぬ顔をしているが、「あのときのように（盆踊りの夜、村の若衆四人に輪姦された夜のよう）縛られて犯されたい」と言ってきた彼女の「殺し文句」が、私の胸を突き刺す。

山口艶子の肉のたっぷりといった臀部を見ていると、私は、たまらなく食欲をそそられ

て、生ツバを、ぐっと飲み込んだ。

△何も、そう慌てることはない。今晩一晩、夜通しで、ゆっくり、この七十六キロの女体を思いのままに弄ぶことが出来るのだから、そう考えると、私は、内心、にたにたと、ほくそ笑むのだった。

そのときは、まだ、私は逆に明日の朝まで彼女のために一睡も許されずに、夜を徹してその底知れぬ体力に圧倒されようなどとは、夢にも考えていなかった。

☆

私が苗木陽子と初めて逢ったのが昨年八月の末だから丁度一年目になるのだ。そしてそのときのカメラ・ルポ「畜化願望の女」を書いたのも奇しくも昨年の十二月号だった。

今、山口艶子をヒロインにしたこのルポも、年号こそ違え、同じ十二月号に載るのだ。

肥満体の女性にチャレンジした皮切りが、苗木陽子だから、私にとって殊に印象が深いのだ。そして、次には森田美美子、更に、この山口艶子という順になるのだ。

苗木陽子は、生まれて初めて縛られたというのに、第一回目から、あのように物凄く燃えあがってしまった。

今、この目の前の山口艶子も、まだ一度もSMプレイとしては、(強姦された最初のときは別として)縛られたことがないと言っている。観念的に、自分はマゾだと思っているらしいが、さて、果たして、実際に縄で縛ったとしたら、どうなることだろうか。

なんといっても、第一回目の最初が、一番肝腎なのだ。全力投球すべきチャンスだ。

苗木陽子でも、第一回目の、あの彼女が失神までしたショックの場面の感激は、それから後、彼女の身体に訪れることはなかった。よく、最初はプレイ出来なかったら、話だけでもいいだなんて、のんきに構えている人があるが、最初が大切なのではなからうか。

私は、山口艶子に対しても、仮借なき強烈な「責め」で望むことにした。息もつかせず

責めたて責めたて、責めまくってやろうと考えた。それが彼女の望みなんだから――。

ここで変に遠慮をしたり、手加減したり、躊躇逡巡したりしたら、却って、折角遠い所からやってきた彼女の好意に報いることにならない――。

そんな屁理屈みたいなことを考えながら、私は部屋にある二本の柱のうちの一本に焦点を合わせて、照明の準備をすすめていった。

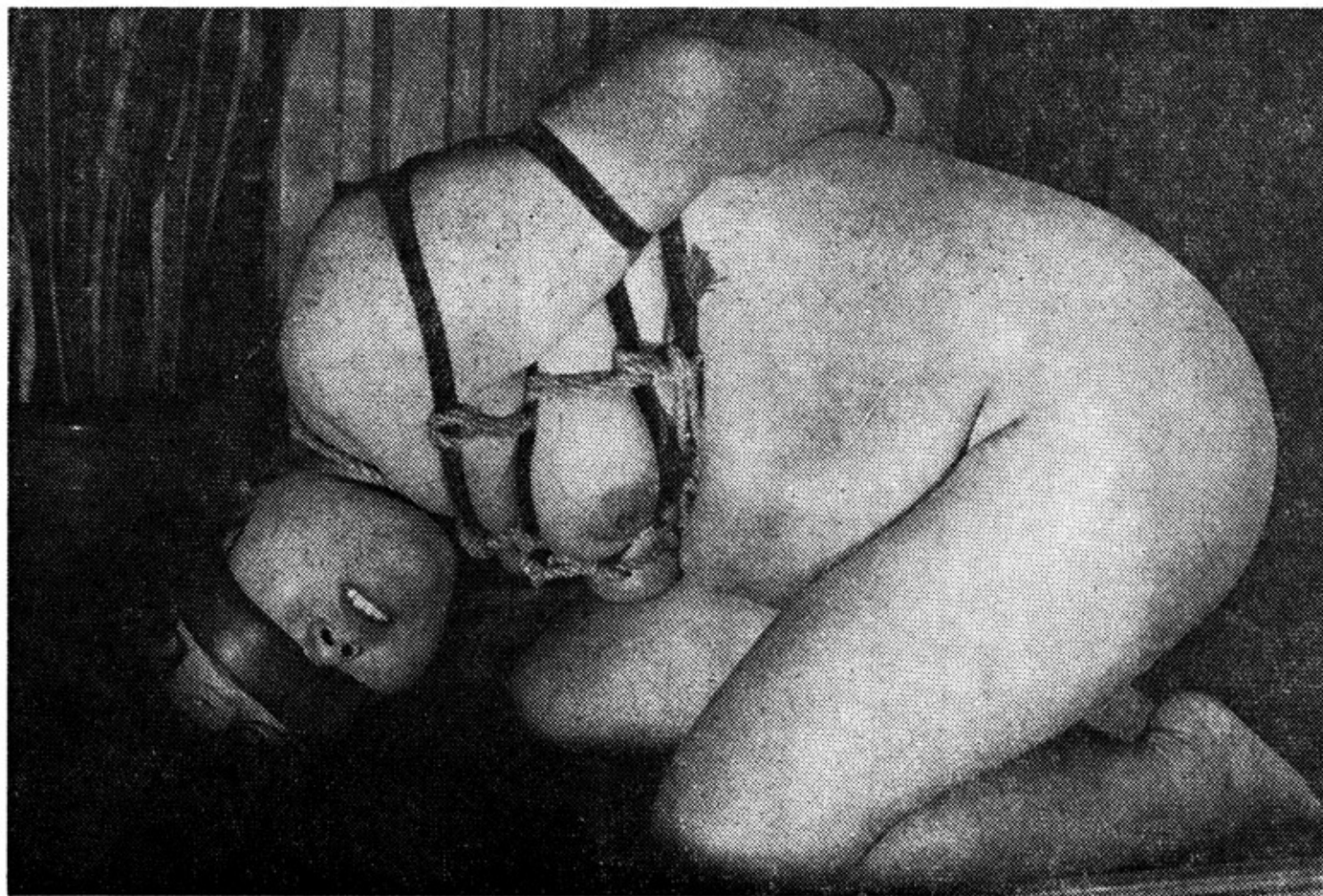
「おい、艶子。高校三年のとき、四人の男性に強姦されたって、書いてあったが、あれ、本当なんだらうな？」

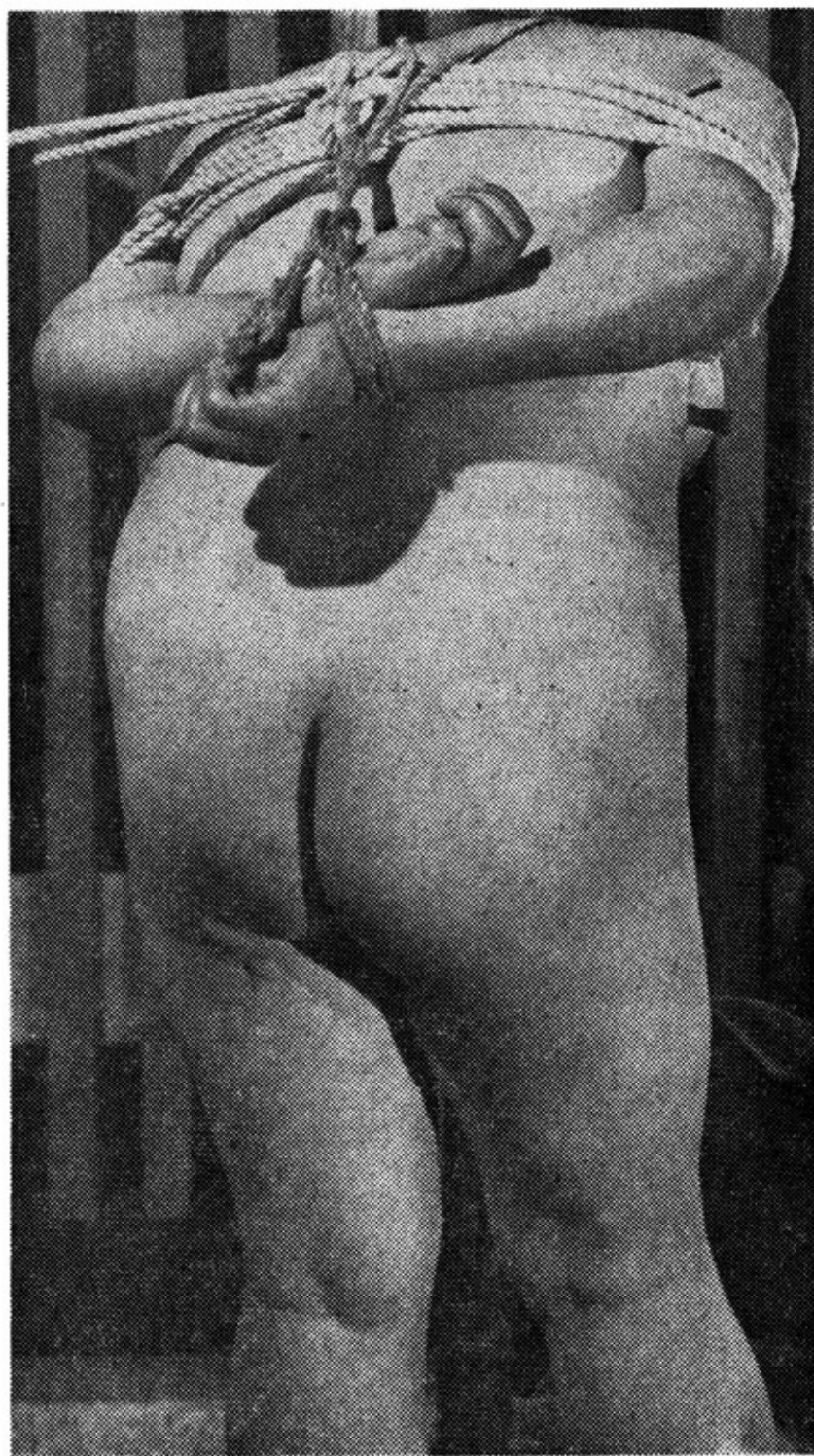
私は、まだ、荷物の整理を続けている彼女の背中に声をかけた。

「えっ！」

彼女は驚いたように顔をあげた。

童顔の、まだあどけなさの残った瞳が可愛い。今から数年





前、高校三年の頃は、さぞかし可愛い女学生だったことだろう。

「私に書いて寄越した、あの強姦されたという手紙は、作り話じゃないんだろうなあ、と訊いているんだ？」

「あら、女の身で、そんなこと、嘘がつけて。あれは、全部、本当のことですわ。貴方が、神様に向って告白するつもりで書けて、おっしゃったでしょ。だから私、何もかも、真実のことを書いたんです」

「そうか。それだったら、信用しておこう。」

でも、四人の男に、入れ替り立ち替り、犯されて、どんな気持だった？ それまで、男は知らなかったんだろう？」

「ええ、田舎ですもの、男の人の友達なんて一人もいませんでしたわ。そのときは、もう怖くて怖くて、無我夢中で、何が何だか、さっぱり、わかりませんでした。とにかく、いろんな格好、させられたことだけは覚えています。とっても、痛くて……」

「それで、四人みんなに犯されたのか？」
「私、怖くて、夢中だったもんですから、は

っきり覚えてないんですけど、一回だけじゃなかったように思いました」

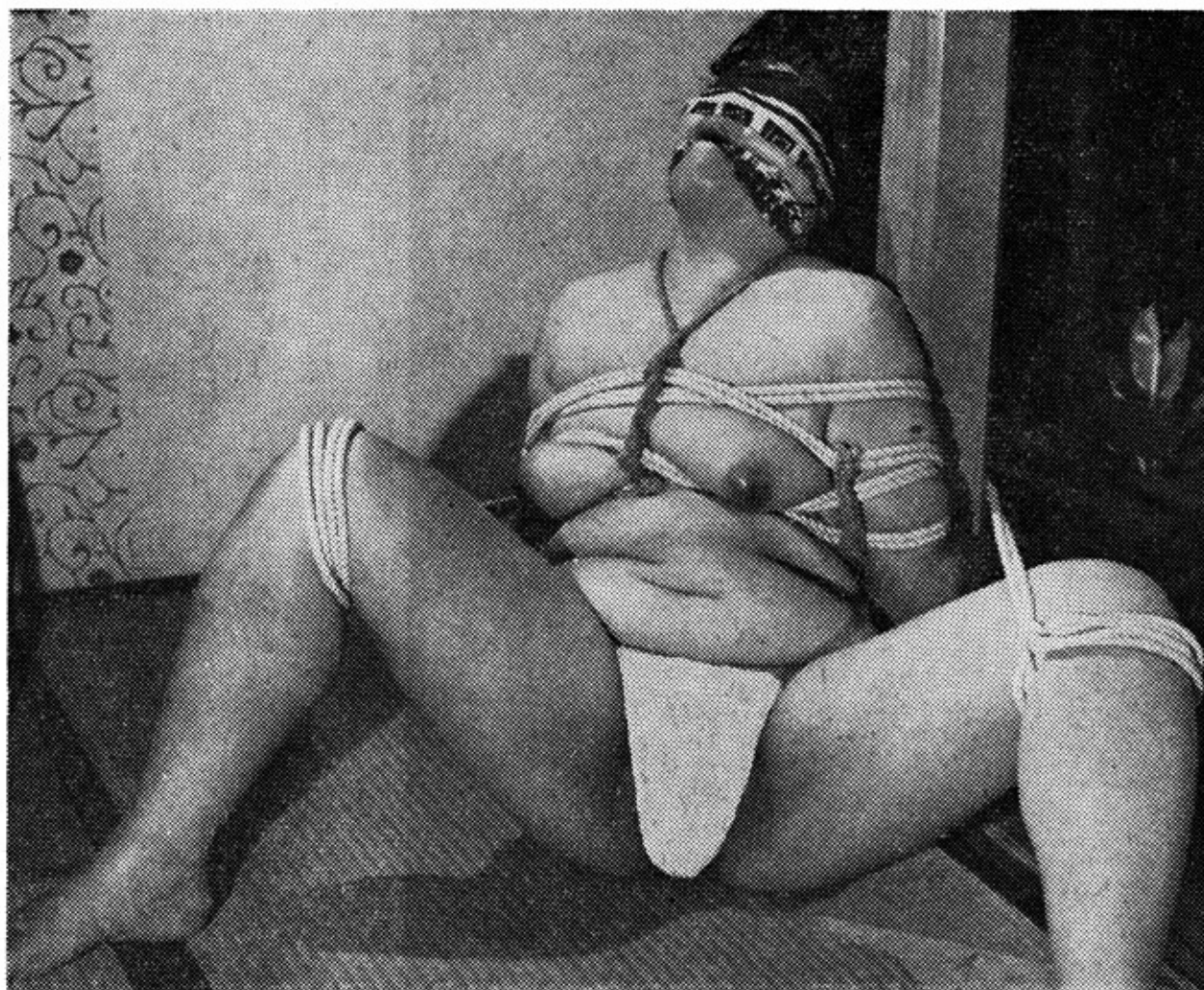
「という、何回もって、いうわけだな。四人の男に、何回も犯されて、さぞ、嬉しかったんだろう？ どうだ、正直に言ってみろ」
「そんな……。怖いのと痛いので、夢中でしたから、嬉しいだなんて、嘘です。私、そのことがあってから、男性っていう者が恐ろしくなっていて、今まで、誰とも、おつき合いもしてないんです」

「ふふん、その嘘、本当かね。こんな立派な身体をしていて、男なしでおれるものかね。きつとボーイフレンドが沢山いるんだろう」
「そんな人、一人もいませんわ。本当です。」

私、男の人と接したっていうの、あの盆踊りの夜の最初るときだけなんです。信じて下さい。私の体、調べて下さってもいいですわ」
「それじゃ、それも信じておこう。それで、いろんな格好、させられたって言ったナ。例えば、どんな格好なんだ？」

山口艶子は、着替えのために、上半身、ブラジャー一つになっている。

まん丸い肩、盛り上って張ちきれそうに、ブラジャーを押しあげている二つの乳房。私は彼女の背後から抱きついた。



「例えば、どんな格好なんだっ」
「言いますから、待って……」
「早く言わんか」
「こんな、四つ這いで、犬のような……」

見られるんだから。それにしても、この太股の肌の白いこと、まるで雪のようだな。さすがに新潟生まれの新潟育ちっていうだけはあ
るね。さしずめ、新潟美人って、いうところ

彼女は畳に両手をついた。
私は彼女を捻じ倒した。
「こんな格好で、犯されたのか？」

押えつけながら、スカートを、ずり下げる。

小山のようなヒップを包んでいるズロースに手をかけたとき、彼女は、両手でしっかりとゴムに手をやって脱がせまいとした。

「私、薄いんです。ですから笑わないで。ねえ、お願いです」

「一体、何のことなんだ？それ——」

「私、とても、毛が薄いんです。ですから、恥かしくって人に見られたりしたら……」

「薄い、大いに結構じゃないか。それだけ白い肌が沢山の裸になっていた。

私の掌は内股から、お臍のまわりへ、そして乳房へまわって、再び内股へ戻った。

「ク、ス、グ、ツ、タ、イ……」

彼女は控え目に小さく声を出してから、恥かしそうに私の胸に顔をかくした。身体に力

だ。雪国の女性の肌は白いつていうことは聞いていたが、こんなにスベスベした雪の肌とは知らなかったナ」

ノーストッキングだ。

内股の白いこと、白いこと。まるで雪のようだ。雪の肌だ。私はズロースにかけた手を放して、雪の肌に掌をすべらす。

「私も肌の白さだけは自慢なんです」

初めて彼女は、ニッと笑った。

両方の口元のえくぼが深く彫り込んだように窪んで、いきいきとして新鮮だ。

私は童顔の彼女の頬に自分の頬を寄せた。

「可愛い、可愛い。とても可愛い」

そう彼女の耳元で囁きながら、ブラジャーのホックを、はずした。

見事に膨らんだ二つの乳房が、むっくりと現われた。私は、その豊かな乳房の重量感を掌で先ず受けとめる。

山口艶子は、いつの間にやらズロース一枚の裸になっていた。

私の掌は内股から、お臍のまわりへ、そして乳房へまわって、再び内股へ戻った。

「ク、ス、グ、ツ、タ、イ……」

彼女は控え目に小さく声を出してから、恥かしそうに私の胸に顔をかくした。身体に力

がなくて、私に全身を預けた格好だ。

鼻息が荒く、肌がとても熱かった。

堀貴代子は毛深いといって恥かしがり、今また、山口艶子は毛が薄いといって恥かしがる。所詮、恥かしがることには変りはないのだが、どっちにしたって、裸になってしまえば、その殆どが標準型なのだ。

私は手を伸ばして、そこに積んでおいた縄束のなかの一本を手にとる。

△これだけのボリュームのある身体だ。情容赦なく、思いつき縛ってやれ。少々の縄のアトがついたって、明日の朝までには消えてなくなるだろう▽

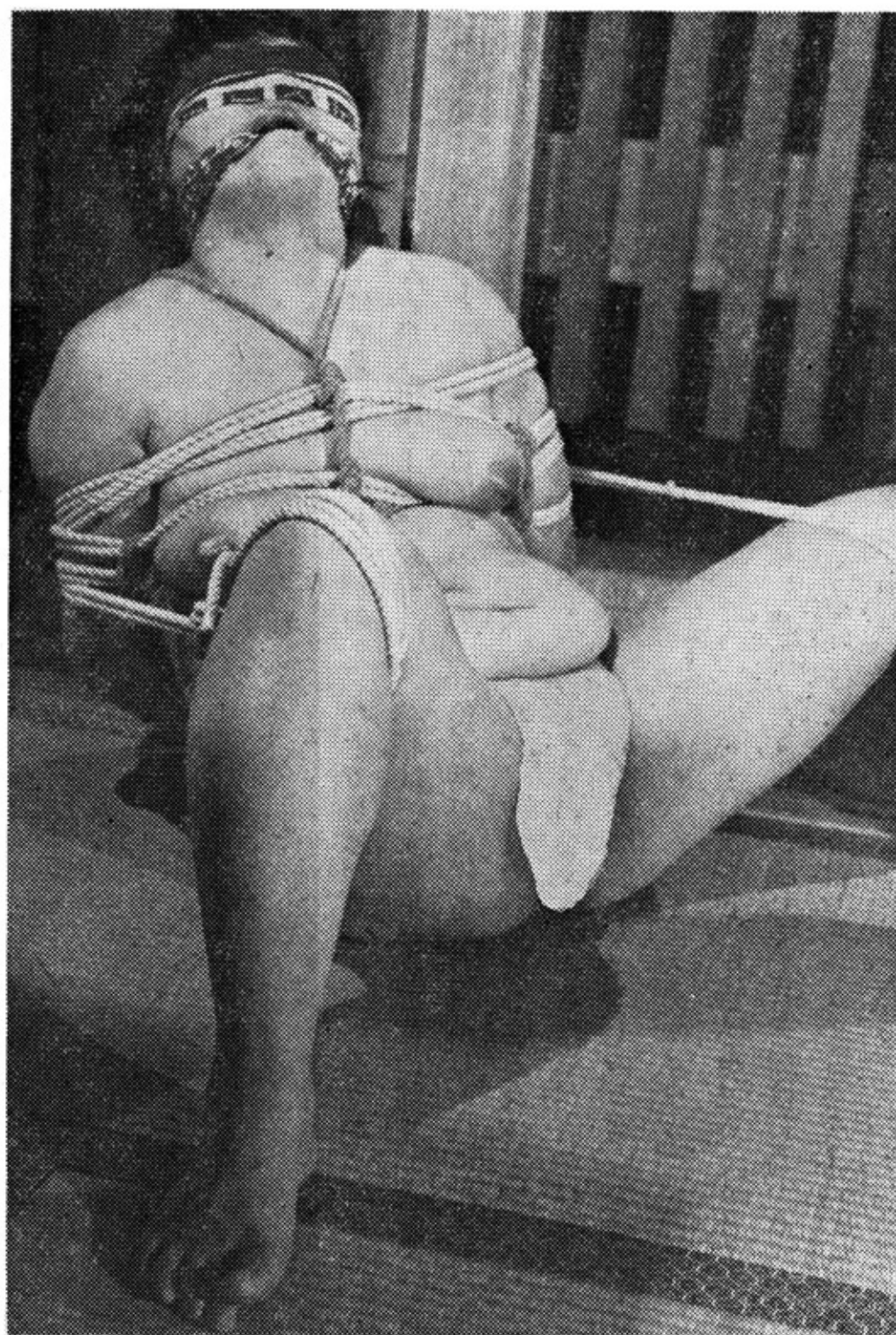
そんなことを考えながら、私は、うっとりとした身体つきになっている山口艶子の上半身に、ゆっくりと縄をかけていった。

「イヤ、イヤ、イヤ」

彼女は口のなかで小さく呟いた。だが、口とは反対に、身体の方は、私にすり寄せるように、もたせかけてくるのだ。

こんなに身体を寄せつけられては縛りにくくて仕方がない。それに、彼女、体重があるものだから、それを支えているだけでも重くて縄捌きが自由にならない。

「こら、しっかりせんか。まるで身体に力が



入っていないじゃないか。立ってみろ！」

私は縄を引く。

彼女は、私の方を顧った。

うっとりとした目つきだ。

「立たないかっ」

私は右手で彼女の脇腹を抓った。

凄く、弾力性のある皮下脂肪の厚い肌だ。

「ああっ、くすぐらないで。私、くすぐられ

ると、弱いのに」

彼女は、足を何度も突っ張ってから、やっと立ち上った。

私は縄を捌いて縛りを、つづけてゆく。

縄にくびれた双つの乳房が見事だ。

かぶりつきたい気持にかられる。

上下の歯が、イイイとなる。

私は縛りながら、乳房の横に噛みついた。

軽く齒型をつける。

「うっ」

彼女は目を閉じて、のけぞった。

背後へ、ゆらりと揺れて倒れそうになる。

どうも、この女、最初から、様子がおかしい。ゆっくりと、念入りに、肉づきのよい真白い肌に、縄を厳しく掛けてやろうと楽しみにしていたのに、少し、縄で縛っただけで、全身がメロメロになって私の方へ倒れかかってしまうのだ。

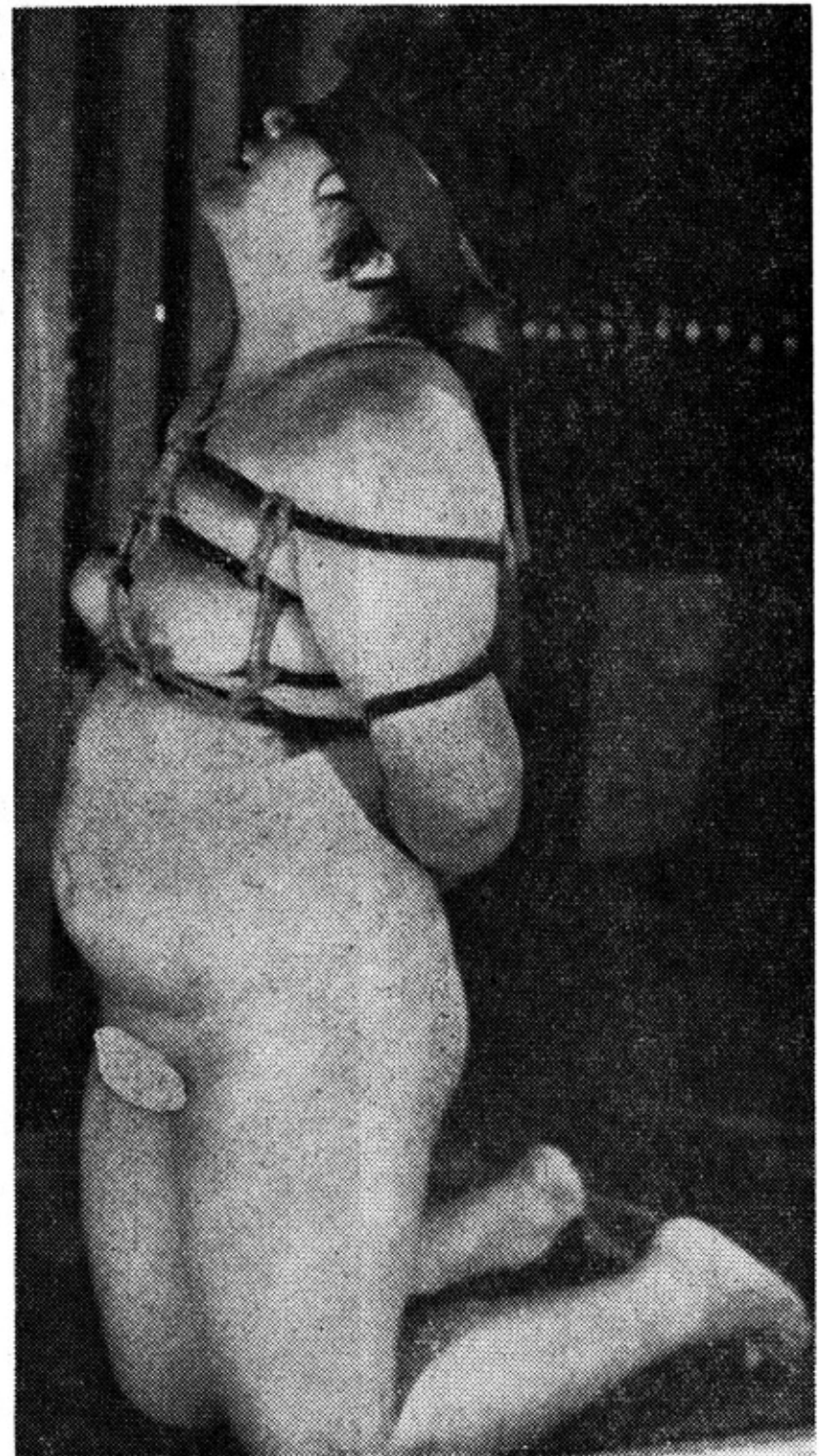
倒れそうになる上半身を支えてから、しばらく間をおいて、押し返した。

ゆらゆらと、揺らいで、今度は前に倒れそうになる。私は、あわてて前へ回って倒れかかるのを支える。私が支えるのを、いいことに、彼女は全身の体重をもたせかけてくる。

なんとこの素晴らしい肉づきだろうか。

私は彼女に抱きつく格好になった。

両手を後手に縛られて、目をしっかりと閉じているのだから、上半身がゆらりゆらりと大揺れに揺れて、支えどころがない。そこへ持ってきて、足に力が入っていないため、ともすれば、くたくたと、くずれそうになる。私は、そのたびに、ちゃんと立たせては、入念に縄掛けをしていった。要所要所を、ぐ



いぐいと締めつけては容赦しなかった。別の縄で乳房が、ぴこんと飛び出すように縦縄を掛けて捻じる。ツンと張った乳房に私の手の甲が触れて益々、乳房も乳房も大きくなる。

「おいおい、目を開けたらどうだ。目をつぶっていると、手を縛られているから、倒れるぞ。ホラホラ、揺れた揺れた。大揺れだ」

「いいんです。このままで……」

彼女はチラッと目を開けたが、すぐに、再び閉じてしまった。目を閉じていることで、自分の今、置かれている状態を見ないでもす

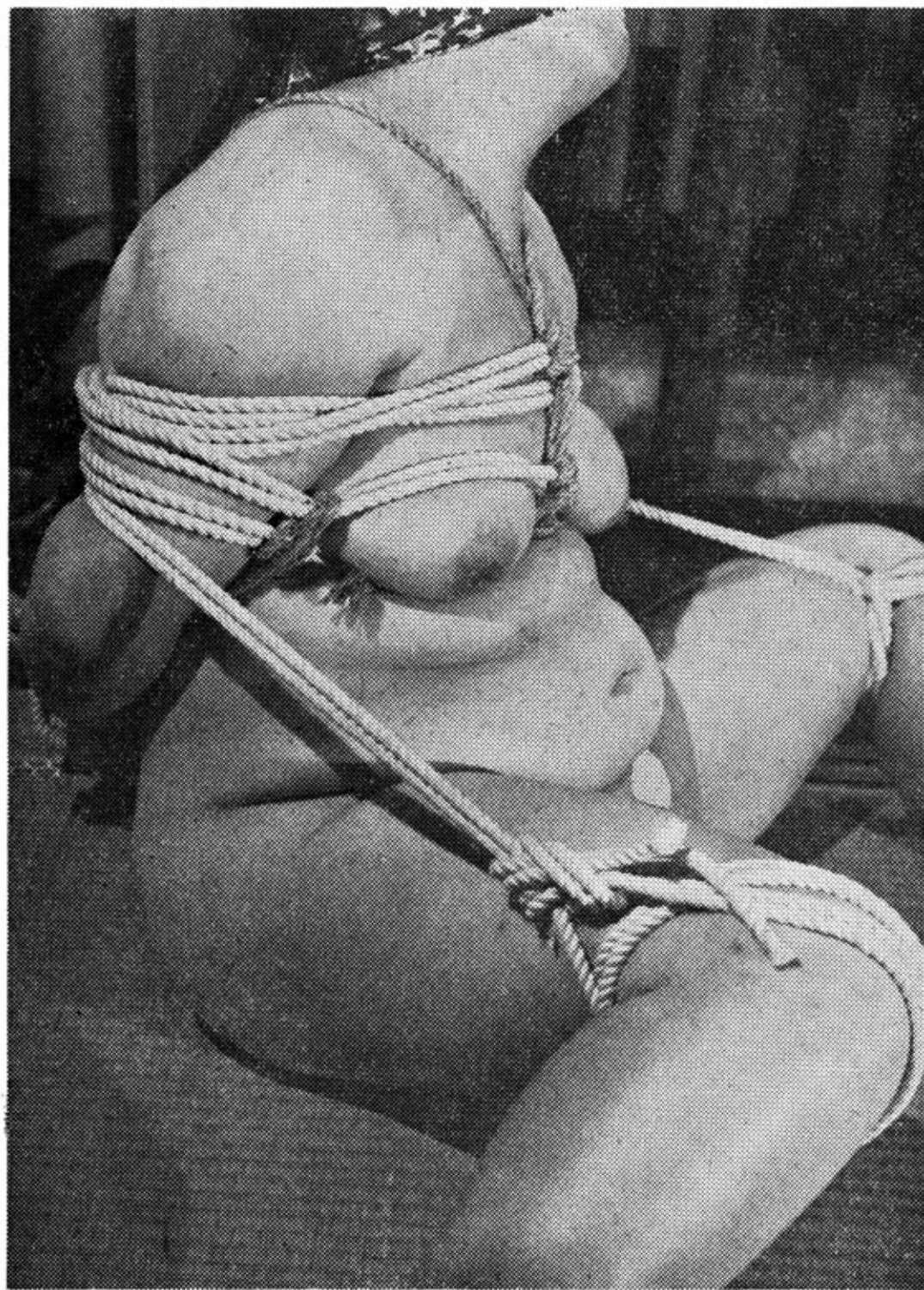
むとでも思っているのだろうか。

私は彼女を歩かせて柱の前まで連れて行き後手縛りの縄を、しっかりと柱に結えた。これで、彼女の重量感のある身体が倒れかかってくるのを支えてやる作業が省かれた。

私の手は彼女のズロースの端にかかった。

「あっ、それを取るのはいやッ」

彼女は腰を振って取らせまいとする。臀部の膨らみが遅しくて片手では容易に取れそうにない。私はソックスの片方をまるめて、彼女の口のなかに押し込み、その上から豆絞



の手拭いで掩ってから首筋で結んだ。

「うーむ、む、む、むむ」

私は、山口艶子の豊満な腰に抱きつくようにして、白いズロースを、ずり下げた。

思わず、のけぞる彼女の顔――。

私は、一步、二歩、三歩はなれて、そこに晒されている山口艶子の緊縛裸身を見た。

毛が薄いというようなことは決してない。

私は、おかしくなった。

密生しているというほどでもないが、粗生ながら広範囲だから、見た目には、むしろ、毛深いという感じなのだ。

彼女は相変らず、目はつぶったままだ。

私は、乳房、お臍……そして、舐めるよう

な視線を、彼女の全面に這わした。

バスト105、ウエスト85、ヒップ110のプロポーションが示すように、全く見事なポリウームのある肉体である。膨隆した乳房、大きくて深く窪んだ臍窩。どの部分一つを取ってみても、素晴らしい女体のオブジェだ。

真白い肌。雪国の女特有の雪の肌だ。シミ一つ、傷一つないスベスベした肌は、ぶ厚い皮下脂肪によって、まるで朝日に輝く雪原のように、まぶしいほどの白さだ。

私は眺めるだけ眺めてからカメラを向けてピントを合わせた。

「そら、これから、艶子の素裸で縛られた姿を写真に撮るゾ。こら、目を開かないか」

私は、カメラを構えた。

「うーむ、うむ、うむ、ムムム……」

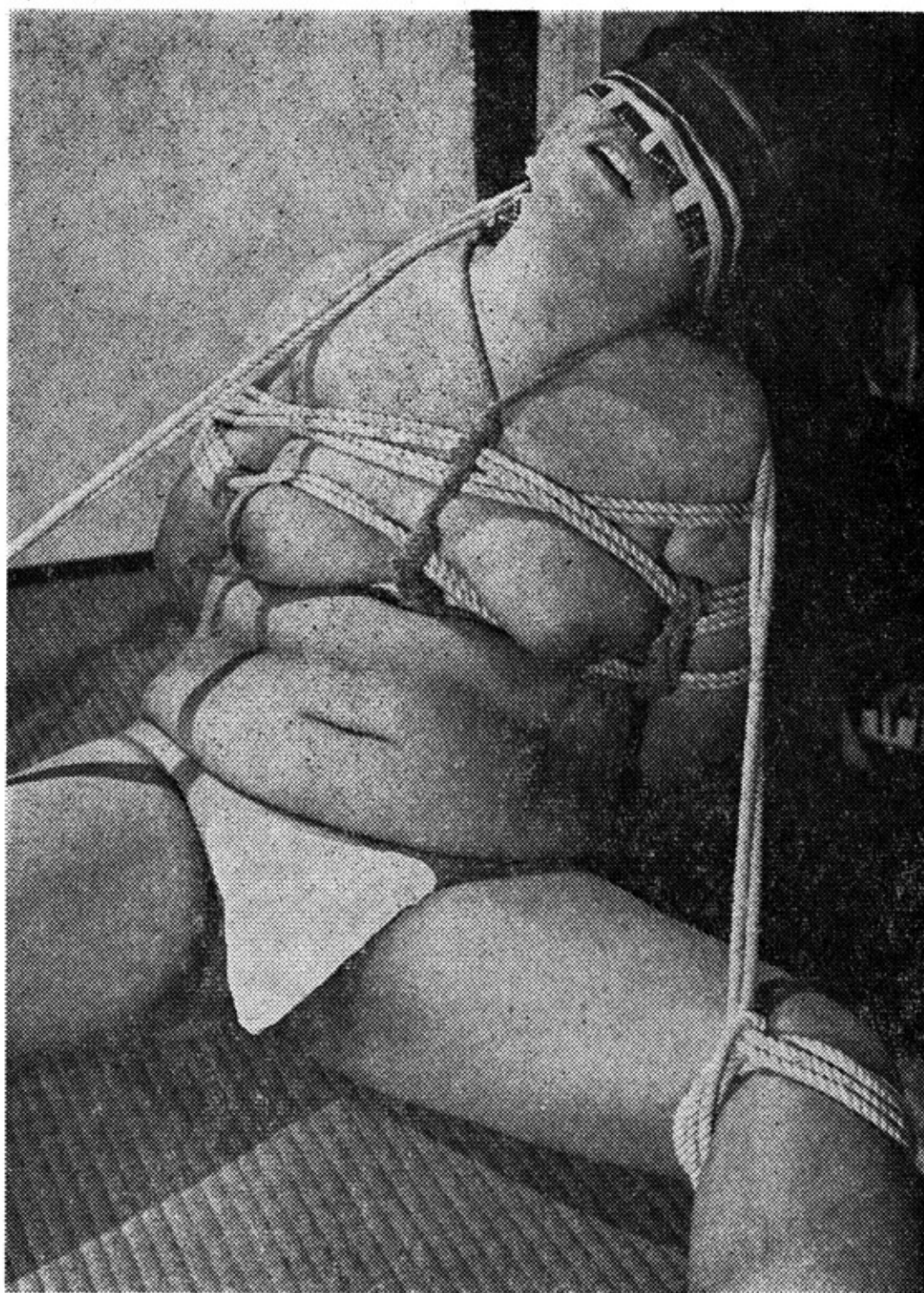
彼女の顔が、一層、のけぞった。

胸が喘いだかと思うと、大きなお腹が激しく、うねるように波打った。

肉づきのよい、真白な腹部が、ぐっと凹んだかと思うと、次には忽ちにして膨らむ。

膨らんだかと思うと、再び、ぐっと凹む。凹み、膨らみ、膨らみ、凹み――。

それが何回となく繰り返されて、益々ピッチが早くなる。私はカメラを構えたままで、



艶子の、そんな激しい発作の状態を、じっと冷静に眺めていた。

上半身が、ゆらゆら大きく揺れて倒れそうになる。私は、カメラを置くと、走り寄って彼女の裸身を抱えた。柱へ括った縄尻は、彼女が動いたので、いつの間にか半ば解けそうになっている。

私は自分の膝の上へ彼女を横たえる。

豆絞りの猿ぐつわを取る。

彼女は口からソックスを吐き出した。

私の右手は、まんまるく小山のように膨らんでいる彼女のお腹の上を這っていた。

自然に人差指が、お臍の窩に、スポンとはまり込んだ。

大きな穴だ。私の指が、完全に埋ってしまった。抜こうとするが、お臍の周囲の肉が、ぴったり密着していて抜けない。

底なし沼のように、臍窩の奥底には何の抵抗感もない。つるつるした感じなのだ。

抜こうとすれば穴のまわりの肉が、ひっついたまま、私の指にまつわりついてくる。

「あああ、指を動かしたらイヤ、くすぐったい。くすぐったいのよオ」

私は、その声を聞いて、彼女の臍窩に、すっぽりと、はまった人差指を更に激しく上下に動かす。嫌だと言え、無理にやってみなくなるのが人情というものだ。

それにしても、なんという皮下脂肪の厚さなのだろうか。探っても探っても、人差指の先に、突き当たったという抵抗感がないのだ。

「くすぐったいっ、やめて、やめて！」

私の人差指が動くにつれて、彼女のお臍が喘ぎはじめた。お臍を中心とした腹部が、激しく上下運動をはじめたのだ。人差指は、臍窩に、すっぽりと入ったままだ。

なんとという大きくて深い臍の窩へそあなだろう。

くちゅ、くちゅっと、指先をこねまわす。

「ゆるして、くすぐったいの。たまらなく、くすぐったいの。ああ、やめて、やめて。く

すぐたくて、たまらないわ。やめて……」

私は、人差指を奥へ奥へとこねまわして、

さんさん、彼女を擦ったがらせた。両手が、がっちりと後手に縛られているものだから、彼女は、口では「擦りたいから、やめて」と哀願しても、私の悪戯に対して、もう、どうすることも出来ない。

ふとった身体を、もじもじよじるだけだ。

私は左手を彼女の首に巻く。

私の胸は、わくわくしてきた。

思い通りにいったゾ。

ざまア見ろ。完全に、こっちのペースだ。

艶子は、うっとり目を閉じている。

お臍の窩を、こねまわすだけ、こねまわしておいて、プチッと人差指を抜いた。

そのまま、右手の掌を、ツツツと、下へすべらせていった。

アアッ

右手の指が、行きつくところへ行き届いたとき、私は、思わず、驚きの声を放った。

これは、なんということだ。

それは私の予想してもいない現象だった。

最初から、こんなことって、あるのだろうか。私は左手で彼女を抱き起してから、口と口とを、ぴったりと合わせた。

しばらくは、唇と唇とを合わせたままだったが、彼女が大きく息を吐いたかと思うと、それをしおに、彼女は自分の舌を私の口の中に押し入れてきた。

私が、それを吸うと、舌の根元まで、私の口一杯になるまで吸われるにまかした。

☆

艶子の、のけぞった体重が、私の膝の上のしかかっているの、その重さで、私の足は痺れたようになっていた。

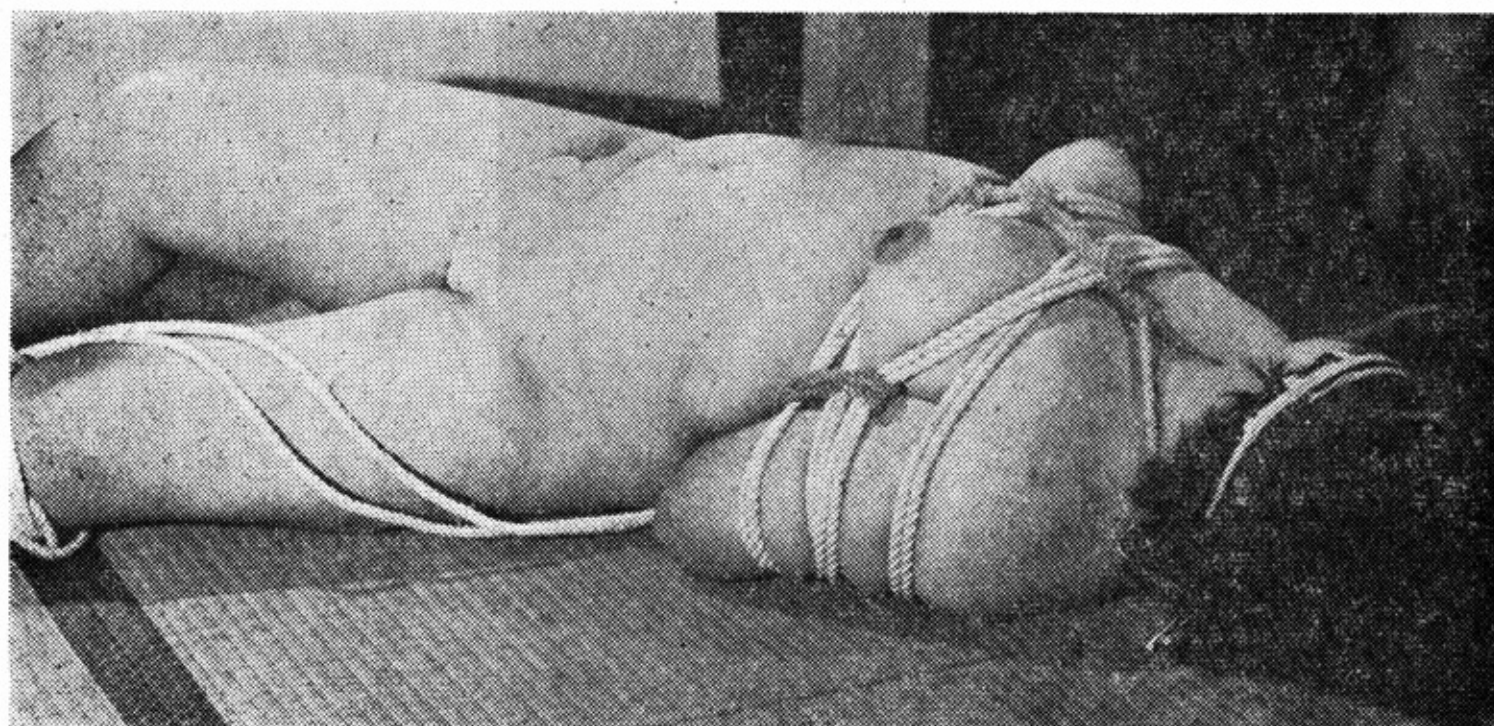
私は、彼女の裸身を畳の上へ横たえておいてから、洗面所へ走った。

手を洗って戻ってくると、艶子の大きな身体が精も根も尽き果てたといった風に、畳の上でのびていた。縄目だけは、一分の隙もないように、豊かな肉をくびっている。

手間と時間をかけて縛った、その縄目を、私は彼女に跨がりながら解いていった。

「手と腕が、しびれてしまっている……」

前にさし出した手首と二の腕に、恐ろしいほどの縄目の窪みがついている。皮下溢血はしていないだろうか——と、私は一瞬、気になった。単なる縄目だけだったら、明日になったら取れるだろうが、もし、皮下溢血だったら、一週間か十日は、アトが残るのだ。



「艶子、縛られるのが大好きなんだネ。こんなに凄いと、思わなかったよ」

「いや、そんなこと言わないで頂戴。恥かしいわ。あんなとこ、見られてしまつて……」

「でも、いいじゃないか。艶子が、縛られることが大好きな女だということがわかつて、僕も嬉しいヨ。これから、遠慮せずに、ドン、責めることが出来るものね」

「私、自分でも、わかつていたの。縛られることが好きな女だつてこと。だって、奇譚クラブの写真、見ていて、あんなに興奮したんですもの、あたりまえですわ。けれども、実際に縛られてみて、こんなに、凄く気持ちがよくなるなんて、考えていませんでしたわ」

「とにかく、凄く興奮したもんだナ。最初から、あんなに……を……すとは頼もしいよ。だが、あれで僕の責めが終つたんじゃないんだぜ。これから、もっと、もっと素晴らしい責めで、艶子を泣かせてやるからナ。さあ、立つて、こっちへ来るんだ」

両手首を揃えて縛り、鴨居で頭上高く吊り上げた。艶子のような太った女体には、こうしたポーズが一番、適しているのだ。ムチムチとした白い肉体が、無防備のまま、私の目の前で、うねうねと、くねっている。

私に、その隠すすべのない全裸の姿を晒すだけで、もう耐えられない恥かしさなのだろう。白い顔を紅に染めて、全身を縄のようによじって悶えている。

「ああ、顔を、顔をかくして、お願い！」

目を固く閉じ、顎をつき出して、顔をのけぞらして、喘ぐように彼女は言う。

「そうか、よしよし、それだったら、目かく

しをしてやろう。顔をかくしたら、身体の方は、もう、どんな恥かしいことでも、やると言うんだナ。それだったら、言う通りにしてやろう。さあ、艶子は、顔をかくして頂い

たら、どんな恥かしいことでも、自分から喜んで致します」と言ってみろ

「はい、艶子は、艶子は、顔をかくして頂いたら、どんな……」





「その次は？」

「恥かしいことでも、喜んで致します」

「本当だな」

「はい」

私は幅広い帯で目を掩ってやる。

これで、彼女の目は、もう何も見えない。

全く目の見えない暗闇のなかで山口艶子は

素裸のまま、両手を吊られているのだ。

深く大きな臍窩が私の目の前にある。

魅力的なお臍だ。

ぽっかりと口を開けた素晴しく深く、美

しい、お臍の穴だ。

私は、その穴に人差指を突っ込む。

「あらっ、いやっ」

彼女は、さっと、お尻を引っ込める。

私は左手を、彼女のお尻へ回す。

「大人しくしないで、脇腹をくすぐるゾ」

「いや、いや。擦るのは、やめて！」

「だったら、素直に、そこらを触らせろ」

「いやです。そんなこと、されるの。私、ど

こ触られても、とっても擦りたいです」

「ふふん、感度抜群って、ところだな。だっ

たら、僕が、これから、どっかを触るから

そのたびに派手に声を出してごらん。どこを

触るか、それは、わからないんだよ」

「勘忍して、勘忍して。そんなの、私、たま

らないわ。しないで、お願い。考えただけ

も、気狂いになってしまいうさうよ」

「いいから、いいから。さっき、約束したろ

う。どんな恥かしいことでもしますって。だ

から、思っきり、恥かしい言葉を出してごら

ん。僕が聞いていてあげるから。ホラ、ここ

は、どうだい？」

私は、両手を挙げて伸びきった脇腹に、そ

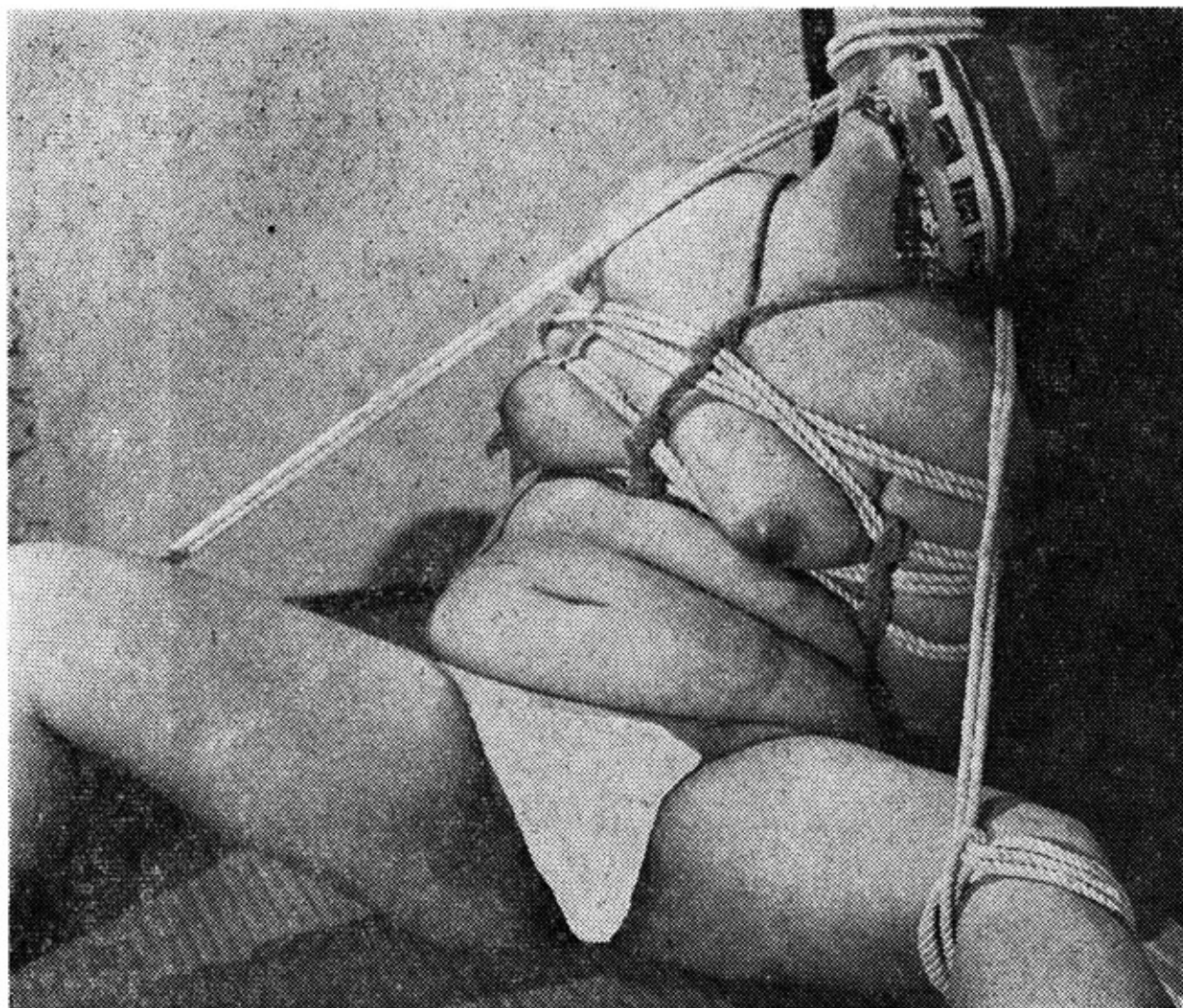
っと、指先を触れた。

「ああ、く、くすぐったい。そこはイヤッ」

吊った縄が、ギ、ギと鳴った。

全身が弓のように、のけぞり、ぐらぐらっ

と揺れた。凄い感度だ。素晴らしい反応だ。



艶子は狂ったように泣き
声を出す。

もう、どこを触っても火
がついたようだ。

全身、これ性感帯といっ
てよい。

大きな声を連続的に張り
あげた。

私は、猿ぐつわを噛まし
た。

狂いまわる白い女体――

私は両腕で、彼女の裸身
を抱きしめた。そうしな
いと、狂ったように、もが
まわる女体の動きが、ど
うしても止まらないのだ。

今までのM女には嘗て経
験したことのない物凄いタ
イプだ。私は彼女を畳の上
へ寝かせた。

私の右手は、す早く、滑

私は、それを見て、たまらなくなり、お臍

り込んだ。

の窩のなかへ、ズブリと人差指を差し込む。

「ゆ、ゆるして、ゆるして……。おおお、そ
んなことは、なさらないで。あああ……」

おお、そこは、さっき以上……なのだ。

まさに、発作――といって、よかった。

私は、右手は、そのままに、彼女の頬にキ

ツスの雨を降らした。

「可愛い、可愛い。本当に可愛い。こ
んなに、反応が凄いと、思わなかったよ」

目隠しの結び目を解く。

両えくぼのある可愛い顔を見ながら、私
は彼女に迫っていった。いち早く、その気配
を敏感に察した艶子は小声で私に言った。

「縛ってからにして……」

手を伸ばせば、縄はいくらでもあった。

私は、早縄を打った。

「痛いけど、辛抱する――う」

艶子は断末魔のように叫んだ。

☆メス犬の狂態

風呂へ入って上つてくると、急に、空腹な
のに気づいた。時計を見ると、七時が過ぎて
いる。あわてて、電話で夕食の注文だ。

彼女は二人前、食べるという。

これじゃ、肥る筈だ。

食事がくるまで、一時休戦になる。

私は彼女の膝枕で横になった。目の前にあ
るのは、白くて逞しい滑らかな肉塊だ。

「真白で、すべすべした綺麗な肌だね。シミ
一つないじゃないの。この感触、こりゃ、た
まらないね。こんな綺麗で、ふくよかな肌っ

て、僕は初めて見たよ」

「そんなこと、ございせんわ。もう、オバアちゃんですもの。ダメですわ。私なんか」

「何を言ってるんだよ。二十五才って言ったら、花でたとえたら、今まさに、満開って、いうところだよ。この色艶といい、全く、爛熟してるという感じだナ」

「色の白いのだけが取り柄なんです」

「それは、そうと、艶子は数年前に、四人の男に輪姦されてから、それ以来、男を知らないって言ってたろう。それだったら艶子は完全なバージンだよ。精神的にも、肉体的にも、処女だナ。それが証拠に、ちゃんと処女膜があったもの」

「まあ、それ本当。私、とても痛かったわ」

「痛いけど、辛抱するって言ったネ」

「ええ、縛られていると、私、痛いのも辛抱出来そうに思えるの。それに、とっても怖いんですけど、何人もの男の方に無理

に犯されたいっていう気持が強いんですの」

「ほほう、だったら、S研の会合には、もってこいだナ」

「そんなの、出来ますの？」

「そう、艶子の、このボリニームのある肉体に、四人も五人ものS好みの男たちが、入れ替り立ち替り、襲いかかるんだ。どうだ、そ

んな目に合ってみたいと思わないかい？」

「おお怖^{こわ}い。私、そんなこと考えるの、とっても恐ろしいの。それでいて、怖いくせに、そんなに犯されてみたいって気持も、するのよ。でも、実際に、そんな、輪姦されるとなると、やはり恐ろしいわ」

そのとき、階段のあたりで、カタッという音がした。私は跳ね起きると隣の部屋へ行ってみた。階段の上り框に、注文品を盆にのせた中年婦人が立っていた。

それを受取って戻ってくると彼女は魔法瓶から急須に湯をついでいた。卓を挟んで向い合って二人で食事をした。

「艶子は、よく喋るので、僕は助かるよ。カメラ・ルポを書くのにも書き易いしネ」

「私、平常は無口なんです。気がむかなければ、一日でも、黙っているときがあるくらいなんですのよ。変でしょ。こんな、私って……」

「今日は、特別に、よく喋るじゃないか。そんなに、何もかも



話してしまっても、いいのかい。僕は、その方が嬉しいけど」

「だってエ、貴方が、うまく私に、喋らせてしまふんですもの。仕方がないわ」

「それで、さっきの、輪姦の話だけど、興味があるんだったら、一度、やってみないか。そんなとき、他の人達が見ていたら、構わないんだろう？」

「そりゃ、見られても仕方ないでしょうね。」

私は縛られて、みんなに交替で犯されるんですもの、どうも出来やしないわ」

「だったら、やってみるか？」

「でも、怖い。私、男の人が怖いよ」

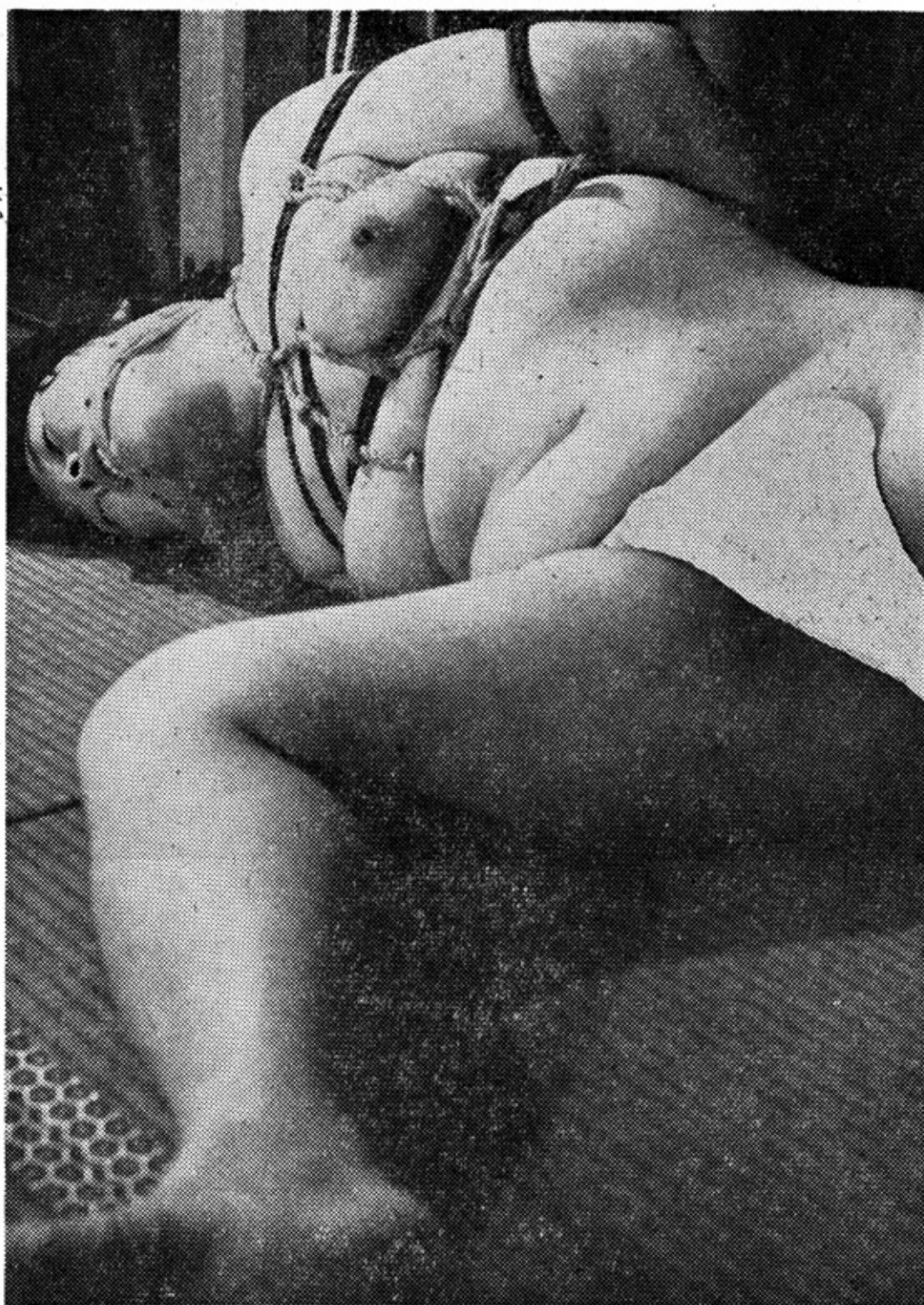
「この僕も怖いのか。僕も男のなかの一人だぜ。どうだ、こうされてみたいのか？」

私は、すでに食事は終わっていた。彼女は二人分目の半分ほど食べかけているところだった。彼女の食欲は旺盛だ。

「待って。食べ終わってからにして……」

「そんなに大食するから、こんなに太ってしまふんだよ」

坐っていると太股の真白い肉の盛りあがりようは見事という外ない。投げだしている胫も、大根足というような生やさしいものではなく、燕膏かぶらに近い太さなのだ。



「だって、お腹なか、すくんですもの」

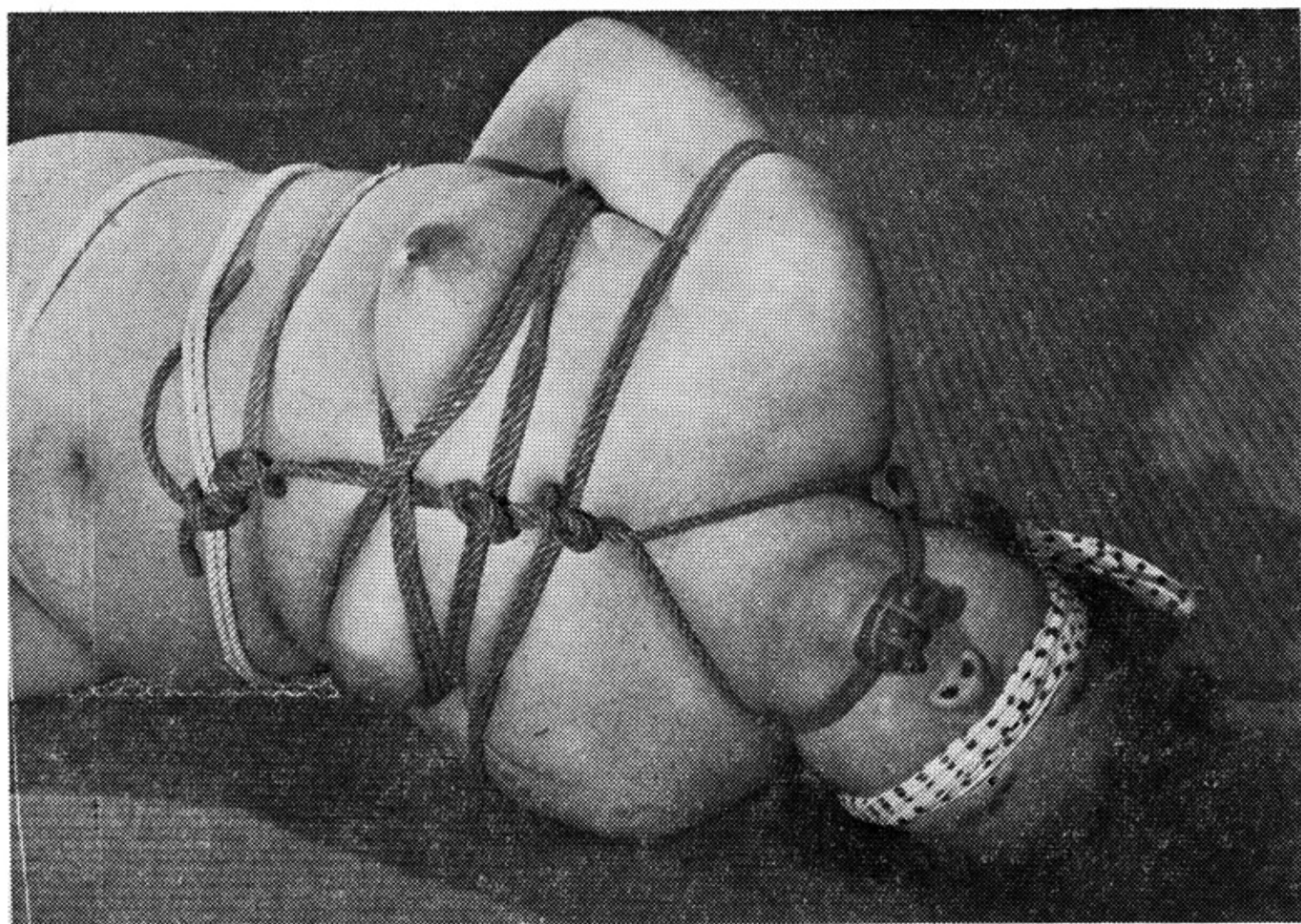
色気よりも喰気の方が優先のようだ。折角ムードづくりをして、アタックしようと思っ

たが、これじゃ盛りあがりようがない。私は起ち上って階段を下り、入口のドアの施錠をしてから、配光の場所替えをする。

二つの部屋を仕切っている襖二枚をはずす

と柱が現われた。その柱の前に、今、食事をすましたばかりの食卓をデンと据えた。

この食卓が、山口艶子を開股縛りにして、女体開陳、女体検身の場となるのだ。彼女の足を開いて縛るための柱、鴨居が、ここにはある。「ふとっているけれど、私は身体は柔らかいの」と言っていた彼女が、私の羞恥責



めに対して、どのように派手な狂態を、見せるだろうか。そこに私は興味があった。

とにかく、縄と縛りには凄く反応する、彼女のことだ。夕食も済んだことだしこれから、ゆっくり落着いて、じくじくと、粘っこいたぶり責めを加えた結果彼女のダイナミックな悶えと泣き声を聞くことが出来ると思うと、胸がわくわくしてきた。

「さあ、こっちへ、おいで——」

私は弾んだ声を挙げた。彼女は、いそいそと、私に近寄ってきた。

身体全体が、何かを期待している風だ。

私は太い腕をとって、後へ捻じまげる。腕の太い割には比較的、よくあがる。彼女は少しも痛いと言わな

いので、私は気軽に縄を、きゅっ、きゅっと締めつけながら、入念に縛り上げていった。どうしても私は、この山口艶子に対しては、力一杯、厳しく縛りつけたいという気持ちにされる。彼女の肉づきがよいからだろうか。二の腕にも胸にも、縄が埋もれてしまうくらい、一分のスキもない凄い緊縛感だ。

さっき、初めて艶子を縛ったときの、あの激しい反応が、私の目に浮かぶ。

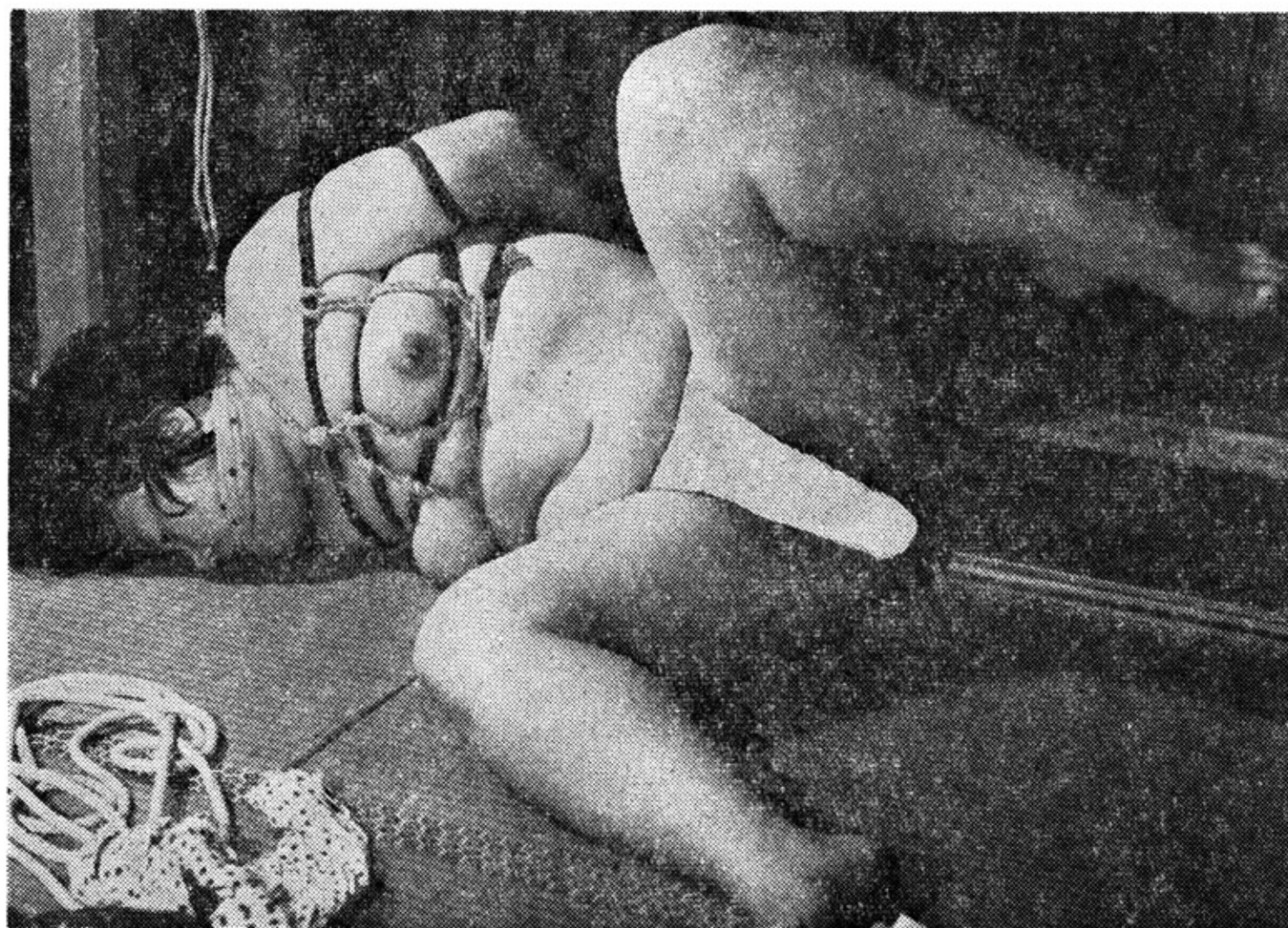
縛るや否や、大きなお腹が、お臍を中心として、激しく波うち、上下運動をくり返した発作が、目に焼きついて放れない。

今も、高手小手に縛っただけで、もう自分では立っておれないくらい、胸と腹とが大きく波うち、上体がフラフラと揺れて、今にも倒れそうになってくる。

私は乳房に手をかけて支えてやる。掌のなかから溢れそうになる豊かな乳房だ。

私が支えようと、彼女は今にも足元から、くずれそうになりながら、私に、もたれかかってくる。体重があるから、抱えあげるのは、なかなか重い。今までに何人ものM女を縛ったが、こんな女も珍しい。

食卓の上へあがらせると、柱を背にして正座した。縄で縛られることによって、彼女の



身体の中に、どのような変化をきたしたのか私にはわからないが、とにかく、うっとりとした目つきは、とても、なまめかしい。

メス犬にふさわしい中型犬用の真赤な革製の首輪を艶子のネックに嵌めた。

尾錠を通して鎖をはめようとして驚いた。頸が太過ぎて、穴が間に合わないのだ。仕方がないので、秋田犬などに用いる大型犬用の首環に替えて嵌める。

「艶子。さっき見たところでは、お前さん、処女膜があったよ。これから一つ、はつきりと、それを見究めてやろうね」

「そんなこと、ない筈ですわ。私、もう、処女じゃないんですもの」

「それじゃ、処女膜じゃないしに、処女膜痕と訂正しておこうか。あの痛がりよう

は、ただならぬものがあつたからネ。それに艶子には喋らなかつたが、出血も大分あったんだよ」

「だったら、あの輪姦されたときから、ずっと、そんな経験がないもんですから、もとへ戻ったのかしら？ あれから、今日のあなたが、初めてなんですよ」

「痛いけど、辛抱する——って、叫んだね。

あれは確かに、M女の叫びだったよ」

「まあ、私、そんなこと言いました？ 無我夢中だったもんですから、何も覚えていませんわ」

「なにしろ、激しい^{ほつき}発作だったからね。このように、この大きなお腹が、こんな風に、波打っていたんだよ。本当に凄かった」

「いやいや、そんなこと言わないで……」

「言わないなら、太股を素直に開くんだ。艶子の言うことが本当か、どうか。今から、とっくりと調べてやる」

山口艶子は体格が、ずば抜けて良いのにも拘らず、あちらの方は至って小作りなのだ。

彼女の言う、最初の十八の年の輪姦による初体験以来、只の一回も、そんな経験がないという言葉裏付けるように、抜けるような内股の色の白さそのままに、色素の沈着が少

しもないのだ。

美しい、全く、美しい。

艶子が、ニイッと笑ったときに見せる、口の両側のえくぼ、さながらに可愛いものだ。

色の白い、肉づきの良い、この女にして、初めて、このように美しい持物があるのだろうか。私は惚々とした目つきで、しげしげと見た。いくら眺めても、何度眺めても、千差万別、見飽きない絶景だ。

彼女は、諦めきったように観念して、私の見るにまかしている。

縄で縛るといことが、艶子に対して、これほどまでに強い影響を与えるものなのか。それとも、私が、見ているから、それが、こうして嚴重に高手小手に縛られ、開股縛りにされている彼女の心と身体とを揺り動かしているのだろうか。

私は、やおらカメラを取り上げた。

「艶子、目を開けてレンズの方を、見てごらん。そんな開股縛りの素晴らしい姿を、バッチリと写真に撮っておいてやるからね」

「いやーん、いやーん、顔をかくして、お願い。このままだったら、イヤ、イヤ」

彼女は一瞬、目を開いて私の手にしているカメラをチラッと見ると、顔を左右に激しく

振って目を閉じた。

私は近寄ると、食卓の上にカメラを置き、彼女の足首を、むんずと握った。

「ここを、こうされてもか？」

足の裏、そうだ、土踏まずのやわらかい皮膚を、ソツと指先で、くすぐるかのように軽く撫でた。

「く、くすぐらないで——。私、くすぐられるの、とっても、たまらないんです。そんな足の裏なんか、くすぐられたら……。ああ、許して、許して……」

きれいな足の指がピクピクしている。

私は触れるか触れないかのソフトタッチで足の指の根元あたりに指先を這わせる。

蟻の這うように、もぞもぞ、もぞもぞと、執拗な指先は、たえまなく艶子の足裏の柔らかい皮膚の上を舐めてゆく。

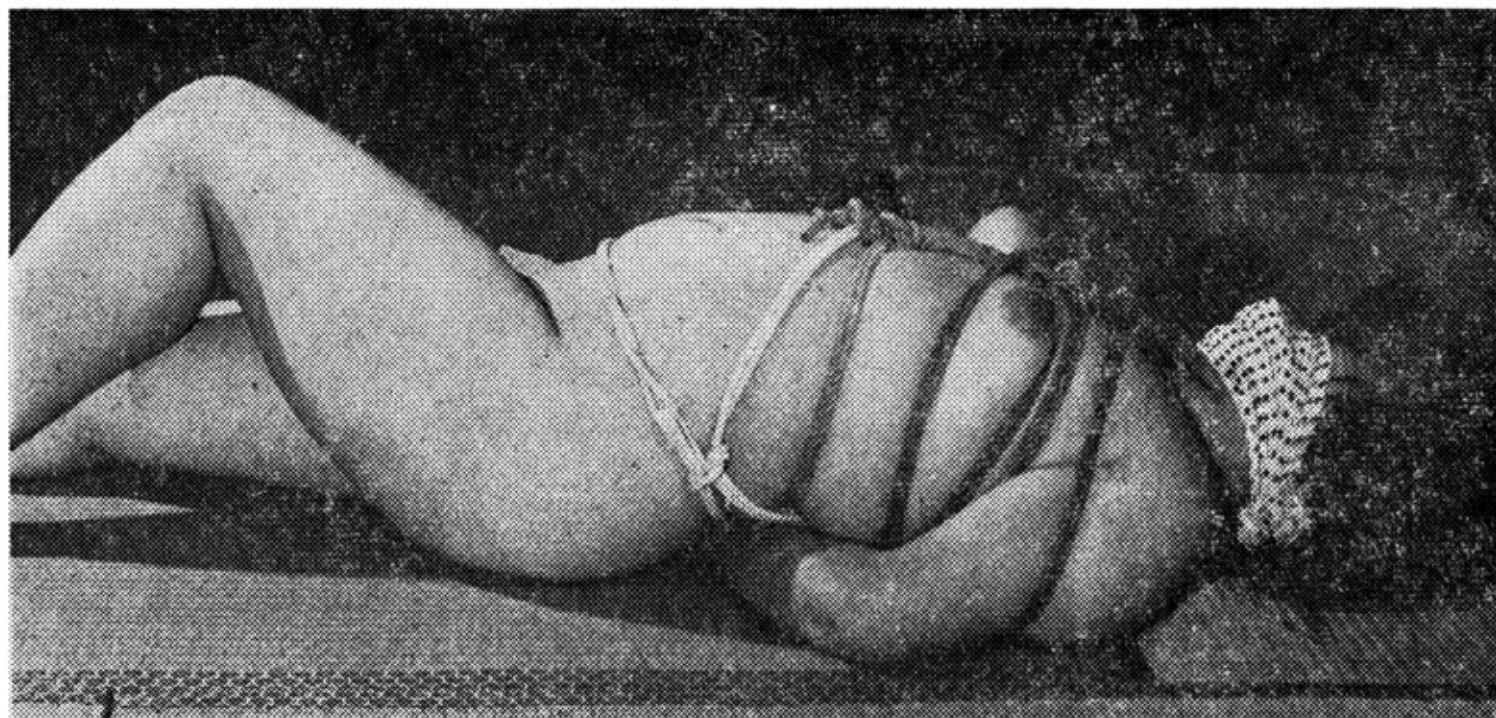
身体の間で、腋の下と共に、一番にくすぐったい個所が足の裏だ。

その足の裏に対する擦り責めなのだ。

足の指がピクピク鋭角的に動き、お臍が押し出されたかと思うと複雑な動きを私の目に見せて、凹んでいった。

「くすぐったいから、許して……」

私は写真を撮ることも忘れて、足の裏の擦



り責めを楽しんだ。

この女、身体中が性感帯といってよい。

縄が、その性感帯の塊みたいな幅広い女体を縛っているものだから、今や、火薬庫に火がついたみたいなのだ。

食卓のベニヤ板が動きまわる彼女の体重によって、ミチミチと不気味な音を立てる。縄が、きゅっきゅっと、きしんだ。

彼女が顔をのけぞらし、全身を波打たせてもがけばもがくほど、張り合いがあった。

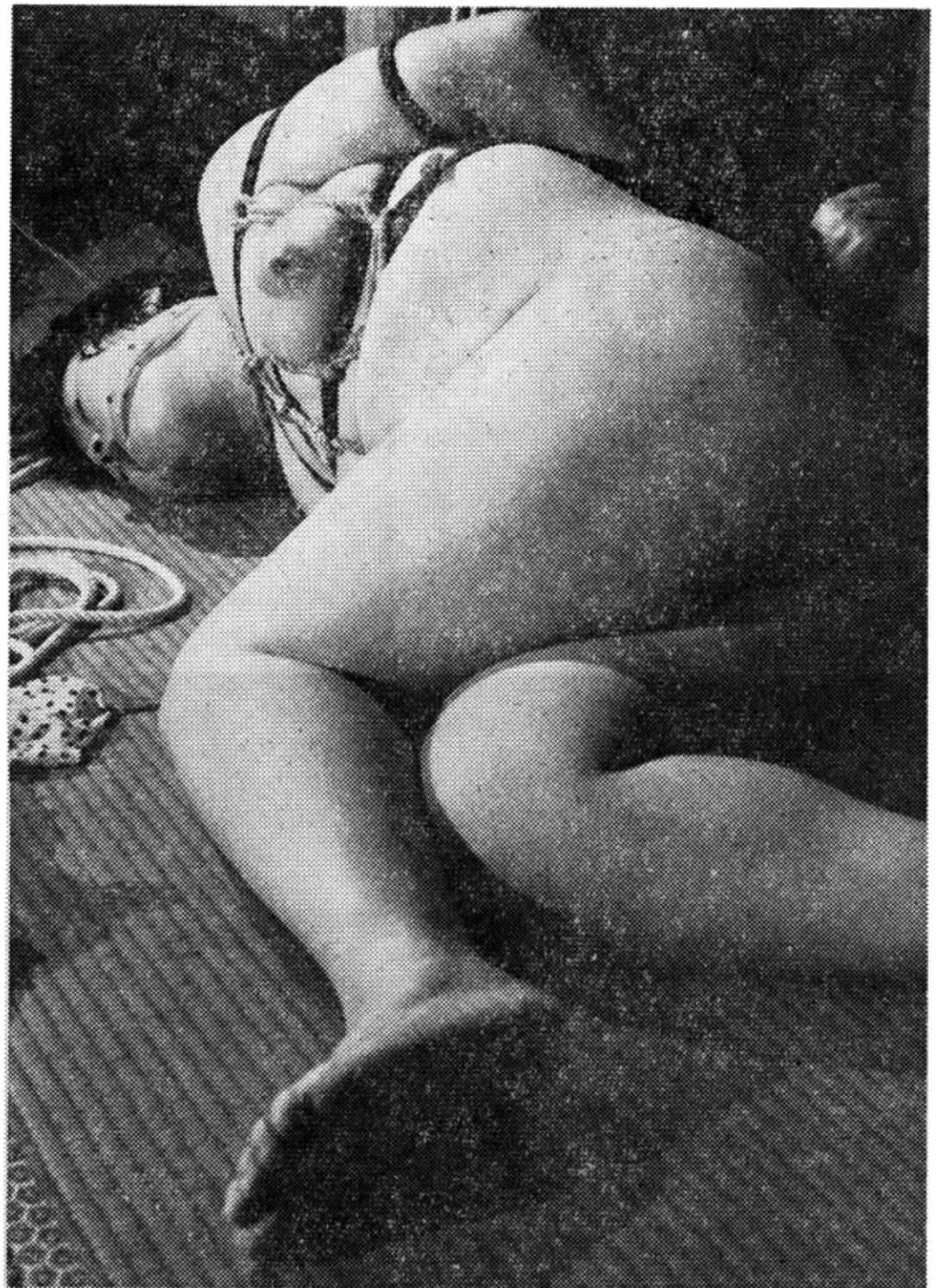
私は思わず奥歯を噛みしめた。

操りに対して感度の鋭敏な女性を、操り責めにするほど面白いものはない。以前、東浦ひかる——という女性を操り責めにしたことがあるが、彼女は特に腋の下から脇腹についての操りには弱かった。

そのたびに、嬌声をあげて、ころげまわって苦しんだ。しまいに私は、操るだけではなしに、脇腹を抓ったり捻ったりした。余りの彼女の反応の激しさに、つい私も前後を忘れてハッスルしてしまったのだ。いつも、そうして彼女は昂天してしまった。

今、目の前の山口艶子は、果たして、何処が最もウィーク・ポイントなのだろうか？

それを、これから、じっくりと、確かめる



楽しみが、私の手に残されている。

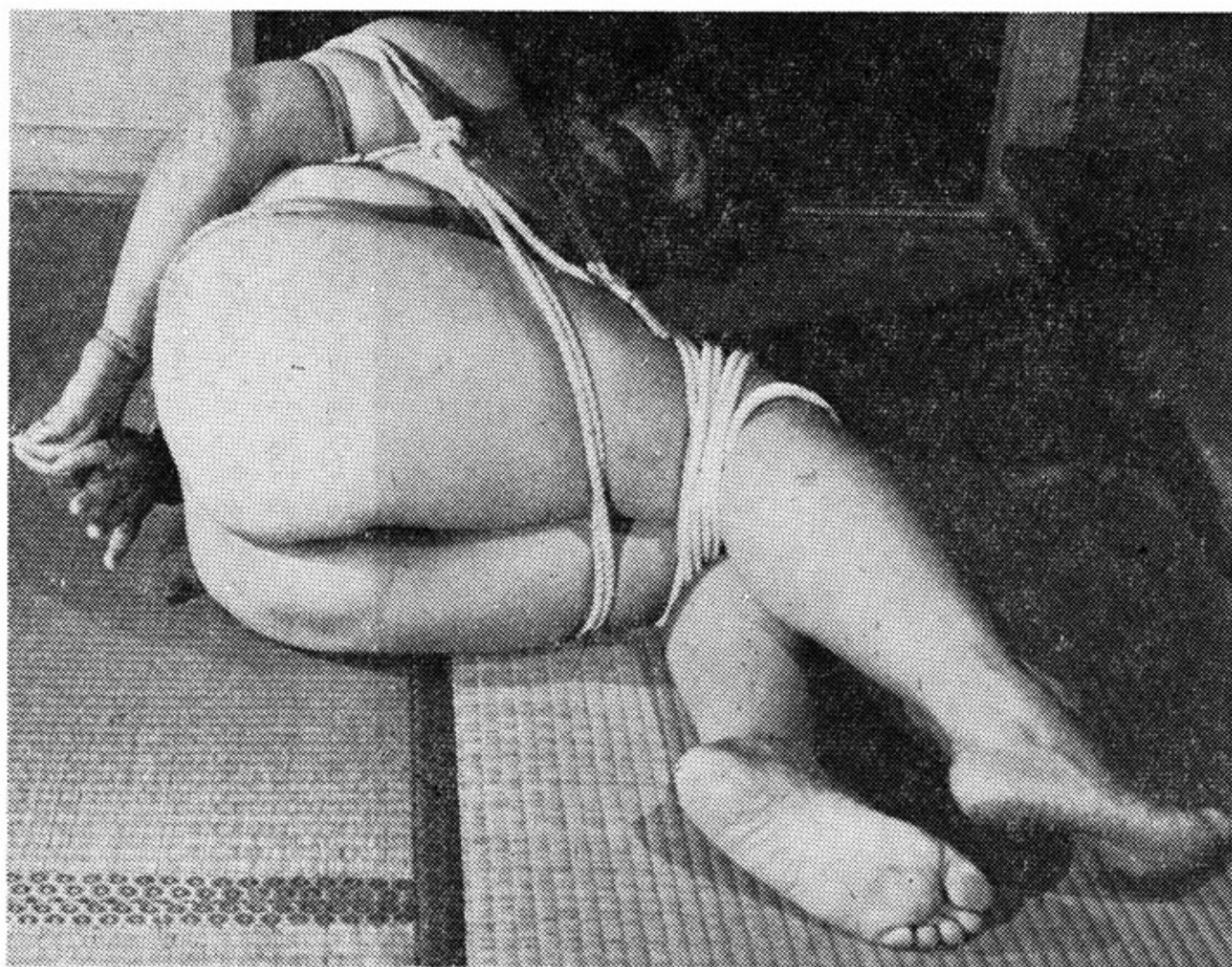
ネチネチと、あれやこれやを試みながら、ゆっくりくと、このポリウムのある女体を、いたぶり、弄び、そして、幾度となく犯してやることだ。操り責めだけで、昂天させてしまっは勿体ない。

私は縄を解いた。

入念に、何本もの縄を用いて縛ってあるので、解くのも、なかなか手間がかかる。

縛られるとき、そして縄を解かれるとき、それは、山口艶子のような女性にとっては、きつと、たまらない刺激なのだろう。見ていて、私には、それが、よく分った。

縄を解き終るや否や、彼女は、私に、がば



と抱きついてきた。ぶ厚い肉の感触だ。

「ねえ、私に、オルガスムスを覚えさせて。」

私、一度も、そんな経験ないもの……」

私の耳に熱い吐息がかかる。

食卓の上でだ。膝が、とても痛い。

こうしたとき、女を抱えてベッドへ運ぶのが一番いいのだが、なにしろ八十キロ近い女体なのだ。とても軽々と抱えてゆくというわけにはまいらない。

「まだフィルム一本分も写真、撮っていないんだよ。」

艶子の、この豊富な肉体美が縄にくびれているところを写してみたいものだナ」

「お写真なんか、撮らなくて、いいじゃありませんか。私、写真うつりが良くないのよ。だから、写真にうつされるよりも、実際にプレイした方が楽しいと思うのよ。ねえ、私を、さっすきのようにして、いじめて……」

「艶子は、そんなことを言

ってるがね。僕が写した写真を見たら、綺麗なので、きつと、びっくりするよ。この真白い肌が、縄目に悶えているところを永遠に残しておきたいナ」

私は、彼女の内股の白さへ、手を滑らせていった。なんという、なめらかさだろうか。ねっとりとした掌に吸いつくようなのだ。

見れば、彼女の受入態勢も、準備態勢も万全なのだ。

なんという感度抜群の女なのだろうか。

私は食卓の端に置いてあったカメラを、右足の先で蹴落していた。

「とっても痛い。でも、我慢するからいいわ。もっと、乱暴に扱って……」

彼女はマゾ女特有の澄んだ声音で喘ぐような言葉を吐いた。そして、しばらくしてから、私の首に両腕をしっかりと巻いて締めつけながら、念ずるように呟くのだった。

「私、オルガスムスになりたい……」

やがて二人は、食卓の上から畳の上へ、ころがり落ちた。下敷きになった縄が肌に痛かったが、今は、そんなことに気をとられていない心の余裕とてなかった。

「私を、もっと乱暴に扱って……」

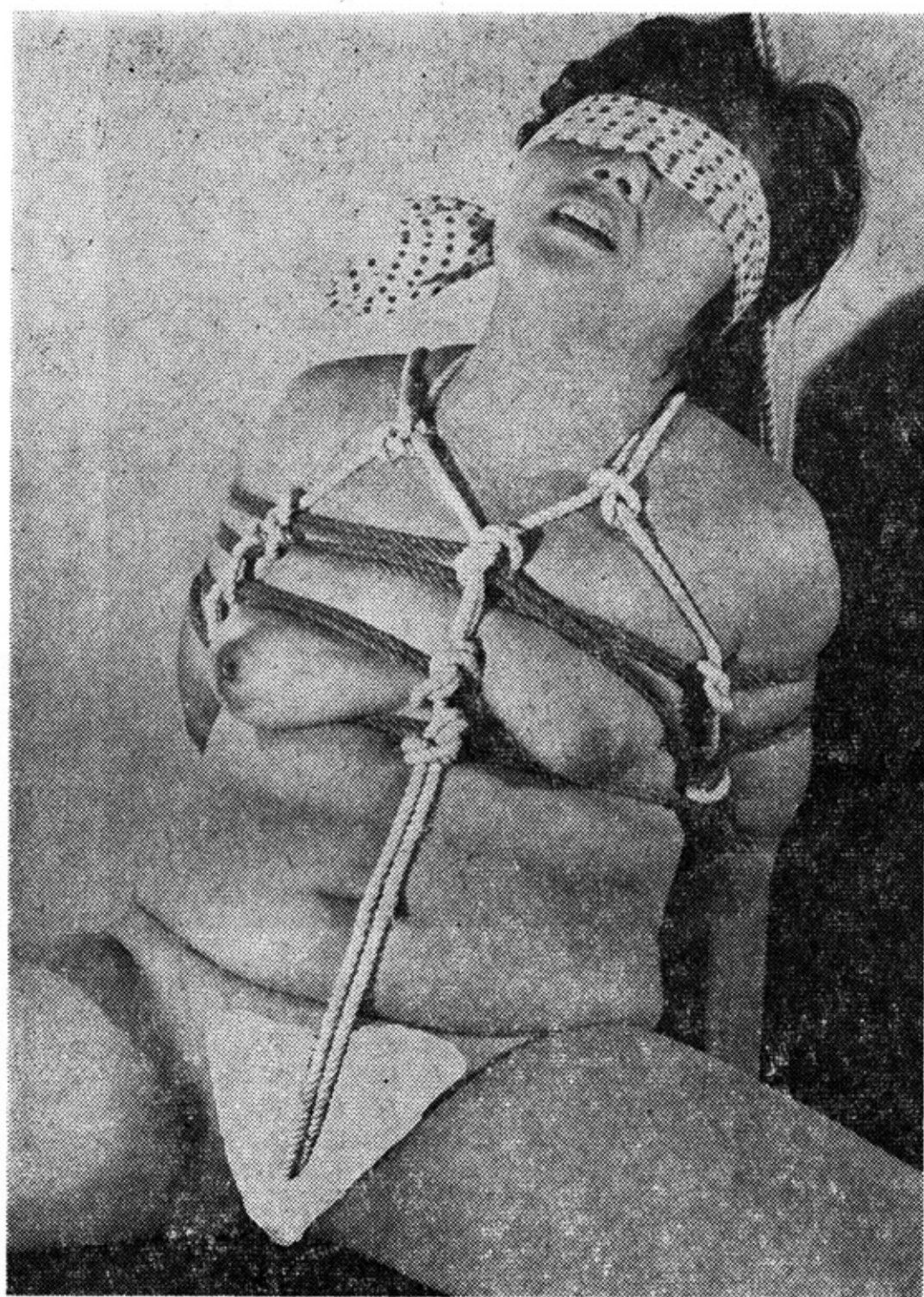
彼女は囁言のように何度も繰り返した。

☆ケモノになりたい女

この山口艶子という女――。

今日、SMプレイをするのが最初だと言っていたが、緊縛に対して、とてもタフだ。

柔らかい縄は、一本だって使わず、しかも遠慮会釈なく、思いつき縛り上げたのだ。



それなのに、一度だって、「痛い」と弱音を吐いたことがない。この密室へ入ってきて以来、食事と入浴のときを除いて、ずっと責め続けてきたのに、それが当り前のようにケロリとしている。丁度一年前に責めた苗木陽子とは身体つきは少し似ているが、山口艶子の方が年令も、ずっと若いし、しかも未婚で

ある。

女というものは、飼育次第では、どのようになっても変化してゆくものなのか。

私は赤い皮の首輪を色の白い艶子の首に嵌めたかったが、どうしても首が太くって嵌めることが出来ない。それで、ビーズのついた大型犬用の首輪を嵌めて曳綱をつけた。

四つ這いにさせて部屋のなかを歩きまわらせると、まるで白犬のようだ。

喜々として犬の首輪をつけさせられて這っているのを見ると彼女は、もう既に精神的にケモノになりさがっているのと同じだ。

今日の午後、私と初めて逢った彼女だ。それが、まだ数時間もたっていないのに、こんな犬の真似をさせられて喜んでいるのだ。

私は曳綱を手元へ、たぐり寄せる。

彼女の両の手首、胸、二の腕に、くっきりと縄目のアトがついている。

女に犬の首輪を嵌めるとき、嫌な（或は恥かしい）顔をしながらも、私が強要するので仕方がないといった風で従う諦観の者と、如何にも、そうして欲しいといった風に首を差し出して嵌め易いようにする者があるが、勿論、この山口艶子は、後者の方だった。私は、彼女の顔の前に足を差し出した。

「艶子は、首輪をされて犬になったんだ。ホ
ラ四つ這いになっている。さあ、僕の足を、
その口で舐めてごらん」

「いやん、いやん。私、口が大きいのに、そ
んなことしたら、一層、大きくなってしまっ
わ。させないで、させないで……」

私が、まだ、何もしないのに、彼女は今に
も、私に何かされるように悲鳴を挙げた。

それは、彼女の巧みな誘導だ。

私は、その言葉で忽ち誘発された。

彼女の口が大きい筈はない。私は、むしろ
顔に比較して、小さい口だナ——と、思って
いたくらいだ。下の方の口も、経験がないこ
ともあるが、身体に比較して、とても小さく
て、私は苦勞させられたのだ。

私は、もう彼女に足を舐めさせたくって、
ムズムズしてきた。

髪の毛を驚づかみにしておいて、彼女の唇
の上へ足の指を当てがった。

ムムムムム——

彼女は、しっかりと口を閉じたまま、唇を
足の裏でこすられても開こうとしない。

「こら、舐めないか！」

そう言ったときだ。

彼女はパクッと口を開くと、私の足の拇指

を、スポッと口にくわえた。

忽ち、根元まで吸い込むと、チュツチュツ
と吸い出した。強く、そして、時には柔らか
く吸ったかと思うと、拇指の裏を舌の先で、
くるむように舐めまわした。

「ざまア、見る。舐めたじゃないか」

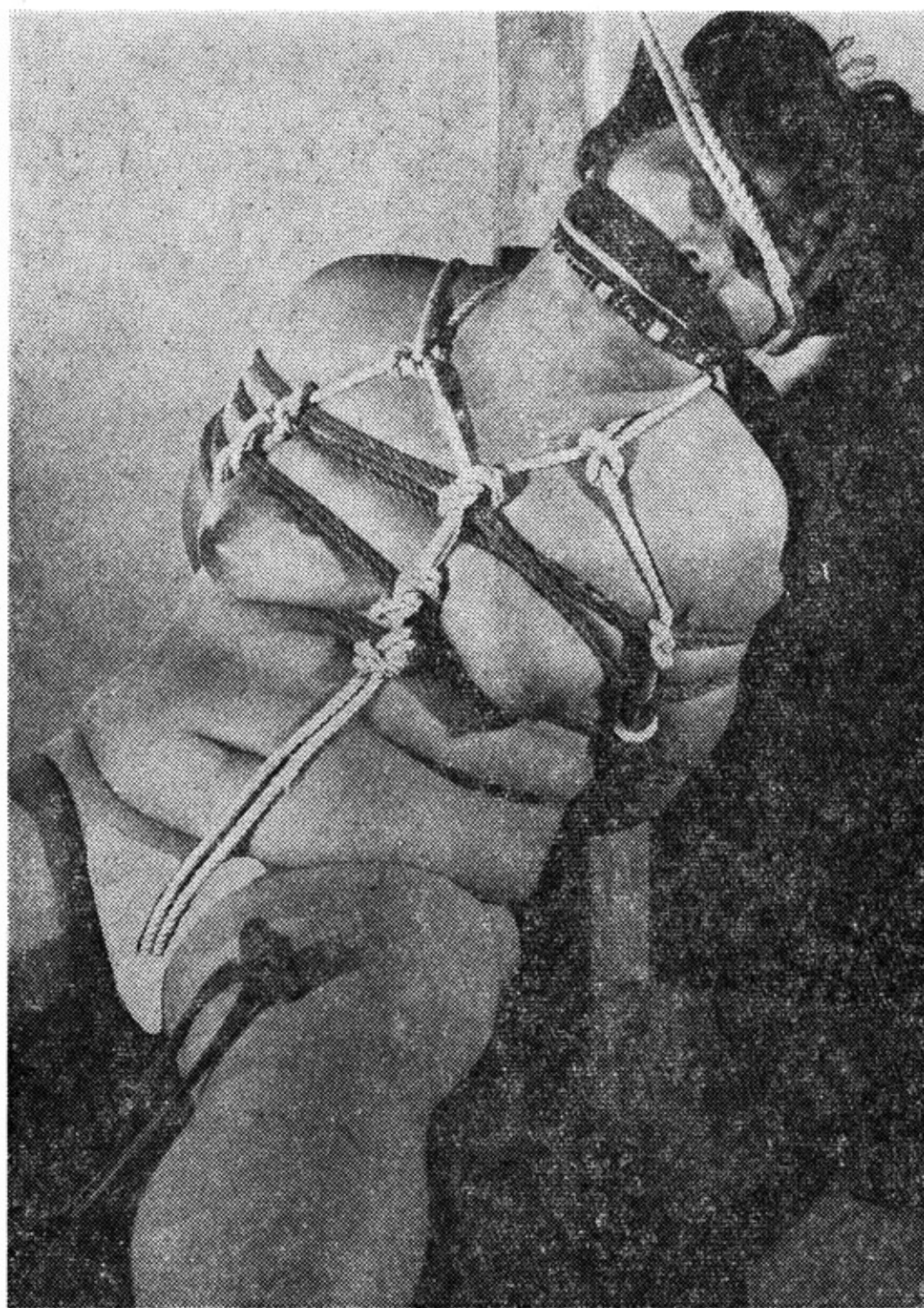
私は、みるみるエキサイトした。

若い女に、足の拇指を吸わせるということ
が、こんなにも気持がよいものなのか。

彼女は拇指ばかりを懸命に吸っている。

指の裏の方に、生温い擦ったさが瀰漫して、
その快感が背中の方まで伝わってゆく。

裏の方ばかりか、爪の方へも、彼女のよく
動く舌が、まつわりついて離れない。私は曳



綱を握ったまま、彼女の舐めるがままに任せていた。歯が指の根元に軽く当たった。

「私、犬になりたいの。犬にされたいの」と言っていた彼女の望みが果たされたわけだ。

奴隷女は、まだ人間の境涯であるが、犬はも早、人間ではない。ケダモノなのだ。いや人間に飼われた家畜なのだ。ペットなのだ。

「私、足舐めなんて、したことないの。だから、どうしていいか、わかんないの」

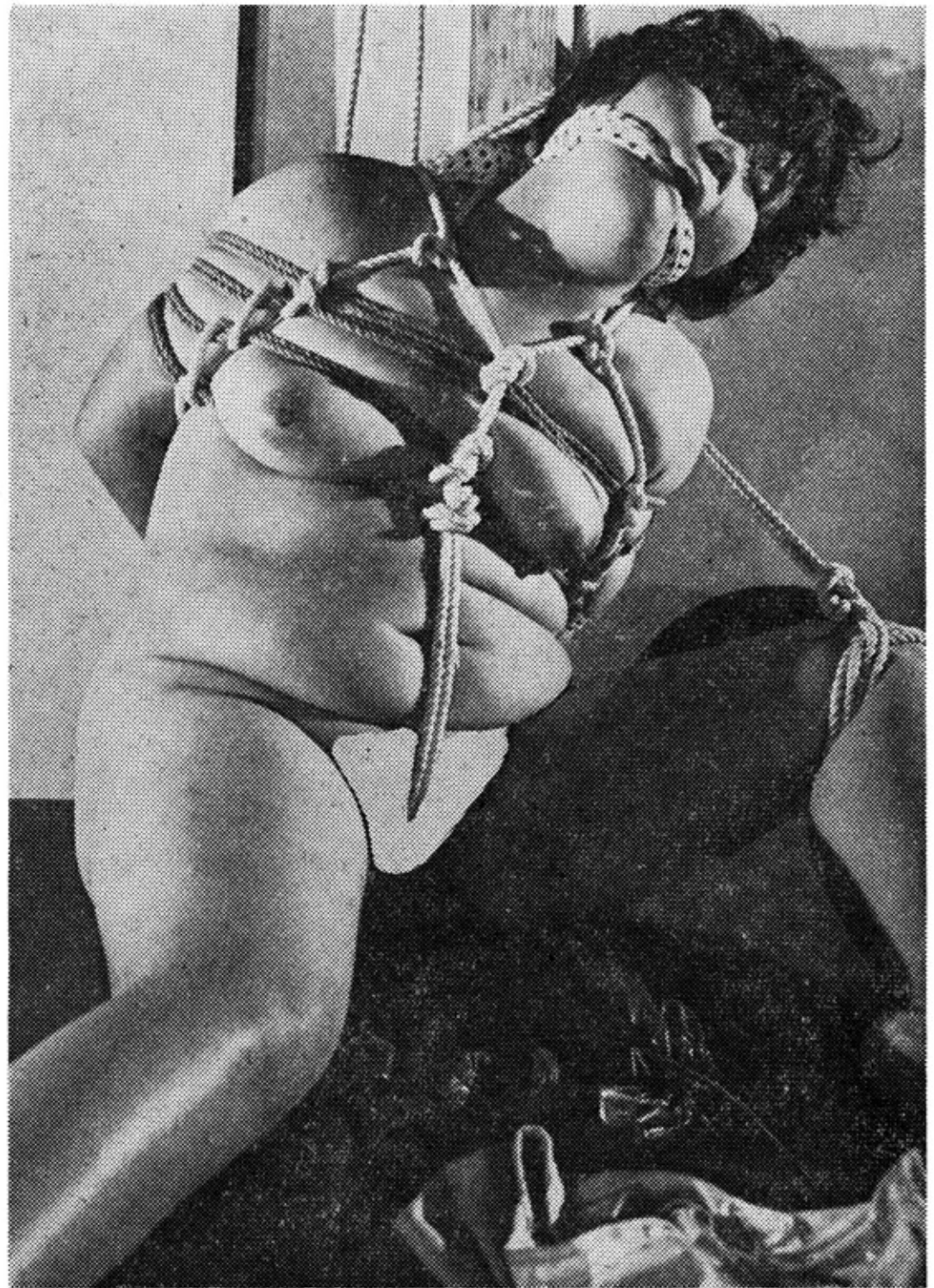
そんなことを言っていた彼女。たしかに、男の足を舐めたことも、舐めさせられたことも、今までになかっただろう。

それが、どうだろう。今、目の前で、こうして、男の足の拇指を、すっぽりと口に含んで、チュッチュッと吸っているのだ。

私は目の前が薔薇色に輝いたように華やかに見えた。艶子と二人でワイキキの浜辺を歩いているような錯覚に陥った。

でも、その華麗な映写幕は一瞬にして消えた。もう一度、そんなムードを味わいたいと思ったが、あとは徒らに生理的な快感だけが満潮のさすように襲ってくるだけだった。

私は彼女の口からスポッと足指を抜いた。曳綱を引っぱって、彼女を四つん這いのまま、ベッドのある部屋まで歩かせた。



「艶子は、僕の足を舐めたから、もう、すっかり犬になってしまったんだね。僕の可愛いペットちゃん、身体の寸法を計ってから、どこが一番、感度が鋭いか調べてあげよう」

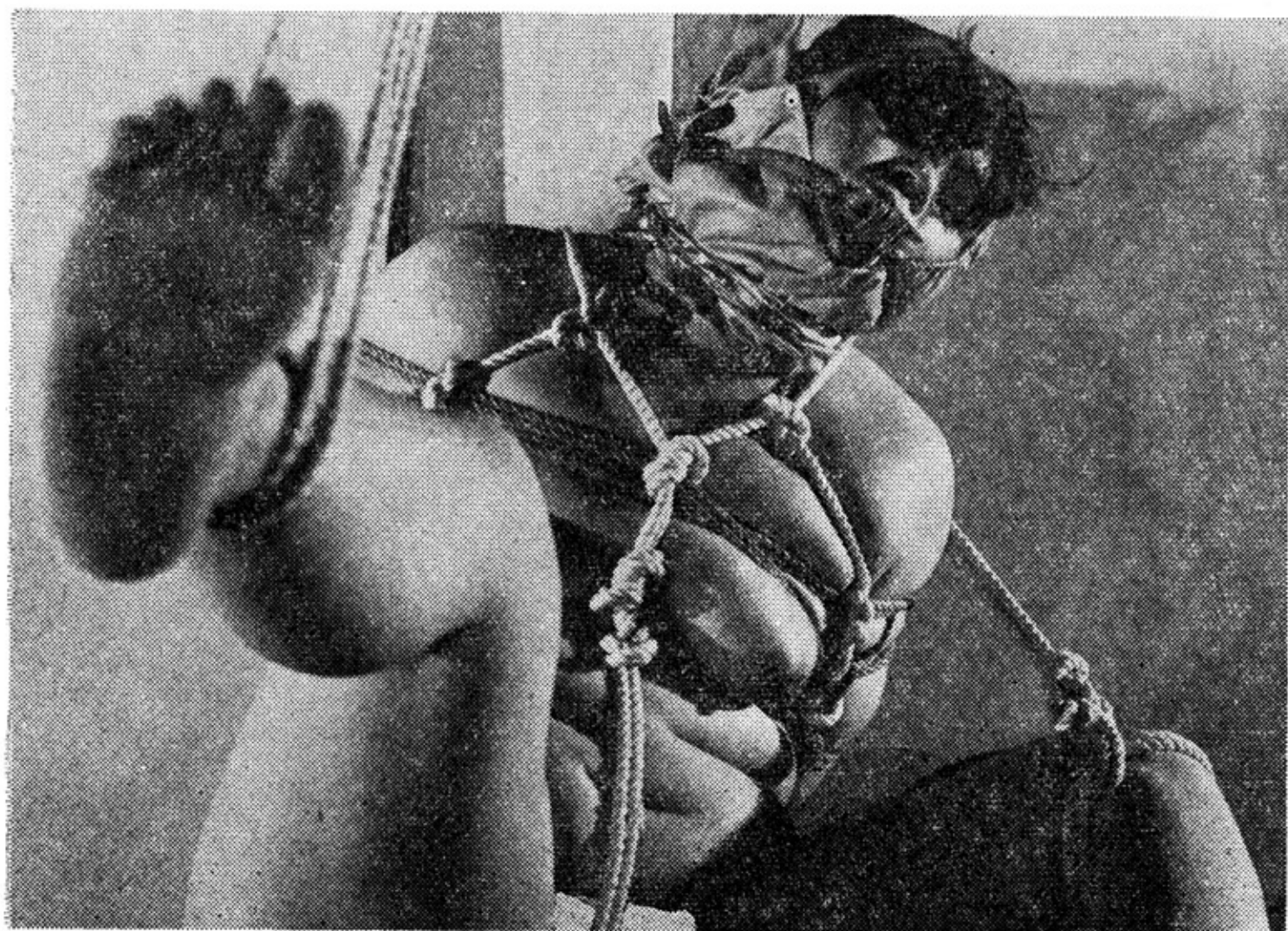
「身体の寸法は、もう自分で計ってありますから、いいんです。それよりも、私を凄く気狂いのように、燃え上れる身体にして。私、

一遍、そんなになってみたいの」

「さつき、奥で、コリンコリンとしたときは艶子は、そうだったと、思っていたんだが、艶子って、とても欲張りなんだね」

やはりベッドの上は、クッションが良く効いていて、気持がよい。

「私、後手に縛って犬のようにさして……」



枕を二つ重ねて腰の下へ敷いて、お臀を高々と掲げた格好にさせる。両手を後手に回して、浴衣の紐で、きっちり括り、顔を蒲団に埋めさせた。遅い臀部が真白い小山のようで、まことに見事な眺めだ。

私は双丘の奥で、ひそかに息づいている真珠のようなアヌスを見た。アヌス責めと浣腸を願っている彼女なのだが、それは所詮、奇譚クラブの読み過ぎからきた観念的な妄想の所産に過ぎない。私の一瞥したところ、小さくて可愛いくて、全くの処女地だ。

私は充分に、見るだけ見た。

そして、曳綱を手に巻いて引いた。

首輪をされている限り、彼女は犬だ。

犬として取扱われること

に、限らない愉悅を覚える「畜化願望の女」なのだ。

肥満体——白豚——ケダモノ願望。

これは一脈相通じているのか、そういえば苗木陽子も後背位が殊の外、好きだった。そしてアヌスに対する素晴らしい感度も共通だ。

苗木陽子といえば、七月に、彼女から便りがあって「S研の会合があったら出たい」と言ってきたので、早速、返事を書いて出したところ、八月も中旬が過ぎてから、転居先不明で戻ってきた。

さて、同じ肥満体でも森田美美子のアヌスの感度は、また抜群だ。それぞれに特色を持ちながら、私のイメージのなかで、三人の女性／苗木陽子／森田美美子／山口艶子が、ある意味でオーバーラップしてくるのだ。

この原稿を書き始めてから直ぐ、森田美美子から、「今、六甲山のカントリークラブに来ているが、来ないか」と電話があった。

「これから数時間は身体があいているので、プレイをしたいんだけど……」と言うのだ。

土曜日で折悪く、私は人と逢う約束があった。彼女は怨じ顔で、「いつも駄目なのね」と言う。「それだったら、S研の人を誰か、代りに向けようか」と言ったら、「私、初対

面の人にはダメなの。
人見知りして、喋れないわ。だからプレイどころじゃないのよ」

「だって、僕の場合は初対面で、あんなに喋ったし、物凄くハッスルしたじゃないか」

「あら、あれは、貴方が、私をうまく喋らしたからじゃないの。オホホホ、いやだわ」

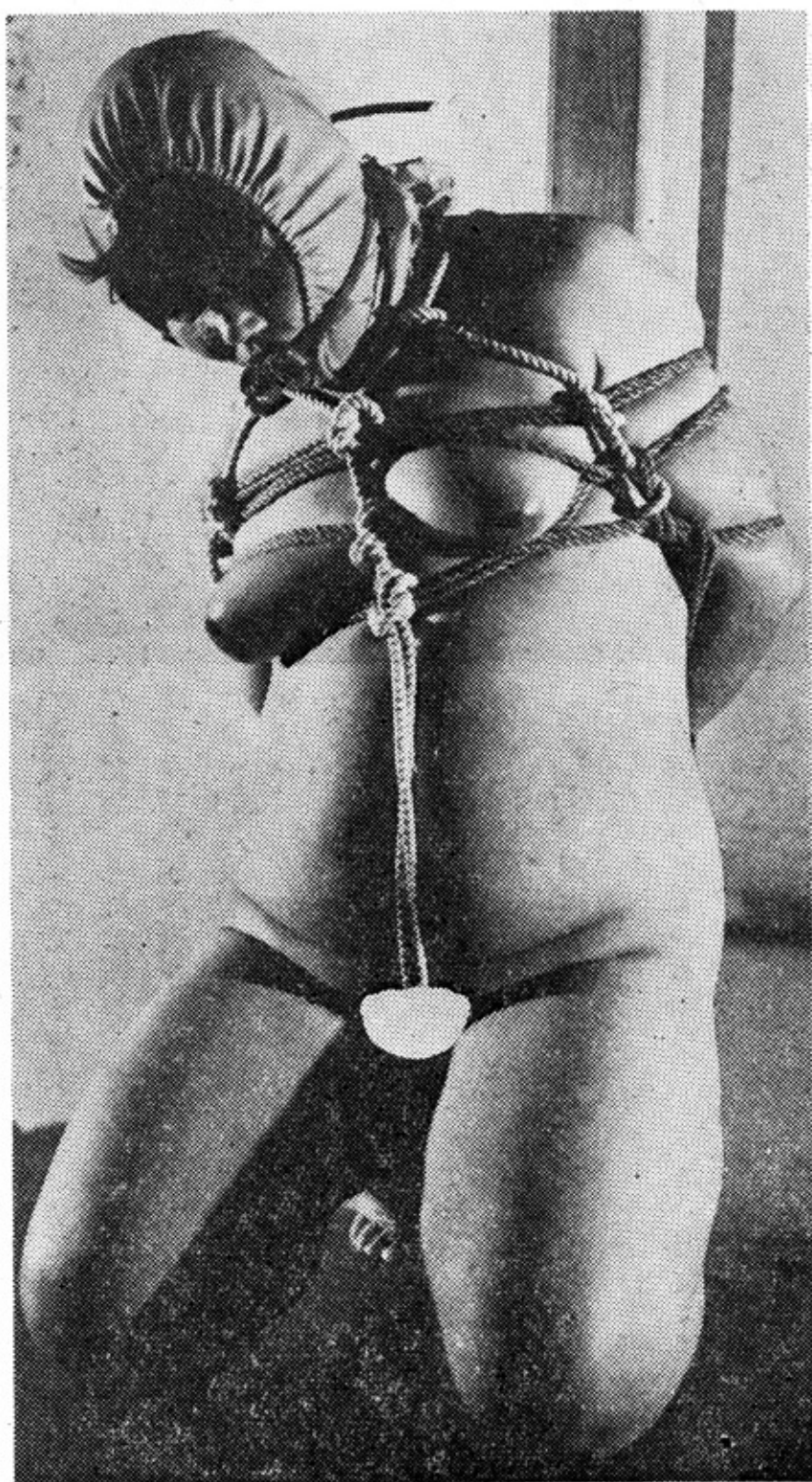
というわけで、とうとう、次の機会にプレイすることにきめた。

どうせ、気まぐれ娘のことだ、いつ、電話がかかってくるか、どこから、かかってくるかそれは分らない。

「一泊旅行は出来るかい？」と訊いたら、「パパが出張のときだったら、二泊でも三泊でもOKよ」と言っていたから、泊りがけで、こっそりと責めてみたいと思っている。

☆

山口艶子は不死身のような女だ。
さすがの私も持て余し気味になった。



体格が良いのでスタミナは抜群だった。

初めがあっても終りが無いマラソンのような長帳場には、いや、マラソンにも決勝点はある。彼女には、その終着駅もないのだ。

痛さは相変らず訴えたが、それも、やがては、薄らいできたようだった。

太股の太さ、ネック、胫のまわりなどの計測をしようと思ったが、それは諦めた。その代り、感度の測定だけは、この際、なんとしてもやってみようと思った。

測定器具として、胫

圧計の代用品として、私は人差指を用いることにした。それに依って感度の強弱深淺を知ることが出来るのだ。

片方の手では、彼女の裸身のあらゆるところを探ってゆくだった。

お臍、顎の下、肩口脇腹、足の裏、胫、指の股、首筋、お尻……などなど。

私の人差指に、最も強烈に、ビリビリとシ

ョック的な反応のあった箇所、それは驚く勿れ、お尻の上部、腰のつけ根の箇所だったのだ。こんなところに、彼女の性感帯のツボがあるなどとは、考えてもみなかった。

やはりケモノ・スタイルの後背位を好む女だけのことはあるなあと考えた。

おぞましい検身を受けた山口艶子は、その全身摩擦の過程で、喘ぎ、悶えながらも、私の検査の結果に自らも肯定するのであった。私の人差指に感じた、その結果が、彼女自

身の興奮度とも、ぴったりに合致するのだ。

この奇妙な女体の感度測定が終ったからといって、私は、この肥満体の女を休ませるということはしなかった。

トゲトゲしい麻縄を手にしていた。

テレビの上に置いた腕時計にチラッと目をやると、零時半を指している。

時間的な感覚は、さらさらしない。

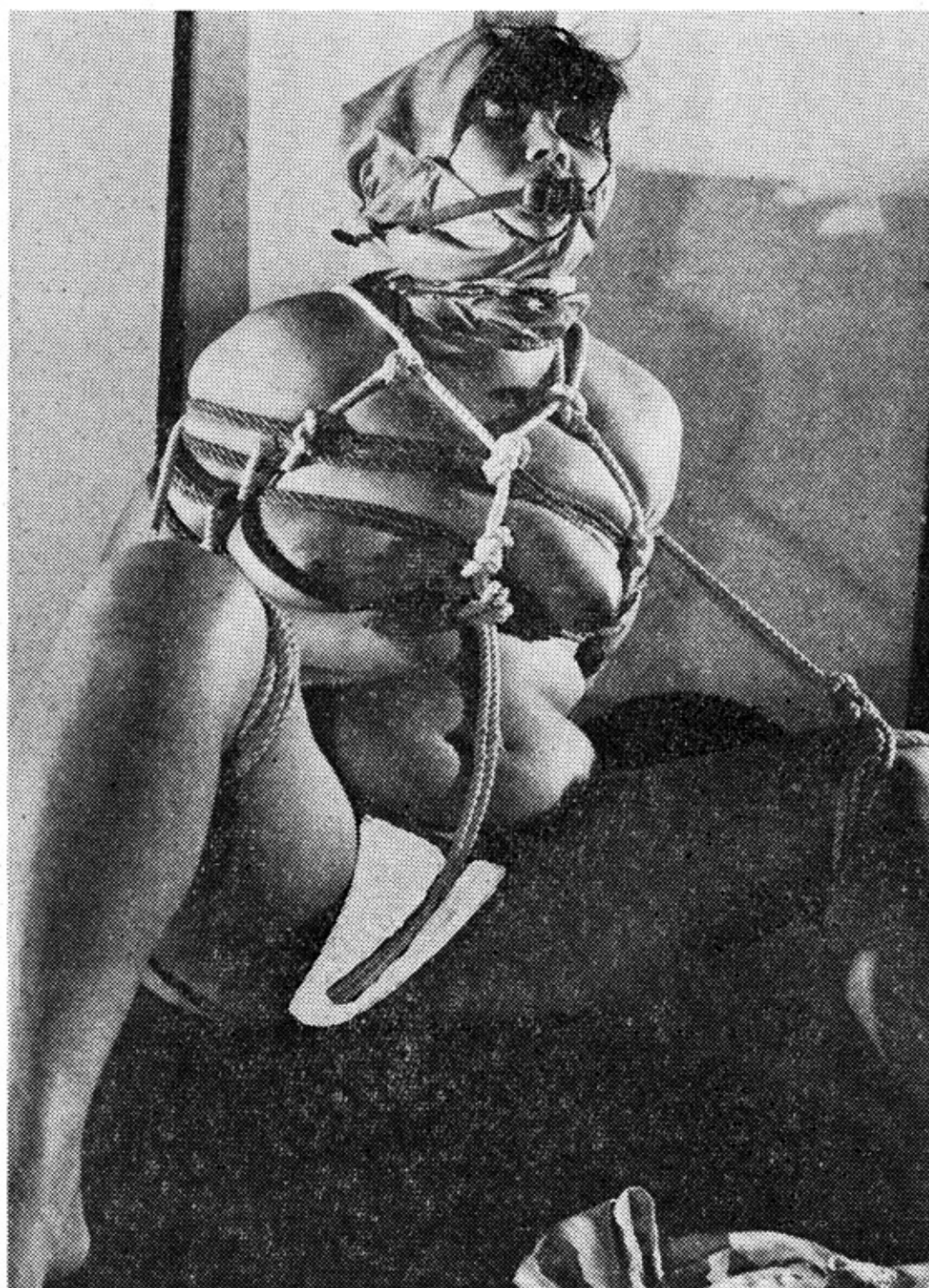
今、この部屋へ入ってきたような気もするし、また、長い長い時間、プレイをやっていたような気もするのだ。だが、実際は、時計の針を見た限りでは、ここへ来てから、すでに九時間近く経過しているのだ。

山口艶子には、疲れたといった気配は、いささかも見えない。頼もしい。私のパートナーとしては、うってつけの女だ。

私は、とびかかろうようにして麻縄を彼女の柔肌に掛けていった。区切り区切りで、ぎゅっ、ぎゅっと、縄を締めつけつつ、豊満な乳房が、くびれるほど厳しく縛っていった。

「ああ、縄のトゲトゲが気持ちいいわ」

まだ、縄止めをし終らないのに、彼女の身体に法悦境が訪れた。上半身が不安定に、ゆらり、ゆらり、揺れたかと思うと、今にも、ぶっ倒れそうなのだ。



私は前へ回って彼女の胸を支え顔を見た。固く目をつぶって恍惚の表情だ。

支えていないと、いつ倒れるか不安だ。

一思いに畳の上へ、ごろりところがす。

「イイイ、痛いっ」

下敷きになった二の腕の縄目が締まって、とても痛そうだ。体重があるから尚更だ。

私は、非情にも疼痛に呻き、もがく女体にカメラを向けて焦点を合わせた。

「顔は、顔は、うつさないで……」

彼女は痛さをこらえて哀願する。

「よしよし、顔はうつさないよ。その代り、

でっかい、お尻はバッチリ撮ってやるゾ」

首輪／猿ぐつわ／目隠し／オシメカバーの

帽子／と、私は艶子の女体を、いたぶった。

「その縄、最初に縛られたとき、トゲトゲが肌にささって、とても気持ちよかったんだけれど、縛られているうちに、痛くなってきた、もう、辛抱できないくらいだったわ」

麻縄を解くと、彼女は述べ懐いたように、その浅黒くてトゲトゲしい縄を見て言う。

私は縄を変えて更に縛っていった。

股間縛り――。

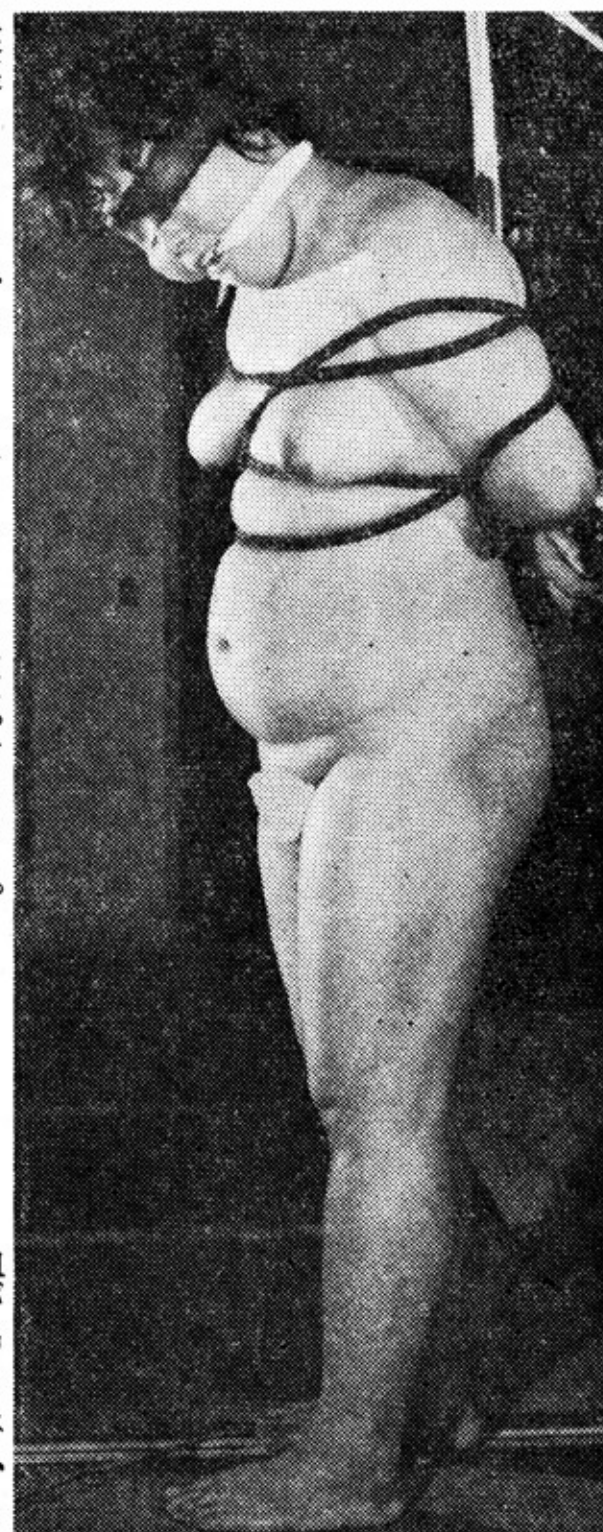
これは、皮膚がこすれて痛そうだった。

つぶった目に、うつすらと涙が浮かんでいる。痛さをこらえた涙か、それとも、責められた嬉し涙か。或は、その両方か――。

足首と太股とを揃えて縛って、二つ折りにしたが、なにしろ、肉づきが良いので、瘦せた女性のように、とてもならない。

縛り直して開股開脚縛りにする。この方が苦痛が少ないようだ。

縛ったり、解いたり――そんなことを繰り返していると、彼女の身体が、縄で刺戟を受



けてメロメロになってしまう。

縄を解くと、ゼンマイがもどけたように、手足に力が入らなくて、全身を私にもたせかけてくる。なにしろ、体重があるから、それを支える私も大変である。抱えながら、自然と、手が、あっちの方へ行ってしまう。

そこは、もう、身体以上にメロメロだ。

ありとあらゆる縄が、ちらばっている上で横になった。彼女ばかりか、私も縄に挑発され、彼女の女体に挑発されていた。

「耳を噛んで、そして耳の穴に、熱い息を吹きかけて……」

私は今までに、いろんな性癖の女と逢ってきたが、「耳の穴に熱い息を吹きかけて」という要求は今までに聞いたことがなかった。

絹川文代は、「耳たぶを噛んで」と叫ぶ女だ。耳たぶを噛んでやれば、凄く興奮した。

今、山口艶子は、耳を噛んで、耳の穴に息を吹きかけて呉れ――と言う。

耳たぶを噛むのは、私も好きだ。

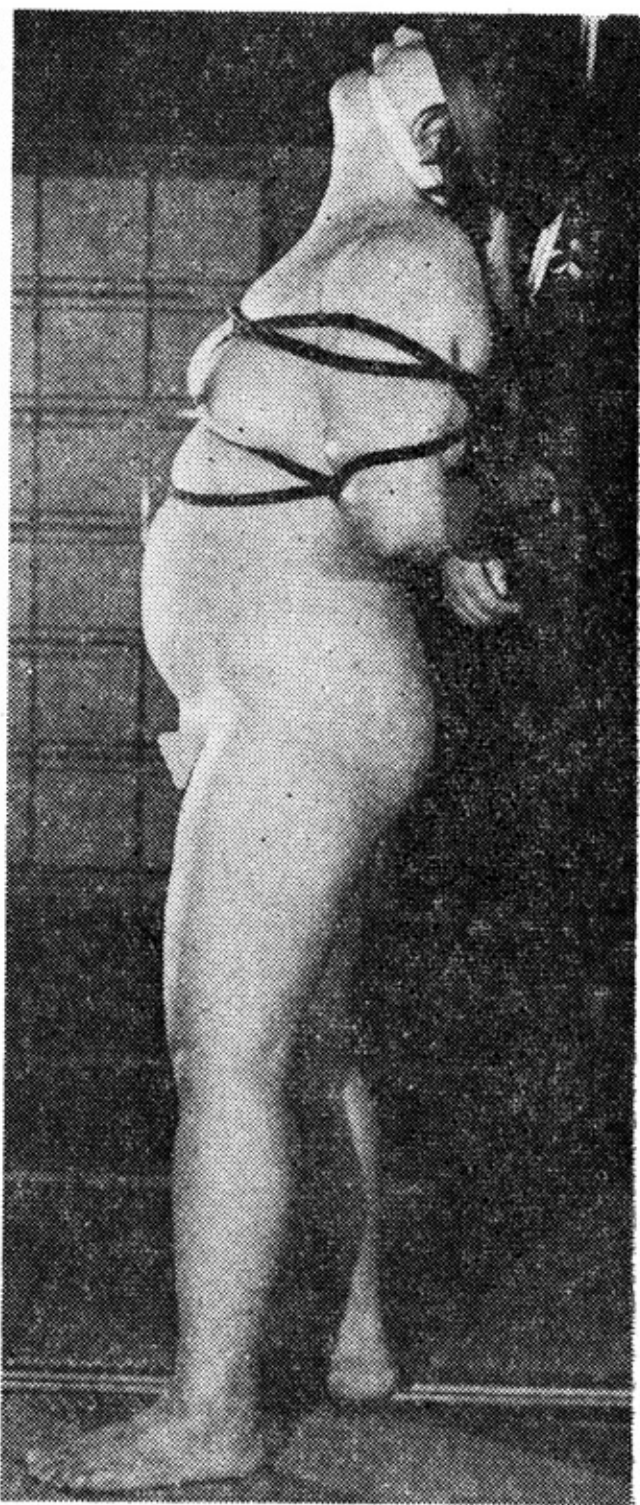
血が出るほど、きつく噛んでやると、全身がオコリのように、ふるえた。

耳の穴に息を吹きかけるのは、どうも、私には、ぴったりこない。でも、彼女が好きがるのだから、仕方なく、ハァハァと熱い吐息を耳の穴に吐きかけてやる。

私には、まだ、彼女に対して、やりたい責めがあった。

それは、両手を吊っておいて、無防備に展開している女体の観賞と擦り責めだ。

好都合に、二つの部屋の仕切りに襖をはめ込んである鴨居がある。ここへ、彼女の両手を吊ってしまうのだ。こうされると、女体の前面も背面も、すべて無防備のまま、すっかり責め手の前にさらけだしてしまうのだ。



縄をきしませて、全身をうねうねと悶えさせ、声を張り上げて絶叫しても、悪魔のような責めの触手からは逃れるすべはないのだ。

苗木陽子にも、最初に、この責め方で成功したことがある。というのは、みたところ、そう大して苦痛もなさそうだし、安心して、気易く縛られてしまうのだ。しかし、こうして一旦、縛られてみると、これは容易ならぬ責めだということがわかってくる。

両腋の下から脇腹にかけて、完全に無防備のまま、責め手の眼前にむきだしになってしまえばかりか、お臍も下半身も、さらけ出したまま、隠しようもないのである。

お臍なぶりや、ムチ打ちには、もってこい

のポーズだ。むっくりと盛り上った逞しい臀部、ムチを揮うのには絶好の目標だ。

山口艶子は、両手を縛って吊っただけで、私の好色的な責めが加えられるのを覚って、何もしないうちから、顔をのけぞらして、狂ったように身体を、ねじった。

それが私に対する誘い水になった。

私は激しく揺れる彼女の腰にとりついた。百十センチ。太い胴まわりだ。

左手をヒップに回しておいて、右手の人差し指を、お臍の窩に挿し込んだ。

「イヤ、イヤ、イヤイヤ」

彼女は腰を前後左右に振って、私の指先を避けようとするが、そんなこと位で、大きく

て深い、お臍の窩の中に潜り込んだ指先が、とれるわけがない。かえって、私にグリグリと、乱暴にこじられてしまう。

「ああ、くすぐったい。いやよ、いやよ。やめて、やめて、お願い。しないで……」

彼女は涙声で哀願する。

「だったら、大人しく、なぶらせろ。こんな深いお臍って、今まで見たことがないからゆっくり、奥の奥まで探らせて貰うよ」

擦ったいのを必死で我慢して、静かにしているのをいいことに、私は臍窩を、くじりまわす。まったく、むごい話だ。

「お臍なぶり」が終ると、今度は、腋の下から脇腹へかけての擦り責めだ。

これはポーズがポーズだけに、私の手が腋の下に触るか触らないうちに、彼女は吊った縄を振り切らんばかりに狂いまわった。

その恥も外聞もなく、髪ふり乱して許しを乞う有様を見ているだけで私も興奮した。

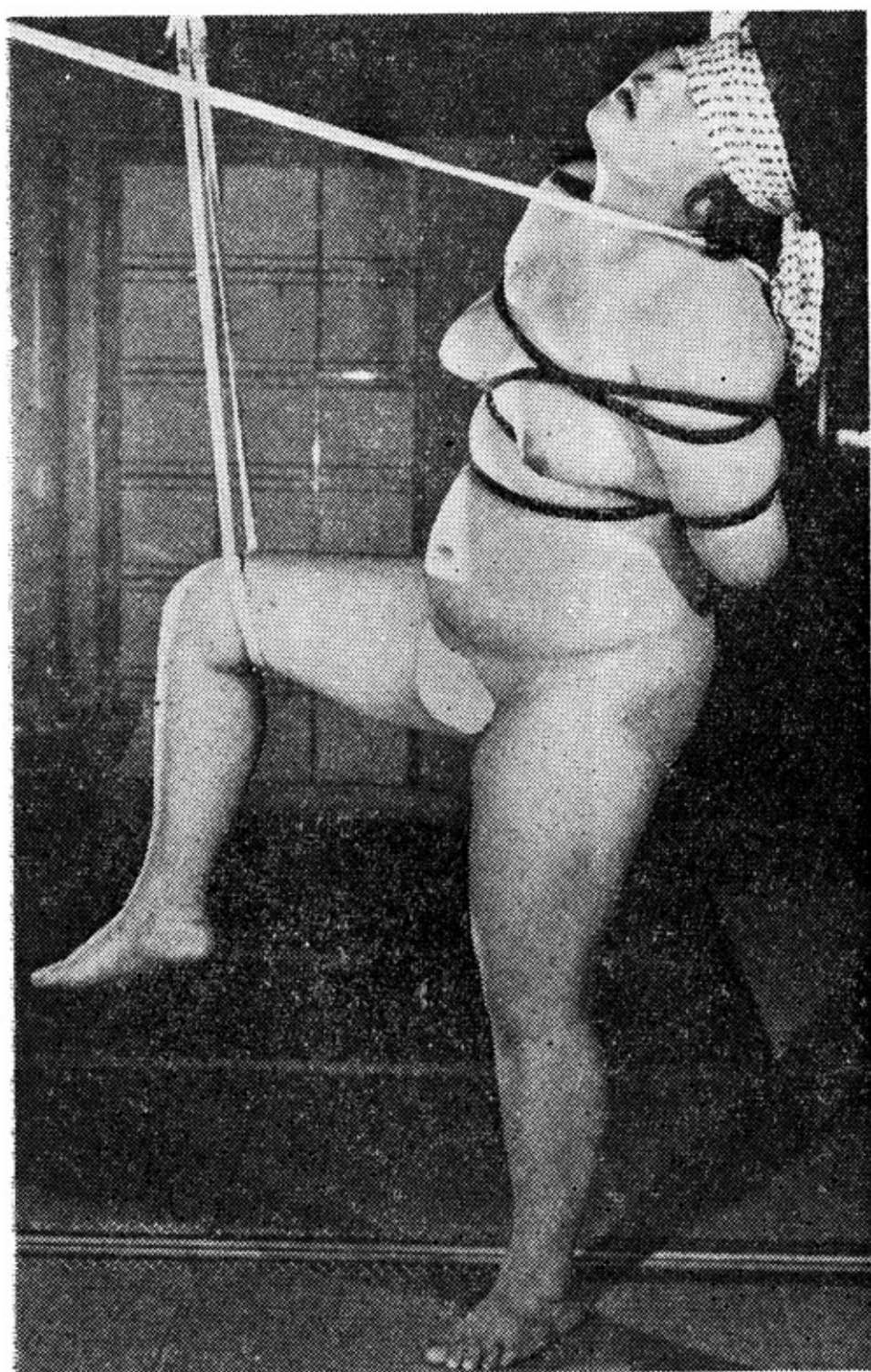
「責め」に悶える女の姿って本当に美しい。決して、憎くて責めるのではない。可愛いからこそ、責める「悦虐責め」なのだ。

もう、こうなったら、彼女の裸身の、どの部分だって、動感的な美しさ映えている。

肩口も乳房も、足の先も、背中も膝も、一

カ所として、じっとしている個所はない。すべて悶絶するように動きに動いて、その最高度の美しさを發揮しているのだ。

私は、彼女の左足首に縄を掛けて引き上げると、今までの「責め」に依る燃えぐあいを具さに検身した。それは、頻死の女体に対する止めの一刺しのような役目を果たした。片足を挙げさせられている加減もあって、途端に、彼女の動きが停って静かになった。



両手と片足を吊られて、山口艶子は身体のすべてを私に委ね、大人しく、されるがままになっている。淫靡な音がして、やがて時が経つにつれて恍惚から放心状態に陥った。76キロの女体が、ぐらりと揺れたかと思うと、吊られた両腕に体重がかかって、右足の膝が、がっくりと力を失っていた。そうになると、上半身が大揺れに揺れて、吊られた左足の方へ回ってゆこうとする。

私は彼女の上半身を支えておいて、さっと縄を解いた。縄を解くなり、潰れるように倒れかかる女体を両腕のなかへ抱え込んだが、彼女の両足に力が入らないので、私は支えきれずに一緒に倒れて畳の上へ、ころがった。

ちらばっている縄が蓐しとねのようなものだ。膝や脛に縄が当たると私も少し痛いから、彼女も背中やお尻の下敷きになっている縄が、きつと痛いだろうに、何も言わない。

今からベッドまで歩いて行くのが惜しいような気持だった。彼女もまた、それが当然であるかのように、私の首に両手を、しっかり回して放さなかった。

☆

たしかに体格は、ずば抜けて良かったけれど、童顔の両方の頬に、笑うとえくぼが出来て可愛いかった。

「可愛い、可愛い、とても可愛い」

私は頬ずりを、くりかえした。

彼女は、「犯して」ほしいと言っていたが結局、愛撫のような形になってしまった。

風呂へ入って、ベッドの上へ戻ってきたとき、私は急に睡魔に襲われた。

時計を見る。4時30分を指している。

この部屋へ入ってきたのは、昨日の午後4

時前だから、もう十二時間以上も過ぎているわけだ。夜を徹して一睡もしていないのだから睡い筈だ。睡いと思ったら、もう、損も得もなく眠りたかった。このまま、ぐっすりと眠ったら、どんなに幸福かと思った。

そこへ彼女が風呂から上ってきた。

「あなた、眠っちゃ、駄目よ」

豊かな真白い肉塊が、私の傍らに、すべり込んできた。

私は、とても睡かった。彼女も、私と一緒に眠るのだと思った。私は場所が変っても、明るくても暗くても、静かでも、騒がしくても、そんなことは、どちらでもよかった。傍らに女さえ居てくれれば最高だった。

女さえ、いてくれたら安心して眠れた。

だが、この山口艶子という女は、そんな生やさしい女ではなかった。睡い睡いと思っている私を眠らさないのだ。

「ねえ、あなた。お風呂へ入ったら、ホラ、こんなに縄のアトがとれてしまったわ」

風呂上りのピンク色の肌に、あらあら不思議、縄のアトは、一かけらもない。

「お願いがあるんだけど。さつき、私を感じたところ、あるでしょ。あそこ、すまないんですけど、押して下さらない？」

「うん、そりゃいいけど、睡くないのかい」

私は心のなかでヤレヤレと思った。今から眠ったって、二、三時間しか眠れないのだ。それなのに、この女、これから、まだ、何かを、やらかそうと言うのだ。

「ええ、少しも睡くないわ。それよりも、ねえ、さっきの、あんな気持ちに、もう一度なってみたいの。押してみても下さる？」

彼女は布団の上に腹這いになった。

でっかいお尻が目の前に盛り上っている。

私には彼女の性感帯のポイントは、先刻のテストで、よく分っている。それが不思議な

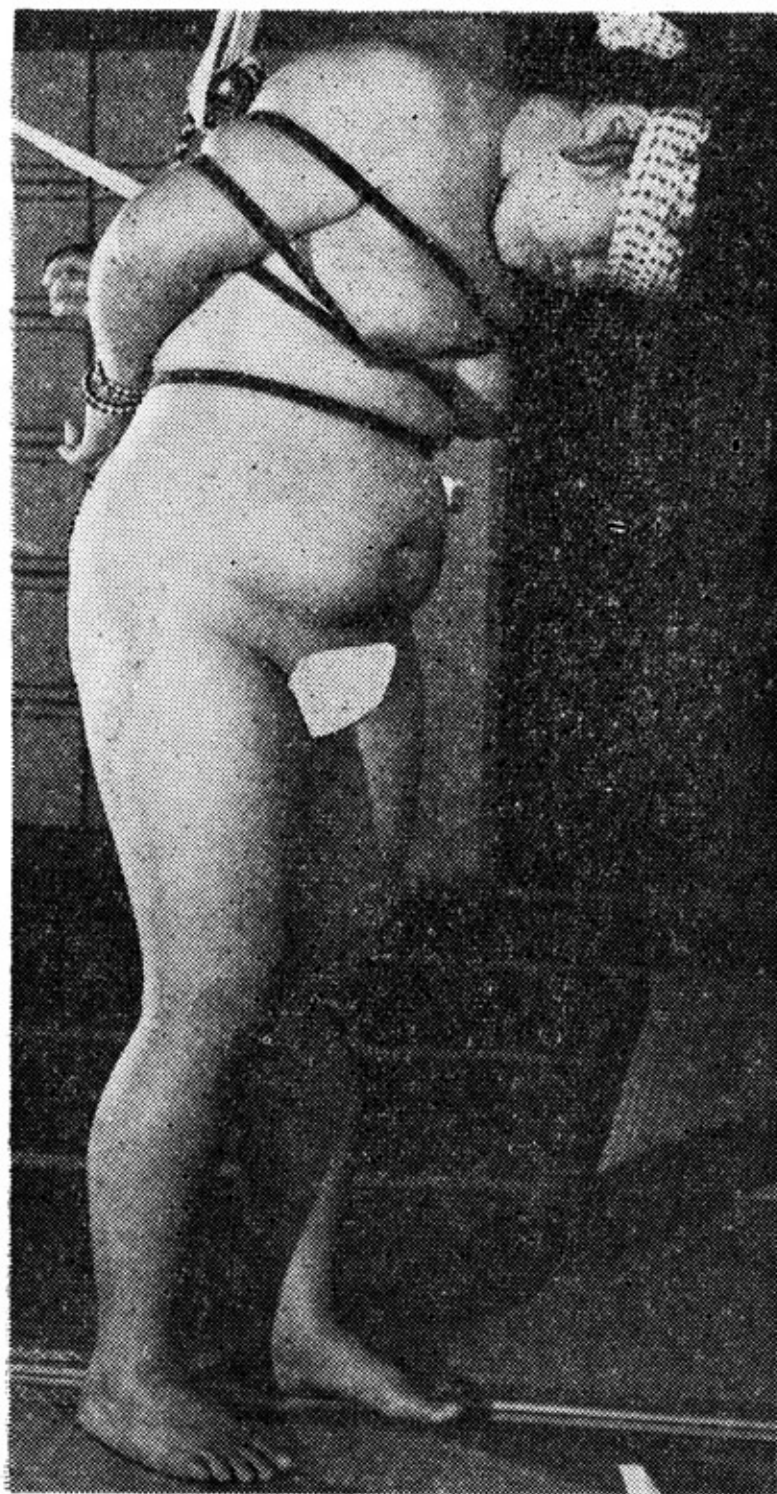
ことに、お尻のちょっと上のところなのだ。

両手の拇指で、そのツボを圧迫した。

「あっ、ああっ、あーあ」

彼女の口から、魂ぎる声が洩れたかと思うと、白くて遅いお尻が、フラダンスのように、激しく振動しながら、ぐぐっと盛り上ってきたのだ。私の手も一緒に持ち上げられたので、私は指を圧え直さねばならなかった。

お尻だけが、揺れながら更に一層、盛り上ってくる。それを見ていて、私の睡気が、いっぺんに、ふっ飛んでしまった。俄然、目が冴えてきたから、全く現金なものだ。



「ケモノにして、犯して……」

ハハン、これが彼女の真意だったのか。

私は浴衣をかなぐり捨てて素裸になった。

それから、窓の外が白むまで、私は彼女のお蔭で寝かせて貰えなかった。

なんというスタミナ抜群の女なのだろう。

何もかも、終ってしまおうと、私は豊かな女

体に埋まるようにして眠りこけた。

快適な眠りだった。私は、ふと、揺り動か

されて目が覚めた。

「ねえ、起きない。良いお天気だわよ」

窓から射し込む朝日が、寝呆け眼に、とっ

ても眩しい。でも、寝起きのよい私のこと、

起きたとなれば頭は、すかっと冴えてくる。

「なあんだ、もう起きたのかい？ 一体、何

時なんだ？」

「今、八時を、少し過ぎたところよ」

「だったら、まだ、たっぷり時間はあるナ」

「ねえ、もう、朝は縛らないの？」

「朝縛ると、縄のアトが残るだろう。そうし

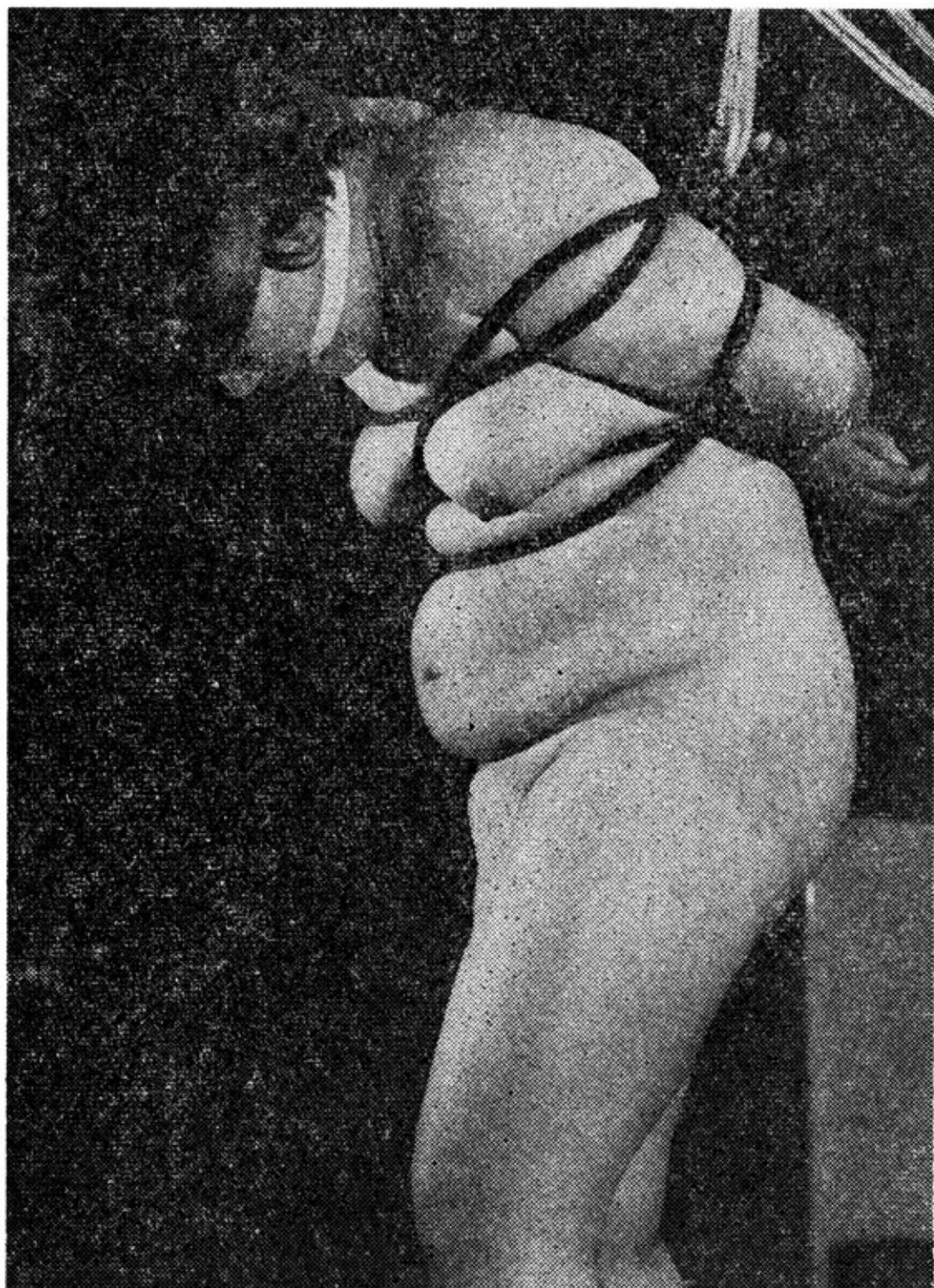
たら、艶子が困るから、やめておこうよ」

「いいのよ、私。ブラウスの長いのを持って

きたし、あなたさえ、よろしければ、もう一

晩ぐらい泊ってもいいのよ」

私はまさか、朝っぱらから彼女が挑戦して



くるとは夢にも考えていなかったが、どうやら、このままでは、只では済まない妖しい空気がなってきた。

「ねえ、縛って下さる？ 私、縄で縛ってか

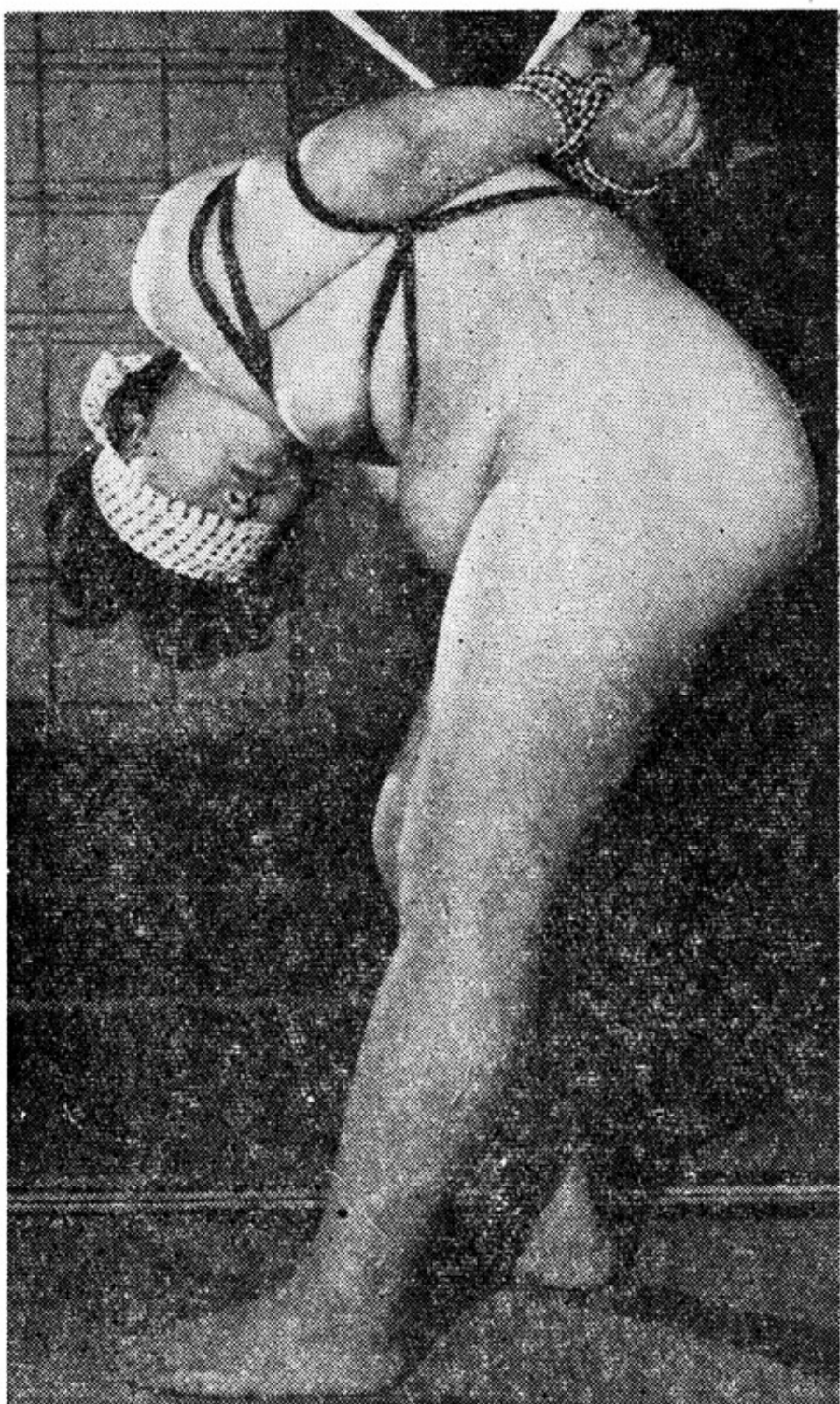
ら犯されたいの。その方が感じが出るのよ。

昨日もネ、胸のところに結び目のコブが出来

るような縛り方で、あなたの胸で押えつけら

れたでしょう。あとで胸が痛くって、仕方がなかったけれど、でも、嬉しかったわ。それに、やっぱり、私って、ケモノのような格好にされるのが、一番、好きなのだわ」

そういえば、私も、縄の結び目が自分の胸に当たって痛かったのを覚えてる。だが、そのときは、もう、そんなことを、とやかく言



っておれなかった。いや、それよりも、胸が痛いけれど、その痛さが、そのときはまた、快かったのだ。

そんなことを思い出すと、私は忽ちにして元気になってきた。彼女は、肉づきのよい裸身を私に、ぴったりと、すり寄せてくる。

私は、その挑発にのった。朝だから、いくら寝不足気味だといっても、彼女も私も、新鮮で凄く元気があった。

手元には縄はなかった。

縄という縄は、黒縄も白縄も麻縄も、あるだけ使いきって、もつれたまま、畳の上に、ほうり出して、とぐろをまいている。

彼女は、縛って、そして、犬のような格好にさせて犯してほしい——と言うのだ。

余程、最初にやられた輪姦が、強烈な印象として、彼女の心の奥底に、こびりついていくらしい。若い女の身として、それを口にするのは、よくよくのことだろう。でも、私は山口艶子と一晚一緒にいて、彼女の告白が、

嘘や作り話でないことが、よく分った。

私は、縄も使わず、また、彼女をケモノのスタイルにもさせなかった。人間の女性として取り扱った。苗木陽子との別れ際に、いつもそうしたように……。

せめて朝だけは、人間と奴隷、人間とケダモノ、ケダモノとケダモノ——の関係ではなしに、人間と人間の愛情でいたかった。

でも、それは、私のささやかな感傷でしかなかったということが、それからの山口艶子の行動によって如実に証明されたのだ。

彼女は、もう、僅かばかりの痛さしか残っていないと言った。

私は上下の前歯で彼女の耳朵を噛んだ。

ジーンと力を入れると、彼女の身体がブルブルと痙攣して、そこが締まってくるのが私には手にとるように分った。私は軽く、そして時には強く噛んで、その反応を楽しんだ。

やがて、彼女の耳を噛むこと自体が、私の快感でもあるように思えてきた。耳朵を噛みながら、耳の穴へ熱い息を吹きかけた。

そこで山口艶子は、どうしても、これだけは誌上には書かないで——と固く、繰り返して頼んでいた一つの性癖が発露された。

それは、最初、彼女に接したときから、私

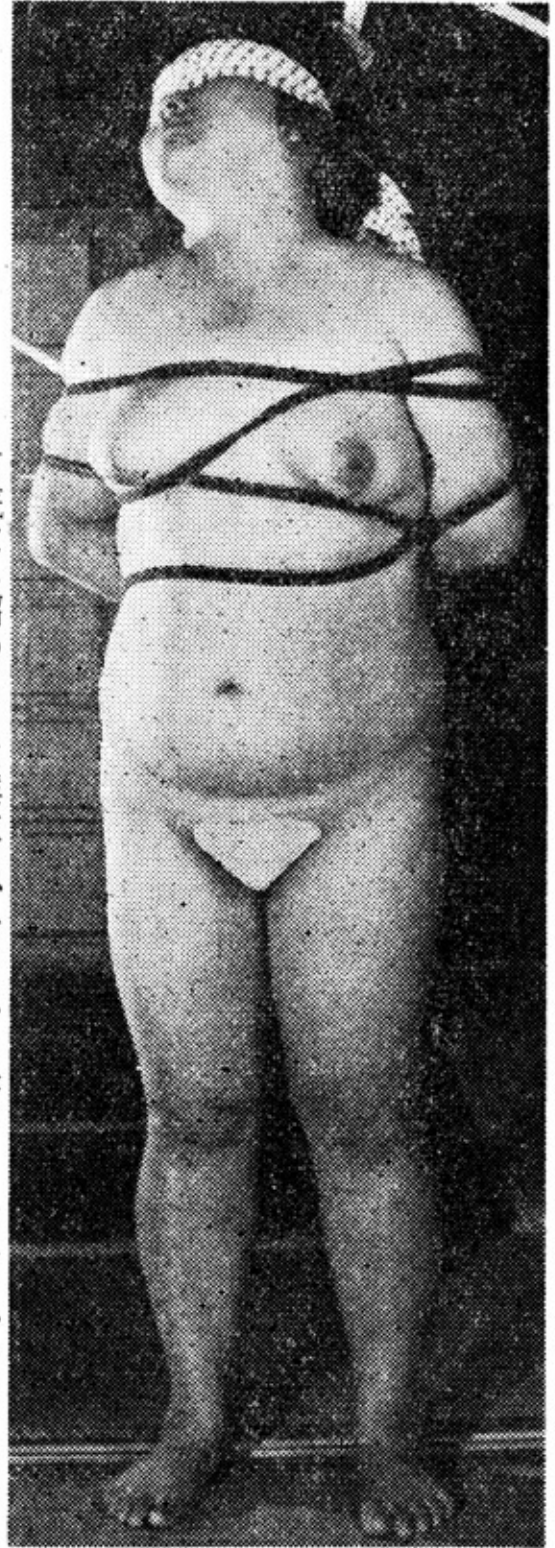
には分っていた。そのことを私が言うと、彼女は、「言わないで、言わないで……」と、顔を赤らめた。そして「このことは、決して雑誌には、書かないでネ」と念を押した。

私は書かない——と約束した。

そのことは、若い女性としては当然のことだし、むしろ、私なんかから考えたら、ほほ笑ましいと思うのだが、彼女にしたら、それを他の人に知られるのは、とても恥かしいと言うのだ。このルポも、彼女は第一番に、先ず読むことだろうから、私も約束した手前、今は書かないでおこう。

彼女は、自分は男性との交際はないと言っていた。その彼女の言葉は、彼女の肉体を見ていて私には、よくわかった。それなのに、山口艶子の、この荒淫とも思えるほどのマゾ性が、どこから来たものか不審だった。まさか昨日、初めて逢った私が、火をつけたということは成り立たないだろう。

とすれば、飽くことを知らない、この奥深



くて底なし沼のような淫欲は、どこから来たものだろうか。彼女自身、本来、持っていた性格だとすれば、初体験があつて以来、数年間も、男性なしでいたということも、不審という他はない。

「ねえ、やはり、私、縛ってほしいわ」

大分、時間が経ってから、彼女は言った。私の受けた感じからすれば、幾度となくヤマを迎えた筈だと思ふのに、彼女は更に私に縛ることを求めた。

私は彼女から身体を離すと、畳の上に乱雑に取りちらかしている縄の束のなかから、白いロープを一本、たぐり寄せた。

「思いつき、きつく縛って……」

真白い裸身をベッドのふちを滑るように、這わせながら、身軽に立って彼女は言った。

なんとという貪婪な性欲の持主だろうか。

そのヌメヌメと輝くような雪肌の裡に、底知れぬ淫欲の念が、ドロドロと隠されているように私には思えた。

私は10メートルの白ロープをたぐって二つに折り、前から彼女の両手首を握った。豊かに膨らんだ乳房が私の胸に生温く触れた。

手首を背中縛ってから、胸へ、一巻き、二巻き、ロープを締めつけただけで、彼女の上半身が、ゆらゆらと大きく揺れて、私の方へ、もたれかかってくる。妊娠腹のように皮下脂肪の厚い腹部の真下に縄を掛けていたときなので、ひよいと顔をあげると、彼女の右の乳首が、私の口に入った。

私は舌の上に乳首をのせてから、くるくると、まるめるようにして吸いながら、彼女の顔を上目づかいに見た。彼女は目をつぶって、うっとりとした表情をしている。

時間が経つにつれて、彼女は自分の力では立っておれないくらい、フラフラになって私に身体をもたせかけてくる。私は乳首から口

を放して、上半身を抱えて前屈みにさせた。

胸を畳につけて、膝を立てているので、立派な臀部がニョキッと突っ立った格好で、お尻の背面が、まるで孔雀が翼をひろげたように開いている。私は犬の首輪を艶子の首に嵌めて曳綱を握った。彼女の両手首は後手に縛られたまま、背中で逆手になっている。

全くのケモノ・スタイルである。

山口艶子は、すぐにケモノになりたがり、そして、縛られたがった。

彼女は畳に頬をつけたまま目を堅く閉じている。私は女体の背後へ回って、当然のように、そこへ目をやった。

面積のただっ広い双丘には、ホクロ一つとてなく、白く輝いていた。その双丘の寄り合う谷間には、深窓の麗人が鎮座していた。

数年前の盆踊りの夜、こんな格好をさせられて四人の男たちに襲われたときのことか、どうしても忘れられないというのか。

見るだけ見た私は犬の首輪を曳綱で引き寄せながら、彼女の縛られている後手を押え、肩口を押え、やがて、髪の毛を驚づかみにした。彼女の上半身は、縄束の中で蛙をつぶしたようになりながら盛んに喘いだ。

彼女の口からは囁言が洩れた。



逆手になって背中で両手首を縛られているところへ、私が自分の両手を当てて押えつけたとき、彼女は、重くて苦しい——と、ねじむけた顔を縄の束の中に埋めながら言った。山口艶子は、もう完全にケダモノだった。野性的なケダモノだった。超人的な逞しいスタミナを持ったケダモノ

だった。

私は、一晩かかって彼女をケモノに飼育し仕込み、そして、今、それが成功したのだ。私が一時間か一時間半、まどろんだ、あの間さえも彼女は眠っていなかったのかも知れない。私は、それ怖ろしくさえなってきた。なんととしても、このヌエのような得体の知

れない動物を退治しなければならぬと思った。自分が彼女をケモノに飼育しておきながら、手におえなくなってきた。

今は、この猛獣の両手を後手に、がっちり縛っていることだけが、私にとっては、唯一の助けであった。

☆

私が浴槽につかっていると、山口艶子の白い裸身が浴室へ入ってきた。

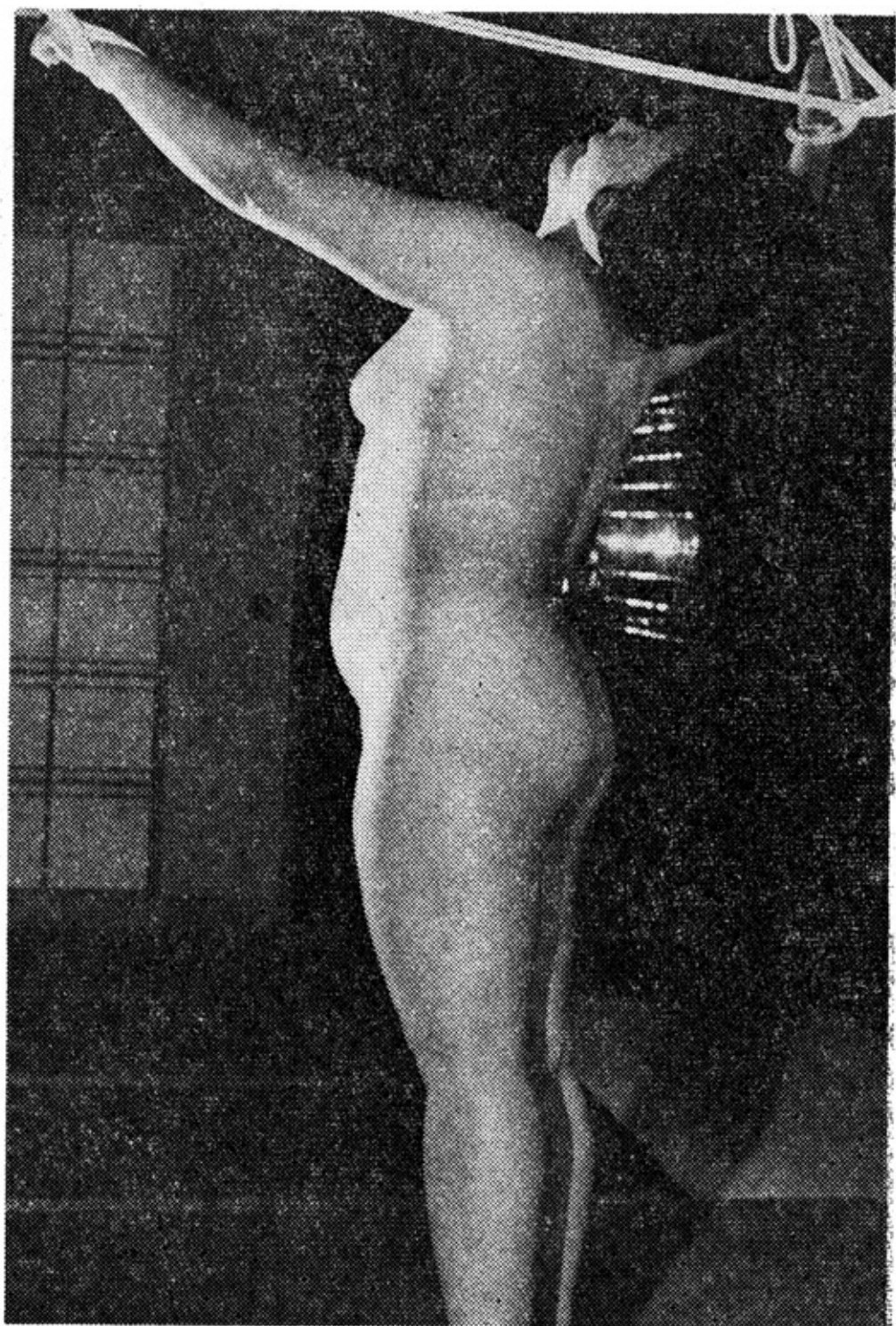
彼女は浴槽へは入らずに、シャワーを浴びだした。

「私、一度、是非、奈良へ行ってみたいと思ってますの。今度、こちらへ来たときには、また、きっと逢って下さいますわね。私、奇譚クラブを読んでいて、浣腸をされてみたいなああって、思っていますのよ」

彼女の声音は、さっきとは、まるで違うのだ。ついさっきの、あの惑溺ぶりは、一体、どうしたというのだろうか。

ケロリとした、その表情は明るくて、まるで屈托がなさそうだ。ケモノになりたい——などと言ったのは、どこの誰様なのか、といった、そ知らぬ顔つきなのだ。

「そうだね、今度来たときは、奈良を案内してあげようかね。そして、どこか観光ホテル



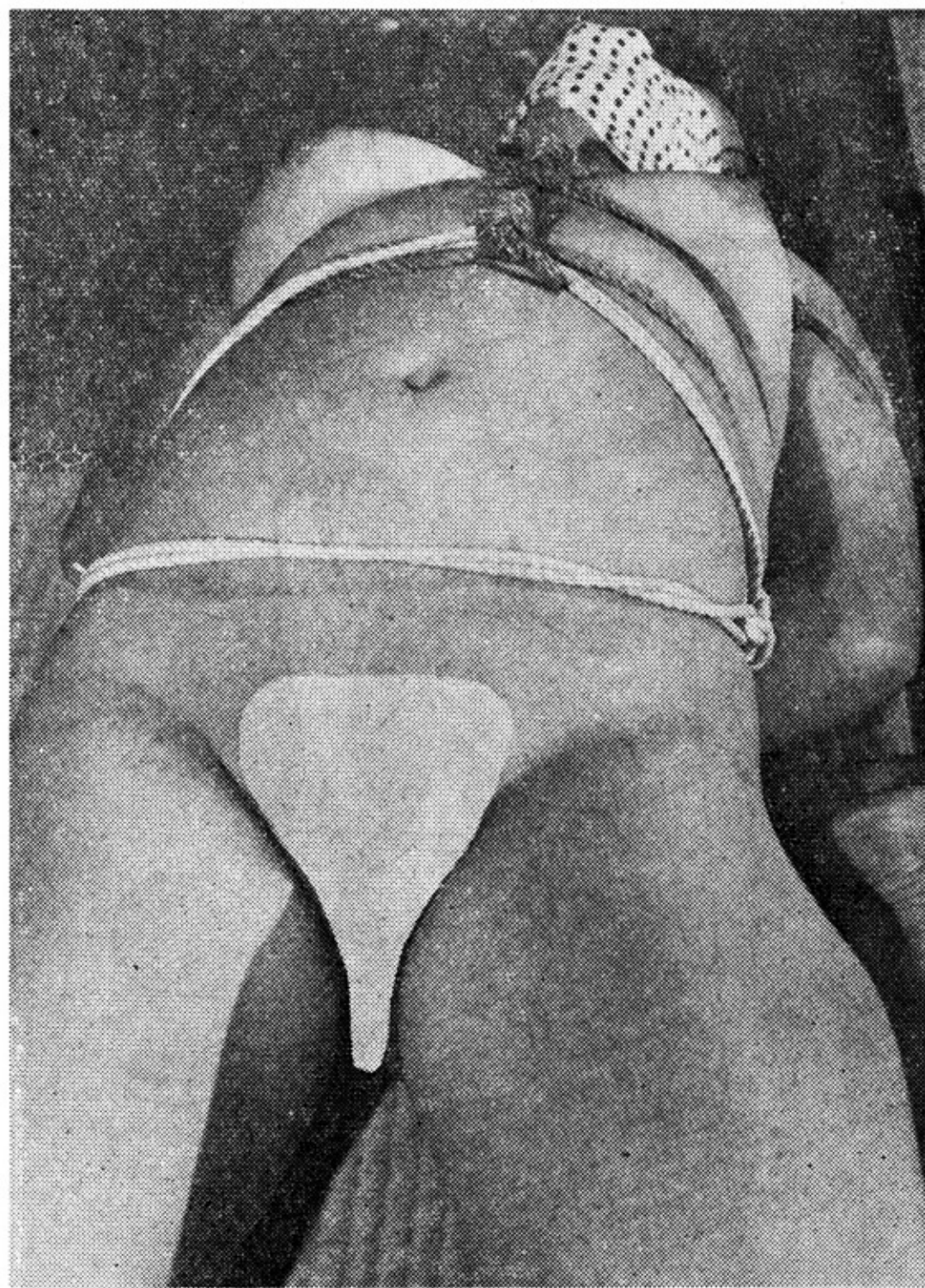
を予約しておいて、また徹夜でプレイをやるうか。きっと楽しいぞ。アハハハ」

私は目の前で、シャワーを浴びている山口艶子の福々しい裸身を、惚々とした目で眺めていた。若々しく、そして、身体のだこもかも張り切っていた。

山口艶子って、今までにない変わったタイプの珍しいM女だ。世の中は広い。こんなM女

だって、いるのだなあ——と思った。

プレイをしているとき、あれほど、全身がメロメロになって、まるで奇譚クラブの中のSM小説の女主人公のようなセリフを吐きまくっているのに、一旦、プレイが終わってしまうと、別人のように、しゃんとしてしまうのだ。そして、言葉つきも、がらりと変わってしまう。彼女って、なかなかの役者だ。



「ねえ、私、今晚一晚、京都で泊まろうと思うの。予約してあるホテルの部屋の番号、電話で問合わしてみますから、おいでになりますよ？」
 ダブルベッドの部屋なんですよ」
 部屋へ戻って、帰りの身仕度を整えていると、彼女が近寄ってきて言った。
 「まだ、京都見物をするんかい？ 疲れてい

るだろうに。これから帰って、また、次の機会に来たら、どうなんだ」
 「でも、折角、来たんですもの、金閣寺を見ておこうと思うの。今晚、来て下さらない？ 遠いから、無理でしょうけれど……」
 「そう誘われちゃ、行きたいところだが、今日の午後から、どうしてもやらなきゃいけない

用があって、残念だが、駄目なんだ。そのかわり、次に関西へ来たときは、奈良でも、どこでも、好きなところを案内するよ」
 「そう。だったら、また、お電話しますからそのときは、お迎えに来て下さいね。九月になったら、休みがとれるかも知れないわ」
 荷物を車に積み込んで、至って静かな昼前のモーター街を出て新大阪駅へと向った。
 昨日と違って、今日は午前中のせいもあって、駅構内は人も少なく、至って静かだ。
 山口艶子は、昨夜一睡もしてない筈なのに至極、元気である。明るい顔で、さつさと先に立って歩き、予約してあるホテルへ電話してから、「私、お腹すいたわ」と言った。
 空いているレストランで向い合って座る。
 私は、まじまじと山口艶子の顔を見た。
 淡い朱色のルージュを塗った小さな目の唇が可愛いらしい。この唇が、私の足の拇指を、すっぽりと含んで、舌でしゃぶったのかと思うと、不思議な気がした。
 私の『SMカメラ・ルポ』のカメラとペンの記録の上に、山口艶子という、この女が、また新しい一ページを付け加えたのだ。
 私は盛んに食事をしている彼女の手元を、ぼんやりと眺めていた。
 〽終り〼

須坂旭様のイメージ画に寄せて

北川 まりこ



須坂旭様

九月号に載せて頂きました、まりこの羞かしい文章「奴隷妾まりこの妄想」に、貴男様の真心の籠った、素晴らしいイメージ画を、何枚も添えて頂き、まりこは天に昇るような嬉しさでございます。本当に、本当に有難うございました。心から御礼申し上げます。読者通信や奇クサロンの片隅に、拙い文章や、短歌、詩など載せて頂くだけで十分、満足しております。あのような晴れがましい本文に、数ページにわたって、しかも貴男様の立派なイメージ画まで添えて頂いて掲載されたのですから、穴に入りたいような羞かしさと、心の奥から、こみ上げてくる喜びで、何時間も貴男様の画に見とれ、何度も自分自身の文章を読み直し、十日ばかり、そわそわして、家事は勿論、手につかず、主人の命令すらも、うわの空で聞き流して、落着かない日々を過しました。主人も、

「須坂さんのイメージ画は、どれも実に素晴らしい。お前の下手糞な文章も、素晴らしい画のお蔭で、少しは読めるようになった。これからも、せいぜい、須坂さんに援けてもらおうのだな」

などと申しまして、貴男様の画を何度も丁

寧に、見ています。

貴男様のお描き下さった四枚のイメージ画の女性は全部、まりこの念願通り「ドレイメカケまりこ」とか「裸女郎まりこ」などと、駄に、いたずら書きをされたり、貼紙をとりつけられており、紛れもなく、あたし自身でございませう。ドレイメスの切なる望みを早速叶えて下さった貴男様の御親切に、まりこはどのように御礼申し上げて、よいか分りません。財産も自由も持たない、まりこは、パン助として駄の御奉仕で御礼するより外はございませんが、それにも、主人の許可が必要です。そのことは、いずれ機会を見て主人に頼むとしまして、今日のところ、せめて貴男様のイメージ画を、一枚一枚、鑑賞させて頂くことで、貴男様への御礼にかえさせて頂きませう。筆がすべって鑑賞過剰の結果、貴男様の画を冒瀆するようなことがございましたら何卒お許し下さいませ。

まず、一六六ページのイメージ画。

「ドレイメカケまりこ」と、全裸の肌に楽書きされて、開股縛りで吊られているのが、あたし。そんな浅ましい恰好のあたしをモデルにして、夢中になって、お描きになっておられるのが、須坂旭様。旭様のイメージ画の大

ファンである、まりこは、主人に何度も頼んで、貴男様のイメージ画を何枚か、主人に贈って頂くことを条件に、貴男様のモデルになることを許して貰います。まりこは貴男様のアトリエをお訪ねします。勿論、二人は初対面です。まりこが、心の中で想像していた通りの、貴男様にお目にかかり、心がときめきます。早速、密室のアトリエの中で、生れたままの丸裸に引き剥かれ、荒縄をかけられ、いろいろの羞かしいポーズを強いられます。写真と違って、画のモデルの場合、長時間、同じポーズをとらなければなりませんので、とっても辛いのですが、一生懸命、お描きになられている貴男様のお姿に打たれて、まりこも、じっと我慢します。でも、時々、女体のすべてを、さらけだした裸身を、喰い入るようにみつめられる貴男様の視線に、思わず顔を紅らめ、「ふーっ」と、溜息をつくこともございませう。そして最後に一番、羞かしい開股吊り責めのポーズをとられますが、その前に、まりこは特別にお願いして、駄に「ドレイメカケまりこ」と、いたずら書きをして頂きます。朝から、色んなポーズをとりつづけた疲れと、最高に羞かしいポーズをとらされてる被虐の陶酔で、まりこは、うっとり

と目を閉じておりますが、心の中では、「まりこ、幸せよ。今が一番、幸せなの。あんなに憧れていた旭様のモデルになって、女の身にとって、最高に羞かしいポーズをとられていくのですもの。駄が、とろけそうに幸せよ。でも、旭様は本当に、お仕事に熱心なお方。あんなに夢中になって、お仕事をなさるから、素晴らしいイメージ画が出来るのだわ。それに旭様は、とっても、礼儀正しいお方。まりこが、いつも、お相手する殿方は、どの方も、すぐ御自分もお脱ぎになるのに、旭様は始めから終りまで、きちんと御洋服をお召しになっておられるのですもの。でも、すぐ御自分もお脱ぎになって、だらしない恰好で、やたらと肌に触れたり、淫らなお口になさる殿方よりも、旭様のよう、きちんとなさっておられる方が、あられもない恰好をしている、まりこにとって、惨めな気持ちになります。だって、その方が、人間様とドレイの身分の違いが、はっきりしていますもの。そんなマゾ女の気持まで、お読みになっておられる旭様は、本当に心憎いお方。でも、この一枚をお描きなられたら、貴男様もお脱ぎになって。そして徹底的に、まりこを、お罵りになって。あたしの駄は、旭様の

ものよ。どんなに、ひどいことをなさってもいいのよ。存分に、おもちゃになさっていいのよ。一晩中、虐め抜いて下さいませ。でも最後は、やさしく抱いてほしいの。虐めっぱなしは嫌よ。ねえ、最後は、やさしく抱いて……」と、呟きつづけております。

つぎは、一六九ページのイメージ画。

裸女郎まりこがお相手をしている殿方は、主人の取引先のS様に容貌、体格とも、とっても、よく似ておられます。今まで三回ばかり御接待したことがございますが、特にサド性のお強い方で、腕力も強く、この方に縛られますと、一週間も縄の跡が残ります。いつも、S様御指定のホテルで虐めて頂いておりますが、今夜は主人のお仕事に特別の便宜を計って頂くために『北川楼』に御招待しました。お湯文字一枚も許されない、一糸纏わぬ全裸で、格子越しに主人との『女郎ごっこ』で十分、練習している嬌声を張り上げて、御登楼願ひ、廊の主役の主人に、背中に『裸女郎まりこ、売約済』と、大書して貰い、マゾ女郎のお勤めを強いられました。

早速、折檻用の荒縄で、高手小手に縛り上げられ、猿轡を噛まされ、S様好みの蜷涙責めが始まります。高く持ち上げられた双臀に

ぽたぽた落ちる蜷涙の熱さは格別です。時々一番、敏感な箇所にも落され、痺れるような熱さに身悶え、呻き声を洩らします。このあと、鞭打ち、木馬、石抱き、吊り、浣腸のコースで虐めて頂き、最後は縛られたまま犯されます。とっても精神的な方ですので、プレイの途中でも、お迎えしなければなりませんし、A感覚もお好きな方ですので、浣腸のあとは、もっぱら、そちらの方で御奉仕しなければなりません。A感覚の余り好きでない、まりこにとっては、辛い一夜に、なりそうです。

一七一ページの画は、まりこの一番、好きなイメージ画です。マットの上に大の字に縛られているのが、元女教師、今ドレイメカケのまりこ。三人の殿方は、まりこの教え子のA君、B君、C君。一人々々の性格、経歴などは九月号で、御紹介した通りです。まりこの左足を縛りつけておられるのが、一番、腕力の強いB君。中央で、革鞭をお持ちの方がA君。A君と、今夜のプランについて話合っておられるのがC君。部屋のあちこちに、荒縄、木馬、三角台などの責め道具が、雑然と置かれております。三人の教え子に、生れたままの丸裸で、女の羞恥の部分を隠すすべも

なく、一切を露わにしている、この場面は、元女教師まりこにとって、最高に幸せな状態です。耳を蔽いたくなるような三人の会話も否応なしに聞えてきます。このイメージ画を見ているだけで、心の奥から、被虐の悦びが湧いて来て、胸がしめつけられ、頭がぼーっとなり、下腹が独りで収縮弛緩を繰り返し、われ知らず、濡らしてしまったような始末です。旭様、本当に痺れるようなイメージ画をお描き下さって有難うございます。女としてはいたないことまで書いてしまって、申し訳ございませんが、まりこにとって、このイメージ画を拝見させて頂いたときの偽らぬ気持ちでございます。

最後に一七三ページのイメージ画も、まりこの大好きな場面ですが、主人も、この画を特に気にいって、

「これは傑作だ。(歓迎ドレイメカケまりこ先生)の貼紙など、全く素晴らしいアイディアだ。こんな場面を、本当に実現できると、いいのだがなあ。どうだ、まりこ先生。女の教え子の前で、ドレイメスの浅ましい姿を、晒すときの気持は。まんざら、悪くはないだろう」などと申しまして、再び、卒業写真と同窓会名簿を持って、女生徒三人と新たに加わ

られた一人の男生徒の名前を決めるように命じます。いろいろ考えた挙句、男生徒はクラスで一番、成績の良かったD君という方に決めました。D君は、父親を早く亡くされ、母親一人の手で育てられ、高校まで優等で終えられました。その後の進学を諦められ、目下、この町の鉄工所に勤められ、労働組合の幹部などなされて、幾分、左翼の方の思想をお持ちの、真面目な青年です。社交家のA君の紹介で、今日のクラス会に、出席されました。まりこの正面にお坐りになって、隣の女性と話をなさっておられるのがD君です。D君と話をされている女性は、S子さん。クラス一番の美貌で、中学生の頃から、とかく噂の多かった方でして、高校卒業後は、H女子大に進学されております。大きな呉服屋さんの一人娘で、目下、御養子をお探しになっておられるとか。成績は良いのですが、我儘で高慢なところがあり、どちらかといえば、殿方を尻に敷く女王様の傾向の強い方でして、ドレイの境遇に悦びを感じている、まりことは全く正反対の性格の女性です。C君の紹介で、今日の会合に御出席になりました。S子さんの左側でS子さんの肩を叩いておられるのがT子さん。S子さんとは小さい頃からの

仲好しで、二人は、いつでも、どこでも一緒にでした。家具屋さんの娘さんで、成績は中位の、明るい性格の方。現在、自宅で家事手伝いの傍ら、洋裁を習っておられます。右側の席の、口に手を当てて、笑いを抑えている女性にはY子さん。運動の万能選手でして、体育

関係の大学に進学されております。男まさりの、陽気な性格の方で、その豪傑笑いは、中学生の頃から評判でした。まりこの主人と同居の、土建屋さんの娘さん。大勢の兄弟姉妹の一番、末っ子だったと記憶しております。以上で、新しく参会された男性一人、女性三



人の御紹介は終わりますが、前回、御紹介しましたA君は、まりこの隣で、まりこの前を隠している貼紙を剥ぎとろうとなさっておりますし、B君は、右側の席の一番、奥で隣のY

子さんに何か話しかけております。C君はY子さんの左隣で、頬杖をついて、にやにやとこれから始まる、まりこの御開帳の一瞬を、見つめておられます。



貴男様のイメージ画の、登場人物が決まりましたところで、主人は例によって、この場面の話を、七人の会話風にして纏めてみると強要して、何か書かないと承知しません。貴男様の、立派なイメージ画を冒瀆することになるかも知れませんが、蛇足を加えさせていただきます。

(この前のクラス会から一週間後、あの時のA、B、C三君の計画通り、三人が発起人になって、A君の別荘で、女生徒も混じえてのクラス会が、再度、開催されました。前回と同じように、一糸纏わぬ全裸で、椅子に開股縛りに固定され、白い布をかぶせられ、彫刻像のように、じっとしております。前回と違っている点は、御開帳を番組にとり入れた方が効果的だという、C君の発案を採用して、「歓迎ドレイ・メカケまりこ先生」の貼紙をとりつけられていることです。全員、揃ったところで、B君の手で、白い布がとり除かれ「あっ、まりこ先生」と驚く四人の新会員。B君に代って、今宵の司会者A君が登場します)

A君 皆さん、今晚は。ただ今から、まりこ先生担任のクラス会を開催します。私達卒業後、間もなく先生が教職を退かれ、

その後の消息が分らないまま、長い間、クラス会も開くことが、出来ませんでした。ところが最近、先生は、ある方のオメカケになっていることが判りました。普通の二号さんではなく、もっと下等なドレイ・メカケだそうです。動物並み、家畜並みの取り扱いを受けて、一生懸命飼主である主人に仕えて、そのことに喜びを感じる、マゾ・メカケだそうです。先日、主人の依頼で、B君、C君の三人で、まりこを辱かしめる会を行いました。が、三人だけでは、もの足りない。もっと大勢の、同性の教え子も混じえての会を開いてほしい、という、まりこの希望で、今宵の集りになった次第です。われわれの恩師まりこは、今や人間でなく、畜生並みのメスになり下っています。われわれで、思う存分、辱かして、まりこを喜ばし、われわれ自身も楽しもうじやありませんか。これで開会の挨拶を終わります。

(全員の拍手、お互いの私語)

C君 それでは今夜の番組を、御知らせします。この後、すぐに御開帳。御開帳とはまりこの前を隠している貼紙を、とり除

き、女、いやメスの一切を皆様に御覧に入れることです。恩師の何みかも見られるのです。

S子さん いやあねえ。こちらの方が、羞かしくなるわ。

T子さん でも、面白そうじゃあないの。まりこ先生が、丸裸になって、何もかも見せて下さるなんて。昔の先生からは、全然、想像もできないことだわ。

A君 まりこの奴を、ここまで飼育するのにまりこの主人は、並々ならぬ努力をしたそうだよ。

Y子さん でも、まりこの奴、もともとマゾっ気が、強かったのじゃないかな。

B君 そうかも知れないな。ところでD君。君は、女の躰を見るのは始めてだろ。君のような真面目人間に、今夜の催しは刺激が強すぎるかな。

D君 いや、大変、参考になるよ。

S子さん D君ったら、こちこちになっっているのよ。御開帳の後、どうするの？

C君 では、続けます。御開帳の瞬間、全員拍手して下さい。それから、まりこは、幼い姿になっておりますので、驚かないで下さい。

T子さん それは、どういうことなの？

C君 あるべきところの毛を、きれいに剃っているのです。

T子、Y子さん まあ、そんなことまでされているの。

A君 もっと面白いのは、その部分を、お化粧しています。まりこはセックス・ドレイですから、暇さえあれば、男性に気に入られるように、手入れをしているのです。

S子さん まあ、いやらしい。まるで、いろいろ面白いだわ。

C君 そうなんです。まりこは色情狂ドレイメスなんです。御開帳の後は花電車を行います。皆さん、自由に飲んだり食べたりしながら、ゆっくり御覧下さい。

D君 花電車とは、どういうことなんだい？

B君 D君は何も知らないんだなあ。C君、詳しく説明してやれよ。

T子さん あたしも、さっぱり分らないわ。説明して頂戴。

C君 花電車とは、つまり……仲々、説明しにくいな。つまり女体の、あそこを使つて、いろんな芸をやらすことなんだ。Y子さん いろんな芸とはどんなことなの。

B君 今夜のまりこには、牝鶏になって卵を生ませる芸、卵を割る芸、バナナを切る芸。最後に、参加者全員へ記念品として色紙に『メス犬、まりこ』と書く芸を、予定しています。

S子さん まあ、あきれた。まりこの奴、そんな羞かしい芸を、どうして覚えたの。

A君 まりこの主人の、並々ならぬ努力の結果だよ。ここまで育てるのに、五、六年はかかっていると思うよ。

D君 早くその花電車とやらを見たいな。

T子さん、Y子さん あたし達も、早く見たいわ。

C君 少し、お待ち下さい。花電車の後は、一度、縄を解いて、まりこに食事をさせます。ドレイの食事は、自分の生んだ卵と、刻んだバナナにしますから、T子さん、恐れ入りますが、この策で、うけとめてやって下さい。それからドレイの飲物は、特別に用意してごいません。まりこは、男性特製のジュースが大好物だそうですから、有志の方は提供して下さい。私も提供するつもりです。

T子さん それは、どういうことなの？

S子さん あなた、分らないの。あたしは、



よく分るんだけど。そんなことの大好きな、まりこって、本当にいやらしいメスなのね。

C君 つまり、男性のものを、おしゃぶりするのが、大好きなのです。

T子さん・Y子さん まあ、本当に、いやらしい。

D君 僕も特製ジュースを提供させてくれ。

B君 D君も仲々隅におけないね。勿論、僕もA君も提供することになっています。

C君 それでは、男性参加者全員が提供することにしませう。食事の後は、まりこの裸踊りを御覧に入れます。歌は全員で合唱します。歌詞は、以前、まりこが、

奇ク誌に発表した「芸者ワルツ」の替歌の「マゾ女ワルツ」と「田原坂」の替歌の「まるはだか」にします。歌詞は印刷して、各自にお配りします。

A君 まりこの奴には、すぐく淫らに踊るよ
うに仕込んでおります。

C君 最後は、ダンスパーティーにします。まりこは、ドレイらしく足枷を嵌め、鎖を引きずって踊らせます。そのとき、参加者全員、まりこの躰に楽書きをしてやって下さい。どんなことを書いても結構です。できるだけ淫らなことを、書いてやった方が、本人は喜ぶと思います。その楽書きの躰のままで、まりこを主人にお返しします。以上が、われわれ発起人が考えました、今宵の番組ですが、他に何か、これは面白いという趣向は、ございませんか。ありましたら、申し出て下さい。

A君 S子さん。あなたは、確か、お花を習っておられますね。まりこの奴を花瓶代りにしてお花を活けて見たらどうです。

S子さん 面白そうね。やらして頂いわ。

D君 鞭打ちや、吊り責めを、やらないのですか。

C君 君も仲々、この道に詳しいね。今夜はもっぱら、羞恥責めを、主体にしております。肉体の苦痛を伴う責めは、次回に計画します。

S子さん あたしも、あの汚らわしい奴のお尻を、縞ができる程、ぶって見たいわ。

木馬責めなんかも面白いと思うわ。

Y子さん あたしも恩師を、思い切り虐めてひいひい、泣かせて見たいわ。

T子さん でも、少し可哀そうじゃない。少なくとも、昔の先生なのよ。

S子さん 先生なんて聞いて呆れるわ。あんな汚らわしいメスは、徹底的に虐めてやるのがいいのよ。人間じゃないわよ。

C君 そうです。まりこは、人間ではありません。勿論、先生でもありません。畜生なのです。ドレイメスなのです。今回はもっと、みんなで趣向をこらして、まりこを虐めてやりましょう。その一つとして、目下、特訓中ですが、この別荘に飼っている、二匹の猛犬と、まりこを交わらせることを、是非、実現させたいと思っております。

S子さん まあ、すごい。そんなこと、うまくできるの。是非、実現させて頂戴。

C君 それでは、時間も大分、遅くなりましたので、番組通り、御開帳から始めさせていただきます。A君、早速、御開帳を下さい。みなさん、是非、拍手喝采をお願いします。

(こうして、まりこの前の貼紙を、A君の手で引きはがされ、割れるような拍手喝采と、哄笑罵声の中で、剃毛の生々しい跡も露わにまりこは、縄の外は、一糸も纏わない姿で、男性四人、女性三人の教え子の前に晒し者にされます)

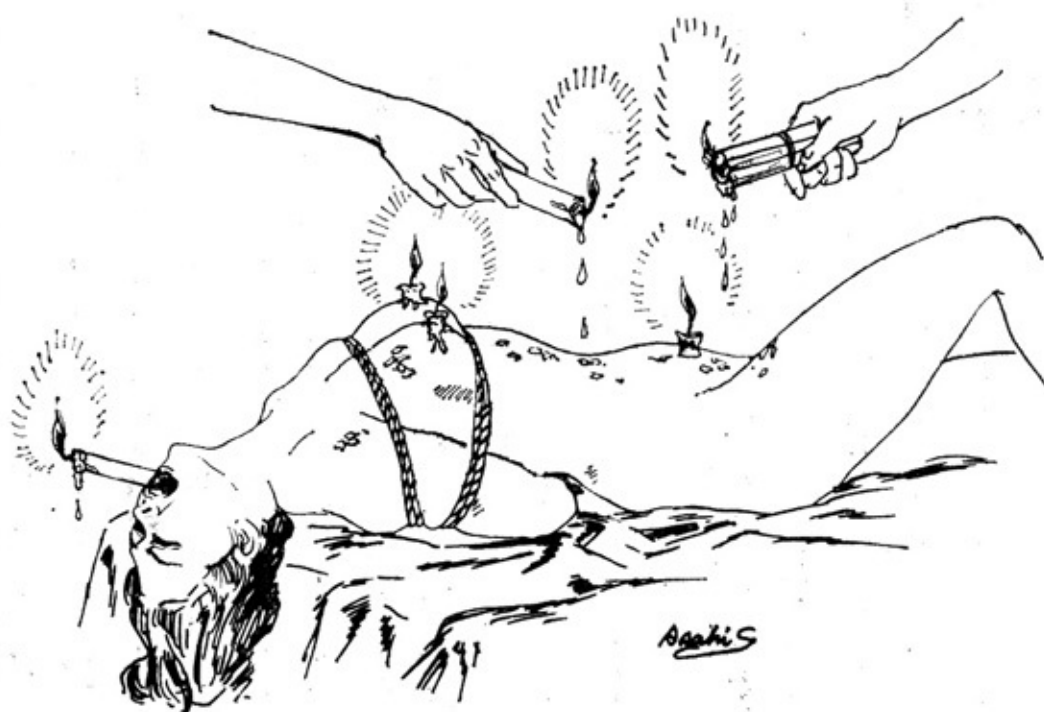
以上、長々と、主人のお智恵を拝借しながら、貴男様のイメージ画について、妄想の翼を拡げました。

旭様。まりこのような女のために、お描き下さった、せめてもの御礼に、貴男様のイメージ画の鑑賞をさせて頂きましたが、かえって、自分勝手なことばかり、書いてしまったようです。こんな恥知らずなことを書く、まりこを、お見捨てにならないで、今後も、まりこをモデルに、お描き下さいませ。

(旭様のモデルメスまりこより)

須坂旭様へ

△イラスト・須坂旭▽



「ああ、駄目だわ。私、困ってしまう。縛られているみたい」
私は特別に責めを意識して愛撫を描いたわけではなかった。稚児のおっぱいのように大胆に短くした髪を、右に左にと振りながら目の輝きは耐えていた。怯えているのか、待っているのか、声に震えが混じっている。右の腕を肩の付け根から思い切り曲げて背

『贗作・真知子』

昨年の夏、真知子は姿を晒した。黒いガードル、ストッキングで。私は一年、真知子のことを思い続けていたようだ。再び晒す、その日を待って、まだ待たさう。

小沢 準一

中に負け、女自身の自体の重みを、そのまま乗っけるようにして脇腹から、はみ出している手首を強く引っ張っていた。白く長く伸びた型の良い指が五本。真紅の美爪と共に、その部分だけが軟体動物のように勝手に動いている。女は小学校の教師だと言った。手の甲に、えくぼがあった。可愛いと私は感じた。

出たばかりの奇譚クラブを、無造作に丸めて上着のポケットに突っ込んだままで新宿へ出た私は、ほとんど最後にこの女と会った。酒の勢いもあったのだろう。一目で高価とわかる白いスーツを、完全に自分のものとして身につけ、気品ある雰囲気を感じさせてグラスを傾けている横顔を見た時は、外人かと思った。短いスカートから、のぞいている小動物のような下肢は、青い性を思わせたが、漂う雰囲気、それを打ち消す落ち着きさを持つ

っていた。よく気軽に声を掛けたものだ。「サン・ローランですか」

女は答えもしなかったが、こちらを見ずに微笑んだようだった。私は、勝手に近づいていった。

「お独りですか。それとも、待ち合せ。しかし、こんな遅い時間からだったら大変なことですね。モデルさんか、なんかですか」

店の客種を思いながら、たずねた。

女は「モデルさんじゃありませんわ、私」と楽しそうな笑い声をたてながら答えてくれた。その後の話は何事もなくスムーズに流れた。旅館にも何のためらいもなく入ることが出来た。最初の旅館で「満員」と、ことわられた時、女は逃げるだろうと思ったが、逃げはしなかった。プロなのかとも思ってみた。スーツと合わせて選んだのだろう、ハンドバッグを、私は女の手から離してやることか

ら丁寧な慎重にエスコートする気持でおこなった。

不思議なもので、私の手は女の唇と髪を優しく撫でているままでも、スーツの止め金を一回で探りあてた。

スーツの下には、思ってもいなかった健康的に陽やけた豊潤な肢体が、あらわれた。緋色のブラジャーとパンティー。セットなのだろうが、同じガードルでストッキングを止めていた。

「素敵だ」言葉が、勝手に女の耳許でささやいていた。女は、短く「嫌」と言っていたみたいだった。

私は繊細な細工ものでも扱うかのように気を配りながら、愛撫を加えていったのだ。が「縛られてるみたい」と女が言った時、愛撫の図式に気がついて、この女ならば、加虐を期待するのは、当然のことだ、という気がした。

ブラジャーの肩紐ごと、思い切り歯形がつくくらい乳房の上部を噛みついて、私は女の身体から離れた。鋭い悲鳴を上げて女も身を起そうとしたが、すぐまた、もとのままの縛られていたみたいになっただけでベッドに横たわった。

私は、芝居がかった調子で言った。

「おい、俺が見ていてやるから、そのベッドの上で、自分で、一枚一枚、下着を剥いでい

け。なんなら、バックミュージックを流してやろうか」

部屋のライト・コントロールをマキシマムにしながら私は、わざと洋服をつけて、ベッドのある位置よりも一段、低くなっている応接セットに腰をおろした。

「俺が、ここで見ていてやる。俺の気に入っただように脱がなければ、何度でもやり直しをさせるからな。これから、うんと恥かしいことや痛い思いを、さしてやる。お前は、そういうことが好きなんだろう」

女は、動かなかった。

「自分じゃ、いや。明りを消して。あなたがお手伝いしてくれなくちゃ、脱げないわ」

甘えは、ふくまれていなかった。落ちついた声で言っている。まっすぐ伸びた薄い肉色に包まれた腋下は、太股の部分で弾力性を強調して、ストッキングの端が喰い込むくらいに、ぴったりと、貼りついていて。洋服で整えた時の気品のかげらは、うかがわれなかった。この女は、半裸になったことで、変化していた。そういう女なのだろう。

「いつまでぐすぐすしてるんだ。早くしろ」大声をあげたら、一瞬、身体をピクリと動かしだした。機械人形のようにベッドから降りて、こちらを向いて、ガードルの止め金を外した。溢れんばかりの乳房の落ち込む谷間が、見え隠れしている。

「そうだ。その調子だぞ」

パンティーを、ずり落したら、そのままペタリと崩れるように座り込んでしまった。

「こら、立っんだ。立って、こっちへ来い」

女は両手で顔を覆って本当に泣き出した。

「恥かしいわ、私。だけど、あなたの言うことを聞かないと、帰して来れないのね。私は辱かしめを受けているんだわ。可哀想な女なんだわ」

「さあ、いい子だから、立ちなさい。立ってきちんと見せなさい」

「はい」

女は言葉と同時に、起立の姿勢をした。水着の跡で区別される、そこには黒影はなく、生まれたままの双丘が白く輝いていた。女は座り込むことはしなかったが、又、顔を両手で覆って、

「ああ、見て、見て、見ている」と泣きわめいた。両股を擦り合わせたり、心持ち開き加減にしたりもした。

部屋の隅にあるドレッサをもつて来て、横倒しにした。女にその鏡の部分の跨がせることにした。向う側の壁にも、鏡が嵌め込まれている。私の目と合わせて三角投影法だ。

旅館の備え付けの紐では、いかんともしがたい。せいぜい両手を後に回して縛るのが、せい一杯である。胸の部分にも、なんとか縄掛けしたいが、しかたがない。幸いな事に私

の内ポケットにブックバンドが入っていた。女には、一度、手を上げて尻でも胸でも打つ真似をしたのち、優しい言葉で同情してやらぬと素直にならない。本当に身体を堅くして、うずくまってしまう。自分の周囲に妄想を起して感情を昂らせなければいけない性格なのだろう。

ストッキングだけは穿かせた。太股に喰い込む感じが、被虐をそそって、とても好ましい。股をわしづかみにして、髪を後ろに引いた。声にならぬ叫びをもらして女の肢体は震える。身体の内部分から震えている。

長さの揃った睫は完全に瞑じていない。驚愕に引寄せた顔と、半閉じの瞼の様子は、女の心の内にある妄想に完璧な現実描写の影を創り出しているようだ。

「両手を揃えて出せ」と一喝したのち「痛くないから、可哀想だね」と言わねばならぬ。私まで女の妄想に引きずり込まれてしまう。女は、素直にうなずき、後手にして手首をピツタリと合わせている。浴衣の腰紐を三回、回して巻きつけた。首を何度も何度も、女は自分でうなずくようにして垂れていた。きちんと正座して縄を受けた。ブックバンドを腕と一緒に乳首を押し潰すように締めつけた。鏡を跨ぐことを知らされると、女は口をきつく結んで嫌々をするように大きく頭を何度か振った。短い髪の毛が、金糸のように下の

部分で拡がった。瞳は涙で濡れて光り、両方の目から一筋、流れた。

「ごめんなさい、許して。私は絶対に嫌よ。嫌、嫌」

ほとんど狂乱に近い。クラブで見たときの端正さは微塵もない。

言葉の恐喝と憐憫の繰り返しによって跨がせはしたが、ドレッサーの鏡は意外と広く、女は中腰の蹲踞の姿とならねばならず、鏡には内部の探奥までが映る感じがする。

「こんなの、いや。お願いだから、やめさせて。堪忍して。私、とっても悲しいわ」

「座ると鏡が壊れるぞ」

「ああ、嫌、嫌」

後手に縛ってあるためにバランスを崩すことが出来ず、ふんばった両足だけで支えているが、床のビニタイルとストッキングのナイロンが滑るのだろう。顔面は驚怖の形相を示し、薄らと赤味を帯びて来た。私は鏡の丁度女が跨いでいる中央あたりにコーラのビン、そのまま立てて置いた。向う側の嵌め込まれた鏡には、後姿となって女が、映っている。前から見るよりも映っている部分は、はつきりと、よくわかる。

ストリップは前の方よりも後向きになった時の方が良いと教えてくれた同僚のことを思い出して、大声で笑った。女は言った。

「私を、いじめて。あなた、笑ってるんですよ。ああ、もう助けて、お願い」

そのまま、鏡から離れることが出来るのに女は、それをしようとしめない。言葉の調子にも泣き叫ぶ響きは、なくなって来ている。

大腿部に汗が出はじめた。

「足が、足が、とっても痛くて、我慢出来ないわ。もういいでしょう、許して」媚びる態度になっている。肢体全体から悩める感じが発している。

「ようし、俺の言うことを聞か」

「はい。私、言いつけ通りに何でもします」浴室から小さいポリダライを持って来てコーラビンと取り変えた。

「そこにしろ」

「あっ、そんなことやっちゃいけないのよ。どうして、そんなに困らせるの、私を」

「何でも言うことは、聞くと聞いたじゃないか。黙ってやるんだ」

「そんな急に言われたって困るわ、困るわ。それに私、男の人の前で、こんなことするの始めてだもの」

羞恥のためなのか、足を踏んばって耐えているためなのか、顔や首に赤味が増した。恐怖にひきつった面影は、いつのまにか消えていた。気持は言葉と裏腹なのかも知れない。期待しているのだろうか。

「愚図愚図していると、これを、入れてやる

ぞ」とコーラビンを、かざした。

「そんなことをされたら私、気が狂ってしまいます」

きっぱりと言う。女は加虐を堪能していて楽しそうである。太股には痙攣が起っている。痛味は過ぎてしまったのだろうか。

「では、向うむいて下さい。こっちを見ないで。ね、お願い」

私は女が言ったことに、したがうことにして、後になった。

わずかに、はじける音がしたと同時に、女の方を向いて真近まで近づいた。

「あっ、いけない、駄目です。あっ、嫌だ。止まらないわ」

はげしい音とともに、しずくが鏡にも、はじけて飛んだ。私も素早く女の腹のあたりに向かって放った。きわめて近い距離からだっ

☆ SM画稿 募集!! ☆

☆ SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしい SM画稿を読者の方々から募ります。

☆ 画材は、女体責め、女体緊縛を初めとして、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも結構ですし、女体切腹の悲愴美は勿論、下着などのフェチズムに関係したものでも、本誌の内容にマッチするものでしたら、お好みのものを、お寄せ下さい。

た。女は後で、火箸で刺されたようだと叫びた。呻きに近いような驚声と「来るのよ、来るのよ。ああ、とっても来るの」と言っているのよ。そのままだ倒れ込んだ。緑色の小さい便器は、女の膝で横へ飛んだ。鐘の上に曲線を描きながら静かに、ゆっくりと、あたりに流れた。

ああ仰けになったままで女は、せわしく息を吸い込み両股を重ね合わせ、何度も何度もくねらせていた。

後始末は二人とも全裸でやった。「ストッキング、汚れちゃった」

時間は、始発電車の時刻を告げていた。私は女をベッドにうつ伏せに寝かせて、両股を開かせ、足首でもって固定させた。締め上げるたびに女は声を上げる。ブックバンドで両手首を後で止めた。

濡れたストッキングを丸めて、女の口へ押

☆ 必ず自作の未発表の作品を御投稿願います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆を御利用下さい。大きさは御自由ですが本誌の雑誌大位までが適当です。カット的なものは半分大でいいと思います。

☆ 掲載作品につきましては、作品の出来に相当した画料をお支払致します。アイディアだけの時は、鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう期待します。

△ 奇譚クラブ編集部 △

し込んで片方を二ツに折って猿轡とした。何度も頭をベッドに打ちつけては、拒んだが、力のままに強制させた。

冷蔵庫には親切なことにウイスキー用の氷が入っていた。

石鹼を直接、塗り始めると、されるがままでいた女は急に暴れて、身体全体で拒むことを示したが、ひるむことなしに私は充分に塗りたぐった。

形の丁度よい氷塊を力一杯、挿入した。押し戻してくる女の括約筋の力はすごかった。

懸命にコーラのビンを内味とともに氷塊のフタをするようにして、ふさいだ。

女は猿唇から動物に近い絶叫をして動けなくなった。確か「お尻が裂けた」と言ったような気もした。

○ 新宿は、霞っていた。駅の方角さえも見当がつかぬくらい、霧が立ち込めていた。

女は「眞知子」と名乗ったような記憶もあるが、私が勝手に思ったことで、名乗りはしなかったようでもある。一夜の僥倖だったのか、酔いつぶれての妄想だったのか。

旅館の名入りマッチを持って出たはずだったと思うが、ポケットには何もなかった。横断する信号の識別さえわからぬ位、霧は視界をさえぎっている。はたして無事に家へ帰り着けるだろうかと不安が胸の内をかすめた。

小便 割り

「久しぶりだな。もういい、立ってみろ」

平伏していた男が静かに立ち上った。全裸後手ロックだから、その均斉のとれた腹筋の紋様はおろか、遅しく吊り下っているものさえも、あらわに見られる。そして、この男のそれは、有明のハレムにあって、選り抜きの美女たちの環視に曝されているというのに、憶して縮みあがる気配もなく、その余裕のあるバイタリティを誇示していた。

隣に坐っていたエミー司令さえ、ゴクリと

固唾を呑んだのを、敏感に読みとった有明は思わず苦笑して、

「どうかね。私以外の男をハダカで見る機会には、そうさらにはないだろうから、せいぜい目の保養をすることだ」と皮肉を言った。

さすがのエミー司令も、自分の内心の動きを有明に覚られたと知って、みるみる全身を真っ赤にして、うなだれてしまった。

昔の大奥女中のような有明の女達は、確かに男に飢えている。彼女たちは男奴に心を動かすことは全くなかったし、手足を切りとら

れた性奴では何としても味気なかった。そこで思いがけず、有明以外の男を目の前にして平静でいられる方が、寧ろ、どうかしているともいえよう。

「しばらく会わぬ間に、すっかり美事な体型になった。随分と、贅肉を落したのだろう」「いいえ、それ程体重は減っておりません」男が、うやうやしく答えた。声だけは、かつての国際捜査官、新津謙介の張りのある音調を残していた。

「そうか、それはいい。筋肉がしまって、細



く見えたのだろうか」

と、有明は一人で合点した。有明の特命によって、新津は去勢されることもなく、このポートエリアで、ずっと特訓を受けていたのであった。有明は不思議に新津が好きであった。今の今でも、エミー司令が新津の裸身を見て、いささか昂奮したからといって、少しも嫉妬の感情が起らないのである。もともと、有明は、新津をここまで連れて来ようとは、考えてもいなかった。知りすぎたと思えば殺してしまったって、よかったのだから。ところが、イーラ（第10回参照）が新津を愛し、新津が彼女を好きになってくると、事情が違ってくる。新津はイーラを責め、そして屈服させるための重要な武器となった。事実、病気になるイーラを救い得たのは有明でもなく、佐野女医でもなく、鎖に縛られた新津だったという経緯すらある。（第9回参照）そして、二人は互いに相手を救う配慮から、断腸の思いで各自の恋情を圧殺して、二人ながら有明に隷従することを誓った。ここで又、いつもの有明なら、不要になった新津を処分した筈なのに、いや、処分しないまでも、男奴にした筈なのに、どうしたことか、そのままたまウィリー博士に、あずけっ放しにしていた

のであった。

「手を自由にしてやれ」

有明は、いたずらっぽく、傍らのエミー司令に命じた。普通は、こんなことを貴妃である星恵美子に命令する筈はない。本席の最下級といえばジャンヌだが、そのジャンヌあたりに命じられるべきことであった。それが、さっき胸をときめかしたことに對する有明のシッペ返しだということ全員に読みとられてしまうおそれがあるので、エミー司令としては何ともバツの悪い羽目に追い込まれたわけである。だからといって、有明の命令には

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその材質に応じて、五段七階級に分類され、巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。鋭い感覚で有明を追った国際捜査官、新津謙介も遂に有明に囚えられ、恋人イーラの命とひきかえに有明に隷従を誓う羽目になってしまった。そして今、新入荷の英国アン王女、イングリッド夫人ジャネットをいたぶるパーティに、ひき出された。

エミー司令といえども従わないわけに行かないから、唇を噛んで新津のところへ近づき、後ろへ廻ると手錠をパチンと開いた。蛇足ながら、ここでは、一般の戒具に使用してある錠前は、すべて同じ鍵で開くことが出来、アマゾン将校たちは、その髪飾りかねた階級章の留め金の中に、いつもその合鍵を所持しているのである。金、銀の戒具は装飾化していて、自分で自由に着脱が出来るけれど、銅の戒具は一旦、外してあるときでも、ちょっと嵌め合わすだけで、自動的にロックされるような仕組みになっている。ロックするのには鍵は不要だが、開くときは合鍵でしななければならない。鉄のクラス（畜位、物位）のそれは『永久ロック』であることは言うまでもない。

「ありがとうございます」

手、または足などの緊縛が解かれたとき、平伏してお礼を言うのが、この国の礼式だがさすがに特訓を受けた新津は、床にひれ伏し額を床にすりつけ礼を言う様になっていた。

「よし」

有明は満足気に、うなずいて、「なかなか、礼儀正しくなったな。褒美にビ

ールを奢ってやろう」

というと、まわりに円陣をつくって坐っているアマゾン女兵をグルリと見回して、

「誰か出してやれる者は、いないか」

といった。これには、さすがのベテランたちも一寸、辟易した風に、ざわついたが、これが有明のためなら、譬え火の中、水の中、も飛び込む連中でも、新津のためとなると、二の足を踏むのも当然である。有明のよくやる罠に、自ら、はまることもあるまい。それに、有明が、どうしてもやらせたいのなら、誰それと名指しにする筈であった。こんなときが一同にとって一番、判断に苦しむケースだったといっている。

有明は深追いを避けた。

「誰も出ないと見える。それなら、今後一時間はトイレに行くな。行ったら懲罰を与えるぞ。ハハハハ」

と笑いとばしてしまったから、女兵たちはホッと胸を、なでおろすのであった。

「アマゾニアンズが出さないと……」

有明は円陣の片隅に裸身を寄せあって立ちすくんでいるメリー王女とイングリッド夫人の方にジロリと視線をあてた。

「プリンセス・ビルと、いこうか」

ミセス・ウィリーが男奴に、実験室へ行って大きなビーカーを持ってくるように言いつけている間に、エミー司令が有明が要求していることを王女に通訳した。

「い、いやです。そんなこと……」

憤りのあまり、昂奮して絶句する王女を、冷然と見据えた星エミーは、

「いやなら結構ですよ。縛りあげてカテールをインサートすればいいんですから」

哀れな王女が、フラフラと倒れかかるのを後手ながら、必死に支えてジャネット・イングリッドが叫んだ。

「わたくしが、わたくしが代って……」

「だめよ。そんな勝手は許されません」

星がピシヤリと、おさえつけた。

「まあ、いいさ」

今度は逆に、有明がとりなすのである。

「折角、志願したんだからやらせて見よう」

男奴が円陣の中央に直径30センチもありそうな大きなビーカーをデンと据えた。

「どうしたの。自分で申し出たのに出ないというの……」

ピシヤ、ピシヤと夫人の豊満な尻をたたき

ながら、エミー司令が揶揄するように、けしかけていた。

口惜し涙を流しながら夫人は必死に頑張っていた。その中腰の恰好が面白いといって有明たちが大笑いしているのが、英語だったから夫人によくわかって、情けなさを余計、かきたてている。それかあらぬか、出そうと思えば思う程、かえって出てこない。苦行が始まる前、粗相があつてはならないと、キレイに出さされてしまっていたから、時間的に、まだ大して溜まっていなかったからでもある。

「なにさ、出すっていうから機会を与えてあげたのに、だめね。もういいわ。王女を、こちらへ……」

「ま、まって下さい。い、いますぐ、いま、だ、出しますから……」

血を吐くような声音で夫人が叫んだ。

「忠臣だな」

有明が嗤った。

「……を刺戟したら尿意が催してくるよ」

ウィリー博士も言う。

「ウツ——」

夫人が、よろよろした。矢庭に後からエミー司令が夫人の体を、かかえ込んだ。

それは、夫人の屈辱と苦悩の代償としてはあまりに鬱なかった。ほんのチョロチョロであった。

「だめねえ、もういいわ。誰か、これをあっちへ連れて行って」

エミー司令に命じられて、ジャンヌが夫人の首綱をひっぱって円陣の外へ連れ出す。

「これっばかしですわ」

ビーカーを抱えあげた、

エミー司令が、有明に見せた。実際、こんな大きなビーカーでは夫人の洩らした液体は、底を少し濡らした程度にしか見えない。

「やっぱり、もう一人のをブレンドしなくっちゃあ」と有明が調子を合わせた。

王女が金切り声をあげて円陣の外へ、逃げようとした。何人かのアマゾン女兵が飛びかかって、それを引き戻した。最早、ナプキンの揮は、どこかへ吹き飛んでしまい、腰に廻した紐も引きちぎられて王女は再び

生れたままの姿となって円陣の真ん中に投げ出された。

その髪をつかんで引き起しながら、エミー司令が鋭く言った。

「自分でする？ それとも、カテーテルがいの？」

進退きわまった王女は、苦しそうに

「アイ・ウィル（自分でやります）」と幽かに答えた。

数人のアマゾン女兵に手取り足取りされて遂に恥かしい姿を曝け出す王女。その直下に情容赦もなく、さっきのビーカーが据えられた。

張

「卑怯者！ わたくしがすれば、王女は助けて下さるとおっしゃったでしょう」

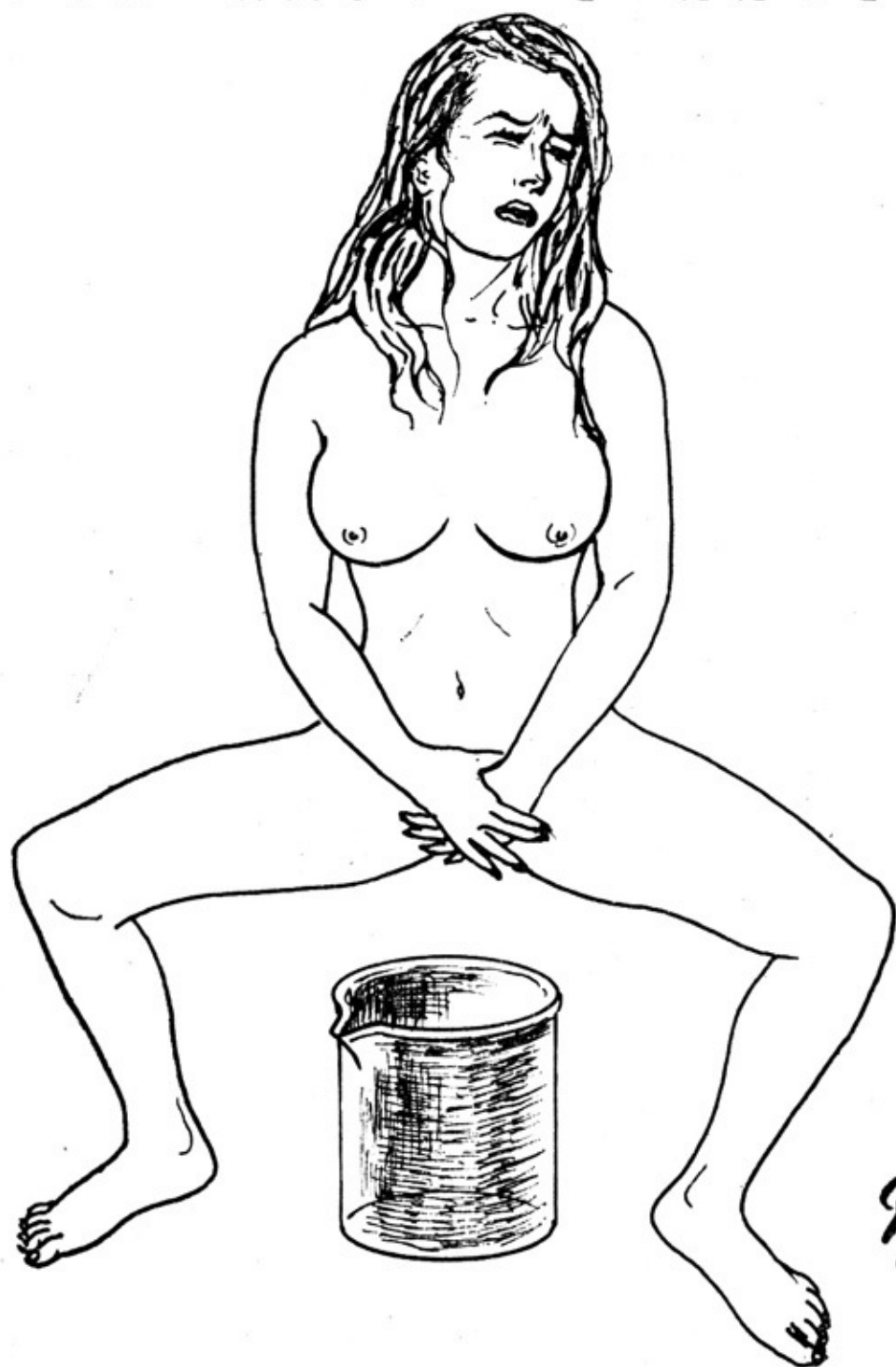
大声でジャネットが、わめいた。

「そんな約束はしませんよ」

エミー司令も大声で答えた。

「第一、これっばちでお役に立てると、お思いですか」

そう言われては返す言葉もなく、唇を噛む夫人だった。どうせ、夫人がやろうと、やるまいと、王女を辱かしめることは



変更されないのだということを身にしみて覚りはじめている。

「王女さま、何とかしてお助けしようとしたが、この鬼のような人たちには通用しませんわ。本当に、お気の毒な……」

ピシヤリ——と、大きな音がして夫人の裸身が床に叩きつけられたように見えた。

今まで黙っていた高橋侍従が、もう我慢出来ないという風に、夫人に躍りかかったのである。

「オオ、ジャネット」

王女も絶叫した。その拍子に、丁度よく括約筋が、ゆるんだらしい。シューッとガラスの中に泡が立った。

「まだ足りないなあ。これじゃ半ジョッキだね」

再び、エミー司令が差し上げるピーカーを眺めて有明が、つぶやいた。

「もういいでしょう。アルコール分がないから、これに足したら、いかがですか」

自分が飲み干したビールのジョッキに、ウイスキーをコップ一杯分も入れ、それをエミー司令の方へ差し出しながらウイリー博士がとりなしたので、有明も

「まあ、いいでしょう」

と、やっと納得したのであった。

納得しないのは新津謙介の方だった。鋭い警察官の本能から、ここで嘲弄の餌食にされている二人の英国貴婦人が誰であるか、早くも見抜いていたし、それが本物の王女であることを確信して、心から気の毒に思っていたのであったが、それだからといって、この二人の排泄物を喜んで飲めるわけがない。だがここでは、どうしても飲まなければならぬのである。さもないければ、報復は、忽ち愛するイーラに及ぶであろう。国際捜査官としての義務はおろか、人間としてのプライドすら自ら棄て去ってしまった新津にとっては、イーラのために一切を犠牲にすることしか、生甲斐がないのである。

彼は不快の表情を押しかくして、ウイリー博士が差し出したジョッキを口に近づけるのであった。

あ て 馬

「小便割り」という前代未聞のカクテルだったとしても、やはりアルコールのパンチは胃の腑に、しみ通るようだった。第一、新津は

半年以上も酒から遠ざからせられていたので余計、効き目が強かったのであろう。全身をめぐる血液がグリーンとスピードを増した。新津は思い切り酔い痴れてしまいたいと願っていた。これから果たさなければならぬ破廉恥きわまる役割は、正気で出来ることではなかったからである。

男奴たちがマットを運んできて、円陣の真ん中に据えた。手近な男奴部屋からでも持ってきたのであろうか、プーンと男くさい臭いのする、きたないマットだった。表面の布地は実用一点張りの木綿らしかったが、布目は垢に埋まってテラテラに光っている。特に真ん中のあたりには大きなシミが、いくつも、ひろがってジメジメと、しめっぽかった。

やっとジョッキ一杯を空けた新津は、それを、うやうやしくテーブルの上に戻して（そんなときも許可なく立ち上るわけにはゆかないから、膝行して進退する）

「ご馳走さまでございました」

と再び額を床につけて、お礼を言上るのであった。

マットの上に仰向けに寝ろ——と、いつけられたメリー王女は、顔色を変えて、

「オオ、おゆるし下さい。こんなキタナイベツドにあがるのは嫌です」

「フウン……」

エミー司令が唇を、とがらせた。

「最低の畜生のくせに、おまえは、まだ、そんなことにまで選り好みが出来るの」

彼女の手にした電気鞭がギョツと、しなった。その空振りの音を聞いただけで、王女は戦慄した。その抵抗も、はかなく腰くだけになつてしまう。

気味悪さに総毛立ちながら、オズオズとマツトの上にのぼり、言われた通りに、仰向けに横になった。王女の体は、つい二日程前にトウモロコシで、ほんろうされてしまつていた。シクシクした痛みは、いまだに続いている。それよりしかし、王女の心が受けた傷手の方が遥かに強烈であつた。それは、これから先、どんなに酷い目に遭遇したとしても、これ以上の苦しみにはなるまいとさえ、思われる程であつた。

だから、たとえ肉体は、どんなにオモチヤにされようとも、心だけは絶体に許すまいと健気にも思い定めて、目をつぶって、ジツと襲いかかる暴力の嵐を待ち受けるのだった。

けしかけられ、小突かれた新津が、ようやく王女のそばへ近よろうとしたとき、不意にジャンヌがおさえている縄尻を振りちぎった。イングリッド卿夫人が、狂おしそうに王女の上に身を投げ出し、

「とても見てはいられません。わたくしが、どんなことでも致しますから、プリンセスをたすけて下さい」

と叫んだ。夫人の白い背中に結び合わされた手、指の動きが、言葉より雄弁に夫人の絶望的な苦悩を物語つていた。

「また始つた」

エミー司令が舌打ちをして、
「お退き。さもないと……」

——ヒューツ——

鞭が振りおろされた。

「ギャーッ」

痛みよりも、電撃だつた。夫人の裸身がハネあがつたように見えた。

「ジャネット、やめて！」

メリー王女が泣きながら言った。

「あなたが犠牲になろうとしても、この人たちには通じるわけがないのよ。結局は同じことですから、もうお止めになつて下さい。わたくしは、もう、おお……」

言い終ることも出来ず、滂沱と涙を流しながら、声をつまらせてしまふ王女に、夫人はますます身を固く寄せつけ、言葉もなく、むせび泣くのであつた。

「日本語に『当て馬』という言葉があるのを知っていますか？」

「ア・テ・ウ・マ？」

突然、有明が問いかけたのでウィリー夫人は鸚鵡返して繰り返した。英語で用事が一切足りるから、ウィリー博士は殆ど、日本語を話せなかったけれども、夫人の方は、かなりしゃべれるようになってきていた。だからといって、アテウマなどという言葉は彼女の言葉に入っていなかったらしい。

「アプロプリエイトすることです」

「わかりませんわ」

英語で言つても夫人には、わからなかった。ので、ウィリー博士が面白そうに笑つた。

「タネ馬にケガをさせないように、ウォーミングアップは他の駄馬を使ってすることがある。その馬のことをいうんだ」

ウィリー夫人は、男のように大声を出して笑いこけた。

「おもしろいわ。アテるからアテウマなんで

すねえ」

と、わかったようなことをいうのである。

「だから」

有明がニヤニヤして続けた。

「ウォーミングアップには、志願したイングリッド卿夫人を当て馬にしようというんだ」

何のことやら、わからないままにメリー王女は汚らしいマットから引きずりおろされ、それが束の間の救いであるとしても、ともかく、ホッと胸を、なでおろしたのであったがそれにひきかえ、イングリッド卿夫人、ジャネットには酸鼻な『当て馬』の苦役が課せられたのである。しかも、依然として後手の拘束は解かれていない。

マットの上にアグラをかけた新津謙介のそれはダラリと垂れ下ったままであった。夫人が、まずやらなければならぬことは、……である。見ず知らずの男を相手にして、そんなハシタないことの出来る、夫人ではなかった。マットの上に押し上げられても、思わず知らず顔が反対の方を向いてしまう。

「どうした、どうした。自分で志願したんじゃないの。いやならいいのよ。どうせプリンセスがしてくれるんだから」

エミー司令が、けしかけた。その声にキツと顔をあげた夫人は、

「おっしゃる通り、私がプレイしたら、必ず王女を助けて下さいますね。約束して下さいますね」

「くだいわね。それも、あなたのハタラキ次第なのに……」

言葉より、鞭のひと振りの方が効果があった。肌当たったというわけではないのに、夫人の顔は反射的に新津の体の方へ向ってしまった。

新津のそれが元気になったと思うと、身体で受けろといわれた。しかも、獣のように四つん這いになって、（とはいっても、後手縛りの身では、せいぜい臀部を屹立させるのがせい一ぱいだったが）受け入れなければならぬ。

頬にあたるザラザラしたマットの感触が、たまらなく不潔だった。夫人は、誇りもなにも忘れてワアワア哭いた。

不思議な倒錯だった。こんな辱かしめを受けて、感じる筈もないと思った肉体は、それなりに独自の快感を夫人の脳に送っていたのである。

「それしろ、ケダモノめ。乙にすましていたって、もう臀を振りたてているじゃないの」
エミー司令の罵声も、すでに夫人の耳に入らなかった。マットの臭さも忘れはてしまった。夫人は、ボロボロになったマットの布地に爪を押したてて、もがいていた。

「おっと、出しちゃいけないよ」

エミー司令が新津の髪を荒々しく引っばって、その上体を、のけぞらせた。

「オオ、今更、ひどいわ。やめないで」
切れ切れに夫人が喚いたが、それも拷問のうちであった。再び鞭がとんで、夫人はマットから追い出されてしまう。

再び、マットに追いたてられたのはメリー王女である。

「約束を、約束を守って……」

必死に叫ぶイングリッド夫人を、冷たく見返って、エミー司令が言った。

「約束？ そうねえ。プリンセスを助けてあげようって約束したわね。プリンセスは今、男が欲しくってたまらないと、おっしゃっているのよ。それで、今、この男が王女さまを、お慰めしてくれるって、いうわけ。その意味では、王女様をお助けしていることにならな

いかしら」

「う、嘘つき！」

夫人の抵抗も円陣の外であった。円陣のなかでは、もうたまたまなくなっていた新津が、否応なく王女を組み敷いた。

健康な肉体が示す反応は、王女の場合とて例外ではなかった。その上、教え込まれた新津のテクニクにも隙がなかった。王女は人前もはばかりず哭き喚いた。細い体なのに、逞しい新津の体を、はねあげんばかりに反った。

「オウ、オオ、ノー、ウッ」

リズムが次第に短く激しく変る頃には、王女はたまたまなくなつて、短い嬌声を洩らしはじめた。

演技は惨烈をきわめ、見守るアマゾン女兵たちも固唾を吞んで静まりかえってしまっているというのに、有明とウィリー博士は、まるでテレビの番組でも見ているように横目にしながら、平然として酒をくみ交し歓談しつづけていた。

「私は反対ですよ、ドクター・ウィリー！」
有明が反論した。

「私はグロテスクなのは嫌いです」



ポイント 本を水平に持ち、左目を男、右目を女に合わせて静かに両目に近づけて下さい。二つが重なったら本を少し回転気味に動かして、ご覧願います。

「それは、よくわかっておりますマスター。しかし、グロテスクにはならないと思いますよ。丁度、ケンタウロスのように……」

「それにしても、王女の頭部をジャネットの腹中に埋め込むというのはねえ。それはいいですよ、どのみち、スチュアート家の顔は、私の好みには合わないんですから、どうなったって構わない」

「そうでしょう。だからこそ、ご提案申し上げたのです。偶然ですが、血液型も同じ、親和性もいいですから、接合手術は完全に旨くゆくでしょう」

「でも、脊骨があるから、どうしてもセンターを、ずらさざるを得ないでしょう」

「それは、止むを得ません。位置は脇腹になります」

「だから、グロテスクだというんです。どうでしょう、もう一匹お使いになつては。二匹並べて立たせ、その間に頭をはさんだら、どうですか」

「そうですね。マスターのご意見ですから、よろしうございましょう。そのようにいたします」

「ありがとうございます。では二人を置いて行きます。もう一人は適当に、お探し下さい」(未完)

連載

Mグループ

〔空想創作集団〕

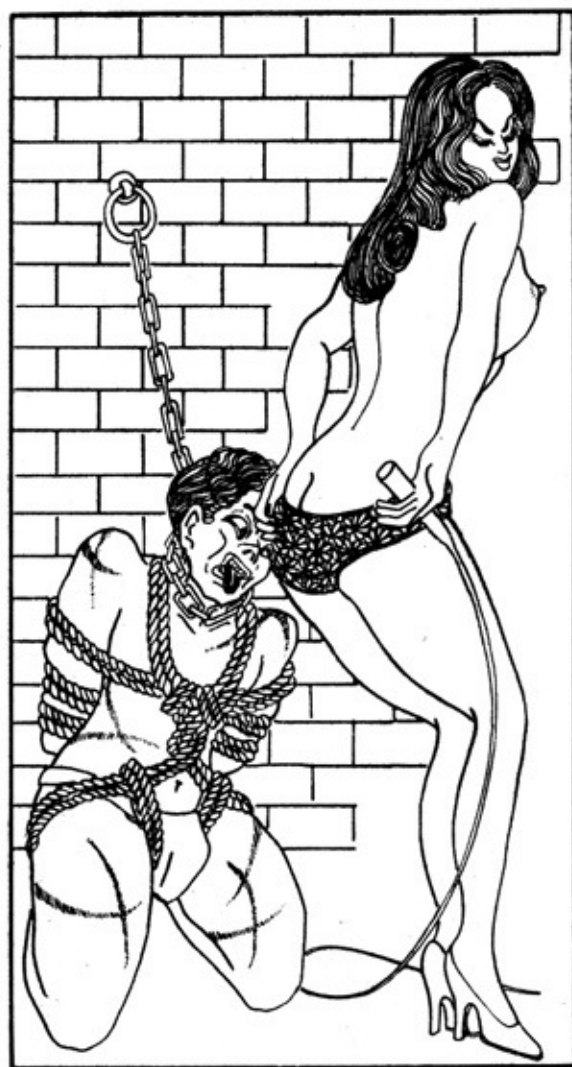
作品

女の虜囚

(10)

ある湯治客の話より

カット 春日田春夫



佐 治 麻 造

「もう配食の時間よ。こんなに運び残すなんて一体、何をしてたの？ 芝生で、ひる寝でもしてたんだろ」
二名の囚人は松原看守の前に深く身を屈めて声もなく並んで立ちすくんだ。
「申し訳ございません。悪

げだが、とてもその目と視線を合わせる勇氣もなく、再び頭を垂れた。

「も、もう少し、運ばせて下さいまし」

地べたに、ひれ伏した女囚が、身をよじりもだえて、哀願した。

「何だって？ もう配食使役の時間だと言ってるだろ」

女囚の背にピシッと鳴る鞭音を聞きながら四十五号も股手錠の両手を辛うじて指先だけで合掌し、

「配食を済ませた後もやらせて下さいまし、お願いでございます。お慈悲でございます。こ、この通りでございます」

手錠や金具をガチャガチャと鳴らせ軋ませ

夕暗が迫る頃、現われた松原看守は、裏門のブロック置場で待っていた。今にも倒れそうな体をもつらせ合うようにしてやって来た十四号と四十五号は、彼女の制服のスカートをみて恐怖におののいた。ブロックは未だ数十個、残っているのだ。

うございました」

「ふん、悪いとは知ってるのね。怠惰に対する懲罰は少しばかり、きついわよ」

暗房、箱、窄衣、吊るし、鉄砲手錠、そして禁食……。苦しい懲罰の数々を思い浮べた囚人達は、哀願の涙を湛えて松原看守を見上

て、辛うじて合掌の形を取った両手を足の間で動かしつつ、必死に憫れみを乞う四十五号囚に、松原看守は黒目勝ちの大きな目をキラリと向けた。

「何だって！ 私の勤務は十八時で終りよ。お前達のために超勤しろって言うのかい」

四十五号囚の膝はガクリと折れた。

「お前達と違ってね、私達には、いろいろと約束や予定があるのよ。お立ち！」

免れる術もない懲罰の恐ろしさに、わななく囚人達は何度も、もがきよめいて、ようやく立ち上った。

「こ、こんなにもお願い申し上げても……」

「うるさいわね。看守抗弁の罰は一番、重いのよ。教えてやろうか？」

四十五号囚の内股に鞭が鳴り、囚人は腿や腰をよじって笛のような悲鳴を洩らした。

股手錠を外され鼻の鎖を除かれても、囚人達の背や腰は伸びなかった。齒を喰い縛って延ばそうとすると、肩や背の骨がミシミシ音を立て筋肉がひきつれて痛む。疲れ切った体を這うようにして配食使役を受ける囚人達の胸は、禁食を心配して恐れおののいた。

「担当様。これから今夜は、あのデイトなさるんですの？」

女囚十四号が十八号の房の床に容器を置きながら阿るおもねように訊ねた。未だ後手錠を外して貰えない女囚十八号は、はだけ切った和服の裾から薄汚れた白い腿を覗かせ、乱れ果てた髪も哀れに正座して喘いでいた。両眼は落ちくぼんで頬もこけ、憔悴し切った蒼白な顔は涙と汗と埃で汚れ果て、血の氣のない唇の端からは涎が垂れていた。

「十四号。お世辞を言っても駄目よ。お前には関係ないんだから。受刑者は受刑者らしくおとなしく刑に服してりゃいいのよ」

女囚十四号が、無念げに唇を噛み、すり切れて血の滲んだ指先を舐めた。後手錠の女囚十八号が、微かに頬に血の色を浮べ、恨めしそうに松原看守を見上げて膝をもたえ、

「まだ、まだ赦しては頂けませんの？ もうこれで……」

「お黙り！ 又、膝を崩してたわね。崩せないようにして欲しいのかい？」

昨日一日中、捕縄で足留縄を打たれて脂汗を流していた女囚十八号は、憎々しげに叱る婦人看守の言葉に、体をビクリと、わななかせて声を呑んだ。

「特別のお慈悲で今夜は女囚に世話させてやるわ。十四号、用便させておやり」

女囚十八号と同じく後手錠にされている五十六号の男は、両足首にも手錠を嵌められて苦痛に呻いていた。

「いくら規則だからって、せめてこんな時ぐらい、外してくれてもいいじゃないか。未だ罪が決まった訳じゃないんだぜ」

四十五号囚の手で用便の世話を受ける五十六号は、便器のそばの床にズボンの両膝をついて身もだえしながら無念げに呟いた。頼まれて五十六号の鼻のあたりに搔いてやった四十五号囚の背に鞭が鳴った。食器の始末を終えた頃、水戸看守がやって来て、

「松原さん。時間が気になるでしょ？ いいから、お帰りなさいよ。あとは私が、やったげるから」

とスカートのしわを伸ばしながら言った。「おくれるとフラレてしまうわよ。ホホホ」

「そうお。有難う」

若々しい頬を輝かせた松原看守は、嬉しそうに飛んで行った。懲罰のことは、もはや念頭にないらしい。二名の囚人は顔を見合わせ、てホッと安堵の息を洩らすのだった。

「今日は、きつい労役させられたのね」

水戸看守は慣れた目で囚人達の鎖錠を念のために確かめながら言った。その、やわらか

な声に含まれる、わずかな、いたわりの響きを敏感に感じ取って囚人達は涙ぐむ思いだった。取扱いはきびしいが、衛生には充分な配慮がなされている事として、今日のような労役の後ではシャワーを浴びさせて貰えるのだ。

鎖錠を解かれ用便をし、そして冷たいシャワーを浴び、少しは水を飲み飲んで囚人達は蘇生の心地だった。再び装着される戒具鎖錠は当然の事であったが、この水戸看守に締められる革褌が、ゆるみであるのも、囚人達にとっては涙のこぼれる程に嬉しい事であった。

「お調べ下さいまし」

自ら嵌めた、少しゆるい目の両手の手錠を両腿の間で光らせて囚人達は、いそいそと水戸看守の方へ示すのだった。

「お入り」

足鎖を鳴らせて房に入る四十五号の背を押して、囚人が床に正座するのを眺めやりながら水戸看守は鉄格子を閉じ音高く施錠した。

彼女の制服の胸ポケットには、この手錠の鍵があるのだ。しかし当然の事ながら彼女はその鍵で外してくれはしない。ガチャン、ピーン。何度聞いても、そのたびに胸もふさがりみじめさを味わあさせる音が、囚人の耳朶に響いた。正座して見上げる囚人の目と、鉄

格子の外から見下ろす水戸看守の目とが、ちらと合い、囚人の目は忽ち、床に悲しく伏せられた。

水戸看守のまなざしは、憫れみの色を混じえてはいるものの、やはり冷たく、きびしいものだった。

受刑者としての戒具鎖錠を身に施されてから一カ月程、経った或日の午後、四十五号囚は医務室へ曳かれた。囚人には分らなかったが、正確には四週間目であった。鼻環と、もう一個の錠を残して首環まで外された四十五号は、洗滌液をタププリ与えられ、命じられるままにシャワーで念入りに全身を洗った。

香料など入っている訳のない洗滌液が、鞭痕や枷ずれに沁みて泣きたい程に痛かった。真正面から監視の目を注いでいた水戸看守に許されてボロ布で体を拭いた。いつもはシャワーを浴び放し、自然に乾くままにしている彼にとっては、布で体を拭くという人間らしい振る舞いを許されて嬉しかった。

彼女は腰の革サックから手錠を取り出し、床の上の囚人の戒具類を、ちらりと見て「どうせ、すぐ外すんだから、いいわね」「担当様。どこへ行くんでしょうか？」

囚人は背に回した両手を、彼女が嵌め易い

ように背から離して後手錠を受けながら訊ねた。大ていの看守、特に西川、松原などという婦人看守にかかる、手首のあたりを荒々しく掴まれて手首の骨にビーンとこたえる程に激しく叩き込まれてしまうのだが、水戸看守は、囚人がおとなしく両手を揃える限りはそんな事はしない。若い松原看守などは殆ど同時に両手首に環を喰い込ませて、その素早い手錠捌きを誇り顔に、しゅんとする囚人を小馬鹿にした表情で眺めるのだったが、水戸看守は片手宛、ゆっくりと嵌める。

「医務室へ行くのよ。体を調べて貰えるわ。規程の精密検査よ。さ、おいで」

彼女は取り出した革紐の先の金具を囚人の鼻環に嵌めようとしたが、止めて背中を指先で押して促した。別棟の建物へ通ずる地下通路や明るい廊下を彼女と並んで歩いて行くと革褌を外されている身が恥かしくて堪えられなかった。後手錠の身は隠すすべもない。

「どう？ そうしてると楽だろ？」

「それはもう……ありがとうございます」

「足鎖や吊鎖も、なかなか重いものねえ。四六時中、つけられ放しじゃ、こたえるわね」鎖のない両足は踏み出すたびに躍り跳ねるようで、首環のずっしりした圧迫のない体は

何だか軽くて宙に浮くようだった。囚人達が毎日、力の限り磨き立てている廊下はピカピカ光って四十五号の素足の足裏にピタピタと吸いつくようだ。揃いの青い上っ張りを着た娘さんが二人、肩を並べてやって来た。それを見た水戸看守は、囚人の肘を強く掴み、娘さん達は囚人をチラと眺めて行き違って行った。恥かしさに囚人の全身は赤くなり、人々とすれ違うたびに知らず知らず体が前に屈んで横の方へ、ねじれるのだった。

「ちゃんと歩かなきゃ駄目じゃないの」

と水戸看守は、囚人の肘を掴んだ手に更に力を加えて、引き立てて行行った。待合室で三十分程、立たされて待った後、治療室に入れられた。硝子戸の所で水戸看守は革紐の先の金具を囚人の鼻環にカチッとつけ、革紐を掌に巻きつけて短く握った。薬の匂いが立ちこめる治療室の中では、赫ら顔の医者が革椅子に、ふんぞり返って葉巻をくゆらし、若い看護婦が台の上に何やらカチャカチャ並べている。囚人の後手錠を外してやった婦人看守は鼻の革紐を握り直しながら、

「お願いしますわ」

「ああ……」

太い声で返事した医者は、それからしばらく

くして、ようやく立ち上った。

「えーと……カードは？」

看護婦が渡すカードを碌に読みもしないでデスクに放り出し、聴診器を白衣のポケットから取り出す。

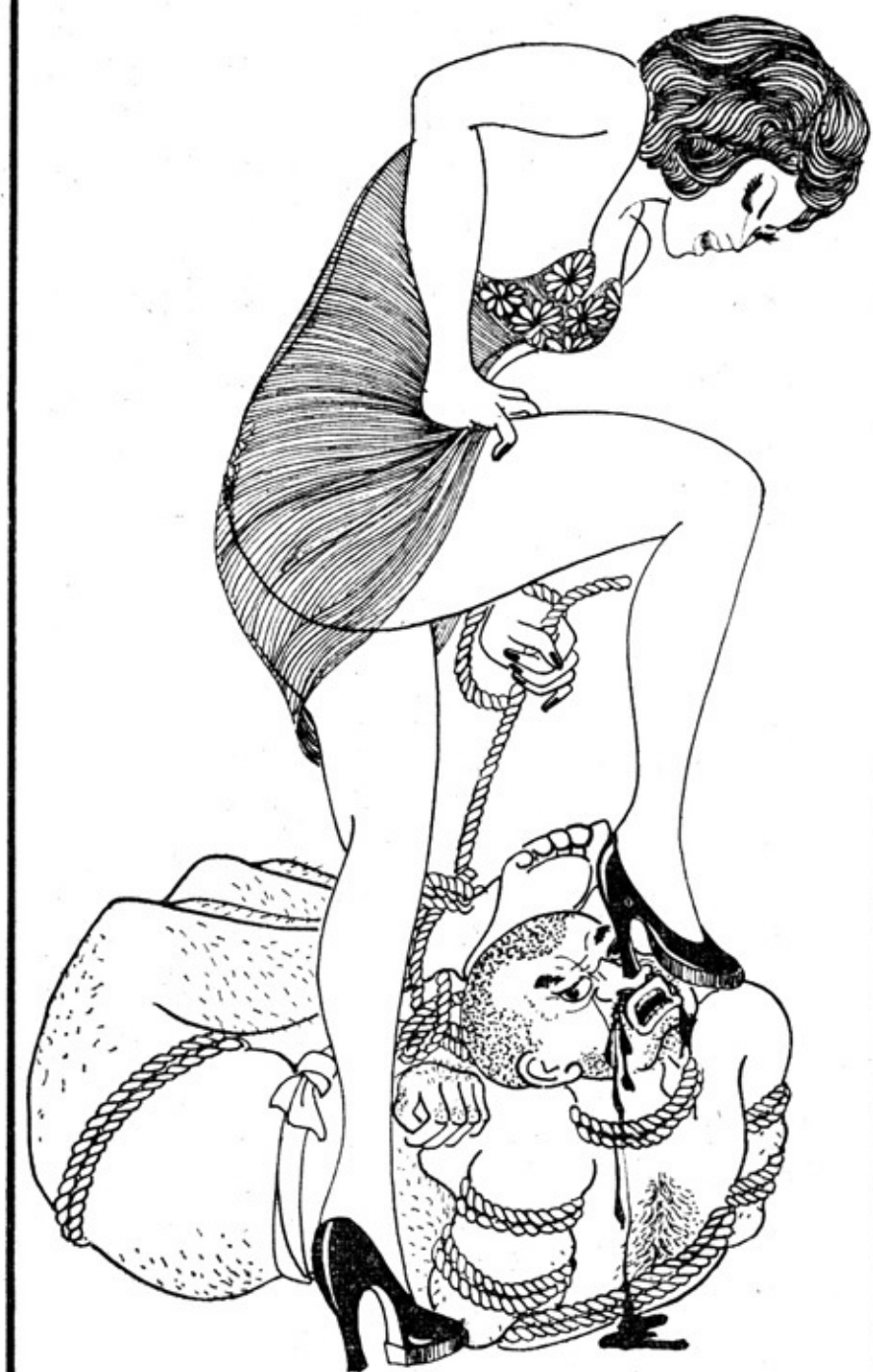
「水戸君。旦那さんは元気かね？」

お座なりの聴診を面倒げに続けながら医者が訊ねた。

「そうかい。そりゃ結構。仲はうまく行ってるんだろうね。こら、後ろ向いて四つ這え。腰を高く挙げるんだ。そうそう。恥かしい分際か、馬鹿奴」

乱暴な手つきで調べ上げた医者は、薬液を塗りたくった。

「うるさい。ヒーヒーぬかすな。もっと締め上げて貰っても大丈夫だ。此奴の懲罰歴は、



イメージギャラリー

「芋

虫

男」

春日田春夫

どの位？」

覗き込んでいた顔を挙げて訊ねる医者に、看護婦が、

「あら、カードに記入してありません？」

「読んでくれよ。おいこら、俯向けに寝ろ」

医者はピカピカ光る金属棒で囚人の尻を強く突き、手足を伸ばして床に俯伏させた囚人の頭上で、水戸看守の靴先が所在なさそうに床のリノリウムを軽く叩いていた。

「えーと、電気鞭六つと八つが一回宛。窄衣は一昼夜が二回。禁食は一回。それだけですわ。わりかし楽させて貰ってるわね」

記録に残される懲罰の他に、どのように苛酷な扱いを受けているかは知りもしないで、看護婦はそう言って、あくびを手で押えた。

「そうかい。吊るしや擽りや箱は喰らってないんだな。こら、そのままで仰向け」

戒具の痕の検査が済むと立ち上がらせられて、医者の命じる、いろいろな姿勢や動作をやらされた。

「所で、水戸君。赤ちゃんは、まだなの」

鼻環の状態を調べながら医者が訊ねた。

「ええ、未だですの。でも作らないようにしてるんですもの」

婦人看守が頬を赤らめて答えた。

「へーえ、そうかい。おい、君。脳と心臓だけは器械で診て見よう。他はいいよ」

床に正座した囚人の頭に金属バンドを巻きつけ、体のあちこちに針を突き刺し、電極をテープで貼りつけ、器械のコードに接続しながら医者は水戸看守と話を続ける。

「早く産まなきゃいかんね。五十才を過ぎると初産は無理になるよ。あ、もういいよ」

囚人の背後にしゃがんだ水戸看守は両腕を背に回わさせて手錠を嵌めながら

「あら、私まだ……五十だなんて。五十までには未だ、大分ありますわ」

と、ふくれて見せた。

「だって、もう三年程で三級の恩給がつくんですの。そしたら辞めて、赤ちゃん作るつもり……」

スイッチが入って、頭蓋の内部や胸の奥を弱い電流がビリビリ流れるのを囚人は感じながら、背から離して持ち上げていた両腕の力を抜いた。今、嵌められた手錠が冷たく背に触れる。次は機能障害の有無の検査だ。

「お立ち！」

囚人の前側に立った婦人看守は、小さな鍵を持った手を伸ばして手際よく錠を外した。外した錠は台上のピーカーのアルコールの中

へ落されて沈んだ。四週間振りに、やるせなくも苦しい錠を除かれた男囚四十五号は、腰をもだえて喘いだ。

「どうだ？ 辛かったか？ ハハハ」

医者は遠慮会釈もなく触診しながら笑う。

機能障害を与えないという事は余りにも苛酷であるから、それを防ぎ、或は速やかに発見して治療を加えるというのが、検査規程の建前なのだ。しかし、それは慈悲のように見えて却って残酷な規程だった。相当な機能障害でも、刑を済ませた後で、加療治療し得るのだ。受刑中は機能を喪失でもしている方が男囚にとっては楽であった。身を切るような苦しみを齒がみして堪え、のた打ち回って呻吟する、本能の地獄の責苦から逃れる事が出来るというものだ。けれども残忍な規程は男囚が充分な機能を保ち続ける事を強いていた。

「さぞ辛いことだろうが、ま、辛抱するんだな。野郎に生れたのが因果というものさ」

チクチクと電極針が、あたりに刺し込まれそしてコードの付いた筒を、かぶせられた。筒の殆どは透明なプラスチック製で、先端部や根元などの内側に圧力なんかを測定するらしい金属片がキラキラ光っている。スイッチが入ると、男囚四十五号は体を硬直させて呻

き喘いだ。若い看護婦が筒の長さを加減し、水戸婦人看守が革紐を極く短く握り、更に囚人の肘を強く攔んだ。二人の女性は、お互いにけん制し合いながら覗き込み、そして数秒の後には、少し染めた顔を横に向けて、呆気なさそうな表情を浮べた。一瞬の戦慄が過ぎると、男囚四十五号は喚いて泣きたい感覚を切なく味わった。それは次第に苦痛に交って行き、医師が計器から目を離してスイッチを切るまで、切なく続いた。看護婦が筒を取り去り、針が抜き去られて、囚人の波打つ胸や激しい息使いも鎮まっていた。

「どうだ？ 楽になったか？ あーん」

医者は無遠慮な指先で点検しながら言う。このような取扱いや処理を初めて受ける四十五号囚は、堪まらない恥かしさを、胸にこたえて味わうのだった。

「恥かしがる事はないぜ。ま、その中に平気になるわさ。さて、と……。お前さんは全然異常なしだ。二、三カ月、嵌められ放しでも大丈夫だな。おめでとう、いや、お気の毒にな。ハハハ。水戸さん、もういいよ」

ピーカーのアルコールから摘み出した錠を点検していた水戸婦人看守は、自分の左手の拇指に嵌めて、引っ張って試みていた。

「痛たた……凄く喰い込むわ」

顔をしかめながら錠で外した錠を右手に、彼女は囚人の肩を攔んで自分の方へ向けた。「もっと、こっちへ来て……」

左手の革紐で鼻環を引き寄せた婦人看守はつと右手を伸ばした。カチッ、ビーンと錠が鳴って、再び完全に嵌め込まれる。寒々とした絶望の思いが、下腹から突き上げて来た。いい様のない悲しい思いだ。低い動哭の呻きが男囚の咽喉を洩れた。

「何とも言えない顔をするわね」

と若い看護婦がジロジロ見ながら言った。

男囚の目の下に首筋を見せて身を屈めていた婦人看守が体を起しながら、

「物凄く辛いものなのよ……らしいわね」

おくれ毛がまつわる、ふくよかな彼女のうなじの乳色が男囚の眼に灼きついた。

「ハハハ。水戸君は亭主持ちだもんな」

と医者が笑った。

「制服、着てちゃ言えない事だけどねえ、ほんとに、この錠って、残酷だと思うわ」

水戸婦人看守が少し頬を赤らめて言った。

「刑務官がそんな事言っちゃ困るね、君。

刑は厳正に執行してくれなくちゃ、ハハハ」

「私ねえ、婦人警官になりたかったのよ。で

も、試験に落ちたの。それで、悪い事した者を懲らしめる方にでもと思って、刑務官になったんだけど。この頃は時々、考えてしまう事があるのよ」

アルコールで指先を洗いながら、水戸婦人看守は呟くように言った。

「あら、何を考え込むことがあるの？」

水道の所で看護婦が筒を洗いながら、顔をしかめて言う。

「あら、これに洗わせますわ」

婦人看守が手錠の鍵を取り出そうとポケットに指を入れたが、看護婦は

「もう、いいのよ。済んだわ」

と筒を乾燥器の中へ入れた。

「水戸君はね、そろそろ倦怠期なのさ。いろいろと思うことも多いわさ」

と、医者が葉巻に火をつけて言った。

「あんなこと……じゃ、どうもお世話様でした。カードを早く提出しといて下さいね。さあ、帰ろう」

と婦人看守は囚人を促して、革紐を持ち直した。

「まあ、コーヒーでも飲んで行きなさいよ。

ばたばたしないで坐ったら」

先刻、医者が火をつけたバーナーの上のフ

ラスコから香ばしい匂いが流れて来る。

「ありがと。ご馳走になろうかしら」

水戸婦人看守は革紐を握ったまま椅子に腰を下ろし、囚人は革紐を張ったまま少し離れて、うなだれて、じっと立った。

「おひまらしいですわね」

「ああ、俺は、仕事を減らす事ばかり考えてるんだ。二監の奴等の検診を、向うの人達に任せてからは、どだい、もうひまさ」

医者はコーヒーにブランデーを、かなり多量に落して啜った。二監とは、破廉恥罪の囚人が収容されている第二種監房のことだ。

「なあに、いろんな器械、計器や試薬があるんだから、大抵のことは医者でなくても分るさ。ご婦人方は、えらく興味を持って熱心なものだぜ。そこで引掛かった奴だけが俺の方へ回って来るという段取りさ。人間の体なんて案外、丈夫なものだよ。あれなんかも」

医者は茶碗を片手に、囚人の方へ顎をしゃくって、

「いいつや、をしてるじゃないか。もっとも、ここの餌は娑婆のとは栄養の点だけじゃ、桁違いに良いからな。ハハハ」

「お酒も煙草も全然、やらないんだし、こんなコーヒーなんかで胃を荒らすこともないし

甘いものも摂らないし、申し分ないわね」

と看護婦が言って、掬い入れた砂糖をスプーンで掻き回す。

「そして、頭脳を使わないで肉体労働だけしてるんだからな。スタミナがつく筈さね。所が、そのはけ場がないんだからな」

医者は紫煙を吹き上げて顔をつるりと撫で

「錠を掛けられた上に、錠がなきゃ脱げない縄を締められて、そしてお手々を、その辺で縛られてガチャガチャさせてるんだから、考えて見りゃ切なかるうて」

「あら、手をどこに縛られてるの？」

と看護婦がコーヒーに粉ミルクを振り込みながら、不審げに口を挟んだ。

「ここさ。毎晩、こうやって寝るのさ」

医者が腰を少し浮かして、その恰好を見せて。

「ああ、そうそう。そうだったのね。ああおかしい」

若い看護婦は囚人の方を眺めてケラケラと笑った。談笑する三人の方へ前側を晒して立ちつくす囚人は、口惜しさに胸を熱くした。

頭を垂れた目の真下に、嵌め込まれた錠が光っていた。

「一監の既決囚の逗留は少ないからな。それ

に、このお嬢さんはご着任後、まだ日が浅いもんで珍しいと見える。所で水戸君、ご亭主が浮気でもしてるのと違うかい？ 男っ振りはいいいし、本庁の四課は、いろいろと誘惑も多いからな」

水戸婦人看守は微笑を浮べて茶碗を干し、かぶりを振った。

「どうだい、お嬢さん。恋人に、あれ嵌めときゃ安心じゃないか。やきもきと二時間おきに電話せずに済むぜ」

「あら、駄目よ、売ってるのなんか。鍵も売ってるんですもの。何にもならないわ」

「だからさ、水戸君にでも頼んで、奴隷用のじゃないのを使えばいいじゃないか。それなら鍵は、ちょっと手に入らないし、奴さん泡喰って、まつわり付くようになる事は請け合うがね。ハハハ」

医者にかからわれた看護婦の娘は、口をとがらせて、ぷんと、ふくれた。

「あら、奴隷や受刑者以外の人に、そんな物を使うと法に触れますわ」

水戸婦人看守が珍しく煙草を吸いながら生真面目な声で言う。

「ハハハ。水戸君は相変らずまじめだなあ。ま、冗談はともかく、あれは君達、こたえる

ぜ。君達にや想像もつかないだろうがね」

「医者は茶碗の底を洗ったブランデーを一息に呷^{あふ}って、

「つい二、三日前にも二監で、どうしても鼻血の止まらない野郎が出てね。何でも二回ばかり処理を飛ばされたんだな。可哀想だったから外してやれって言ったんだが、ご婦人方は、きついもんさ。懲罰中ですと言って、どうしても外してやらないんだ。強く指示すりゃ洩々外してやっただろうがね。實際上、体はそんなに害^{そこな}われるもんじゃなしね。荒療治して血だけ止めてやったよ。そしたら事もあろうに、凄^こいグラマーの女囚とさ、短い鎖で腰を連鎖して追いついて行^いったよ。飛び出しそうな目を剥いていやがったな」

「私、男って浅間^{あま}しいものだと思^{おも}ったわ。可哀想な事なんか、ちっともないけど」

看護婦が手の爪にエナメルを塗りながら口を挟んだ。

「時々絞り上げてやるといいんだ。それが却って慈悲というものだ。窄衣を掛けて走らせるのが効果的だよ。鞭なんか、その時限りさ。操^さってやれば文句なしに消耗するけど、窄衣よりも心臓に悪いからなあ。水戸君、あまりやさしくしてやると、却^{かえ}って奴等のため

にならないよ」

「そういう事かも知れませんか」

と水戸婦人看守は呟^{ささや}いて、おくれ毛を掻き上げ、煙草を灰皿に揉み消しながら、

「けど正直いって、少しきびし過ぎると思いますのよ。規則だから仕方ありませんけど。両手に手錠を叩き込んでやれば、どんな男でも大抵、しゅんとしますわ。鉄の鼻環と首環を嵌めてしまえば、もう諦めてしまつて可哀想な程に、しおれ切るものです。一番、強い本能を抑えてしまつて、空想する事も許さないなんて」

「おいおい、君。部長にいいつけるぜ」

「いいわよ。そして今度の所長になつてから股手錠を採用したでしょ。苦しめたり恥かしい思いをさせたりするだけが能^{あた}じゃないと思^{おも}うんだけど」

「ハハハ。君はスエーデンの国にでも生れりゃよかったのにな。スエーデンじゃ大分、以前から、全般的に教育刑主義に切り替えてるそうだけ」

注射でもして貰^{もら}いに来^きたらしい女子職員^{しやくしん}の姿が待合室でチラチラし、水戸婦人看守は腰を上げかけた。

「どうもご駄走さま。今、言った事は、私の

気持だけの話ですよ。そりゃ中には、どうしようもないようなのが、いますわ」

「所で水戸君。その男は何日おきに、外してやるんだね？」

「ここじゃ二週間に一回の内規なんです。監獄法による分類の三級に該当します。じゃどうもお世話様でした。さあ、来るのよ」

入口の所で出会った娘さんが、顔をしかめて身を避けた。廊下に出たが鼻の革紐は除^{はず}ては貰^{もら}えなかった。肩を並べて歩く婦人看守のスカートが揺れ、制服の襟元から香料が匂^{にお}う。先刻、この女性の手で嵌められた錠^{かぎ}が、自身の重さで少し、ずれ下^{くだ}つて痛^{いた}かった。

「どうしたの？ 腰をよじつたりして。嵌め方が工合、悪いの？ そんな筈^{はず}はないつもりだけどねえ」

婦人看守は首をかしげて覗き込んだ。なまじ優しい言葉を与えられると、切ない思いに胸が疼く。小さなその錠^{かぎ}が磐石^{いわいし}のように重く感じられ、体温で暖^ぬまった筈^{はず}なのに、その硬い存在の感触が冷たく突き上げて来て、背骨を脳天まで駆け昇^{のぼ}った。これから二週間は絶対に外しては貰^{もら}えないのだと思^{おも}うと、齒^はぎしりしたい程に悲しい。

「そんな怨めしそうな顔しないでよ。まあ、

そんな事は何も考えない事ね。監獄へ行ったら、その内規で、まぢまぢだけど、一級囚になれば間違いなく外してくれるわ」

連れ戻された囚人には、きびしい戒具鎖錠が待っていた。水戸看守は、先刻は、あんな事を言っていたものの、規則に定められたいまいめは厳正に囚人に嵌め施すのだった。

それから十日程の後、四十五号囚は早苗と面会させて貰えた。股手錠の身を深く屈めて足の鎖を鳴らす彼の姿を、二重の金網越しに見て早苗は、暗然と涙に掻き暮れた。

「そんなにされて毎日、暮らしてるのね」

涙に咽ぶ声を聞き、恋しいその顔や姿を見て囚人は、ままならぬ身をもだえた。声を限りに、せめてもの想いをこめて言いたい事、訴えたい事は山程もあった。しかし、すぐ身近には、あの冷酷な松原婦人看守が意地の悪い目を鋭く光らせている。又、いくら早苗に泣いて訴え叫んで見たとて、何ともなりはしないのだ。早苗は今、暮らしている、と言った。しかし受刑者の日々は、暮らし等といえるものではない。

「暮らしてるなどと、いえたもんじゃないんだ。お慈悲で生かしておいて貰ってるんだ」

イメージギャラリー『オイボレ馬はやっぱり駄目ね』春日田春夫



口から洩れようとする怒りと悲しみの叫びを囚人は辛うじて押えて早苗の顔をひたと見つめるのだった。股手錠の体は、顔を挙げてみると、首の後ろのあたりが苦しい。早苗の顔は、かなりやつれていて、囚人の胸は痛んだ。訴願中の再審だけが微かな希望だった。

「随分、お金が要るのよ。けど、あなたが、たとえ一年でも二年でも早く出れば惜しくないわ」

訴願は受理され、法理士も奔走してくれていろいろだが、早苗の話では雲を掴むように頼りない。あれから一度も面会に來ない法理

士に対する怒りが燃えたが、囚われの身には如何ともする術はないのだ。五分間の面会時間はアッという間に過ぎ、松原婦人看守が、つかつかとやって来て、荒々しく鼻環に革紐をカチツと鳴らしてつけ、早苗の目の前でグイと引っ張った。無慈悲なものだ。

「さあ、来るんだよ」

鼻環を曳かれた囚人は、身を揉んで、みじめに呻き、見つめる早苗が金網を指で握り締めて、ヒート泣いて顔を押し当てた。彼と早苗にとっては、この小娘の婦人看守が鬼のようにも思えたことだった。

その夜の四十五号囚は独房の床を、のた打ち回って呻吟した。恋しい早苗の、いとしい顔が眼底に灼きついて胸を搔きむしるのだ。払えども払えども、その灰白い体の思い出が全身を疼かせるのだ。

「静かにおし。でないと、もう面会させてやらないから」

松原婦人看守が監視孔から憎々しげに叱りつけ、そして舌打ちしながら、鉄扉と鉄格子扉をガチャガチャ開いて入って来て、鞭を当てた。

体の検診の日から二週間経ち、その日の担

当は嵯峨婦人看守だった。四十五号囚は、ここ数日来というものは目が血走り、ともすれば頭に血が昇ってカッカッし、十四号を見ると激しい苦痛を感じていた。

「いやらしい日に、担当が回って来たものねえ。ここへ立つのよ。いつまで舐めてるの」

整った美貌を自慢の嵯峨婦人看守は、昼食を啜り終えた四十五号を叱りつけて監視台下に立たせた。監視台には、電気鞭の時に使われるコンセントが設けられているし、その他にもコンセントやダイヤル等がパネルに並んでいた。「今日、これからなんだな」と、これからの事を知った男囚四十五号は、屈辱感と歓喜の思いが入り混じって湧き上る感情を押えかね、全身の血が熱くなる心地で胸を波打たせた。

「愚図々々していると飛ばしてしまうわよ。又二週間のお預けよ。こっちは面倒臭くて嫌なんだから。理由なんか幾らでもあるわ」

嵯峨婦人看守は囚人を小突き回して股手錠を外し、更に革鞆を取り除く。外された革鞆は吊鎖をジャラリと鳴らして両足の間の床に落ちた。足鎖は、そのままだ。磨き込まれた彼女の装備品の手錠がきらめいて、忽ち後手錠が叩き込まれる。

「十四号。ここへおいで」

びくっと、わなないた女囚が、四十五号の体から目をそむけながら、おそるおそるやって来て、婦人看守の顔を、おずおずとうかがいながら、股手錠を外して貰うべく膝を開いて腕を動かした。

村田婦人看守が大股に現われて、

「今日の定食は豪華版だよ。嵯峨さんは未だだろ？」

と大きなガラガラ声で近寄り、男囚の体を無遠慮に眺め回わした。

「おや、十四号にやらせるの？」

「勿論よ。こんな事、なにも私達が、やってやる事ないわ。十四号！ この鍵で外しておやり」

「あんた、殺生だよ。この娘は未だ……」

「さあねえ、こんな無邪気な顔してるけど、ほんとは、どんなか分ったもんじゃないわ。何してるの？ 命令に背くと、ひどいよ」

女囚十四号は泣きそうな顔を真っ赤にして震える指先で四十五号の錠を、やっとの事で外した。四十五号の目の下に跪いた女囚の丸い肩がわななき、触れた指先に彼は呻き声を挙げた。外した錠は鼻環に引っ掛けられた。「これを、かぶせておやり」

手渡された筒をかぶせた女囚は、四十五号の足許で顔を両手で掩って泣いた。

「泣いてると舐めさせるわよ。青ランプが点くまで、そのネジを回わして」

嵯峨婦人看守はコンセントにコードを差し込みながら言った。開口部の柔らかな部分がじんわりと締まり、透明部分が少し縮んで、電極を含む小さな装置が、閉じた先端部の内側で触れて当たった。スイッチが入れられた。

忽ち男囚は、棒立ちのままで全身を痙攣させて喘ぐ。この器具を用いられると、如何なる男でも一分間とは保たないのだ。筒を除かれた四十五号は、えらく損したような物足りなさを焦れつつく味わうのだったが、ともかく身も軽々とした心地だった。自らの浅間しさが泌々と情けない。鼻環に引っ掛けられていた錠に手を伸ばす十四号と目が合った。婦人看守の手で着脱されるよりも遥かに恥かしい気持だった。叱り飛ばされ、軽く鞭さえも受けた女囚が、跪いて再び、それを嵌める。堪まらなくなつて微かに腰をもだえると、未だ嵌め終えられていない錠が女囚の指に引かれて飛び上る程に喰い込んだ。鋭く観察していた嵯峨婦人看守の鞭が背に激しく鳴り、錠は更に締まってビーン、カチリと音を立てた。

じっと眺め続けていた村田婦人看守が軽く咳払いしてニヤニヤ笑い、嵯峨婦人看守が丸めた鞭で、それを突つき回して調べ上げる。堪まらなくなつた四十五号は思わず両腕をもがいたが、後手錠の両手は前側には、回わらない。嵯峨婦人看守に思い切り叩き嵌められた後手錠は、先刻の数十秒間の夢中だった身もだえと硬直のために、自分の背中や腰の後ろで強く押しつけられたのだろう、手首の骨が砕ける程に締まり切っていた。その数十秒間の身もだえの激しさを今更のように知って、男囚は鼻環から錠が落ちなかったのを不思議にさえ思った。革褌が再び無慈悲に締め上げられ、後手錠が外された。

「楽になった？ 浅間しいものねえ」

嵯峨婦人看守は手錠を重ね革サックへ納いながら、さもさげすみ切った表情で言った。

「ハ、ハイ。お慈悲、有難うございました。

ほんとにお手数を掛けました」

「ふん。お礼なら十四号にお言い。お前、咽喉、乾いたろ？ 水を吞ませてやるわ。特別のお慈悲よ。フフフ」

嵯峨婦人看守は監視台の水差しから筒に少し水を注ぎ、ゆすり洗ってその水を、床の囚人食の容器にあげ、

「さ、お飲み。おいしいわよ」

と冷笑した。彼女の命令には服従があるのみなのだ。囚人は咽喉をつまらせながら死ぬような思いでその濁った水を飲むのだった。その彼のみじめな姿を女囚は目を丸くして眺めながら唾をゴクリと飲んで咽喉を、びくびくと動かした。塩辛い小さな塊まりを呑み込む時には囚人の胸はゲーゲーと鳴り、容器を捧げ支える両手は余りの無念さ悲しさに、わなないた。

「フフフ。恨めしげな顔してるわね。自分のした事の始末は自分でやらなきゃね。さ、手錠磨きが十分、溜ってるわ。早くやるのよ」

第一種未決監の備品としての数十個の手錠や多数の連鎖を一点の汚れもないように磨き立てるのは勿論の事、その外に看守達個々の装備品である手錠をも随時磨かされるのだ。

「担当様の手錠を磨かせて下さいまし」

嵯峨婦人看守がカチャンと手渡す彼女の手錠を両手で押し戴いた四十五号は、スカートを翻して立ち去る婦人看守を見送りながら、鎖を鳴らして立ち上がり、壁に吊られた手錠の束の下で、女囚と共に膝を折って坐り、手首を撫でながら、用具箱の蓋をあけるのだった。

——(つづく)——

大振袖・花嫁姿緊縛プレイの魅力

高橋 秀樹

山本五郎様の「大振袖・花嫁姿緊縛写真」に魅せられて、つたない投書をさし上げてから、早くも一年余が過ぎました。四十八年四月号では、山本様もあの中広の女帯に特別の魅力を感じるとの記事を拝見して、大振袖・巾広帯のマニアとして誠に意を強くいたし、あつかましくも再びお送りした拙文が同年九月号に載ったのを見たときは、おどろきと喜びで、いっぱいでした。しかも私の好みにピッタリの写真が一緒に掲載されており、編集部のご配慮には深く感謝しております。

五十九頁の写真は特に私が好きなもので、頁を開いたときは、ハッと息を呑む思いでした。これこそ私の理想とする意地悪責めの極

致でして、全裸女性の縛りをお好みの方には、つまらないものに見えるかも知れませんが、あの超豪華な衣裳・かつらを身につけた上縛り上げられた花嫁姿は、まさしく山本様のおっしゃるように「見る方にとってはウッシシでも、見られる方にとっては難行苦行」そのものなのです。なにせ、たくさんの腰紐やら伊達巻やらで締めつけられた上、「とにかく、あの固い厚板の帯で巾広にグルグル巻きにされ、やれ帯枕、それ帯メに帯揚げ。そして更に、しごき、又は抱え帯とくるのですから」たまったものではありません。

すそをひかず、からげて前のごろを帯にはさんでいるのも意地悪のひとつです。この恰好だと衣

裳の重量が全部、女体にかかり、重心が高くなってバランスをとりにくくなるのです。重いかつらを頭に乘せ、大きな帯を胸高に巻いて背に高々と大立矢に結んでいるのですから、重いすそをひきずって、やっとバランスがとれるのにその重いすそを上げられてしまっただけでも大変な努力が必要でしょう。

口には、かわいい花嫁用扇子をくつわにされ、二の腕から、きつちりと後手に縛られた、この「花嫁」の立姿は、本当に美しくも哀れな感じが、あふれています。今にも床に届きそうなポツテリとした長い袖。歩きにくそうな分厚い花嫁草履。だらんとぶらさがった

重量感のある厚ブキのすそ。腰から胸へかけてピツタリと締めつけられた巾広の帯。わずかにあいた胸元もハコセコを押し込まれ、息をするのも、やっとなという感じで世にも美しい責め道具による、重く、暑く、息苦しい三重の責め苦を耐えている、この花嫁の姿こそ男性のサディズムと女性のマゾヒズムを満足させてくれる最高の被虐美では、ないでしょうか。真横や後からの姿も、ぜひ見せて頂きたいものです。

近ごろは「奇ク」も大分、入手しやすくなり、特定の書店へ行かなくても、すむようになりましたが、昨年四月号以来、山本様の写真がパツタリ載らなくなったのはどうしたのでしょうか。毎号、期

待しているのに、ずっとお名前が見えず、誠に残念です。あれからは書店めぐりをして、『奇ク』の旧号に、山本様の作品を探す日が続いております。在庫の既刊号をお願いすれば、楽に入手できるとは思いますが、それでは「発見」の喜びがありません。古書店で、やっと見つけた『奇ク』旧号の中に、花嫁の大振袖緊縛写真が載っているときの嬉しさは、また格別のものです。こうして「妖しい日本美の探究」、「宙に浮く振袖」「念願の文金高島田」など、ひとつずつ見つけて参りました。見つけるたびに、その作品について山本様と新しくお話をしたいという気持ちで、いっぱいになります。今のところは、かなわぬ夢で、せいぜい編集部のご好意で、誌上でお目にかかるはかありません。

それにしても、花嫁のモデルになる奥様のご苦労は大変なものでしょう。山本様好みの大振袖花嫁衣裳は実に豪華なもので、まず現代の結婚式場では見られそうもありません。類似のものといえば、歌舞伎や日本舞踊の舞台衣裳しかなく、衣裳・かつらとも重量感のある、すばらしい超一級品です。かんざし満載の文金高島田のかつら、ぼつてりとした三枚重ねの大振袖、腰から胸までかかる分厚い巾広の帯など、重いづくめのものを身につけ、もうそれだけで身動きもままならぬ花嫁姿になった上で縛られ、吊り上げられるのですから、裸の縛りとは比較にならない苦痛を感じておられるに、ちがいません。これでスタジオ用のライトでも浴びせられようものなら、暑さが加わり想像しただけでも気の遠くなるような責め苦となるでしょう。それでも女性として最高のあこがれである文金高島田に大振袖・巾広帯の花嫁姿になり愛している男性——ご主人の手で縛られ吊られ、いじめられるとなれば、その責め苦の中に、ひそか



な幸福を感じるのが女心の不思議さでありマゾでないとはいいいながら、きつと奥様も、そう感じられているにちがいないと思います。大分前に何かの雑誌で、花嫁を縛る話を読んだことがあります。創作か事実かは知りませんが、一人の男性の告白の形をとっていました。思い出すままに記してみますと大体、次のようなものです。『いよいよ披露宴も佳境にさしかかり、彼女は色直しの美しい振袖姿で、花嫁の席についた。まぶしい程に美しく豪華な装いに身を包み、身動きもままならぬ風情が、

たまらなく愛らしかった。この美しい創造物が、きょうから自分のものになる。これからは毎日、この美しい「もの」を思いのままに持ち扱えるのだと思うと身体中の血が、たぎりたつようであった』当夜は新婚旅行に出ず、花嫁は振袖姿のまま来賓を送り出して、新郎とホテルの一室に、はいります。そして、誰にもじゃまされなくなつた二人は、かねて合意の緊縛プレイを始めるのでした。それは花嫁にとって愛する男性に「絶対服従」を誓う儀式であり、今は「夫」と名を変えた人に、思いの

ままにしてもらうことによって、その愛を確かめる試練なのです。『予定に従い、まず彼女は床に正座し、三つ指について前髪が床につくまで深々と、おじぎしながら、「きょうから私は、あなたのおいつけでございます。あなたのおいつけに従い、どんなことでもいたします。どうぞ、末長く愛し、かわいがって下さいませ」というのだった。恥かしさも手伝ったであろうが、大きな帯を締めた花嫁姿での



おじぎは余程、苦しいらしく、その声は、か細く、とぎれがちで、いとおしさを誘った』
こうして、文金高島田に豪華な大振袖を着て金らんどんすの帯を締めた花嫁は、新郎の手で縛り上げられ、屈辱と羞恥に満ちた姿態を次々に、とらされるのです。
「後手縛りの引き回し」、「両手バンザイ吊り」、「衣桁磔」、「後手縛り、片足吊り」、などなど、それは和装縛りの幻想美の極致を

思わせるようなもののばかりでした。そして、最後に花嫁は、初夜の床の上で海老責めにされるのです。小見出しに『海老責めの初夜』とあったのがとても印象的で、この一節にだけ、さし絵がついていました。

『すでに、たくさんの紐や分厚い巾広の帯で充分に締めつけられている彼女に、多くの縄をかける必要はなかった。それでも、縛りは縛りである。私は容赦なく、この美しい振袖人形に縄をかけ、海老に縛り上げた。花嫁の帯は、しきたり通り、丸帯を使っている。固い芯のはいった、錦織りの豪華な巾広の帯で腰から胸までを、ぎっちり

と締めつけられた身体を、無理矢理折り曲げられ、息も絶え絶えに無残な海老責め姿態をさらしながら、その責め苦を必死に耐える花嫁姿の彼女を見ると、たまらなくいじらしく、かわいいと思った。これほどに美しくも妖しく、そし

て残酷な「美」が、この世にあるだろうか。私は、この豪華な振袖衣裳に包まれ、縛りの責め苦にあえぐ美しい花嫁姿の彼女が、その責め苦が強烈であればある程、私にすべてを任せたことに満足し、私の愛の強さとして受けとめて幸福を感じていることを彼女の目から悟ると、時の経つのも忘れて大きな満足感にひたるのだった』

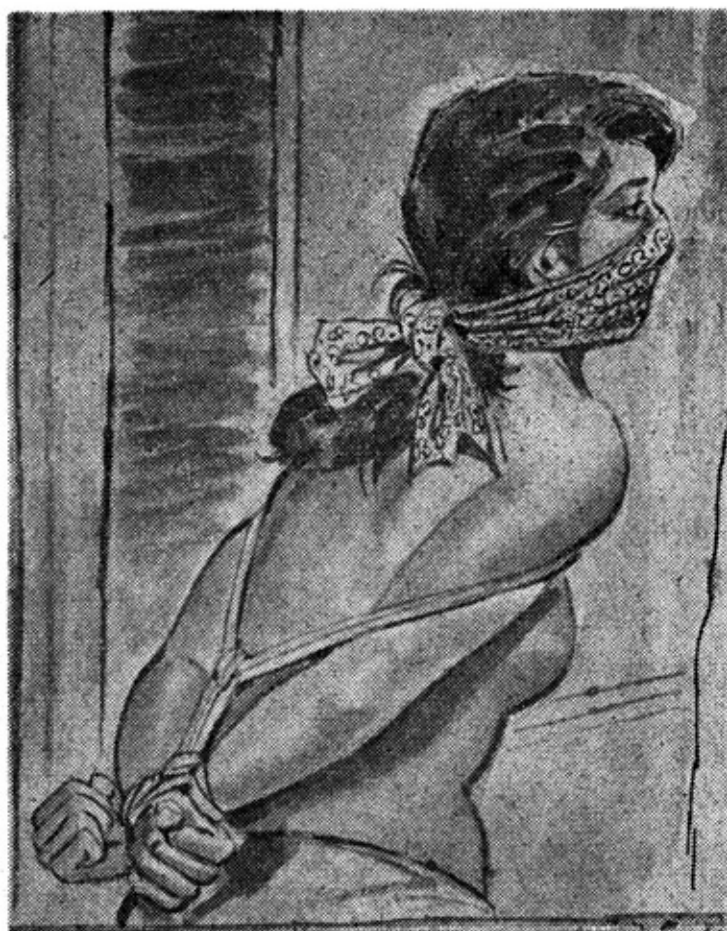
正確ではありませんが、大体、以上のような内容で、いじめる側の新郎の喜びと、いじめられる側の花嫁の喜びが、一致するところが良く描かれていたように思います。さし絵は余り良い出来ではありませんでした。裸の縛り絵が多い中で、高島田に大振袖の花嫁が海老責めにされている図は珍しく、これが写真だったら、すばらしいだろうな、と思ったことを覚えていいます。それにしても、振袖姿でいじめられる花嫁さんは、それが喜びにつながるとはいいいながら、ずいぶんつらかったことでしょう。そんなことを考えながら、山本様の作品拝見を、心待ちしている昨今です。

さるぐつわ

〈第二回〉

——この美しきものの詩と真実——

新 川 裕 夫



次に、その猿轡が文学の中で如何に取り扱われてきたか、言いかえれば、われわれの先祖たちは如何に猿轡に対して来たか、そして現代のわれわれに継承されて来たかについて考察してみよう。

まず、その前に、一口に「猿轡」といっても、その型式は既に前回の写真鑑賞でわかった如く、種々雑多であり、そのため、一つ一つの猿轡の持つ美的効果にも相違があることに注意せねばならぬ。

○ 前回で、われわれは、塚本鉄三氏の写真により、猿轡の持つSM的妖美を鑑賞した。

山口とき子さんは、優れた好エッセイ『縛り方教室』（昭和四十九年二月号）において「猿ぐつわ」についても言及され、興味ある

そして非常に貴重な文章を発表されている。以下、山口とき子さんのエッセイに、自己流の評釈を加えてみよう。

山口とき子さんは言われている。

女の身で猿ぐつわが好きなんて、人には言えないことですが、私は、あの鼻口を覆われた息苦しさというか圧迫感というか、そういう感じが大好きなのです。

この文章には二つの重要な点がある。

第一は、猿轡が好きということは女性の身では人前に、はばかれること。第二は山口さんは猿轡の持つ息苦しさが大好きであることである。

第一の点は古川裕子さんも『さるぐつわと私』の一文の中で、猿轡という言葉聞いた

時の女の反応は、かなり微妙なものがあり、決して積極的な姿勢でなく、恥部をあばかれた、うしろめたさや恥かしさがあるというような事を述べておられた。故に私は、このような反応を示す女性こそ、女らしい、女特有の優しい性質の所有者であることの、一つの証明であると考えて。そのため、山口とき子さんの「女の身で猿ぐつわが好きなんて人には言えないこと」だと言われている一条から私は彼女の女性らしさを痛感し、強烈なSM的興奮を感じるのである。

第二の点について、かつて古川裕子さんも同様の趣旨の事を、言われていたと記憶するし、以前、縛られたモデルばかりの座談会の記事で、司会の川端多奈子さんと高瀬忍さんも、猿轡は大きく鼻孔を掩って、口、顔を包んだ型式のものが、山口とき子さんの所謂、「息苦しいというか圧迫感というか」一種独特のSM的感興によって非常に好きだと発言していたのを覚えている。

この事から山口とき子さんは猿轡に関してその奥義を悟った素晴らしい玄人くわうとだと思う。猿轡を愛好する女性たちが期せずして同一の効果を楽しんでいるのは面白く、又、「猿轡と女性」に関する大切な資料でもある。

また、山口さんは左のように言われる。

勿論、猿ぐつわというものは、発声を封ずるためのものなので……（以下略）

この、山口さんの観察は正しい。

大槻文彦博士『大言海』で「さるぐつわ」の項をひくと、（人ノ、声ヲ出サシメヌ為ニ口ニ食マセ、頸ニ約ムル具。）とある。

ここで塚本鉄三氏のルポルタージュ「別嬪じゃないけど凄く可愛い娘」を想起していただきたい。塚本氏は縛った女に猿轡をしたのだが、それは「別に発声を封じようと考えたわけではなかった」と言われている。氏も、まず猿轡の持つ意義に、防声を否定してはいない。それは私も同様であり、後でふれる吾妻新氏も然り。吾妻氏など、防声から一步を進め、それを逆手にとって、ある種の効果をひき出して楽しんでさえいるのだ。

山口さんの鋭い観察は続く。

（猿轡が防声の役目さえ果せば、よいわけでも効果のある方法が、えらばれるのが当然でしょう。だから手拭一本を歯と歯の間に噛ませて、うなじで結ぶ方法が最近では、もっとも多く使われますし、奇巧のグラビアをみても、殆どがその方法で、モデルの

人が猿ぐつわをされているようです。

たしかに、その通りで、これは前回、塚本氏の写真から、われわれも確認してきたところだ。

さて、山口さんはそれに続けて、

「猿轡を咬ませる」なんていう表現からすれば、それが本来のものかも知れません。と説かれている。

これはまさに傾聴に値する説で、先にあげた大言海でも「口ニ食マセ云々」とあるから猿轡は、単に口を掩うのではなく、はじめは口の中に何かを入れたのか、或は入れるものがない時、布をかませる型式のようにして、口に食ませる効果を持たせるように転化していったのであろう。面白い研究テーマだ。

山口さんは更に言われる。

映画やテレビのシーンでも、以前は鼻口を覆う式のものが多かったのに、最近では咬ませる式のものが大部分のようです。確かにその方がリアルですし、顔の表情を出すという点では、すぐれています。

オーソドックスな鼻から口を包む型式の猿轡をして、女の目だけを出すか、或は掩う面積の極めて少ない咬ませる型式の猿轡をして女の表情（この場合、口を閉じるか、又は、

かんだ布を、いくらか見せるかによって、非常に変ってくる)を見るかということは、各人の好みによって大いに議論のわかれるところであり、断定は出来ないし、それをする事は、厳にいましめなければならない。

山口さんは「リアル」という点に限定して咬ます式の猿轡に、軍配を挙げられている。

顔の表情に主眼を置けば、必ずしも咬ます型式にのみ、その優秀性を見出す事は不可能である。塚本氏も、猿轡によって女の眼の表情が生き生きしてくることは経験者の知るところ、と既に言われた。そして、この場合の猿轡は、鼻から口を包む式のもので、それ故に眼の表情が強調され得るのである。要は、どの猿轡が一番、塚本氏のいわれる「被虐のムードを高める」かであろう。これも究極は、各人の好みによるのであるが――。

山口とき子さんは、この素晴らしいエッセイの中で、猿轡を型式の上から次のように分類されている。

- 一、手拭を一本、齒と齒の間にかませて、うなじで結ぶ方法。
- 二、手拭で鼻口から口まで覆うもの。
- 三、手拭で口だけを覆い、鼻は出しておくもの。

四、棒を銜えさせるもの。

五、縄をかませるもの。

六、齒の間を割って縛った縄を柱に結びつける猿轡と頭部の縛りを併用したもの。

七、皮製の猿轡。

八、ピンポン球のようなものを口中に突っ込んだもの。

等である。

さて、山口さんは「自分自身がそれによって、ある種の快感を覚える程度のものでなければなりません。私にとって身体の縛りと猿ぐつわとは、切っても切れないもので、どちらがなくても物足りないし、快さは半減します」という前提に立って、「割箸の両端に紐を結びつけて口に咥えたり、ピンポン球を買ってきて、その球に穴をあけて紐を通し、口に入れて、その球の後ろで結んだり、柱の前に坐り込んで頭の後ろで結んだり、柱の前に坐り縄を口に咥んで、それを柱に廻し、三重ぐらい口を割るように柱に縛りつけたたりした」結果、「矢張り、鼻口を覆う猿ぐつわが、最もよい」という結論に達している。それは「息苦しさというのは被虐の、もっとも大きな要素であり、それがためには他の方法では満足がいけない」からであるという。

まさに、体験者のみが、そして猿轡の愛好

者のみが、語りうる迫力ある卓論であり、猿轡研究上、貴重な資料である。

以上、みてきた如く、一口に「猿轡」といっても、その型式は種々雑多であり、そのため、当然、一つ一つの猿轡の持つSM的效果にも相違が出てくるのである。猿轡研究の面白味と複雑さは、ここにあるのだが、私も山口とき子さんのひそみにならない、猿轡の分類を試みよう。

今、世界の猿轡は大別して二つにわけることが出来る。即ち、日本式と西洋式である。そのうち西洋式のは、しばらくおき、先ず日本式の猿轡について、その型式を考えよう。

第一は、単に手拭(或は布切れ)で、女の上から口、頤と、顔半分を包むようにして、おおい、後頭部で結んだもの。

第二は、第一の型式の猿轡をする場合、女の口の中に何か詰め物(例えば、ハンカチ、ガーゼ、靴下、パンティ、ふんどし等)をしたもの。

第三は、単に布切れで女の鼻孔をあけて鼻の下から、口、頤を包むようにおおい、後頭部で結んだもの。

第四は、第三の型式の猿轡をする場合、女の口に何か詰め物(第二の例と同じ)をした



もの。

第五は、布切れを広げず細くして、女の口を開かせ、口を割るようにくわえさせて、後頭部で結んだもの。

第六は、布切れのかわりに縄を使った第五の型式による猿轡。

第七は、女の口に詰め物をして、それを吐き出させないために、細くした布、或は縄で

口の上を縛ったもの。

第八は、種々の変型猿轡。

(範囲は、なかなか広い。山口さんの分類、四、六、七、八などは皆、これに入る。変型猿轡の中でも猿轡用に人工的に作られた皮製のものなどになると、日本式と西洋式との接点の感がしてくる。しかし、皮製、即西洋式というわけにはいかないから注意を要する)

などである。

いよいよ私の饒舌的な筆も、ようやく本題に入ろうとしている。

上述の猿轡に関する基礎的考察をふまえてわれわれは文学作品の中で、愛すべき猿轡と再会しよう。

一、山東京伝

『本朝酔菩提』

海津嘉門という勇猛の大将があったが、時利あらず討死する。その妻此花は子供たちを連れて落ちて行く。敵の軍兵らは勝ちに乘じ此花や子供を生捕りにしようと迫ってくる。ただ強い者が正義の戦国の世。もし敵にしまったら女たちは、どのような運命を、たどることになるだろう。それは決して明るいものではないのだ。此花は必死に逃げる。どうやら敵の手からはのがれたと思ったのも束の間、「爰にまた有漏路太郎無漏路五郎と云ふ兄弟の強盗あり」というわけで、一難去って又一難というのが草双紙の定法。この物語でも、その通りで、落人があったならば、身ぐるみ剥がうと待ちかまえている二人の強盗にとうとう見つかってしまうのである。強盗どもは此花等の様子をうかがい、特に此花の娘

たまむし みめかたち
の玉蟲の美目容の美しいのを見て、この娘を引っさらって、人買いにでも売り飛ばしたらしたま、もうかるだろうと思ひ、

飢たる鷹の雀を掴様に玉蟲を捕へて猿轡をはませければ……
となるのである。

この場合の猿轡は、「はませ」たのであるから、玉蟲の口を開け、布切れをその中に押しこんで、その上を更に布で掩ったか、玉蟲の口を割るようにして布切れをくわえさせて後で縛ったかの、いずれかであろう。それもとつさの事であるから、後者の方式の猿轡が使用された公算が大である。

ちなみに此花の運命は如何にと言うに、玉蟲をさらわれて大いに驚き、強盗にとりつく彼女を、まず有漏路太郎が物をも言わず刀を抜いて、此花が肩尖を二、三寸ばかり斬り込む。血汐は、さっと、ほとぼしり、雪の上に散りかかる。「こは情なや悲や」と肩尖の疵を押え、痛手の苦しみに、もだえる此花を無漏路五郎も一太刀斬れば、あっと叫んで身をふるわせ、「髻切て黒髪を風に乱せし有様は緑も深き青柳を時にもあらで見る如く身上は朱に染りつつ惟子雪に散交る寒紅梅に異ならず」その苦しい息の下から、右左によろめき

ながら、玉蟲をかえせと取つく此花を、無漏路五郎、丁と斬る。又、有漏路太郎が磔と斬る。あっちこちの、なぶり斬りに七転八倒身をもだえ、ああ苦しい堪えがたやと叫ぶ声も、やがて絶えだえに、虚空を掴む苦痛の体を、二人の賊は、せせら笑って「情深くて俺たちの商売が出来るか。鱈の料理でも賞翫しろ」と、さも憎々しげに、かわるがわる罵りつつ、慰み半分、片手斬りに、なお幾太刀となく斬りつけければ、斬るたびに血汐は雪にかかって紅にそめる。やがて有漏路太郎は此花を蹴倒し、足下にふみつけ、止めの刀を、ぐっと刺せば、あっと叫んで彼女の息は絶えてしまふのである。

なんと美しい残酷味であろう。我々の先祖は、充分この美しさがわかったのである。

『雙蝶記』

ここに吾妻という美しい遊女がいる。彼女には金持の浪人、堂左衛門というのが手をかえ品をかえ、言いよるが、山差餘吾郎という情人がいるために言うことをきかない。そのため、堂左衛門は深く、これを恨んでいる。

さて、この所、恋人餘吾郎が少しも吾妻をたずねてくれないので、彼女は大いに愁い顔で物思いに沈み、あのお方が心変りをなさつ

たのではないかしら？ と、かこつ。そしてとうとう病氣になったからと、部屋にとじこもってしまった。と、ある夜、一人の乞食が古つづらを背負って奥庭から、こっそり吾妻が寝ている部屋に、しのびこんできたのである。そして、

独臥居たる吾妻を捕へて、手拭を口にはませ、葛簞の裏におし入て、これをおひ、逃げ出してしまったのである。

と、もうここで御想像がつくと思うが、これは堂左衛門の仕業であつた。

が、それはさておき、この場合の猿轡も、手拭を「口にはませ」た型式が使用されている。やはり『本朝醉菩提』で述べた型式であろう。そしてこの型式は特に防声の上で、きわめて効果的であるところから、又、『雙蝶記』では、人知れず女をさらって行くのであるから、猿轡も防声に主眼がおかれねばならず、よって「口にはませ」式が使用されているのであろう。

『優曇華物語』

この物語で猿轡をされるのは、弓児という「都のうちにすら、たぐいまれなる美女」である。

弓児は、ある山寺の施餓鬼の法会に、行つ

た。と、にわかに一陣の狂風がおこって寺中の灯籠は残らず消えてしまった。あっと驚く弓児の背後に人影がうごいて、彼女の襟を、ひしとつかみ、

手巾を口にはませてものいはず。餓たる鷹の雀を見つけたるごとく。襟首をつかみて引立ゆく。

しかし、真つ暗なので誰も知らない。弓児は大に驚き、助けを求めようとするが、

ものいふことあたはざれば、只身をもだへてぞ悲みける。

この場合の猿轡も、人中から女をさらうのであるから防声を第一としなければならず、口に「はませ」た猿轡となつたのであろう。

彼女が「ものいふことあたはざれば」という所から、いかにこの猿轡が、しっかりと弓児の口に、はまされていたかが、わかる。

以上、山東京伝における猿轡をしめくると、京伝は、猿轡を防声の道具にのみしか使用していない。故に、もっともその目的に効果的あらしめるように猿轡は、いずれも「口にはます」方式のものである。山口とき子さんは、まだ現われてこない。それは、もう少し時間がたつのを待たねばならぬようだ。

二、柳亭種彦

山東京伝を先輩として最も崇敬私淑していた種彦には二つの型の猿轡を使用している。

第一は京伝風の「はます」型で、第二は口をつつむ型である。

『浅間嶽面影草紙』

わすれがいのやどかり

忘貝と寄居虫という二人の美しい娘が、或夜、ものの本など読んでいると、一団のギャングが侵入した。二人の娘は、あっと叫んで逃げようとしたが、ギャングどもは、何ぞ逃がすべきや。娘を捕えて高手小手にいましめおき、ゆうゆうと仕事をしている。

二人は活いきたるここちもなく。声たてまく思へども、手巾てぬぐいをもて口をつつみたればそれさへ心にまかせず。

ただ、涙のあるかぎり、泣いているばかりである。

実はこのギャング団の首領は忘貝、寄居虫の従兄の奈古平という悪人なのである。奈古平は何くわぬ顔して再び娘たちの家をおとずれ、びっくりした顔で娘たちの縄や猿轡をとってやっている。もし私だったら、目の前に転がっているのが、親類とはいえ、縛られた美女たち。「なんてエひでエ奴らだ。こんなに固く縛りやがって。おお、よしよし。今

解いてやるからナ」とか、なんとか、解くふりをしながら娘たちの体を、あっちこっち、ひっくりかえしながら、女体のやわらかい曲線と猿轡をされた美女の表情を、ゆっくり楽しむのだが……。しかし、そこはそれ、私より、ずっと悪人の奈古平のことだから……。

それはさておき、この場合の猿轡は、手拭で「口をつつみ」という型式で、「はます」型の京伝のとは違っている。「つつみ」というのであるから、明らかに手拭を巾広にひろげて、鼻の下、或は上から口、頤を、つつんで、後ろで縛った型式である。後でふれるが種彦には、どちらかというところ、こういう型の猿轡を愛する傾向があったようである。防声という実際効果よりも、「つつむ」型式の猿轡の方に、より多くの美しさを認めていたのであろう。

『正本製』

胡蝶という美しい人妻が、良人源頼信を探して、とある辻堂に來かかる。丁度、雷鳴が激しく、辻堂に雨やどりしていた二、三の者が源頼信の悪口を、しきりに言っている。たまりかねた胡蝶につき従う忠義の家来、柴平が脇差をスラリと抜くと、人々はバラバラ、逃げる。柴平は追う。胡蝶は一人、辻堂に残

る。と、その時、一人の怪しい男が、簑笠かなぐり捨て、つつと寄って、

胡蝶が小腕取より疾く鰐口の紐引ちぎり其俣直にぐるぐる巻。あれよと叫ぶを手巾にて手早に掛し猿轡。

胡蝶の運命や如何に。

種彦は、又ここで猿轡に関して新しい表現法を用いている。『掛し』が、それである。

思うに、これは猿轡をするという事に対する一般的な表現で、猿轡を「はます」猿轡で「つつむ」等の諸動作を、すべて包含するのである。故に、この場合の猿轡が如何なる型式のかは判然としないが、種彦であるから「つつむ」型式であろうと考える。又「手早に掛け」たのであるから、女の口を割らせてかませるよりも、つつむ方が簡単である。

『緦手摺昔木偶』

美しき遊女、薫は恋人、信夫之助との間に信夫という子をもうけ、その健やかな成長を楽しみに、毎日を送っていた。しかし、ここに一寸、薫にとって気がかりな事が起った。近頃、信夫之助が少しも花街の薫の所をたずねてくれないと思ったら、彼が病気になったのだという。そして遂に命も旦夕に迫った由を手紙で知らせて来た。薫は大急ぎで信夫之



助の住いをたずねる。信夫之助も大いに喜び驚き、とりすがる薫を抱いた、と思いきや、そうではない。

まづおん身にいふべきことありと、病に弱る膝ふみしめ、躑よろばひよって薫が小腕背に振あげ、あはやと喚を、声立させじと、手

拭とって猿轡、足にまとへる葛簞の縄をこれ幸いと高手小手に縛あげ、

という有様である。愛しあった男が、女を縛り上げ、猿轡姿にしたのには、理由があったのであるが、くだくだしければ、ここでは省略する。

さて、右の描写であるが、種彦は調子づいて一寸、筆をすべらせている。

命旦夕に迫った病人が、どうしてムッチリした若い女の腕を背に重ねたまま、猿轡をする事が出来よう。びっくりして女は猛烈にあばれるのが普通であろう。そうすれば女の両手など、ただ後ろで、ねじあげていただけであるから、すぐ自由になる筈だ。

故にこの場面は、まず女を縛ってから猿轡をすべきであろう。それとも薫というこの美しい女は、後手にねじ上げ、布巾をチラつかせて猿轡をするぞと意思表示をしただけで、体が燃え、しびれてくるような、わが党の女だったのだろうか。

この場面の猿轡は、「あはや」と叫ぶところを「声立させじと、手拭とって」ほどこした猿轡であるから、女が叫んで口が開いたところをタイミングよく手拭をかます方式にしたか、或は、口の上をつつむ方式で、後頭部へグイとしぼって結んだか、いずれとも、とれる描写である。どちらとも読者の御随意にいうところであろうか。

私は、これは必ずや口にかませる方式でなく、口をつつんだ猿轡であると確信する。というのも、私の説を立証すべき有力なる

証拠が、次に挙げる『天縁奇遇』の中にあるのだ。

『天縁奇遇』

ここに咲華さくはなという絶世の美女がいる。彼女は戦いで良人を討たれ、今また、大きな鷹に幼児をとられて気も転倒。ぼんやり海辺をさまよっている。

そこへ一人の男が現われ、咲華を一そうの船へ連れ去る。船中には、その男の妻とおぼしき女がいて、咲華を見るや、「今日の獲物は美しい事は美しいけれど、年はどうやら二十才たちあまりらしく一寸、古い方だから売っても、あまりいい値にはならないね」などとグチる。男は「いや、売るなんて、とんでもねえ。大事に世話をしてやるんだ」と言いながら咲華の背の辺りを、しきりに撫でる。どうやら男は、咲華にゾッコン惚れこんだらしい。女心で、とっさに見抜いた妻は、「何のゆかりもない女を、そうまでいたわるお前さんの気がしれないわ。こんな女、追かえしちゃって——」と、自ら咲華を引き立てようとする。男は、それを見るやいなや、妻の手をはらいのけ、襟髪つかんで投げつけた。「お前さん。なんてひどい事すんのよ。あいたた。ええ嫉ましいのは、この女だわ」と嫉妬に狂

った妻は、又もや咲華におどろかかす。それに対して男は、

又立上るを復はねのけ、疾く猿轡とさるぐつわに口を

覆ひ、碇の綱もて身を縛め、

妻を転がしたのである。

そして猿轡姿で縛り上げた妻の前で、いろいろ咲華にエッチな事を、やり出す。「妻は見るより気をいらち、唯後手に繋がれし、いかりの色をほのめかせど、夫は更に見向きもせず、いよいよこなたに戯るたはむ」仕儀となるのだが、それは又、別の話。ここでは猿轡に注目しよう。

明らかに「口を覆った」方式である。即ちかませるのではなく、口の上から頤を包んだ型である。これが種彦の愛好する型式である事は、既にみた通りであるが、実はこの場面の挿絵が有難い事にあり、そこにも、はっきりと口、頤を覆った猿轡が、えがかれているのである。画家は五渡亭国貞。挿絵は国貞が画いたので、だからといって別に種彦が「はます」型よりも「つつむ」型の猿轡を好むという証拠にはならないではないか、と反論が出るかもしれないが、ひとり種彦の場合は、そうはいかないのである。

種彦の草双紙が大流行したのは勿論、本文

が面白かった事は当然だが、挿絵画家として国貞の艶麗濃厚な筆を得た事も、錦上花をそえる結果となった。が、そこまでだったら普通の作家と画家の関係で珍しくない。しかし種彦は、挿絵の下絵を一々丁寧に緻密に指図して、かいて与えたのである。これが成功した重要な理由であった。

故に『天縁奇遇』の猿轡の絵は画家国貞が本文を読んで、こうでもあらうかと考えて画いたものでなく、種彦の猿轡とは、かくあるべきものという厳しい下絵を、精神的に、なぞったもので、種彦が画いたといっても過言ではなからう。

では一寸、その挿絵の猿轡を鑑賞しよう。両腕を水平に後ろで組まされ縛られた一人の女が、長い髪を振り乱して、嫉妬のあまりに身もだえているのか、天を仰いでいる。鼻すじの通った鼻の下から口の上、頤と、ぐいと一枚の布でつまれて、髪の下で結ばれている。本格的な猿轡だ。

さて今度は、主として種彦の「はます」型猿轡をみよう。京伝風を踏襲しているのは勿論だが、それよりは少し、写実的となっている。つまりより迫力が感じられるのである。

『阿波之鳴門』

文化四年の作品であるから、『天縁奇遇』（安政七年）よりは古く、山東京伝篇としてあげた諸作品と同じ頃とみていただいても、ほぼ間違いではない。「はます」型の京伝の中にあって、種彦がどんな猿轡を女にやっていたか、興味深い。

さて、弓子という美しい娘が、祖母の水無瀬と共に情人をさがして、さまよっている。二人は淀川の茶店で花をながめて休んでいたが、同じ茶店にいた四十がらみの男が、弓子を見つめつつ涙を流し、この娘は十七才で死んじゃった俺の娘にそっくりだ、などと語りかけ、すっかり弓子や水無瀬を安心させてしまった。初心な女をだますのは、昔も今も同じ手管がおかしい。

そしてこの男は、川につないである舟を指さし、あれは私の舟だが、長柄まで乗せていってあげようと、さそう。俺のヨットへへらないかという現代のプレイボーイと同じ。弓子と水無瀬は、いと飲んで乗りうつった。男も、とび移るとみるや、

水無瀬が衿首かいつかんで、川へざぶと投こみたり。あなやと叫ぶ弓子をとっておさへ、手巾を木丸となし、船へ押しこみて、行方もしらず漕いで行ったのである。

この場合、木丸と書いて「さるぐつわ」と読ませているのは大いに考究に値する。

さるぐつわを木丸と書いたのは、種彦の外にもおり、草双紙で時々見得る表現である。『大言海』をみると、さるぐつわとは「唐書ニ云フ、木丸ナリ、トモ云ヘリ」とある。

思うに古代中国では、木を丸く、山口とき子さんの使用されたピンポン球のようにしてそれを口の中に入れて防声の具としたのであろう。そこから転じて丸い木を口の中に入れなくとも、さるぐつわ一般を木丸と書くようになったのではあるまいか。

そこで弓子は、どのようにされたのか考えると、手拭を、丸い木のように、まるめて口の中に、ねじこまれたか、手拭をかませたか手拭で、口をつつんだかの、いずれかであろう。私は、わざわざ種彦が木丸と書いているところから、前二つ、それも押しこんだ方ではないかと思う。長時間であったならば、口の中に押しこんだ上から、更に手拭でおおうように縛らなければ、吐き出されてしまうが、さつと女をさらう場合は、これで充分、間にあうであらう。いずれ、このエッセイの真実篇で確かめてみる予定である。

新婚愛戯生活日記

杉谷潤 二

里帰りしていた新妻の可奈江が十日振りで帰宅した。食事を終えて夫婦そろってテレビを楽しむひととき。平凡な家庭の、心のどかな土曜日の夕べである。

お菓子を口にはおぼりながら、低級なテレビの漫才をみてヘラヘラ笑っている可奈江の白い豊満な顔を、久しぶりにしげしげとながめてみると、突然、新妻が憎くなってきた。十日も家を空けて亭主を一人きりにしておいて、一体これはどうだろう。

テレビが乱暴に消された。やがて六畳の間に女の「あっ!」という声があがった。私は衝動のまま背後から可奈江に襲いかかった。た。力まかせに可奈江を仰向けに組み敷き、「待ってエ」と悲鳴をあげるのかまわず、その光沢のある艶っぽい鼻頭を右手の親指で

思いつき、グリグリこね上げて豚鼻に変造し果て、「痛い、痛い、痛い」と言って逃れようとするのを許さず、白い鼻の肌とは対照的な、その妖しげな黒い鼻孔を私は舌でペロペロと、なめて味わった。

「このぶざまなお前の畜生面を人様に、とっくりと見て頂くから来い!」と、私は可奈江に鋭く命令し、押入れから米国製の皮の貞操帯をもってきて、新妻の体にガッシリと、はめて締めあげた。こうされてしまうと不思議に、いつも可奈江は従順そのものになり、万事を心得えて、然るべき準備をテキパキと言われなくてもやり始めるのであった。

持ち出された大きな黒いカバン、その中には一ダース以上の赤、ピンク、紺、黒、紫など、色とりどりの腰紐、小さなハサミ、手

鏡、食酢の入ったビン、鳥の羽、日本手拭い数本。そして、例の豚鼻化粧装置がおさめられている……。

家庭着のままで引っ張ってゆき、タクシーをとめて、中へ押し込む。行く先は神戸の、いつものホテル「S」である。クローラーのきいていない車中は暑く、人一倍、汗かきの可奈江はポケットからハンカチを取り出して、しきりに汗をふいている。私は、いきなり、その香水の染み込んだハンカチを奪い取り、可奈江の両腕を背後へ、ねじり上げた。いやがって必死に抵抗するもののかは、「おとなしくせんか!」と叱りつけながら、とうとう無理強いに後手に縛り上げ、両手の自由を奪ってしまった。運転手は、かなり驚いている様子だが、夫婦の痴話喧嘩と見て、わざと

知らぬ素振りをしている。

可奈江は頬を真っ赤に染めて、うつむいている。その可憐な姿を見て私は、さすがに妻に優しい良人としての言葉をかけずにはおれなかった。そっと、妻の耳元に口を寄せて、「勿論、君が好きで好きでたまらないから、こんなことをするんだよ」と言っていて、温かい耳たぶを少し噛んでやる。何を言っても妻は無言のままだ。

じれったくなつて私は、うつむいている可奈江の顔を、あごをつかんで上向かせ、シートに押しつけて、他方の手で又しても激しい鼻責めでグイグイ、グリグリと責め上げれば新妻は、ほとんど切ないまでのあえぎ声を漏らし始めた。ふと、可奈江の肌に手をやれば強い羞恥のせいであろうか、匂やかな女獣のメス香水が、たっぷりとあふれ、皮の貞操帯をベトベトにしていた。

車中、いっそ上半身を素っ裸にむいてやろうか、と何度も思ったが、少々運転手に気がとがめ、そのままの姿に妻を放置して、今度大きな声で責めつけることにした。

「どんな恥かしい責め折檻を良人から受けたのか。妻のお前の口から言え」と言っていて、両手指にて可奈江の口唇を大きく上下にめく

り開いて、骸骨の口のようにしながら執拗に責めつけたが、とうとう妻は沈黙を通したまま、遂に車はホテル「S」に到着した。この間、小一時間。さすがに濃艶な夫婦のざれごとが照れくさく、妻のいましめを真っ先にとき、それから料金を支払い、逃げるようにしてホテル内に飛び込んだ。

「部屋は最上等の日本間を」と注文をつけたのは外でもない。日本間には可奈江のための恰好の柱があるからである。部屋に入るや否や、可奈江に言っていた。

「今日はこのホテルにオレの友達がアベックで泊まっているんだ。お前は二人のために、さらしものになつてもらふよ。お前が浅ましい姿に仕上げられてやってくるのを二人は今か今かと待っているんだ」

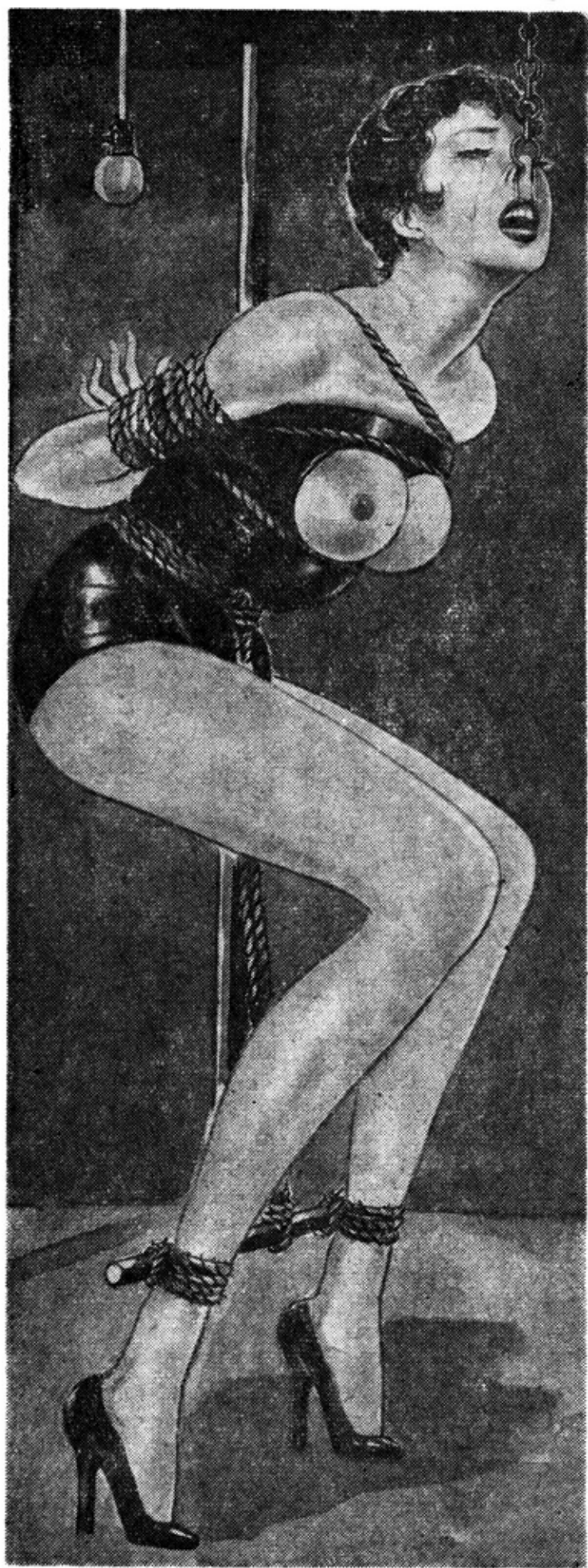
この、口から出まかせの言葉を聞き、妻の顔色は一変した。可奈江は、かつて経験したことのない力をふりしぼって暴れ出し、私の手をふりほどき、狭い部屋中を逃げ回った。しかし、弱い女の哀しさ。とうとう浴室で捕えられ、ねじ伏せられ、屈服させられてしまった。

汗にまみれ、女の匂いを濃厚に漂わせて、フーフーいっている可奈江をまず、きれいに

全裸にむきあげることにした。皮の貞操帯もはずしてやり、私は十日振りで、新鮮な妻の豊かな部分におめにかかった。生まれたままの姿にすると、間髪を入れずカバンの中から取り出した色とりどりの腰紐を用い、白い柔らかな両腕を、ぎりぎりまで後手高くねじり上げ、首縄高手小手に容赦なく、雁字搦目に緊縛していった。真っ白い、上出来の大根のように、ふくよかな、その二の腕には、すさまじくも赤い紐が埋没していた。可奈江が、「ウーン、ウーン、ウウン」と、うめき声をあげているのを、構わず、足で蹴り倒した。

次に、可奈江の豊満な柔らかい腹に、黒い紐を思い切り締めあげ、臍のあたりで結び止め、その黒い紐には要所三カ所に鈴のついた紫色の鈴紐を、つぎ足し、そして真一文字、下方へおろし、可奈江の肌へズブリとばかりに食い込ませ、更に股間から後方へ通してからは力まかせに締め上げ、後手紐にしっかりと連結する。可奈江は、ますます甘く高い、うめき声をもらし、「もう、許して頂戴。許して、お願い」と言いつつ、横になった体をもだえ、くねり、よじらせている。

何というこれは華麗な情景であろうか。新妻の真っ白く豊満な肉体は赤、ピンク、黒、



紫など、色どり豊かな腰紐で厳しくも縛せられて、ほんのりと桃色に色づき、かすかに蠢いている。雌荷物として文句なしに仕上げられ、芋俵化した緊縛全裸女体である。私の愛らしい可奈江は、あたり一面に何かの刺激的な雌花の匂いの如きものをムンムン撒き散らし、真正正銘の哀れないけにえのメス豚として料理されるべく、眼前に横たわっているのだ。それにしても、何て匂うんだろう。

「立て、立て！」と私は我に返って、可奈江の巨大な白桃のような、その臀部を足で蹴って、無理やり立ち上がらせ、歩きにくい姿の

まま引きずるようにして罪人並みに部屋中を引き回し、床の間に引き据える。そこで日本女性らしく、しとやかに正座させ、柱を背にもたせ、がっしりと何本もの腰紐で無茶苦茶に縛りつける。正座した両の足膝も厳重に縛し、全く身動き出来ないまでにした。頭にも紐を巻きつけ、ギリギリと柱に固定する。

さて、いよいよ、これから、かの待望の美鼻料理にかかるのである。可奈江は今や、全く体の自由がきかぬ。緊縛の余りの激しさ、酷さのため、うっすらと目には涙さえ浮かべている。その様子を楽しみながら、私は両手

の指に食酢をビッシヨリとつけ、酢だらけの指で可奈江の鼻にさわる。その艶やかな白い肌の鼻全面に、そして鼻孔内も忘れず、十指にて酢を、ぞんぶんにぬりたくり、もみあげもみさげ、こねまわす。可奈江の柔和で女性っぽい暖かみを持つ、気品のある白い鼻は、かくして、めでたくもおいしそうな雌鼻鯨にこしらえ上げられ、桃色に色っぽく色づけされて匂っている。

「お前の卑猥な桃色雌鼻鯨を、鑑賞させてやる」と言っ、全身の映る鏡を可奈江の眼前にもってきて置き据える。私は可奈江に目をつぶることを決して許可しない。

最初に手の親指で可奈江の鼻頭を思いきり鋭く上方へ突き上げ、ものの美事な豚鼻にして、そのみじめな獣づらを、とっくり鏡で拝ませてやる。更に、むんむんする色気を発散してやまぬその雌鼻鯨を、左右へ強引にこ

ね曲げ、こねつぶし、つまみつぶし、徹底的にめくり上げて、情ないメス豚に変貌させ、その伸びきったメス鼻孔に私のものをおしあてて雄匂を十分に吸収させてやった。

それから又しても酔を雌鼻にぬりたくって酔漬けにし、メスの性臭を濃厚に漂わせているその鼻に、今度はしっかりと豚鼻化装置をほどこし、当分の間、完璧に可奈江を豚化させて翳ってやるのだ。まず、額にベルトのはちまきをしめ、次に、額中央から下へぶらさがる、もう一つのゴムベルトに付いた、先のとがっていない鉤形の二つの金具を強く下へ引っ張って、可奈江の二つの鼻孔に挿入して離せば、たちまち、新妻の気品高い優雅な美鼻は、浅ましくも物すごく、めくれ上がり、丁度お正月の獅子舞のお獅子の如き、見事に醜惡なシッ鼻畜生に変身してしまった。この畜生相に墮落した己れの哀れな姿を可奈江に鏡で拝ませながら、私は、「メス豚、メス鯨、メスお獅子。おシシの、おシシの可奈江おシシの可奈江」と言っただけで、鳥の羽で全身をくすぐり、畜生吠えをあげるよう強制し、遂に新妻が喜泣して全身を海老の如く赤らめ、泣いて許しを哀願し、泣き濡れてメス畜生奴隷の誓いをするまで続けた。

次に、後手高手小手、強烈首縄縛りと豚鼻化装置は、そのままにして、肌にめり込んで可奈江を悩ませていた股間紐を鈴音高く、ようやくにして解き放ち、正座した足の紐をといて、今度はその両足を大きく開かせて、上方へ万才の形でもち上げて柱に固定する。可奈江の口には日本手拭い三本で嚴重、苛酷な猿轡を噛ませる。やはり、可憐な可奈江は、又しても全く身動きならず、声も洩れせず、そして浅ましい畜相のままである。可奈江は可哀そうに、顔を紐でガッシリと柱にゆわえて固定され、うなだれることもならず、猿轡と豚鼻化装置とで極限にまで歪曲されたメス畜生面をさらし、かつ又、完全に菊花もヴィナスちゃんも、むきさらけ出した恥辱の極みの姿であった。

こうしておいて、ホテルの女中にタバコをもってくるよう、電話をかけた。私は待つ間可奈江の長楕円形に伸び切った鼻孔内に、鼻呼吸のたびに密集した海草のようにゆらいでいる妖しげな黒い生き物を小バサミでチョキチョキと刈り込んだ。嘆願のいとしい濡れた目で可奈江は私を、みつめている。

ノックの音が聞えた。可奈江は最後の抵抗と、懸命に全身でもがき出し、紐を柱にこす

らせてギシギシいわせた。勿論、全然、全てのいましめは、ゆるむ様子もない。むしろ、もがいたため、一層、開股が、はなはだしくなり、世にも浅ましく、むごたらしい可奈江の地獄相となってしまう。新妻は低劣な畜相のまま、厳しい幾重もの日本手拭い猿轡で声を殺されて静かに、すすり泣いている。

女中が入ってきた。この光景をみて、四十才位の小ぶりのその女中は一瞬、「まあ」と声をあげ、立ち尽してしまった。それで私も相当、困惑してしまっただが、つとめて平静をよそおって、気楽な声で、

「夫婦で、いじめ遊びをして楽しんでるんですよ。どうです、女房の奴、面白い恰好にされているでしょう。こいつ、泣いて喜びやがるんですよ。女は皆、マゾですね。まあ、よかったら少々、遊んでいって下さい。このメスブタは他人に見られてると一層、興奮するんです」と言うと、女中はやがて、しげしげと興味深く、ながめ出し、タバコの代金を受け取っても一向に立ち去ろうともしない。「史上最低の、ぶざまな姿でしょう。こんな恥かしい恰好にされてこの女、鼻息荒くして喜んで、まだ色気を出そうとしているんですよ。家へ帰ったら、これでも上品な若奥様で

結構、大きな顔をしているんです。この際、徹底的に懲らしめて、この高慢の鼻を、へしおってやろうという訳です」と言いながら、私が可奈江の片方の大きな鼻孔に人差指を突っ込んでユサユサかき回したり、アヌスに小指を奥深くさし込んで後、抜いてから、その匂いをかいでみたりしているのを見て、その女中は、とうとう、くすぐったげにクスクス笑い出し、たまらなくなって自分の股間を手で押さえるまでになった。

それで、こちらも増々興に乗り、その年増の女中にも鳥の羽をもたせて、二人で共同して可奈江の全身を、くすぐり始めた。女中はさすがに女の急所を、よく知っており、こちら顔負けの執拗な羞恥責めと、いたぶりを新妻に加え続け、貞淑な妻、可奈江は遂に悦楽の号泣と共に屈服、降参し、被虐の雌花として一層、美しく開花することとなった。

ああ、私の甘く可愛い、いとおいしい新鮮なる新妻可奈江は、これまで頑として拒んでいた、己が美鼻の鼻中隔を穿孔され、純金の鼻輪を装着されることを、心まばゆくも私に固く承諾し、更に祈願し、又、そのきめ細かな白い肌の、艶々しい鼻頭部分に、「畜生」という入墨を、ほりこむことを、雌畜生、永

久奴隷として、良人たる私に誓約した。あげくには、よがり声のような、甘い甘いメスそのものの、悦虐のうめきと吠え声を出し、責めの果てには、とうとう自家製、女獣香水ばかりか、小水を漏らして濡れそぼち、失神してしまったのであった。

塚本鉄三様。近日、私は必ず、この妻の可奈江を持参し、献上致します故、今しばらく御待機下さい。御願致します。

我が妻ながら、この艶鼻には頑丈な純金の鼻輪が、ぶらさがり、人の誇りを現わすという鼻頭部には「畜生」の入墨がほられ、全裸の豊満雌肉は極彩色の数々の腰紐で、むごたらしく緊縛されて芋俵化され、大きなトランクに押し込まれて運ばれてゆきます。行く先は、今度はきつと、塚本様の御指定下さる一流ホテルなんです。どうか、愛妻可奈江の全身、鼻、顔面すべてを、アヌスを、ヴィナスを、足の裏を、臍を、内股を、すべて責めて責めて責め抜いてやって下さい。雌畜生、永久奴隷として、この世に生を享けたことの恥かしくも喜悅この上なき雌花のうれしさ、有難さを骨身に刻んで、教えてやって下さい。よろしければ、豚鼻化装置も持参致します。

酔も持参致します。皮製猿轡も持って参ります。雁字搦目の可奈江芋俵を来る日には存分に二人して会食致しますよう。

ところで、一つ要望があります。確か昭和三十四、五年の二、三月頃のKK誌のカラーの扉絵に、四馬孝氏による「美鼻凌辱」と題する絵がありましたね。その絵は、荒くれ男に仰臥の姿勢で組み敷かれた美女が、男の親指で物の美事な鼻責めを享受し、無残なタテ長の二つの鼻孔をさらしているほぼ正面図が描かれていました。SM画史上、空前の素晴らしき傑作と私は記憶しており、又、かねてから愛妻の可奈江に見せてやりたいと思っており、この際、是非々々あの絵を、リヴァイヴアル願いたいのですが、如何なものでしょうか。それがかなわないと万一するなら、かように前田嬢、高村嬢を仰臥鼻責めして、長き楕円鼻孔をさらすの図を御供覧下さい。(鼻孔開孔器を耳鼻科医よろしく前田嬢の鼻孔にあてがった位では一向に面白くないのデス)右、差し出がましく厚顔ながら、どうか伏して御願ひ申し上げます。

敬具。

杉谷潤二

連載・時代S小説 (第四十回)

紫

蘭

の

門

風 流 極 道 軒

丹可磨而不可奪其色
 蘭可燐而不可滅其香
 雅子は磨していよいよその色を加え
 貴子は燐きてその香りなお千載に滅せず



ギャマンの水槽からひきあげられ、床柱に黒馬の手で立ち縛りにされているお景の正面に坐りこんだ水野出羽は、満足そうに女中頭お松の運んできた料理に箸をつけ盃を傾けていた。

「誰の詩でござりまするか、ご老中さま」

「王安石よ。わかるかの」

王安石とは八百年ほど前の中国は北宋の宰相であった。

「ハッハッハ。万緑ではのうて、万黒にいたしませぬと風雅に欠けまするな。して紅一点とは、このことでござりましょうかの」

「いかにも……」

鯛のさしみをつまみあげた水野の箸が、そのままスウーッと伸びて、しっかりと閉ざされている右太腿のあたりを狙った。

「黒馬さんや、も少し開かせぬと、肝心のもが見えませぬ」

ニヤリと笑った黒馬が、右太腿のつけねのほくろのあたりに手をかけて股を割ろうとするのを、

「どうせ開かせるのなら、ここがよい」

水野の指したのは、天井から垂れている縄であった。

この離れにはギャマンの水槽だけではなく部屋のあるこちらに数多くの仕掛けがあり

料理はタタキ

「万緑叢中紅一点……か。何時、眺めても、ここは男心を、ときめかすものよ」

いま指さされた丸い輪のついた縄も、そのひとつであつたが、多分それは、女の手、または足を吊りさげるためのものであろう。

「片足吊りでござりまするな。ここをみるには、もってこいの姿になりますよう」

元禄屋も盃を干しながら言った。

「やい、お景！」

黒馬に、がっちり右足首を掴まれ、

「御老中さまの仰せだ、神妙にしな」

と言われて、お景は、必死で抵抗した。

いくら捕えられ翻られつづけているとはいえ、八重垣流小太刀をとっては免許皆伝をうけた身であつた。その身が、為すところもなく、金魚責めにされたり、このように玩具のように、とり扱われることへの精一杯の抗議であり、思わず、

「お、お前さんなどに、ど、どうして、この妾が……」と、つい押えに押えていた憎悪が唇から、とび出してしまった。

「なんだって！ お前さんなどに、だど！」

三日月型のつき出たあごを、しゃくりあげた黒馬は、むき出しにされて、どうしようもないお景の下腹を左手で掴みあげて、「アレッ！」と腰をくねらせる間に、やすやすと掴んだ右足首を、たかだかと持ちあげ、

「ナマイキな口をきくんじゃあねえぜ。この俺さまが、これまで何回、おめえを骨の髄まで搾りあげたか、よく考えてみることだ」

事実――

この黒馬を始め羅卒の鞭兵衛一家には、麻布の別邸で、昨日といわず、いまもなお、責め翻られている、お景であつた。

抵抗も所詮はむなしく、丸い輪のなかに右足首を、とおされてしまったお景は、ただジーンと屈辱に耐えるほかはなかった。

「フッフッフ、紅一点か。万黒のなかに紅一点。さあて、そこへ、これをお見舞い申すとするか」

白い箸が、鯛のさしみの一片を載せて、ツツウと、すすんだ。

「イ、イヤ！ イヤ！」

烈帛の気合いにも似た叫びであつたが、床

前号まで――「剃毛の儀式」は、とど

こおりなく終り、あとは深川・新橋のキレイどころをまじえての乱痴騒ぎとなつたとき、元禄屋は奥座敷へと水野出羽を案内する。そこには金魚の泳いでいるギヤマンの水槽があり、小紫のお景がひきすえられていた。金魚責めにされるお景――。

柱に立ち縛りにされて右足を、たかだかと吊られ、左脚だけで裸身を支えている身では、どんな女でも避けようがない。

まして先程から、おぞましい金魚責めに処せられつづけてきた体であれば、心とはうらはらに、何かを待ちのぞんでいたとしても、やむをえぬことといえよう。

「名器・春雨か。のう、元禄屋」

たっぷりと目的を果しつつある箸を、ゆっくりと右、左へと、うごかしながら水野は、「春雨には、鯛のつくりが、よく似合う――どうじゃな。余も風流であろうが」

「いかにも、ご立派にござりまする」

水野出羽守忠成――領田下野ほどの人材ではなかったが、そこは老中筆頭、ガツガツしていないところが取得といえた。

「醍醐液と申してのう、妙味じゃぞ」

したたか揺りうごかして、取り出した鯛の一片を口中に、ほうりこんで、四角い顔を、

いっそう角ばらせながら味わっている水野に

「太閤の主人もそのように申しております」

「深川のか」

「はい。大口屋暁雨めが始まりましたし、やぶのこととござりまする」

「存じておるわ。さし、みは処女の味、煮つけ

は大年増。若い女——それも新妻の味を求め
てのし・や・ぶ・し・や・ぶと、申すのであろうが……
ハッハッハッ

二箸目を無造作に、おしこみながら、

「余は、人真似はイヤじゃ。こうして醍醐液
に浸して喰う料理をたたきと名付けたぞ」

「土佐のあの鯉のタタキでござりまするか」

軽く会釈した元禄屋も、さしみの一片を挟
むと、お景の股間に投じた。

「タタキはまず火であぶると申しまするが」

「バカ」

三箸目を入れようとして、羞恥と苦痛に歪
む、お景の顔を、ふり仰ぎ、

「恥かしがることはない。余は、そちが好き
なのじゃ。スキな女でのうて誰が、このよう
にたわけた真似をしようぞ」

「な、なんで……このような、ことをして、

ア、アッ。スキもキライも……あ、あるもの
かえ。ア、アッ！」

「フッフッフ、イキのよい女子じゃ。だか
らこそタタキにも味がでる。で、元禄屋。火

であぶるなどと申したが、それは湯をとおす
のと同じく下賤の喰いかた。まことのタタキ
は名の如く……」

「名の如くタタク……叩くのでございませう

う。ほれ、こうして」

元禄屋は、箸を少し手もとに引くと、丁度
……のふちのところにあてがって、

「黒馬さんや。鼻をふさいでくだされや」

何を考えておられるのだろうと思ったもの
の、言われたとおりの黒馬が、二本の指を、お
景の鼻の穴に、ひと思いに突っこんだ。

「フッフッフ、水野さま。よく御覧じま
せ。ほれ、あのよう」

見上げればすぐそこに開かれていたそれが
微妙に息づいているのに気づく水野だった。

「敲き（たたき）にも、いろいろあるが、こ
のような『締め敲き』が、あろうとはのう。

元禄屋、参った、参った！」

「何条もって、ほれ、もう少し……黒馬さん
や、唇も、いっしょに塞いでくだされ！」

「承知、大旦那！」

と黒馬が、鼻孔に突っこんだ指は、そのま
まに、大きな掌で口を覆ったものだから、

——ム、ムウ、ムウ……

奇妙な呻きを残してお景の息が止まった。

「ほれ、水野さま、ここぞござります。上の
唇を閉ざされますと、どうしても下の唇が烈
しく呼吸をいたすものでございまして」

事実であつた——。

はり裂けるほど開かれている太股のあわい
で、名器・春雨が、まえにもまして烈しい律
動を、くり返し始めたではないか。

「一、二……一、二……」

黒馬の声にに応じて乳房が波打ち、^{きぬた}砧を打つ
ように蠢く。

いまの時間にして二分か、三分間ののち、
「よし、離せ！」

元禄屋が叫ぶと、動きが急に緩慢になり、
唇が荒々しく息を吸い吐く。その瞬間、すら
り——と引き出した鯛の切身の一片を掛燭に
かざした元禄屋が、

「これが、まことのタタキにて候ぞ」

と、珍しく芝居がかった口調で言ったとこ
ろをみると、この料理、めったには行わない
ものらしい。

考えてみると、こればかりは食べたくなっ
ても、すぐに喰えるというものではない。尋
常のタタキであれば、いつでも板前に、いい
つけることもできようが、こればかりは、並
の料理人では、いけない。

「要は、女料理人の『器』ひとつでござりま
するが、さすがは小紫のお景。よい場合のよ
うでござりまする。さあ、どうぞ」

箸をさし出されて水野は、口をあめぐりと

あけて、それを受けた。

「美味でござりましょうが、のう」

と、次の一片を挟みとって、

「黒馬さんや、さあ、よいかな。塞いでくだされ！」

黒馬の手が再び、唇にかかったが、

「イ、イヤ！ イヤッ！ な、なにを……」

叫びは途中でできた。が、すぐ、なまぐさい音がして、

「水野さま。いかがで」

「旨い！ これは旨い。江戸随一の板前としてこれほどのタタキは、とてもつくれぬ。もっと所望じゃ」

目のまえで、しきりに上下しているのを涎を垂らさんばかりにして眺める水野に、

「女の口というものは面白いものでございまして……一、二……それ、離しなされ」

二片目のタタキが取り出され、

「鬼！ ち、ちく生！」

お景の臉から、一筋の涙が、あふれでた。

「フッフッフ。女を悦ばせ、男が醍醐液を樂しむのが鬼かのう。それ、黒馬さん」

三たび、四たびと唇が塞がれ、そのたびにお景の裸身が、新鮮な桜鯛のように躍る。

「女の口というものは微妙なものでございま

して……」

五片目を自らの口に抛りこんだ元禄屋は、

「女の二つの唇、ひとつは隠れ、ひとつは顯

われておりますが、隠れているほうの唇がどのようなものかは、ほぼ想像がつくと申します」

何か言おうとして水野は、ふと、

「この女、菊の花の香りが、いたすの」

「やっと気がつかれましたか。いかにも責めれば責めるほど嵯峨菊の匂いを、ただよわせ始めます。ときに……」

黒馬が口を塞ぐのを見てとり、サッと箸を繰り出す元禄屋に、

「締まり具合というのは唇の端をみれば、わかるというのであろうが。口を閉ざしたときの反り加減で、想像できると……」

「いえ、いえ。私の申しあげるのは、心の締まりに、ござりまする」

「心の……」

嵯峨菊の匂いのする一片を頬ばって不審そうに水野は頭をかしげた。

「さよう、女の心の問題でござりまする。下

の唇を大切にすることは上の唇を大事にするもの。下の唇を守ろうとせぬ女は、えてして上の唇をも、ぞんざいに扱う——つまり女の

貞操心を知ることが出来まする」

「唇をみただけで心がわかるか」

「見ただけでは、わかりませぬ。女の所作でござりまする」

「いかような所作ぞ」

「女が笑うときでござりまする、笑うとき」

庭をへだてた主屋のほうから、ひととき高く響いてきた喧騒は、数十人の男たちに囲まれている貴子が、なにか度外れの勵られかたを受けたせいであろうか。が、それに意をとめようともせず元禄屋は、

「女が笑うとき口を覆う手の動きでわかります。貞操堅固な女ほど口全体を強くかくしたがるものでございまして」

「フーム。すると手で口をかくことなく笑う女は誰とでも寝ると申すか」

「いかにも。その証拠に結婚前は楚々として口を手でおおって笑っていた女が嫁入りして二、三カ月もたつうちに主人のまえでケラケラと大口をあけて笑いころげます。また女

同志の場合も口をふさいだりは、いたしませぬ、警戒心を解いている証し」

「さすれば女が口をふさがなくなったら男に警戒心を持っていない。つまりは余のものになることを望んでいるというのか」

イメージギャラリー 『今宵の趣向』 岡 たかし



「望んでいるのではうて、すでに男のものになってしまったということでございます」
ふたたび、どよめきが伝わってきたが、そのなかに、あきらかに貴子のものと思われる悲鳴を聞きとった水野は、
「貴子姫は、どうじゃな。いまだに口をふさいで笑うと申すか」

「ハッハッハ。いかにも、いかにも。最近をよく笑うようになりました」
「そちの調教が奏効したと自慢したいのであるが」
水野の箸が、さらに一片の鯛肉を挟み、
「お景は、どうじゃな」
「はて……」

箸の尖端の行方を見守り、それが見えなくなるのを確かめながら元禄屋は、

「まだ私どもの前では笑ったことがござりませぬ。もし、笑うとしても、いつもこのように両手を背後で縛られておりますゆえ」

なまぐさい音の中で、お景が、しきりに腰をくねらせた。

「ときに、元禄屋」

十分に「締め敲き」にされ、体温であたためられた鯛の肉をポイツと口にほうりこんだ水野は、

「三段締めとか四段締めとか申すが、この女は、いったい、何段くらいで締めあげてくるのじゃの」

「はて、何段でござりましょう」

元禄屋がニヤニヤ笑いながら手をのばして、
「かもしかのように発達したお景の左足を撫でさすり、「黒馬さんや」と誘いをかけた。」

「さあて……」

と吊りあげられている右足の指の股をもてあそんでいた黒馬も小首をかしげたが、

「締めるというよりも蛇のようにくねると申しあげたほうが、よろしゅうございましょうか。全体にぴったりと吸いつきまして、万遍なくうねりのたうつとでも申しましょうか」

「伸縮自在と申すのじゃな」

「さようで」

自分のものでもないのに自慢そうに答えたのも黒馬が、お景を何度となく抱いているせいであった。男というものは抱いた女を自分のものと思ひこむ習慣があるらしい。

「さずが『春雨』と名づけられた名器よ。さもありなむ」

ふやけたというのであろうか、湯をとおしたとでもいうのであろうか。うっすらと白くなつては吐き出されてくる鯛の肉を、つぎつぎと水野は口へと運んでいった。やがて、

「次は、この『遊動円木責め』にかけようと存じまするが」

奥歯をかみしめて一言も癸せず屈辱に耐えているお景を見上げて元禄屋がいったとき、隣の部屋では登鯉尺時計が九点鐘した。

肉 ず れ の 音

九点鐘——すなわち夜も九つを過ぎたが主屋での喧騒は、いっこうに止みそうにない。

「むこうでも盛大にやっておると見ゆる」

チラリと言いはしたものの水野、むこうのことより眼前に展開された光景のほうに異様

な興奮を隠しきれないでいた。

遊動円木——と元禄屋は言ったが、黒馬が部屋の中につくりあげたそれは、遊園地などでみかけるものよりも、ひとまわりも、ふたまわりも小さい。円木の直径は約五寸。長さは一丈、そう一間半はあるうか。木の肌もあらわな白木のそれが、高さ二尺のところ、ぶらぶらりと前後に揺れていた。

その円木の片端に長さ一尺、太さ一寸から二寸くらいの大きな筆の穂先をとりつけて、「穴沢流女鬨りのひとつでございます。これをほれこのように規則正しく遊動させます」黒馬が円木のなかほどの縄をひくと天井の滑車が軋み、大筆が前へ後へと遊動する。

——ム、ムウ……。

噛みしめた歯並みのあいだから、お景は、われ知らず呻きを洩らした。

大筆のさきで、お景は鞆、つまりブランコに乗っていた。

いや、左右の手は、それぞれ垂れている綱に縛りつけられ、下半身は「M」の字型に開かれて乗せられていた。

このような姿——即ち上半身は「十」の字に、下半身は「M」の字にされて、一糸まとわぬ裸身をブランコに乗せられているだけで

女にとっては、このうえない恥かしさであるうに、遊動円木の動きにつれて、まだ使っていない糊のよくきいた大筆の穂尖が、ピク、ピクツと下腹を、つつくのであった。

「ム、ムツ……」

柔らかい槍——と形容したらよいであろうか。ともかく鋭くときすまされた穂尖が、秘苑の一部に二打、三打と、されていく。

「どうかえ、お景さん」

ブランコの綱を手に元禄屋が中腰で羞恥に歪む顔を、のぞきこみ、

「こちらからも進んでみますか。フッフッ、水野さま、では」

激しく首を左右に振ってお景はイヤイヤをしたが、水野と二人で「そうれ！」と掛け声もろとも綱を振られては、どうしようもなく高さ二尺の空間で裸身が前後に揺れ始めた。

「黒馬さんや。調子を合わせないと、ほれ、ほれ、外れてしまうではないかの」

「はい……チィッ、また外れやがった」

裸身がすすむとき円木も前へ、裸身が後退すれば円木も後へといくのが理想的なのだがなかなか、ことは、うまく運ばなかった。

その一見、ムダだと思われる打撃の間に、大筆の尖端が次第に、ささら立ってくる。

ささら立つ、つまり濡れることによって糊がとけ、尖端が割れてきたのである。

「筆おろし——というやつですね。大旦那」

「フッフッフ。硯に申し分はない」

「筆ですよ。これを御覧なせえ。牡馬の毛を集めて束ねた、女哭かせにやあ、もってこいのしろものでさあ」

「あとは墨かな、黒馬」

老中筆頭から直接声をかけられて始めのうち、しゃちこばっていた黒馬であったが、「ヘッヘッヘッ、白い墨でござんしよう。框かやの木の、樹液のような、ねっとりした白い墨……滑りが、よくなりますぜ」

いつしか、ふだんの口調になっていた。

フワア、フワアという、あるかなきかの音であったものが、男三人の呼吸が合ってくるにつれて、なまめいた響きに、かわってきた。

女が、きものを脱ぐときの音を「衣ずれの音」というのなら、これはさしずめ「肉ずれの響き」とでも、形容すればよいのであろうか。もしもテープに録音することができたら斯道に達した紳士淑女に随喜の涙をしばらくせることうけあいの、それはそれは、なまぐさくも妖しい調べであった。

その調べにまじって、地獄の唇から洩れてくるような声は、お景の呻きであった。

——せめて、猿ぐつわでもされておれば！

齒の根をときにガチガチと鳴らせるほかは唇を裂けよと噛みしめているはずなのに、どうにもならず、ついあげてしまう呻きにお景は、しきりに我が身を恥じるのであった。

どうしたのよ。なぜ、こ、こんなに恥かしい呻きをあげるのよ、お景！

——ギシ、ギシ……

滑車が軋んで、たまらずお景の唇から金切り声が、ほとばしった。

「もっと哭け、哭け。お景！ もっと、いい音をあげて囀さえずってみな！」

黒馬が円木の中ほどで綱を、いっそう大きく引いた。

「ヒ、ヒヤアア……」

黒い筆の穂は、すでに半分以上も、ささくれ立って秘苑全体を、おおっていた。

律動的な攻撃がくり返されると、お景の軀全体が次第に柔らかく、ときほぐされてくるのも止むを得ないことであろう。

「旦那さま。わたしにも……」

突然、奇妙な声をあげたのは、酒肴を運んできて、そのまま部屋の隅に棒立ちになって

いた女中頭のお松であった。

女相撲取りのような巨体をくねらせ、お景の背後に迫ると、

「た、たまりませねえだ。こ、こんなところをみせつけるなんて旦那さまも悪いお方だ」

「スキなのだね、お松さんも」

「スキであろうがなからうが、これで興奮しねえ女はありますめえ」

紅のたすきを締めなおしたお松は、水野に向って丁寧な頭をさげると、

「女の気持は女でなくちゃあ、わかりません。こげにヤミクモにつくよりも……」

早くもブランコの台板から、はみ出している双臀の凹みに手を入れて、お景に齒がみさせたとみると、

「ほれ、こげにして下から……ホッホッホッホッ」

口に手をあてるところか握り飯の二つや三つは入りそうな大口をあげて笑いこぼし、

「お景さんとか言ったねえ。ほら、こ、これでどうだい。これ、これだろう、お前の触ってもらいたいところは」

「ア、アッ！ ア、アッ！」

「図星だね。やっぱり女でなくちゃあ……。ほれ、これでは、どうだい」

ゴツゴツした男のような指で、どこをまさぐられているのであろう。お景の顔から血の気が失せ、一瞬、裸身がピンと硬直した。

「ム、ムウ。ヤ、ヤメ、ヤメるのよう。やめてちょうだい！」

「止められないねえ。お前さんを見ているうちに、その高慢ちきな鼻柱を、たたき折ってやりたくなったのさ。なんだい、その、もったいぶった顔は。ホッホッホ、女じゃあないのかい。ね、女だろう。楽しかったら大声あげて喚くのが、お殿さまに対する礼儀というものだろうじゃあないの」

「イヤ、イヤ！ ア、アウ……」

「なにが、アウ、さ。ほら、ほら」

紅壺で踊る小人たちのように、お松の指々が跳ねくねるにつれて、お景の鼻孔がひらきM字の下半身の両端で足の指がキュウツと外へ曲がり、内側にかがんだ。

「女でなくちゃあならねえか。フッフッフ、お松さん、なかなかやるじゃあねえか」

「ホッホッホッホッ」

ひととき高笑いしたお松は、あつけにとられたように眺めている水野に、

「お殿さま。黙って突っ立ってねえで、乳房でも揉んでやらねえかよう」

これがここ以外の場所の発言であればお松の首は確実に胴体から離れていたであろう。だが、ここには筆頭老中も女中頭もやくざもおらず、ただ男と女だけがいた。

「こうするのか」

水野の手が乳首にのびる。

「初手から、そこじゃあダメだ。まずは、ゆつくりと乳房を下から上へと揉みあげる」

「こ、こうだな」

女にかけては大名のなかでも五本の指に入る経験をつんでいるはずの水野であったが、お松の醇朴そのものの言動に、ついけおされてしまい「こうだったな、お松殿」

「お松殿……だって。こ、こっ恥かしい！」

お景という同性の女を責めても恥かしがらなかったのに、水野から「殿」とよばれて金太郎のような顔をあらためたところ、いかにも田舎者丸出しであったが、そこを見込まれたの天下の大富豪・元禄屋の女中頭なのだ。

「旦那さまも、早う左の乳房を！」

「おう、そうであったの」

「女は一人の男では満足しねえといっているのは、いつも旦那のほうじゃろ」

「まいった、まいった、お松殿」

水野の口調を真似て戯れてみせた。

三人の男が、いかに戯れても、そのいたぶりは止めはしない。

お松がその部分を左右にひらききった時、「行くぜ、お景！」

黒馬の綱が大きく引かれて、ささら立った黒い筆は、その姿のなかばを溶けてませていた。

「ア、ウ、ウ……」

上体をのけぞらせたお景の唇から断続してほとばしる悲鳴に、

「ホッホッホッホッ。どうだい、これで女ってことが、わかっただろう」

お松は、やっと紅壺から指をはなしたが、

「もっともっと、さあ、黒馬さん、一、二、三！ 一、二、三！ そして、もう一回」

お松にあわせて黒馬が遊動円木を律動的に前後させていき、

「一、二……三！」

と九回目を終えたとき、お景はもう恥も外聞も忘れたように号泣し始めた。

「お松さんや、ご苦労さん。あとはもうこちらでやるから、お座敷へお行き」

「お座敷って？ アレ、旦那さま。あの、あんなに大勢のお客さまのなかへ」

「さよう。素っ裸になって行きなされ。小染

やお仙を始め、女どもは、みな裸になって楽しんでゐるはずじゃ」

「この、このわたしめが……ほ、ほんとに、お客さまのなかへ、スッパダカで、とびこんで行っても、いいづらか」

早くも、たすきを外し、黄八丈の帯を、とかんばかりのお松に、

「いいとも、いいとも。随分と可愛がってもらいなされ」

「こ……こっ恥かしい！」
大声をあげたもののお松、もう矢もたてもたまらなくなったらしく、

「ほ、ほんとに、いい……ずら！」
またたくまに、きものを脱ぎ、長襦袢も、とりさった。

女相撲取り、そっくりであった。が、顔はまんざらでもない。

真紅の湯文字、ひとつになつて、

「旦那さま、ありがとうさんで！」

とび出して行く後姿を見送った水野は、

「肥えてゐる女も捨て難いのう」

「さようでございます。あちらには肥田さまや笠倉屋などがおりますゆえ、たつぷりと可愛がってもらふことでしょう」

ニヤツと笑う元禄屋に、

「ときに貴子姫のことは気にならぬかの」
「意地の悪いお訊ねでござりまするな、ハッハッハッハッ」

破顔一笑して、

「昭吉と和吉がおりまする。何条もって案じましようや、さあ、こちらはこちらで」

ブランコの上で、ぐったりとなつてゐる貴子を見おろした元禄屋は、

「黒馬さんや、雅子連れ出してきなされ。」

お景さんと、どちらがどうなるか、よい勝負になろうよ」

庭の樅の木の下枝であらうか——しきりに夜鶯が哭いていた。

穴 沢 流 ・ 双 つ 臼

淫器・春嵐筒で責められたのは、つい三日前のことであつた。

いま、黒馬の愛縄・黒縄で菱縄縛りにされて座敷牢から連れ出されてきた久我雅子にはあの夜の狂乱振り、しのぶすがもない。

いきな深川崩しに結いあげた鬘も重そうに、京紫の湯文字に下肢をくるんで絶え入りそうな風情であつた。

やはり、育ちが違うと元禄屋は思う。貴子

は、もちろんのことだが、この雅子も、さすがは民部大録従三位久我親元郷の息女ほどのことはある。江戸の女たちが束になつても、かなわぬ気品といおうが、優雅さといおうか、言うにいえぬ香りが躰全体から、楚々として歩く素足の指々から、にじみ出ているように思う。

「いかがする所存じゃの、元禄屋」

水野が急に居ずまいを正したのも、雅子のもつ雰囲気に応じたからであらう。

「穴沢流双つ臼——そうじゃったのう、黒馬さんや」

「さようでございます、旦那」

「フッフッフ、紅搾木」と「春雨」の勝負、これは面白いことになりましたよなあ」

振り返られた水野は、

「双つ臼——ふたつうす、と……」

考えこみながら黒馬の手でお景と同じようにブランコの上に搦めあげられていく雅子の無言の抵抗を見守っていたが、

「あいわかったぞ、元禄屋！」

大声をあげるとグイッと盃を干し、

「フッフッフ、双つ臼か。こりゃあ妙じゃわ。面白い！ 早うやれ！」

象牙の箸で鯛の切身の一片をつまみ、

「お景。いつまで桃源境をさまようておる。目覚めぬか。ほれ、目を覚ませと申すに！」
さし入れようとしたが、ついさきほどまで開かれていたはずの花びらは、すでにかたく閉ざされてしまっていた。

「こやつ！ このように早う……」

奇声をあげたのは、珍なるものをみた、おどろきであった。

「元禄屋、まいったわ。そちの愛する花々はまさしく伸縮自在、開閉自由。世にも得難き女たちじゃの」

「お誉め、かたじけのう存じまする。まさし



イメージギャラリー

『吊り』岡 かし

く天保の乱世に咲く花々……」

「なに、乱世じゃと！」

老中筆頭としての意識がチラッと、のぞいたのを知ると、

「いえいえ、天保四年、本年本日、枝もならさぬ泰平の世にござりまする」

——領田下野さまのように諧謔の通じるお方ではなかった。

元禄屋は、すかさず言葉をあらため、大盃に酒をそそぐと自らもあおり、水野にも薦め「お上のご威光のもと泰平の世を寿ぐ花々でござりますが、伸縮開閉、自由自在には、とてもまいりませぬ」

「やはり、女はのう」

「閉ざしましても、すぐ自分の意志とは、うらはらに、ほれ、ご覧ませ」

水野の手から箸をとりあげ、あてがうとグイッと開いてみせた。

「ア、アッ！」

つまみあげた鯛の切身が消えていき、水野がホォーッと溜息を吐き出す。

黒馬は框の木の樹液といったが、当世風というならばミルクとかカルピスのようなと表現するのであろう。ともかく、その醍醐液を十分に、しみこませた鯛の一片を口の中へと

元禄屋に運んでもらった水野は、飽きたようすもなく、ゆっくりと味わうのであった。

「大胆那、剥がしますよ」

黒馬の声がした。

「よからう、始めなされや」

元禄屋が答え、水野が、そしてお景までがチラッと瞳をみひらくなかで、湯文字の紐がとかれていった。

が、まだ雅子は無言であった。重々しいほど量感のある乳房を、かすかに震わせながら裸身を、じいーと硬く、ひきしめている。

「そんなに気取るなってこと、雅子さん」

紐をとかれるとM字型にされている下半身のことだ。京紫の布は、すらりと青畳へと舞い散って、

「アッ！」

雅子が始めて喘いだ。

「紅搾木か、どりゃ」

水野が立ち上った。向いあったお景と雅子の間隔は一間半。三步か四歩、遊動円木に沿ってあるいた水野は、ブランコの前に、どっかと腰をおろすと、

「お景よりも肥り肉じゃな。それに肌が極上の美酒に似ておる」

かたくひきしまつて小柄な、お景に較べて

雅子は裸身全体が柔らかで凝脂も、ほどよくのっていた。天井から垂れる綱に開いたまま吊り上げられ、ギューッと開いた内股のあいだに亀のように首を突っこむ水野に

「名器・紅搾木——上品中の上品。水野さまお調べなさるよりも、それ、その恰好は」

押揃するように、

「天の岩戸へ向きたがる猿田彦……ハッハッハッハハ」

元禄屋は、たからかに笑うと黒馬に、さあ始めなされと目配せを、おくるのであった。

一間半の間隔で裸女をのせたブランコが二つ——そのあいだに両端に大筆を仕掛けられた遊動円木——。

その円木の中央の綱を黒馬が持った。

「二人とも狙いうちにしくっちゃあなりませんから一寸ばかり難しゅうござんして」

綱に、はずみをくれると、まず前へ、お景の祕苑めがけて繰り出していった。

さきほどと同じ要領でやればよいので、これは見事に的中したが、後退した遊動円木はまだ雅子の股間をのぞきこんでいる水野の後頭部へと尖端の筆を、うちあててしまった。

「な、なんをする……」

思わずとび上った水野だったが、すぐ、

「沈丁花じゃ、久しぶりの香りよ。クッククックク……」

てれくさそうに笑うのだった。

その間に円木は前にすすんで、お景のMの字の中心に迫っていた。

「ア、アア……」

ほんの、またたく間、静止したと見えながらそれもすぐ反動で後退し、いまや妨げるなものもない雅子の「紅搾木」を狙った。

富士額の下の眸が恐怖にふるえた。

音もなく迫ってきた黒い大筆の尖端が、もろに雅子を襲った。

「ヒ、ヒヤアア」

魂切る悲鳴とともに咽喉がのけぞり、琥珀色の太股に二条の青筋が走った。

「痛くはない。決して痛くはないはずだよ」いくら鋭いとはいえ、たかが筆の穂先ではないか。このように、おおげさな叫びをあげる必要はあるまいに、雅子は、いったい、どういうつもりなのだろう。元禄屋の思惑をよそに

「ウ、ウウ！」

と今度はお景が呻った。こちらのほうは筆のなかほどが、すでに見えなくなっている。

「ほうれ！」

黒馬の綱を持つ手に力が入る。

恐怖にふるえる雅子の眸が、下をみた。

長さ八寸余の黒い穂が生物のように迫り、

「ヒ、ヒイイ……」

「そんなに大声をあげるなよ、雅子さん」

黒馬がいったときには、

なまめいた響きとともに、まだ糊でこわばったままの穂先が内股の鬚りのなかに消えて雅子の珊瑚樹の実のような乳首がブルブルツと波立った。

「ご、ご主人さまア」

顔を左右に振りたてたとたん元結がきれてサアーツと黒髪が肩から乳房にふりかかり、

「お、お、お許し、お許しを……」

「なにをいうのじゃ、雅子さん。これからが

本番の『双つ臼』——さあ、黒馬さん」

承知しましたと両手に唾した黒馬が、綱を

たぐり寄せると、白木の円木を前へ、後へと絶間なく繰り出していく。それにつれて両端の大筆が確実に『春雨』にうたれ『紅搾木』にしめあげられる。

「ひとつの臼よりも、双つの臼を同時に搗きますほうが、興が深うござりましょう」

「いかにもいかにも。余も見るのは始めて。

それ、それ、お景。今度はお前のほうへ……」

雅子姫、姫の番じゃ。ハッハッハ

高さは二尺——

円木の動きにつれて、ひとりでにブランコも揺れ始め、雅子の唇が、わななき始めた。

雅子は反応が早いほうなのだ。

「この分じゃと勝負は、きまったようなものじゃな。雅子姫は相変らず敏感じゃ」

「フッフッフッフ、水野さま。『紅搾木』

の、べにしめきたるゆえんが、ぼっぽと」

「あらわれると申すか」

「いかにも……」

固唾をのんで見つめる二人の視野のなかで雅子の股間へと移動した遊動円木が、ピタツと静止してしまっただけではないか。

「こ、これは……」

「『紅搾木』にござりまする。ほれ、ちょっとやそつとでは」

円木に手をやって、そつと手元にひいてみたが、いっかなそれは離れようとはしない。

「み、みごとなものじゃ！」

「ア、アッ、旦那さまア……」

うっすらと開かれた眸に、なまめいた輝きがあった。

「雅子や、お前さんの躰がのう、男を求めているのじゃ。フッフッフ」

少し力を入れると再び円木は動き出したが

天井で不気味に軋む滑車の音にまじって雅子のやるせない喘ぎが洩れてくるのも、もうまもなくのことと思われた。

と、そのときであった。

庭に面した襖が、わずかに開き、斑猿の黄色いハグキが、のぞいた。

徳夜叉が江戸に姿を見せたという。

「やっと現われおったか」

元禄屋の眸が獲物を発見した驚の眼のように異様な光を放ち始めた。

「水野さま、所用ができましたので私はこれにて失礼いたしますが、どうかごゆるりとお過しあそばされますよう」

「フッフッフ、そうもいかぬて。老中筆頭

ともなれば多忙での。夜が明けると、すぐ登城いたさねばならぬ」

「それは、それは大変でござりまするな」

「お互いの」

話しながらも水野の小肥りした躰が、小紫のお景を背後から抱きしめているのを見やっ

た元禄屋は「では」と辞儀して外へ出た。

主屋での喧騒は、まだつづいており、庭で

哭く夜鶯の声も、いつ果てるともない。

——つづく——

縛りの美学

ロマン派生

さて、この怪しげな美学も大好評のうちに連載四回目を迎え、いよいよ内容充実し、天下に賛非両論の渦を巻き起しつつある、というのは真っ赤な嘘で、乏しい写真を、いろいろと、ひねくり廻し、同じような屁理屈を何回も繰り返しながら、かすれたボールペンで原稿用紙の、ます目を汚しているのが実情である。

誌面の無駄だから早く引っ込めという声は全く聞えぬふりをし、ほんの少しでもほめてくれる人があれば十倍に増幅して、さもさも縛り学のオーソリティーのような顔をして、もうしばらく書き続けるつもりなので、賢明な読者は、あきらめて、しばらくおつき合い願いたいものである。

蛙縛り

蛙縛りとは、あまり耳慣れない言葉だが、それもその筈、ロマン派生氏が、この度、始めて提唱したのだから、誰も知らないのが当然である。

どんな形の縛りかは、言葉で説明するより写真を見て頂けば一目瞭然であろうが、これが何故、蛙縛りと名付けられたかという点になると、大分、説明が要るようだ。そもそも



蛙縛りとは、蛙の解剖縛りを縮めて呼んだもので、その昔、中学生か高校生の頃、蛙の解剖をした時のことを思い出してもらいたい。その時、丁度こんな風に蛙を仰向けに解剖台の上に縛りつけたじゃありませんか。一寸、恰好が違ったかも知れないが、細かいことは言わず、テーブルに仰向けに縛りつけられた



女囚から、なんとなく蛙の解剖を連想して欲しい。そして大方の御替同が得られたら、せいで蛙縛りなる言葉を流行させてもらいたいものである。(流行しそうなかな?)

写真①はブラジャー縛りの項でお見せした縄掛けして、テーブルの上に蛙縛りにした所である。両手を頭の後で組んで縛り、両足は膝の上に縄を掛けてテーブルの上部の脚に結びつけて十分に開股させてある。

この縛りの特徴は、女囚を十分に開股させて固定出来ることと、テーブルの上に縛るので当然、畳の面より高い所に大切な所が持ち上げられていること。及び長時間、縛りっぱなしにしているても、女囚にあまり苦痛を与えないこと等である。

そういう特徴を考えると、この縛りの用途が、自ずと浮き上がってくる。

まず剃毛に最適である。剃毛なんてものはゆっくり時間をかけて、ねちねちと行わなければ意味がないのだから、剃る方も剃られる方も楽な姿勢で、且つ動くと危ないので、しっかりと固定してから始めないと不可ない。

その点、この蛙縛りでは、剃り手はテーブルの前に、どっかと腰を据え、すぐ目の前にある作業場を、よく見詰めながら、たんねんに仕事にはげむのに最適の縛り方なのである。

もちろん、剃毛だけでなく擦り責めでも、ディープキスでも、何でも結構だし、女囚の頭の方に廻わってピッコロ、いやフルートを吹かせるのも自由である。

また写真②のように尻の下にビニールを敷



いておけば、浣腸なんかによく適合する。

写真②は①とは別の時の縛りで、膝の上だけでなく、足にも縄をかけて一層、固定をきびしくしている。

実用的なことばかり書いていて、一向に美学らしくならないところが、何ともいい加減

だが、そもそもこの美学は、ルーブル博物館のモナリザのようなものを標準に置いているわけではなく、お祭りの見世物小屋の泥絵具の看板か、或はスエーデン・ポルノの名作を標準としているのだから、そんなつもりで読んで頂かないと困る。

さて、その美学によると、蛙の解剖そのも



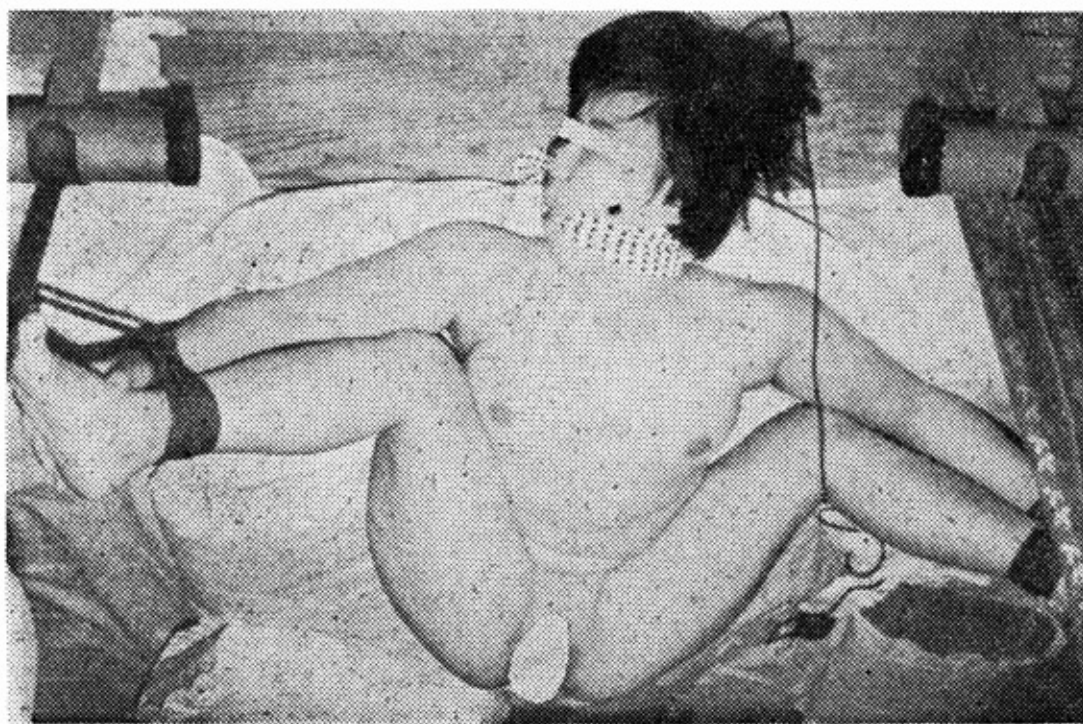
のが、すでに奇妙なエロチズムを発散させている。少年の日に、解剖台に縛りつけられた蛙に、ひどい罪疚感を感じる一方で何か、わくわくするような妙にセクシャルで、なまめかしい情感を抱いたことはなかったろうか。女を剥き出しにして、解剖台ならぬテーブルに縛りつけるということ自体に、おどろおどろとしたセクシャルな美しさというか魅力があるという、いささか、こじつけがましいだろうか。

写真⑧は同じような縛りだが、両手を頭の方まで持って行かず、上げた位置で手首をテーブルに、きちっと縛りつけた点と、膝の上で縛った縄を肘にかけて吊り上げ、更に下へおりて足首に縛った所が違っている。この縛りの方が①、②、に較べて固定感が一層、強く、更に女体が開陳された感じが強くなる。私としては、この方が好ましいし、美しくもあると思う。

この写真で女囚の口に噛ましてある猿轡は透明な硬質プラスチックの丸棒の両端に、ひもをとり付けたもので、赤い口の中にたまったよだれが、透明なプラスチックのレンズのような作用で拡大されて見えたりする所などなんともいえず妙である。もちろん、この特

製猿轡は上の口だけでなく、下の口にも縦にして、かましてある。これも全く同じようなレンズ効果を楽しめる。

このペアーの透明猿轡は、まだ、どこにも売っていないが、手製で簡単に作れるから、御用とお急ぎでない方は、一つ作って験してみたい。



写真④は同じポーズを横の方から撮ったもので、膝から肘に、そして足に廻わした縄の掛け具合が、よく解って頂けると思う。

妊婦を、こんな形に縛り上げ、その腹を断ち割って胎児を見ようなんてことは殺生関白か安達ヶ原の鬼婆におまかせして、ロマン派としては、それはグロであってエロとは認め



られない。グロとエロ、そして美との境界はどこにあるのか、さだかではないが、私の主観では明瞭に境界があって、若いグラマーな女囚を蛙縛りにする所までは、美の範囲内だが、妊婦をそのように縛るのはグロだし、まして血を流せば全く醜悪だと思う。そこら辺がロマン派と自称するゆえんなのだが、あまり深く立ち入ることを避けて次に移ろう。

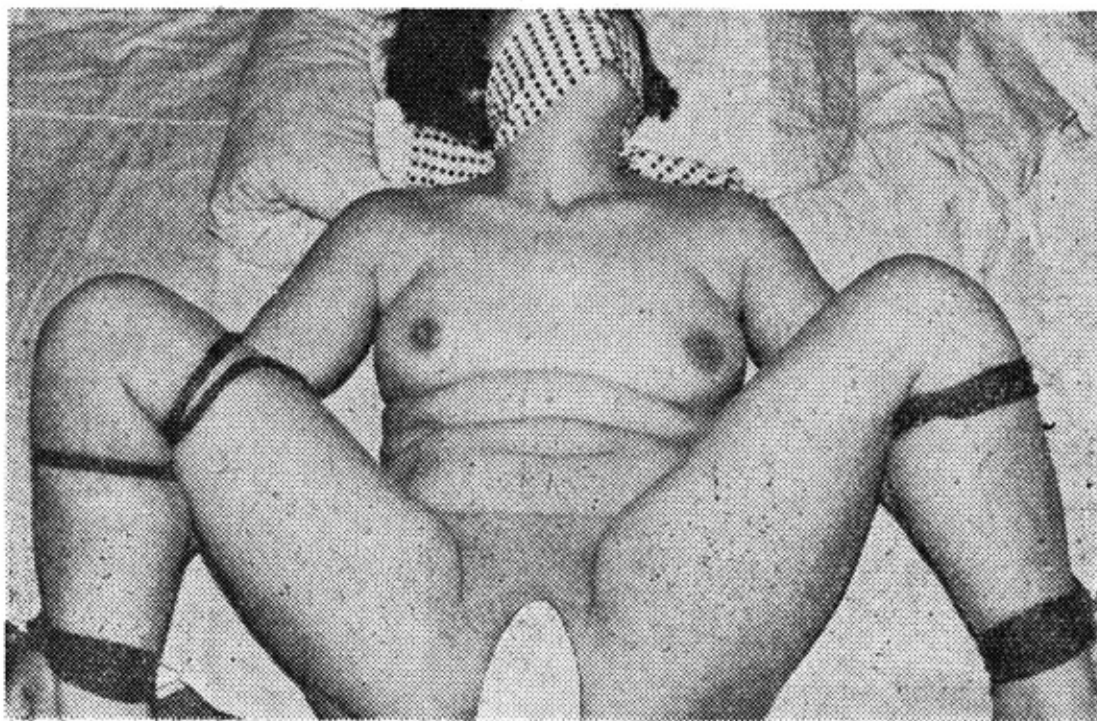
カニ縛り

カニ縛りという言葉は、かの有名な大家・喜多玲子氏こと美濃村晃氏が最近、提唱された言葉で、知る人ぞ知るのだが、言い得て妙仲々、良い名前だと思うので、これを普通名詞化しようと考えて、お先棒をかつぐわけである。普通名詞は登録商標ではないから無断使用しても差しかえないと思うので、エビ縛り、蛙縛りと並べて、カニ縛りということにする。

縛り方は、これも写真を見れば一目瞭然で右手首と右足首を一緒に縛り、左も又、同様に縛って左右を別々に拡げるわけである。カニの足は八本か、はさみを入れれば十本位あるようなので、ほんの少し、足の数が足りないが、そんなことは気にしないで、ムードと

して、カニが白い腹を見せて手足を左右に拡げている感じと良く似ている、と思ってもらいたい。

写真⑤は女囚みさ子をカニ縛りにして、頭が一段、低い所に位置したポーズで撮ったものである。この際、手首と足首を縛る時に、双方を合わせて、ぐるぐる巻いただけでは、



ゆるんで抜けてしまう恐れがあるので、手と足の間に縦縄を通して引き締めておくのが常識というものである。この写真では、あまりはっきり縄目がわからないかも知れないが、もちろん、常識通りに縛ってある。ここまで書いて来て、ひょっとと思い出したが、大分、古い奇クに、なんとか氏が、S字型（或は8の字型）に縛ることを提案されていたが、これは手首を一周した縄を足首に廻らす時に、反対方向に廻わしてS字型に縛るもので、これを数回、繰り返して縛っておけば、キチッ



と巻き締めて、ゆるみが来ないと思う。次の機会には是非、やってみたい。

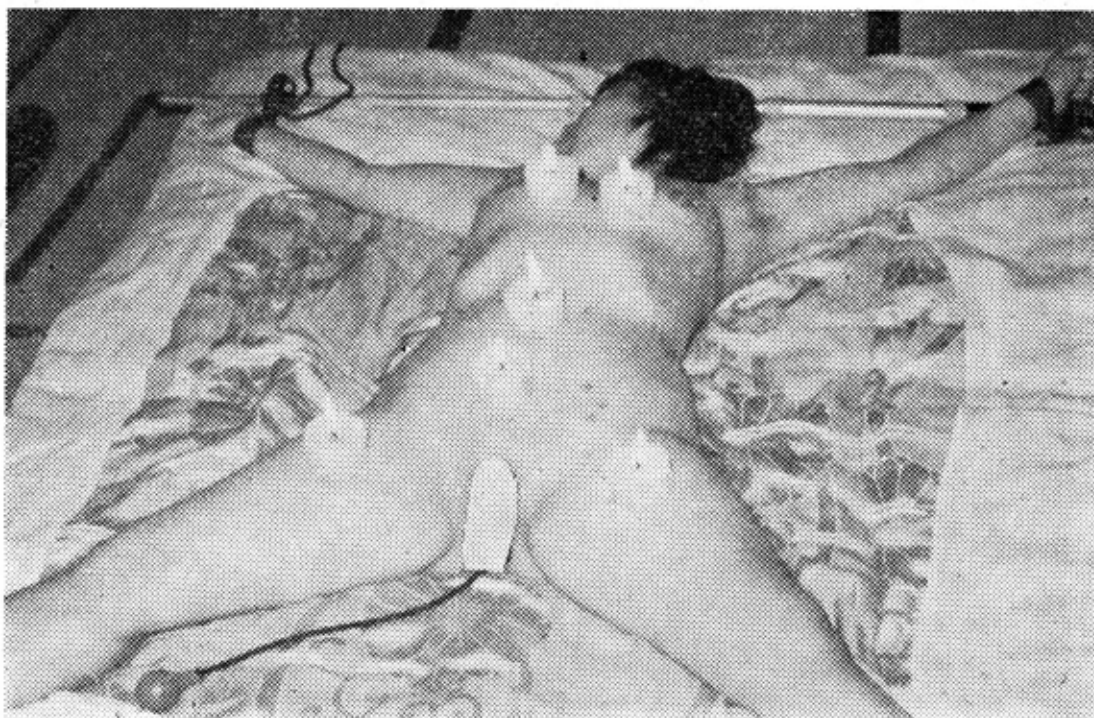
このカニ縛りに適合する責めは、前の蛙縛りと、ほぼ同じだが、こちらは台上に固定していないので、いろいろとポーズを変えて楽しむことが出来る。仰向けにして手足を左右に拡げるポーズが標準的だが、背中が全面ペッタリと床面についているより、尻の下に枕などを入れて高くすると、不安定な感じになって妙な色気が出て来る。或は逆に上体を柱に、もたせかけるか何かして、上体が床の平面に対して斜めに持ち上がったようにすると、これも仲々、いけるポーズになる。

写真⑥は、そういうつもりで撮ったのだが一寸、上体の起こし方が足りなかったようだ。また、作例をお見せ出来ないのが



残念だが、手足を左右水平に拡げないで、右なり左なり、一方を鴨居などに高く吊り上げて、カニの横吊りといった趣きにするのも乙なものである。

写真⑦は膝の下と肘を結びつけてみたもので、一種のバリエーションだが、どうもこの



縄は、蛇足のような気がする。やはりカニ縛りは、両方の手首足首以外には一切、余分な縄がけをしない方が、哀れっぽくてチャームングだと思う。

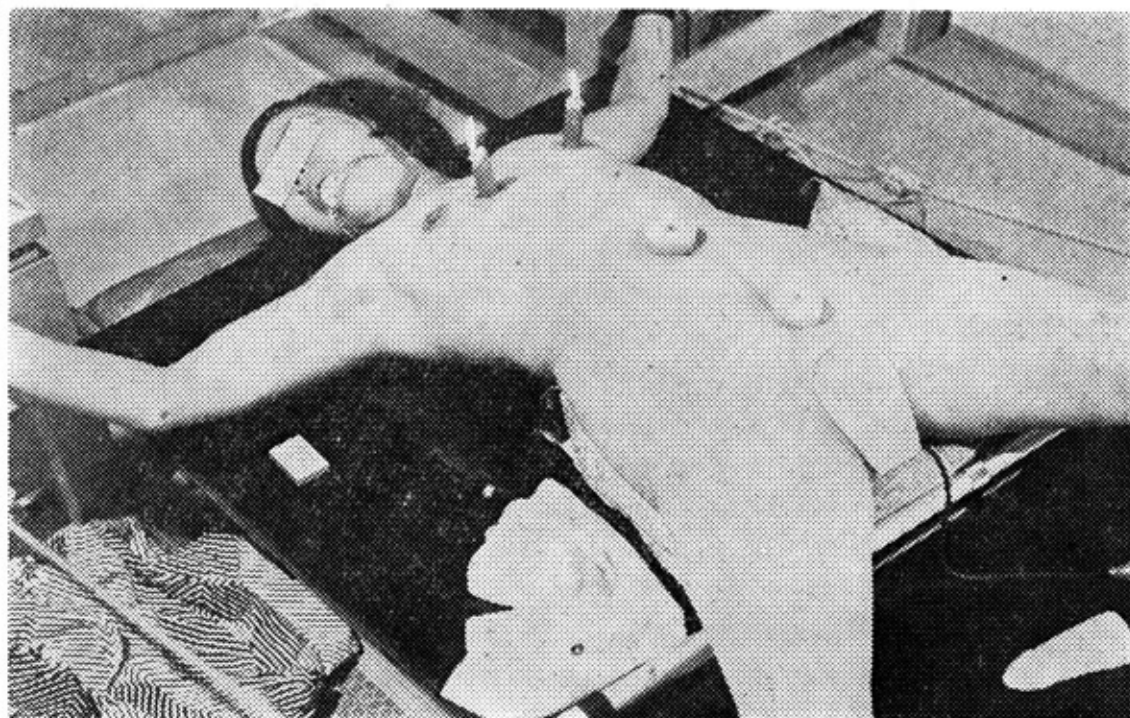
写真⑧も、またまた、バリエーションで、いわばカニ崩しとでも言おうか、手足を二対

二に分けず、三対一に分けて縛るところが、シンメトリーを破って、一寸、面白い味がある。この例では、一本の方を吊り上げているが、三本の方を吊り上げても良い。それぞれ面白味があるが、いずれにしても、平面的に縛っては面白くなく、片方は高く吊らなければ恰好がつかないものである。

大の字縛り

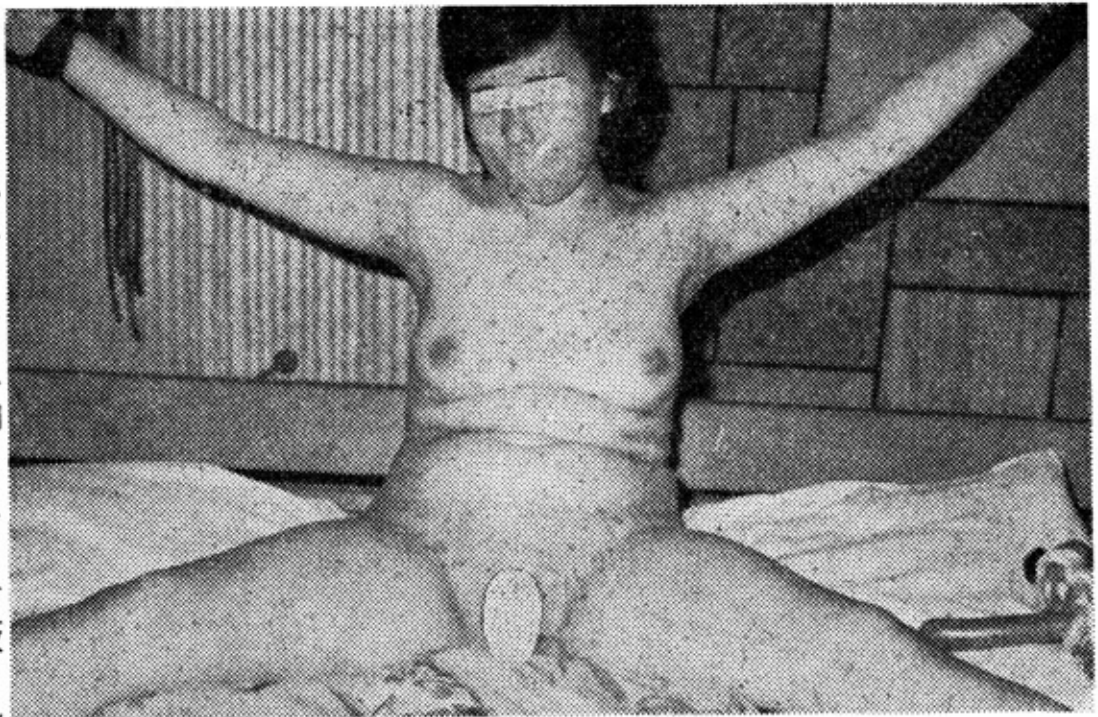
さて話は、とんとんと進んで、大の字縛りと行こう。つまらない文章は、なるべく短くして、写真をゆっくり見て頂く所が、この小論の取り柄なのだと思っているのだが、編集部では文章の量と写真の枚数がアンバランスで、誌面のレイアウトに困っているという噂もチラホラ聞えてくるが、これまた、聞えぬふりをしてマイペースで行こう。

さて、大の字縛りとは両手、両足を大きく拡げて、それぞれ別々に縛ることと定義しても良いのだが磔だけは一寸、別口としたい。磔という語感は、どうしても三尺高い磔柱に足を地上につけずに頑丈な刑具にくくりつけないとピッタリしない。もちろん、土磔などといって地面に寝かせた形をも磔と呼ぶ用例があることは知っているが、別に国語学を



論じるわけではなく、全く私の感覚で、ものと言っているのだから、大目に見て頂きたい。

大の字に縛るためには、縄以外に女体を固定する棒のようなもの、或は縄尻を結びつける柱のような構造物が必要になる。私は好んで写真用の一脚（三脚をバラバラにして使っ



でも良いが、始めから一脚としても市販されている)を使うが、これは、もっぱら携帯の便を考へてのこと、美学的には竹の棒とか木の角材のようなものが好ましい。

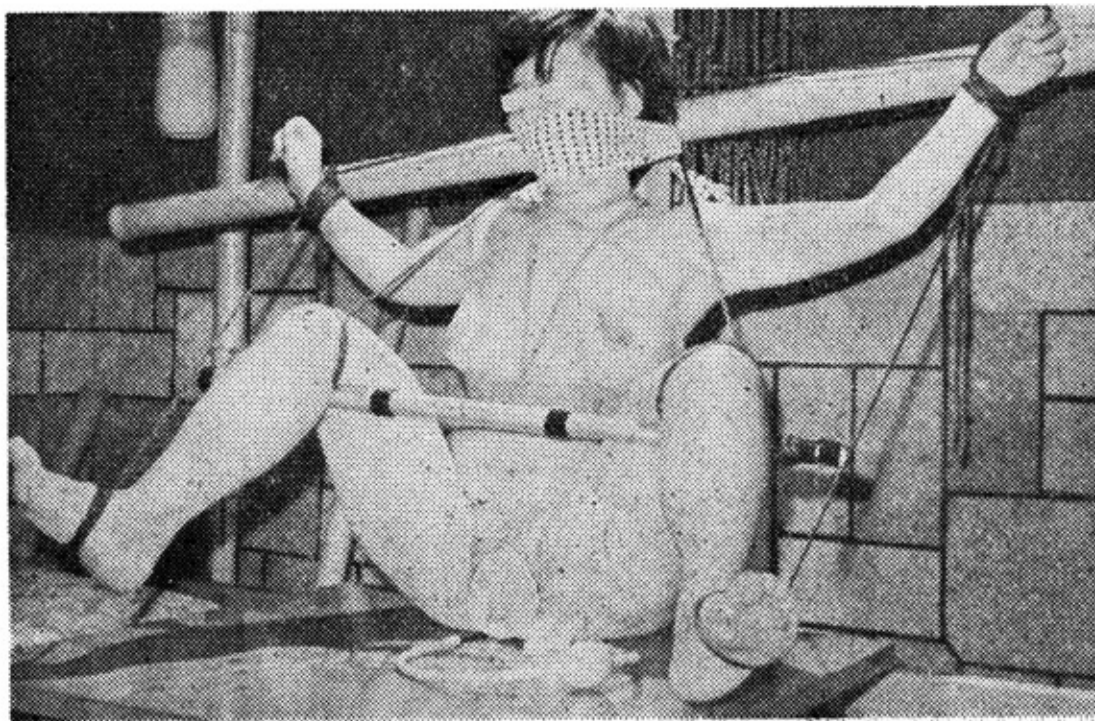
写真⑨は、その一脚を使って女囚みさ子を仰向けに固定した所である。この際、手足を十分に伸ばして縛らないと、だらしないも

のになってしまう。さて、大の字縛りにしたみさ子の身体の上に、短く切ったローソクを幾つも載せて責めるのは良いが、あまりひどく責めすぎると身体を動かすので、ローソクが転がって火傷したり、布団を焦がしたりする怖れがあるので、くれぐれも御用心を願いたい。

写真⑩は同じ場面を足の方から写した所で女囚みさ子の足は、こんなにも良く開くという所を見て頂きたい。

写真⑪は全く別の時の写真で、同じようにローソク責めにしているが、こちらは、やや細いローソクなので、倒れる危険性は更に大きい。この例では、両手は手すりを利用して縛ったので、十分に腕が伸びていない点が良い。口に噛ませた猿轡はゴルフ練習用のボールに、金色のクサリを通して自作したもので、簡単だが一寸、面白いものである。

写真⑫は大の字縛りで上半身を起こした所だが、足を縛った棒まで写さなかった故か、あまり迫力がない。撮り方も上手くないが、ポーズ自体も、さして面白くないようだ。このポーズから、更に足の方の棒を吊るし上げた写真も、とって見たが、それも思ったほど効果的ではなかった。



写真⑬は棒を足首に縛らず、膝の後に縛ってみたのだが、なにか一寸ユーモラスな感じになってしまった。SM写真の大切な要素である「ああ、こんなに、むごたらしく縛られてしまつて、可哀そうに」という印象を見る人に与えない。「可哀そう」ということと、

「可愛い」ということは、語源的に同じなのかどうか知らないが、ロマン派のサジズムは、憎たらしいから、いじめるのではなく、可愛がりたいから可哀そうな状態にしてしまわなければならない。したがってユーモラスだったり、あまりに明るく健康的な雰囲気は、ふさわしくない。

写真⑭は、いよいよ柱の前に立たせた所で両足は、これ以上、開けば立っておられず、転倒してしまうという限界まで、開かせてあ



る。地に足をつけている大の字縛りでは、これが限度という張りつめた感じが写真から受けとれるだろうか。両手は水平より、やや上に挙がっているのが良い。水平より下がっていても、まるでだらしない、見るに耐えない。口には十分、脱脂綿を詰めた上、粘着テープを貼りつけてある。胸や下腹部の点々としたものは、もちろん、ロー涙の跡である。

本日は本格的な磔柱を使って、しっかりとした磔の写真を撮りたいのだが、今の所、そういうチャンスがなくて残念である。

一昨年頃、奇ク誌上に本格的な磔や逆さ磔の写真を発表された大橋美代子さん。その後どうしていらっしゃいますか。あの写真のポーズは全く素晴しかったのですが、照

明が多分、ストロボ一灯、正面光だったのではないかと思えます。一寸、フラットな写真になっていたのが残念でした。あれと全く同じポーズの同じ縛り方で、照明だけ変えて、もう一回、撮り直して発表して頂けたら、どんなにか素晴らしいかと思えます。突然、他人の写真を引き合いに出して批評するのは全く失礼と思いますが、小生の不備な小論を大橋氏が補って下されば、大変ありがたいのですが、どんなものでしょうか。

ついでに他人の写真で言えば、これまた、私の大好きな大塚啓子の髪の毛の長い頃、黒いバックに白い囚衣を着せられて、きれいに磔られていた写真があったが、今はもう絶版になっているかも知れない。

とにかく磔というのは、SM写真の一つの頂点に位するポーズなので、どなたか資料を沢山、持っている方が、本格的な意見を述べて欲しいものである。

私は磔については、あまり語る資格がないので、この辺で、はしよって、来月は柱縛りその他を紹介したい。

(つづく)

連載・M派交友録(五十七)

マ

ゾ

と

賃

金

△岩見崇の巻▽ (三)

鬼山 絢 策

カット・春日田春夫



責めの撮影

吟子の鞭で傷つけられた青年は兵藤と言った。それに窪寺、もう一人、若井雅也に殴られた男と、三人が縛られて転がされていた。

それぞれ、顔や破れて剥き出した肩などに、ルージュで傷痕を描いていた。

ライトが、あかあかとつけられて本番に入った。若井雅也のアップ。

「フン、飛んで火に入る夏の虫だ」と一人の肩を足蹴にする。続いて

吟子のアップ。

「こん畜生！ このお銀姐さんに、たてつこうなんて、太え野郎だッ」

パツと足が上がる。乱闘の時から、着物の前を着崩してあるので、足を上げると裾が思いきり、はだかって、赤い腰巻をはねのけて白い太腿が、つけ根まで露出する。その足が

兵藤の頭を蹴った。

テストで二回、蹴とばして、これが三回目だ。本番となった今度は、かなり足に力が入っていたから、兵藤は首を曲げて転がる。

「この野郎ッ！」

吟子の素足が兵藤の横顔を、じかに踏みつける。そのままでストップしてまたアップ。

「この野郎」

足を動かして踏みにじる。吟子は窪寺の方を向いて、

「丁度いい人質ができたよ。サア設計図を持ってくるか。持って来なきゃ、三人とも生きて、ここは出られないよ」

グツと肩を上げて睨んだ顔は凄艶だった。

吟子の顔から、はだけた胸元、帯、そして右手でグイと裾を捲くった手。赤い腰巻からくの字に曲がった白い太腿。怪。そして足。その下に苦悶する兵藤の顔。とカメラは、ゆっくり舐めて行き、また上へ舐めて行く。

千駄ヶ谷のホテルの狭い部屋に里見監督、若井雅也、吟子、それに若手の三人の俳優、カメラマン、岩見の八人がいた。

若手三人がレフを持ったり小道具の移動やら、助手をしていたのが、いまは三人共、縛られて出演中である。若井は芝居の他は何もしないので、勢い、岩見がレフを持ったりして助手を務めることになってしまった。

次のカットは、若井が窪寺を殴って顔を足で踏みつけ、吟子が三人の男を並べておいて鞭打つ場面だった。

「サア、これでもか。てめえがウンと言わないと、この野郎共を打ち殺してしまおうよ」

吟子がピシッ、ピシッと床を叩き、ヒューッと素振りをくれておいて、パシッと二人の男の背を鞭打った。

鞭は短目のを使っていたが、それでも狭い部屋の中で振るうのは、むずかしいが、吟子は、もう大分、馴れてきていた。

途中で里見監督が缺で二人の男のワイシャ

ツをズタズタに切って、絵具で赤い血の痕を背中にしずつ、つけ足して行った。

「サア、どうだ。二人の友達を殺してしまってもいいのかい」

吟子は足を上げて二人の男を次々に蹴とばす。これがテストで、本番で又、繰り返すのだから、殴られる方は、かなり苦しい。

一方、殴ったり蹴ったり大暴れの吟子も、重労働で、汗をビッシヨリかいていた。

登場人物紹介

加納吟子(28才) 元アングラの女優。

その後ホステス、テレビタレントから現在はポルノ映画の撮影に出演中。

佐戸崎昂(36才) 画家だが、さっぱり仕事はせず、吟子にくっついてマネジャーのようなつもりでいる。S的性格。

岩見 崇(37才) 佐戸崎と同期の画家で挿絵、イラストなどを画いている。吟子を敬愛し、奴隷として仕えている。四百万あった貯金も佐戸崎と吟子に絞り取られ、自分のマンションも吟子に住まわせ自分は汚いアパートに暮している。

里見

ポルノ映画の監督。

若井雅也 かつては二枚目スターとして有名だったが、いまは落ちぶれて、ポルノ映画に出ている。

窪寺 勇

ポルノ映画の若い俳優。

「よし、上出来。休憩」

里見監督が手をあげた。

「おい、続けようぜ、次のカット。俺、乗ってきたぜ」

若井雅也が里見に言った。次は若井と吟子のシーンである。

「そうですか。だけど吟子さん、疲れたでしょう」

「あたしは、いいわよ」

縛られた男のうち、窪寺を残して他の二人は「無罪放免」になり、縄を解かれて、すぐ助手に早変わりし、次のセットの寝室へ、ライトを持ち込んだ。

「やっぱりなんだね。責めるってことはいいねえ。昂奮してきたよ。今日は、とっても調子がいいんだ」

若井雅也は上機嫌で里見監督に言っていたが、ニヤニヤしながら里見の耳に口をつけて何か囁いた。

「な、いいだろう。その方が迫力が出るぜ」

「まあ、吟子さんがOKすればね」

二人がチラと吟子の方を見た。吟子は二人の囁きも自分に向けられた視線も意識していながら、知らん顔で窪寺をなぐさめていた。

「今日は、あの野郎のツラが見えねえから、

ほんとに、やりいいよ。あの野郎、シャツアウトしてしまえよ」

若井は里見に、くどく言っていた。若井は佐戸崎が大嫌いらしい。

真実の演技

ダブルベッドの裾の方の足に窪寺が括りつけられていた。

ベッドには吟子が長襦袢姿で足をひろげて仰向けに寝ていた。それに添って若井が裸で寝そべった。

若井の手が動き、指が動き出すに連れて、吟子の足がスーッと上がって、若井の指の動きを足でかくした。若井は窪寺の方に向かって「やい、良夫。てめえは俺の女房に、どういう風にしてやったんだ。どうか？」

言いざま若井は吟子の上に折り重なった。カメラが全身からバストへと移行する。

そして若井と吟子の顔の拡大し。

「どうだ、吟子。奴と俺と、どっちがいい」若井の体が動いている。

目をつぶっていた吟子がパッと目をあけて若井を見た。それは奇妙な表情だった。驚いたという顔か、意外といった表情だった。

だが、すぐ演技の表情に変わって肩を寄せ目をつぶり、下から両手で若井を抱き締めた。

「どうだ、俺の方が、いいだろう」

若井の呼吸が相当、荒い。演技としては真に迫っていた。

カメラは二人の上半身から下半身へと下りてきて窪寺の顔を写す。口惜しそうな表情で窪寺は歯を食いしばって二人を見ている。

カメラは、また二人の腰に上がる。

「あッ、あーッ」

と吟子は首をのばして叫ぶ。その喉から唇へ若井は唇を這わせ接吻した。若井の舌が、吟子の口の中へ出たり入ったりした。

「ハイ、結構」

里見監督が声をかけたが、若井は、なおも退かなかった。

「うまく行ったかね、監督さん」

「上出来でしたよ」

「そうかい。フフフ」

「ハイ、今度は吟子さんと窪寺君のカット」

その時、若井が上半身を起し、ゆっくりと立ち上がった。

その瞬間、岩見は日本のポルノには見られないものを見てしまった。

それは室内にいる監督をはじめ、三人の若

い俳優も、レンズから目を離れたカメラマンも見てしまったのだ。

若井は得意そうだった。ベッドから下りてくると、岩見のところへ、やってきた。

「おい、タオルか何か、ねえか」

岩見はムラムラとして、張り倒してやりたくなかったが、我慢して別室からタオルを持ってきてやった。

「ヘッヘッヘッへ。なかなか、うまいよ、吟子ちゃん。味な女だな」

拭けよ、と言わんばかりに、タオルを受け取らずに岩見に突きつけたまま、誰に言うともなく言っただけだ。

吟子の話では若井はこの前のシーンでは全然、用をなさなかったと言っていたが、今は若井は皆に元気な「男」であることを誇示している。

若井が休まずに、続けてやろうと言った意味が今になって分かった。

何といっても傍若無人な態度だった。

デカイ面どころでなく、この位、堂々とスタッフ全部を馬鹿にした態度に出られて、皆は気をのまれて啞然としていたのだ。

二人の若い俳優は、目をギラギラさせて怒りを抑えている様子だった。

だが、文句を言う筋はないのだ。

若井雅也は先日シーンの時に、吟子に前張りをしないことを、すすめた。吟子も、それをOKした。

「そのものズバリを見せることは日本ではできないが、真に迫った演技をするには、真実以上のものはない。真に迫るではなく、真実そのものが最高だろう。その意味から前張りなんてやっていて、いい芝居ができるわけねえよ。まして映画に初出演の、お嬢さんじゃな。あんた、やれるかい」

「それはそうですね。先生にそこまで、はりきってもらえば、いい作品ができますよ」

と里見監督も賛成しているのだ。その時点で二人のシーンを認めたような形になってしまった。そのことは他のスタッフも聞いて知っていた。

だから文句は言えないわけだった。

「いい女だよ、吟子ちゃん。これからの女だな。俺とコンビで売り出してやってもいいぜ」

若井は、まだ岩見の鼻先に醜いものを突きつけたまま、里見にしゃべっていた。

「息が合えば、もっと凄いとこをやって見せるぜ。ハッハハハ」

身体を揺って笑った時、故意か偶然かタオルを持った岩見の手にグニャリとしたものを擦りつけてきた。若井は岩見など全く眼中にないのだ。俳優にもなれない、使い走りの小者ぐらいに思っていたのだろう。

岩見はタオルを床へ叩きつけるように投げ捨ててトイレに走った。

——馬鹿々々しい。こんな屈辱を受けるならもう帰ってしまおうか——

と思ったが、やはり吟子のが気になって帰れなかった。トイレで一服して帰ってきて部屋の光景を見た時、息をのんだ。

二つのライトが集中的にベッドの裾の足に縛りつけられた窪寺に当てられている。その前に吟子が股をひろげて、しゃがんでいた。

傍に里見監督が立って何か指示している。

吟子の後ろから肩越しに、若井がニヤニヤ笑いながら覗き込んでいた。

「左の足を、もう少し前へ。そう、肩を膝でおさえるようにして。そのポーズで、きまり。

いいね。ハイ、じゃ、本番行くよ」

裸の若井と抱き合って寝ているところからスタートした。そこから吟子が起き上がって窪寺の方に、にじり寄り、

「フフフ、どう、羨ましい？ それとも口惜

しい？」

せりふをつけながら、

「言う通りにしさえすれば、あんたも抱いて上げるよ。どうなんだい」

「死んでも、いやだ」

「こん畜生！ なまいき、言いやがって」

吟子がグイと半身をおこして、先刻のポーズに入った。

「フン、可哀想だから、お前にも、お裾分けしてやらあ」

股の間に窪寺の顔をはさみ、首だけ後を向いて若井の方を見てニツと笑う。

カメラが若井の方を捉える。若井はベッドに長々と寝そべり、

「フフフフ」

と下を見て、不敵な笑い声を洩らす。

カメラが又、吟子の顔に戻る。吟子は右手を窪寺の後頭部に当てて、グイと手前に引き寄せた。

「サア、お舐め！」

下を見て唇をゆがめて笑う。その顔は岩見の一番、魅きつけられる表情だった。

カメラが、また若井の方に戻り、腕枕した若井が口を極めて罵る。

岩見は、その間、吟子の方を見ていた。吟

子は同じポーズのまま、尻を僅かに動かしていた。

「ハイ、ストップ」

ライトが消え、里見監督が歩み寄る。

今度は窪寺の身体を右に向けたり左に向けたりして、ポーズをきめるべく工夫した。

「まあ、こうだな。こんなところだろう。ハイ、吟子さん。この上に跨がって見て」

「いいの？」

吟子は、ちょっと、ためらい気味で、それでも微笑を浮かべながら身体を乗り出した。

岩見のところからは、里見監督の背中の中になって、窪寺の顔の部分は見えなかったが里見監督の背中からニョキリと吟子の膝小僧が見えた。

「あ、痛ッ。痛い、痛い。痛い、痛いッ」

窪寺が悲鳴をあげた。

「痛い？ そう、無理かな。じゃ、こうしてみてごらん」

窪寺の顔の位置を変えた。

「ハイ、これで乗ってみて」

また吟子の身体が乗り出す。顔の上にモロに、お尻が乗る。

「痛い。ウッ、ウウ、ウウ」

又、悲鳴をあげた。

「痛い？ どこが痛いのか」

「首筋が、首筋の後ろ側が……」

「これじゃ痛いよ、監督さん」

周囲には若井や兵藤まで覗き込んでいた。

「じゃ、そーっと加減して見て下さい」

「いいわ」

また、吟子が増減して跨がった。

「ウウ、ウウ……」

「痛い？ 痛くても我慢してくれよな。特別手当、出すからな。ハイ、じゃ本番」

パツと、たかっていた人が退いた。

窪寺は両手をベッドの足にくくりつけられていた。その姿勢で、そっくり返るようになってベッドの端に頭を捻り気味に仰向けになっていた。かなり無理なポーズで、あれで顔に乘られては痛いのは当然だと岩見は思った。

皆の見ている中で

「やい、まだウンと言わないか」

吟子の膝小僧がゴンゴンと窪寺の額を小突いた。

「言わなきゃ、こうしてやる」

吟子の足がひらき、ゆっくりと窪寺の顔に跨がった。

「ウ、ウ……」

「フフ、苦しいか。うんと苦しめ。ホラ」

カメラは吟子のある部分に、あからさまにレンズを向けていた。

カメラマンは慎重にレンズを絞ってアップに持っていく。

苦悶する窪寺の顔。その顔が窪子の肉体で次第々に隠されて行き、その下に埋もれてしまふまでを、吟子は極めてスローな動作で演じた。

「ハイ、もう一度！」

カメラマンがレンズの角度を変え、更に位置を低くして仰角にした。

一度はなした吟子は、再びゆっくりした動作で身体を、おとして行く。

「ハイ、口をあけて、もっと大きく。舌を出して！」

里見監督の声が、ピンピンと矢継早に部屋に、ひびいた。

吟子は尻で完全にふさいでにおいてローリングした。

「ああ、快い気持。もうOKしなくても、いいよ。こうして毎日毎晩、責めてやる。楽しみが、ふえたよ。ああ……」

吟子の顔のアップが撮られる。下の方で、

窪寺の苦悶の声が、地の底から唸るように聞てきた。

岩見は息苦しくなるほど昂奮して見つめていた。

「こんなことがあって、よいのだろうか。果たして、この映画が、このまま街の映画館で上映されるのだろうか?」

何か重苦しく、不安が感ぜられた。

「これで吟子のタレントとしての寿命も尽きてしまうのではなからうか。こんな破廉恥な演技をしては、まともな芝居には出られなくなってしまうだろう」

「サテ、今度はね、頭の方から跨がってみて下さい」

「まだ、やるんですか」というように窪寺は怨めしように里見監督の方を見た。

吟子は両股をひろげて頭の前方の方からジリジリと迫る。太腿の丸味が窪寺の頭を、はさんで行く。

「電話ですよ、監督さん」

「いま撮影中だから、ダメだ」

「長距離のようですよ」

「あとでかけろと言ってくれ」

電話を取次いだ兵藤は部屋を出て行った。

「そう、そこでゆっくり前進してみてください」

吟子の尻がジワリジワリと窪寺の顔を埋めて行く。窪寺の鼻が巨大な肉の圧迫に潰されて、ひしゃげた。

「ハイ、もっともっと、もっと前に出て」

「監督さん、ちょっとでいいから出て下さいって言うんです。大畑さんからですよ」

「うるせえな。いま、手が離せねえんだ」

「アッ、痛い痛い。済みませんが、少し休ませてくれませんか」

いま少したてば、しゃべれなくなる。電話を救いの神のように、窪寺は泣き声のように高い声で哀訴した。



イメージギャラリー

『SM館の生贄』

春日田春夫

「しょうがねえなあ。もうちょっとと言うとこで。まあいいや」

里見監督は休めとも言わずに部屋を出て行った。

吟子は窪寺の顔へ跨がったまま、見物人の方にペロンと舌を出して、おどけて見せた。そして額の上から退いた。

「ああ、ひでえ」

「解いてあげなさいよ。痛かったでしょ」

同僚の若い俳優が、窪寺の縄を解きにかかった。

「そのままに、しとけよ。勝手な真似すると監督に怒られるぜ」

若井がベッドに寝そべったままで言ったが、どんだん縄を解いてしまった。

「ああ、ひでえ」

窪寺は浴室に行って顔を洗った。ガラガラと、うがいをする音が聞えた。

「フフフフ」

若井は、卑猥な笑いを浮べて吟子にウィンクしてみせた。気取ってやったつもりだろうが、その表情が低劣で、とても二枚目という顔ではなかった。

里見監督が足音荒く、帰ってきた。

「畜生！ どいつもこいつも勝手なことばか

り言いやがって。今日は、もうやめだ！」と大声で、どなった。かなり不機嫌になっていた。

この映画の主役は吟子でもなければ若井でもない。大畑ルミ子と市田健という若い二枚目が主役なのだ。この二人が善玉で、吟子と若井が悪玉で、最後に若井と吟子は格闘の末警官に捕まるという筋である。

時計は二時半を、過ぎていた。

「皆、御苦労さんでした。サ、これから飲みに行こう」

「腹が減っちゃったよ」

仕事が終わってガヤガヤ騒ぎ出した。皆は手ぎわよく、道具を片づけはじめた。

「タカシ。そこに、あたしの服があるよ」

着物を脱ぎながら吟子が岩見を呼んだ。

皆の見ている前で平気で素っ裸になり、岩見の差し出すハンカチで股間を拭き、パンティをはくと、ブラジャーをつける。岩見が背中を廻ってホックをかけてやる。

顔を落とそうとしたが、皆の支度が終わったので、

「いいわ。家へ帰って落とすわ」

とドーランの顔のまま、皆の後に続いた。

玄関にドヤドヤ、ガヤガヤ出ると、女中が

履物を出して来たが、あきらかに不機嫌な顔をしている。ホテル側としては、撮影のセットに使われるのは歓迎しないのである。家具を、あっちこっちと移動して傷をつけるし、シャツなども、しみだらけに汚してしまう。

吟子は、ハンドバックから千円札を何枚かつかみ出して、

「すみませんでしたわね。コレ少しだけど」

と女中に渡した。それを見ていたのは里見監督と岩見だけだった。

「僕、帰ります」

岩見は吟子の後から小声で言ったが、「いいじゃないの。ついて来なさいよ。どうせ、ここまで来たんだからトコトンつきあうもんよ」

ホテルの筋向いにあるスナックは三時だというのに結構、人が入っていた。代々木、千駄谷は深夜族が多い町である。

馴染みと見えて店のママやバーテンは愛想よく「お疲れさま」と皆を迎えた。

ボックスに若井、吟子、里見、カメラマンと座り、スタンドに若手三人と岩見が腰を下ろした。

「明日の予定は？ 何時から」

「それがね、明日は、お休みなんです」

「えっ、どうして？」

若井が険しい顔をした。

「予定が変更になったんです。君達は出てくれよ」

里見監督は若手の連中に声をかけた。

「何だ何だ。そんなバカな話ってあるかよ。」

大畑組が、先にやるのかよ」

「あした一日しか、暇がないというんです」

「冗談じゃねえ。約束が違うじゃないか。俺だって忙しいんだ。ちゃんとスケジュールが決められてるんだ。そんな我がままされちゃたまらねえや。吟子ちゃん、お前だって忙しいんだろ」

若井雅也が怒り出した。かつてのスターの沽券にかかわると思つてか、さかんに文句をつけ出した。実際は彼に仕事などあろうはずはないのは、皆が分つてることなのだ。

「ほんとに、しょうのない奴です。僕も頭に来ちゃった」

と里見監督は調子を合わせた。

「あんな小便くさい女の子に、なめられて、たまるか。俺は、おろさしてもらうぜ」

とゴネるのを「まあまあ」と里見が、なだめた。酒が入ると若井は、しつこい質と見えて、いつまでも里見にからんでいた。今度の

映画の主役は俺達だろうと気炎をあげた。

「昔、佐田啓二が予定繰り上げを言ってきた時、俺と京マチ子とで反対して頑張ったことがある」と、また昔の自慢話をはじめた。

岩見は隅の方からボックスを眺めていた。どぎついドーラン化粧のままの吟子を見ると、ドサ廻りの旅役者を思わせる、佻しさを感じた。岩見は、ふと

——俺の画料は、どうなってるんだらう。

と思った。壁紙も自分が立て替えて出している。だが黙っていれば、このままにしてしまふのだらう。どうせ、三流プロの映画屋なんてものは、皆こんなもんだらうと思った。皆、自己の立場をガミガミと主張し、金のこととなると目を剥いて請求して渋々払うのだらう。岩見のように画料を、いくらと請求したこともないし、出版社へ行けば、先月の画料を黙っていてもくれる職業の者には、齒の合わない世界なのだ。

——まあ、吟子のために働いたと思えば、腹も立たない——と諦めた。

頭にきた吟子

あれから、ひと月ほど、たった。

暑かった夏も過ぎて、朝晩は涼しくなる初秋の頃となった。

この頃、また、吟子と佐戸崎の仲が悪くなった。原因は、例の映画のギャラの問題らしい。佐戸崎に請求しても言を左右にして、なかなか、よこさない。最後にくれたのが四万いくらで、十万という約束のギャラの半分にも満たない額だった。

吟子は、また新宿のクラブ「メルシー」に顔を出すようになった。

佐戸崎の足が遠のくと、岩見は吟子のマンションへ行くのが楽しくなった。吟子のマンションといつても、もともと自分のマンションだから、自分の部屋へ帰るような安らかさを、とりもどせたのだった。

「頭へ来ちゃったわ。今日、里見監督と会って来たのよ。あの人、あたしを気に入ってくれてたようだから、次の作品にも出してくれるようなこと言ってたのよ。それがダメになったの。何故だと思う。あいつの、ためなのよ。あいつがマネージャーじゃ、要求に応じきれないって言うのよ。わけをきいたら、何と会社の方じゃ二十五万も、あいつに払ってるのよ。何のかんのと経費を請求した上、五万円、前借りしてるんだって言うんだもん。」

そいでさ、あたしに四万しか、くれないんだから、とんでもない野郎だよ、ほんとに」

と吟子はカンカンになっていた。

佐戸崎の、やりそうなことだと思った。

「仕方がないですよ。佐戸崎という男は、もともと、そういう性格の男なんです。僕だって何度、だまされたかしれません。でも可哀想な男だと思ってます。人をだまさないければ喰って行けないというのはね」

「冗談じゃないわ。あたしは、そんなことで引っ込んじゃ、いられないわよ。どうしても取ってやるから。生活がかかってんだもん」

それは、まあむずかしいことだろう——と思ったが、口には出さなかった。

「おまけに次の仕事も、あいつのためにパーになっちゃったんだから、あたし、里見監督に言ったのよ。あいつ、マネージャーでも何でもないんだから、ダイレクトに契約して下さいってね。でも考えときますって、返事をにこしてるのよ。あいつが先に何か吹き込んでるのね。それが先入観となって、あいつがマネージャーだと思い込んでるらしいのよ。ほんとに、あんな奴と一緒にになったら、仕事も、まともにできやしないわ」

「しかし、吟子さん。もうポルノ映画に出る

のは、よした方が、よくありませんか。他の仕事に、さしさわりが生じますよ」

「でも今度、出れば二十万以上くれることは確かなんだからね。ギャラは、どんどん上がることは分ってんだから。だから、あたし体当りでやったのに」

「その体当りが問題ですよ。あれは、ちょっと行きすぎじゃありませんか」

「どのシーンが？」

「どのシーンもです。あれは日本のポルノとしては度を越してます」

「フフフ。そりゃナマの現場を見てるからよ。あれがフィルムになれば、角度がついてるし、ボカシも入れて、編集もされるし、ちゃんと映倫をパスできるようになるのよ」

里見監督からでも聞いたことの受け売りだろうが、吟子は知った風なことを言った。

「それにしても若井雅也などという汚ならしい爺さんとのシーンは醜怪でした。彼はスタッフの中で鼻つまみでしたよ」

岩見にしては勇気ある発言だった。

「アッハハハ。あんた、嫉いてんの」

「そうじゃありません。一観客として、見たままを言ったんです」

「でも、あの窪寺を責めるところ、あすこは

よかったでしょう。あんたの好きそうな場面だと思ったから見せてあげたのよ」

「僕は、あれが公開されるのかと思ったら、ハラハラして気が気じゃありませんでした」

「アハハ、取り越し苦労するわね。そんなことは監督さんに委しとけばいいの。あんたも今度、映画に出ない？ 監督さんも言ってたわよ。佐戸崎は嫌いだけど、あんたは気に入られてるんだよ」

——とんでもない、まっぴらだ——

あれだけ人を好くしてれば、気に入られる、かもしれないが、有難迷惑だ。

とは思ったが、吟子にジッと見つめられると、ジーンと頭の蕊が、しびれてきて、まぶしそうに視線を足元におとした。

吟子は岩見の視線を意識して、ソファに腰かけている足を高々と組み替えた。スカートの中の暗く、ほの白い内股を奥の奥まで覗かせた。

「フフ、ここへおいで、タカシ」

魅力のある足だった。魅きつけられるように吟子の足元に座った。吟子の白い足が伸びて、岩見の肩にかかり、グイと足の間に、はさみこまれた。

「ねえ、いくらか、貸してくれない。ここん

とこ、お小遣いに不自由してるんだよ」

温かい腿の肉で、頬をピッチリと、はさんだ。白いパンティからムンムンと女の匂いがただよってきた。

「あの、あなたにパトロン候補者がいるってのは、ほんとですか」

前々から佐戸崎の言ったことが気になっていたので、岩見は勇気を出して質問した。

「ああ、アレ。あんなもん問題じゃないよ」

二、三、質問してみると、どうも佐戸崎の言っていることと、人物も条件も違う。要するに、デマだということが確かめられた。

「佐戸崎が、そんなこと言ったの。フフフ、それを真に受けるなんてあんたもバカだね。ねえ、いくらか、お出し。そうすりゃ、パンティを脱いで可愛がってやるよ」

岩見はマドンナの、あけみを想い出した。

金を取ってプレーする——それでは全く商売女のやり方ではないか。

岩見はこれまで吟子をレディとして、ずっと高いところに置いていた。もちろん金のために色気も売るが、あけみのように全くただ金のためにやるというのではなく、吟子の場合には「芸術」が中に、はさまっていた。

ただパンを得るためだけのあけみが、トー

ストとすれば、吟子はパンの間に「芸術」という中味がはさまれているサンドイッチ——そんな感じに受け取っていたのだ。いまは、やむを得ずエロチックな演技もしなければならぬが、やがては高い次元の女優として完成する素質をもっていると信じていたのだ。

それが、あんな愚にもつかない三流プロのポルノに出て破廉恥な演技を監督の命ぜられるままにやり、すでに過去の人となった若井雅也などの相手役になって得意になっているようでは、彼女の出世は、おぼつかない。

しかも今「金を出せ。金を出せば、お色気売ってやる」と露骨に言うようになっては場末のお色気バーのホステスと、なんら変りないではないか。

「いくらぐらい、入用ですか」

「そうね」

吟子はガッチリと岩見の顔を太腿で締めながら、値踏みをするように岩見を見下した。

「十万ばかり——五万で、いいわ」

佐戸崎を嫌いになった原因も金である。いまの吟子は、すべて金、金、金だけの女になってしまった。

「承知しました」

あけみに対するプレーは金で買った、その

場限りのものだから、非常に気安い気持ちになった。しかし吟子に対しては、金のことを口に出すさえ失礼と思うくらいの気詰まりがあった。それが、今は全く、あけみに対するのと同じような安易さになってしまった。

だが、下から見上げる吟子は、あけみとは違った気高い品位をもっていた。少なくとも外見は、あけみとは比較にならぬ高貴な容貌を保持していた。

吟子はソファから立ち上がり、岩見の顔の上でパンティを脱いだ。下から見上げると、その部分は前より発達して、逞しく大きく豊かになったように見える。佐戸崎や、ディレクターの北尾、若井雅也、それ等の男達によって、成長したのだろう。

「ホラ。この野郎ッ」

ガバツと顔の上に跨がり、顔中へ引き臼を廻すように、こすりつけてきた。

力に圧された岩見は床に仰向けに倒れた。

ふと、あの映画の時の窪寺という若い俳優が浮んだ。

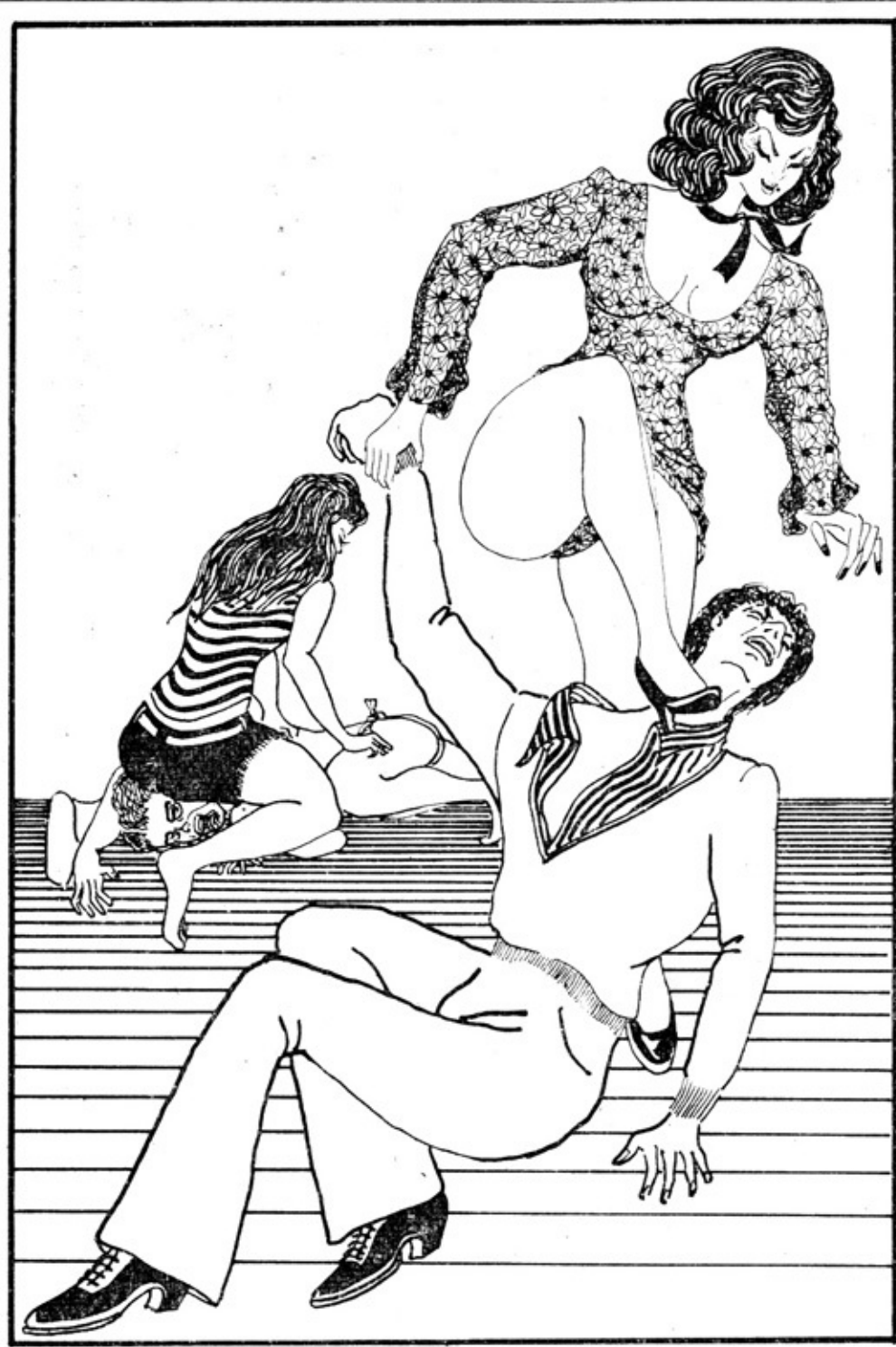
「あの映画の、窪寺とかいいましたね。あの人に特別手当を出すと言ってたけど、いくらぐらいなんですかね」

「そうねえ、三千円ぐらいじゃないの」

イメージギャラリー

『恍惚の重み』

春日田春夫



——そうか。男は首の骨の折れるくらい苦しんで、屈辱の姿をさらし、その報酬が三千円か。三千円のために、あの男は、天下に恥をさらすのか——

男は、いつも割りをくってるなと思った。だが、それに輪をかけた大バカ者がいる。

金をもらいうなら、まだいいが、苦しめられ羞かしめられ、だまされた挙句、金を巻き上げられるのだ。しかも本人は、だまされるのを承知の上である。

吟子の肌は、ブルブルと慄えながら岩見の舌を包んだ。舌に花の露がふりかかった。

——バカでもいい、畜生でもいい。俺は、これを望んでるんだ——

「どうだい、満足かい。あの窪寺という若い男は、イヤイヤやってるように見えたろう。ところが、そうじゃないんだよ。痛い痛い悲鳴をあげながら、そのくせ、いまのお前のように、あたしを求めてきたんだよ」

ギューッと内股が締まった。口からあふれた泉が、太股と頬を濡らした。

「あたしにこうされれば、どんな男だって、しびれちゃうのさ。ハハハ、どうだ。こうして息の根、とめてやろうか。この野郎」

いっとき、息が詰まって苦しくなった。吟子が心持ち、尻をずらせて鼻の穴をあけてくれる。と思う間もなく、またも暗黒の世界。今度は目まで惨酷な肉に埋もれて前より一層苦しい重圧だった。

「アハハハ、あたしの言うことは何でもきくんだよ。でないと、こうだよ。分かったか」「ムウウウッ」

息が詰まりそうになる。すると三方から締め上げていた力がスーッと抜けて、やっと水面にたどりついたように大きな呼吸ができる。その時の嬉しさ。喉をならして口の中ものを飲みこむのも、この時だった。

——ああ、死んでもいい。この女のために殺されてもいいんだ——

岩見は何も考えず、苦しく、悩ましく、そして快美な、このいつとときに酔っていた。

吟子の責めは執拗だった。

一時間近くも奉仕を強いた。

このところ男に接していない欲求不満を、岩見によって燃焼しようとしているのだ。男が相手の時は男のペースでまわる。男が火山のように爆発した時が「エンド」である。

だが、女が主体の時は時間がかかる。いつまでもいつまでも、ジメジメと猫が瀕死の鼠を弄ぶように何回も何回も楽しまなくては満足しないのだ。

「フフフ、参った？」

吟子自身も疲労を覚えたのであろう。胸の上まで尻を後退させて、テラテラになった岩見の顔を見下して、ひと息ついた。

「ヨッコラシヨッ」

ものうく立ち上がると、タオルをとってきて拭き、タオルを岩見の顔に投げつけておいて煙草をすった。

「おなかが減ったわ」

「何か、つくりましょうか」

岩見はパンを焼きソーセイジとトマトとレ

タスを切って、トリスのびんも下げてきた。

——落ちたもんだな——

いままではジョニ黒か、オールドが、いつも並んでいたのに、いまはトリスだった。

この頃はテレビの連中も、やって来なくなった。もっとも、その方が岩見にとっては幸いだったが、吟子の生活が、ひっ迫しているのが察せられた。

こうして二人きりになれたのも、久し振りのことだった。

ソーセイジをパンに乗せて色気なしにパクつく吟子を眺めて、岩見は過去の、いろいろな、できごとを振り返ってみた。

佐戸崎を嫌って自分にすがりついてきた頃の吟子が一番、女らしかった。自分を愛してくれているのではないかと思ったが、確かに「あなたが好きよ」と言った。だから一時は結婚を真剣に考えていたが、どうしても切り出せなかった。

ノーマルなつき合いに失敗したが、それでも吟子は、岩見の異常な性格を理解してくれた。佐戸崎も身を引いたし、秘かに「結婚できたら……」と考えていた時代があった。

それが、テレビに出るようになってから、

吟子のポジションがグーッと高いところに引

き上げられたように感ぜられた。「この女はもっともっと、出世する。いまに自分などの到底、手の届かないところに、のし上ってしまふ女だ」と思い、結婚は諦め、奴隷に甘んずる気持になった。

佐戸崎とのトラブル——佐戸崎がいたので、結婚どころの騒ぎではなく、いつ自分が吟子から遠ざけられるかもしれないという不安さえあった。吟子も全く佐戸崎の言いなりになっていたし、佐戸崎の頹廢的な性格に感化されてマリファナ遊びの乱交パーティーやら不規則な生活の連続——そしていつの間にか四百万の貯金も失い、マンションさえ乗っ取られそうになっている自分を見出し、あまりのみにめさに一人、悩んだものだった。

岩見の推測した通り、三流プロのポルノ映画に出たことが、テレビの仕事を失う原因となったのだ——と思った。

だが現在のように、また佐戸崎を、うとみ出し、ザワザワと落ちつかない仕事のケリもつき、失意の吟子を見ると、哀れでもある反面、親しみが深まる思いだった。

「ね、お金、頂戴」

吟子が手を出した。

「あ、いま、ちょっと持ち合わせがありません

ん。明日の朝、必ず、お届けします」

「忘れたら承知しないよッ」

いきなりピシッと頬を殴った。

突然の凄い見暮に、岩見は痛さを忘れて、
啞然として吟子を見た。吟子もまた、岩見の
顔をジッと見つめていた。

「あんた、あたしに叩かれるの、きらい？」

「ハ？」

「正直におっしゃいよ。痛いことされるの嫌
いな」

吟子が怒って殴ったのではないことを知っ
てホッとした。それなら何のためか？ テス
トしてるのか、これもサービスのつもりなの
であろうか？

「少しぐらいなら……」

「フフフ、あんまり好きじゃないようね。分
ったわ」

お礼の責め

岩見は吟子に全裸に剥かれて後手に縛られ
ていた。

「あたし縛られた男を見ると昂奮するのよ」
と言う吟子の言うがままになったのだ。

「あたしって意外に着物が似合うわね。今度

の映画で、そう思ったわ。いままで着物が嫌
いで一枚も持っていないのよ。これから着物も
買わなきゃ」

細かい菊の模様のついた長襦袢のようなガ
ウンを出してきて白い裸の上に、まとった。

ガウンの前がひろがって、乳房から臍、足
の先までを露出してベッドに腰かけ、煙草を
すっていた。岩見はその前に座らせられた。

吟子は片足を高々と上げて、岩見の顔の正
面からペタリと押しつけた。

「ホラ、足の裏を舐めろ」

岩見は足の裏の窪みをペロペロと舐めた。

「ああ、くすぐったい。お前は、こうされて
いい気持かい」

「ハイ、女王さまの、おみ足を舐めさせて頂
いて光栄です」

「何言ってるやがんだい、この野郎」

吟子は足に力を入れて蹴り倒した。

「変にくすぐったいばかりで、あたしは、ち
っとも快くないよ」

「お前が喜ぶと思って、我慢してやってるん
だからね。お前を蹴ってやった、このおみあ
しに、お礼を、お言い」

「ありがとうございます」

「そんな遠くで言っていないで、もっと、こっ

ちへおいで」

岩見は芋虫のように膝で、にじり寄った。

吟子は岩見の髪を掴んで足元に引き寄せ、
肩に両足をかけて太腿で首をはさんだ。

「ねえ、あたしに足蹴にされるの、嫌い？」

吟子は一回一回、好きか嫌いかと、聞いて
くる。だが、だしぬけに聞かれても返事の、
しようがなかった。吟子は岩見の気に入るこ
とをしようというつもりなのだろうか？

事実、吟子は、その通りだった。

前に佐戸崎が言ったことがある。

「あの野郎を可愛がるには、これでもか、こ
れでもかと痛めつけてやることだ。そうすり
ゃ、奴はヒイヒイ言って喜ぶんだ。マゾの野
郎なんて、そんなもんなんだよ」

それをそのまま信じて、忠実に実行してい
るのだった。だが果たして、それがほんとう
か。岩見の気持を確かめたい——という気で
やっているのである。

「そんなに僕の気持を、お考えにならずに、
あなたの思う通りのことを、おやりになっ
て下さい。僕はどんなことでも従いますよ」

岩見の口調は、抗議するような、きつい響
きが、こもっていた。それは——

——五万円というお金のために、吟子は僕の

機嫌をとるようなつもりで、やっている——
そのことに対する反発だった。岩見は過去に、金のからんだ場合の吟子の態度を想い出していた。

最初、アパートをみつけて部屋代や権利金を払ってやった時、吟子はホテルへ誘って、「これはお礼という意味じゃないのよ。あなたが好きだからなのよ」と言った。あの時は半ば、それを信じたが、いま想えば、あれは「お礼」のほかの、なにものでもない。

競馬で当てたと三万円、渡した時、身体の調子の悪いのを無理してプレーしてくれた。そのためにメンスを浴びせられるというハプニングまでおきたが、あの時も「お礼」だ。所詮は「マドンナ」のあけみと同じに、金のために、つき合う女なのか——

そうは思いたくなかった。内心は金のためであっても、吟子とあけみとは、全然、違う。三万円の金を渡そうとした時、最初は、なかなか受け取らなかった。あけみなら、よだれを垂らして、とびついたであろう。歌の勉強をする資金にと三十万やった時も大して嬉しそうな顔もせず悠然と受け取った吟子。「お礼ではない」と、くどく断った吟子。吟子にはそうした気位の高さがあるのだ。

それが虚栄であるにせよ、いままでの吟子には、そうしたプライドがあった。

「お金、頂戴」などと手を出すような、はしたない、まねはしなかったのだ。自分の機嫌をとりながら責めるというような卑屈さは、これまでは一度もなかったではないか。

そんな過去のことが一べんに想い出されて岩見は抗議めいた強い口調になったのだ。

太腿に、はさんだ岩見の顔をジッと、みつめていた吟子は、

「そう、分かったわ。あたしの思い通りにやっていたんだね」

と頬にサジスチックな、ひずみを見せた。

——そうだ、それでいいんだ——

唇を、ちよっと、ゆがめて嘲った時の顔は

岩見の最も好む、吟子の魅力だった。

「こないだの映画で、あの窪寺を縛って責めるところ、あの時は、凄く燃えたのよ。あたし、縛るってことに興味をもったのも、あの時からなのよ」

「しかし、あの場面、ほんとに公開されるのですか。もうじき封切りになるんでしょう。ラッシュを見ましたか」

「見たくもない。先方に委してあるから」

「ラッシュを見たくないというのは、おかし

くないですか」

爾後の演技が、どのようなになっているか、実際にフィルムを見たくないというのは、その役どころか、演技に不満があるからだろう。

「ナマ言うんじゃないの。素人のくせに」

太腿に力が入って、首を締めてきた。

「ホラ、舌を一ぱいに伸ばしてごらん」

岩見は言われた通りに舌をできるだけ伸ばした。それでも届かない。

「アハハハ、一ぱいに伸ばしてそれだけの長さ？ アハハハ。舐めたいか、舐めたいか」

岩見が首を前に出そうとする。吟子の太腿がグッと締まってブレーキをかけている。岩見の両頬が極端にこけて、四角い顔が細おもての顔に変形した。

「痛い？ これじゃどう？」

吟子は、両股に思いきり、力を入れて締めあげた。

「ウウ、ウウッ」

「アハハ、苦しい？ いい気持だわ。あの窪寺を責めてる時も、あいつ、痛い痛いって悲鳴あげるのよ。テストの時は痛いというに加減してやったけど、本番の時は勘弁しなかったよ。あの時は、じびれちゃったよ。お前なら、どうかな。我慢できるかしら」

ベッドから立った吟子は、岩見をベッドの足の傍らへ持って行って、ベッドの端に頭をのせさせ、その上から跨がった。

「ホラ、こういう風にやっただよ」

首が直角に捻じ曲げられた。焦らしに焦らされたものを与えられた喜びも束の間で、首の骨がギシギシと、きしむほどの重圧が加わってきた。

「ウフフ、どう、嬉しいかい。コラ、嬉しいか、苦しいか、どっちなんだい」

この程度なら何とか我慢できると思った。

「やっぱり、あんたの方が、あいつよりタフだよ」

食欲に舌を求めるために、更にググッと重圧が加えられた。

二、三分ぐらいは我慢していたが、五分を過ぎる頃から、猛烈に首の骨が痛んできた。

「もうそろそろ感じてくる頃だけだね。どうだい、快い気持だろ」

苦悩の表情が露れてきたのを見た吟子は、追い打ちをかけるようにグイグイ両股で首を締めてきた。

「映画の時、本番では二十分も、あいつは我慢したんだよ。もっとも、あの時より、今の方が手加減なしにやっただね。さあ、ど

うだッ！ 苦しいか。この野郎、この野郎ッこれでもかッ」

ぐんぐんバウンドをつけて、のしかかってくる。岩見は痛さに涙が出てきた。

「アハハハ、苦しいか。もっと、苦しめてやる。こん畜生ッ、これでもかッ」

苦痛に耐えていると、こんどはジーンとしびれてきた。その瞬間、何とも言えぬ快感が、首から脳天に向かって走った。

「この野郎ッ、くたばっちまえッ」

唇をゆがめて吟子は、益々荒れ狂った。

だんだん意識が、もうろうとなってきた。

それでも舌だけがピクピク動いていた。

何回か「峠」をのぼりつめた吟子は、顔中一ぱいにふさいでいた身体をずらせて岩見を見ると、白目を剥き出していたので、我に返ったように股の力を抜いた。

「タカシさん、タカシさん。どしたのよ」

身体をどかし、ピシヤピシヤと岩見の頬を叩いた。

「あ、ああ、吟子さん」

ようやく意識をとりもどしたが、デク人形のように、首は不自然に上に曲げられたままだった。

「ああ、よかった。気がついたのね。あたし

いつも、こうなのよ」

——あした此奴が五万円、持ってくる。気が変らないように十分に堪能させてやろう——というサービス精神から出発して、やっている最中に自分の方が堪能し、夢中になってしまふのだ。

そのことを言ってるのだった。

岩見は疲労の極に達していた。首筋は、まだジーンと痺れていて、鈍痛が時折り、おそってくる。それが、いまでは快いものに転じていた。

——ああ、しあわせだ。吟子さんと二人きりの世界だ——

佐戸崎も、吟子の周囲に群がる他の男達もいない。そんな中でのプレーは、どんなに苦しくても、岩見にとってはとても楽しいものだった。

——この楽しさが、いつまで続くだろう——

岩見の脳裡から消え去らぬ不安だった。

それはやがて間もなく実際に現れて来た。

佐戸崎——吟子——岩見

この三者の關係にカタストロフィが訪れるのだが、それは三人が三人、想像もつかない結果となって現れるのである。

(続く)

ハワイ・ポルノ紀行

『デーブ・スロートとアメリカポルノ』

長谷田 亀治

七月下旬、小学校五年になる長女を連れて四泊六日の短いハワイのバカンスを楽しんできました。

娘を放りばなしにしてポルノ探究に馳け回るわけにもいかず、はなはだ窮屈なバカンスでしたが、それでも、まずまずの成果を収めることができました。

北欧ポルノ紀行から、ちょうど一年。かいま見たアメリカ・ポルノの現状を、綴ってみました。

ホノルルで発行されている「ワイキキ・ビーチ・プレス」(日本語版)は、ハワイへやってくる日本人観光客にとって、かっこうのガイドブックといえるでしょう。

この新聞には、たくさんポルノ・ショウプの広告が掲載されていますが、目を引いたのは、かの有名な「デーブ・スロート上映中」というアクアリウス劇場の広告でした。

デーブ・スロートといえば、ご存知の方も多いと思いますが、ポルノの最高傑作として全米にセンセーションを巻き起し「あまりにもワイセツ」と、裁判沙汰にまでなった、いわく付きの作品です。

評判をきいた日本の、ある業者が輸入して公開を計画しましたが、全編これものすごいシーンばかりとあって、ボカシやハサミの入れようがないと涙を飲んで、あきらめたという話も伝わっています。

かねがね話のタネに、ぜひ見たいとは思っていましたが、まさかホノルルで、その機会が訪れようとは夢にも思いませんでした。とるものもとありあえず、かけつけたことは、いうまでもありません。

デーブ・スロート(深いのど)は、そのタートルのとおり、のどに性感帯があるフッカー(売春婦)の物語です。

彼女はカント(膣)やアス(肛門)を使っただけでは、どうしてもクライマックスに達しないのに、ブロージョブ(尺八)では、それが可能という特異体質の持ち主なのです。スラングが、ふんだんに使われ、会話の五分の一も理解することはできませんでしたが

この種の映画に、そんなものは、まったく不用です。

彼女の可愛い口に20センチはあろうかというものが次第に吸い込まれていき、ついには二つのゴールデンボールまでが、すっぽりと納まってしまふところなど、信じられないようなシーンで、とても人間わざ、とは思えません。おそらく先端は、のどを通過して食道にまで達しているに違いありません。

くらがりをいいことに隣席で、いちちゃつきながら観ていた若いアメリカのアベックの女性性が、思わず口を押え「ゲエーッ」と、あげそうになっていたのが印象的でした。画面では彼女が頭の上下運動を、くり返すたびに、そびえたったものが全容を現わしたり、完全に没入して見えなくなったりします。こんなシーンがクローズアップで、男性がイジチャキユレーションするまで延々と続きます。

四つんばいになって口を使っている彼女の背後には、さらに二人の男性がいて、彼女のカントとアスに、それぞれのものを突き立てて激しい運動を、くり返しているのです。

何度も、あげながら特訓に特訓を重ねたのでしょうか、とにかく想像を絶するテクニックです。それでいて完全にエクスタシーに達した表情で演じているのですから驚異です。でも、さすがに気管や声帯を痛めているとみえ発声が舌たらずで、声には魅力はありません

んでした。

また、二つに折りたたんだような極端な屈曲位をとらせた彼女のカントにグラスを埋め込み、ブランドデーを注いで体温で温め、ゴム管でチューチューと飲むシーン。無数の突起物のあるディルドをアスに挿入して、使い易いように拡張するシーン。滑りをよくするため、恥かしいヘアを一本残らず入念に剃毛するシーンなど、売春宿の残酷な女体調教法が、つぎつぎに紹介され、これでもか！これでもか！とばかり、息もつかせぬ迫力で観客に迫ってきます。

上映時間、一時間三十分。5ドルの料金も高くはないと思うほど、ものすごい映画でした。

主演はリンダ・ラプレスという二十三、四歳のハリウッドのポルノ女優ですが、よくもまあ、こんな特技の持ち主がスカウトできたものです。

愚妻など何度か誌上でご紹介したように、

ハワイを訪れる日本人観光客のよきガイドとなっているワイキキビーチ・プレスとアロハ



厳しい調教によって、カントとアスに同時に受け入れるダブルウェイも可能になっていますが、扁桃腺までがリミットで、リンダのようには食道までは、とてもじゃないが無理というものです。もっとも訓練次第で可能とわかれば、なにがなんでもやらせようと思えますが、果してうまくいきますかどうか……。

この映画では、おもしろいスラングが、ずいぶんと使われていましたので、もっともポピュラーなものを二、三、紹介しましょう。

全米にセンセーションを巻き起したポルノの最高傑作「デーブ・スロート」の広告



**ポルノ映画の決定版！
ノーカットの全篇です**

全米にセンセーションを巻き起こし、主演女優リンダー・ラブレスの名を一躍有名にした映画！世界で唯一つの

デーブ・スロート

特別上映
当地では他の劇場では絶対上映されません
十八才以上の大人のみ入場可能

AQUARIUS THEATRE
84 S. HOTEL ST. AT HOTEL AND FORT ST. MALL

毎日
昼12時～朝4時迄
金、土、月は24時間
オープン
PH. 538-3146

フェラチオということばは日本で盛んに使われていますが、これは学術用語ですから、むこうでこんな難かしいことばを使うと、ゲラゲラ笑われるのが関の山です。ブロー・ジョブ（吹く仕事）というのが一般的です。このテクニックは吹くというより、むしろ吸ったり、しゃぶったりするものですから、おかしいといえはおかしいのですが、日本でも「尺八を吹く」というくらいですから、日米とも、この陰語には不思議な共通点があるようです。

クリニグスはカント・ラップ（ぴちゃぴちゃとなめるの意）ですが、ベッドをとにしたような場合、クリニグスをやってもらいたい女性は「サック・ミー」とか「イート・ミー」とかいうようです。

サックは吸うとか、しゃぶる。イートは、いうまでもなく食べるです。これなど男女とも使える便利なことばです。

肛門性交は難かしくいえば、エイナル・インターコースですが、俗にアス・スクルー、またはアス・ファックが通用しています。

アスは尻、スクルーは掘る。つまり日本ではいうおカマを掘るにズバリ通じています。ファックは、いうまでもなく性行為を現わす、もっともヒワイなことばです。カントやコックは、すっかり日本でもおなじみになっています。

同じ女性器を呼ぶにもカントといえは日本のものと同じで顔が赤くなりますが、プシといえは子猫、毛の生えた、やわらかいものとなり、ずいぶん可愛くきこえるから不思議です。

閑話休題

デーブ・スロートを上映しているアクアリウス劇場はダウン・タウンの中心、ホテル・ストリートにあります。

この付近は戦前、太平洋を日米の豪華客船が往き来していたころ、波止場に近いホノル

ルの中心街として栄えたところだそうですがジェット航空機全盛の現在では、ワイキキに繁栄を奪われ、火の消えたような、さびれ方です。

しかし、クイーンズ・ストリート、キング・ストリートから南北のホテル・ストリートにかけて古いホノルルの情緒が残っており、どこからでも有名なアロハ・タワーが望めます。

ポルノ・ショップ、ライブ・ショーの常設館、映画館、シーメン相手のいかがわしいバーが軒を並べ、夜は変質者が、うろうろして治安も決してよくありません。

ハワイの旅行社のガイドたちは「ダウン・タウンへは昼間でも一人では行かないでください。まして夜は絶対ダメです」と口を、そろえて強調しますが、これは、いささか「アツもの」にこりてナマスを吹く「愚に近いようです。

ホノルルに限らず、ヨーロッパでも日本でも、夜の一人歩きは物騒なものと相場が決まっています。裏通りへさえ行かなければ、そう心配するほどのことはないようです。悪くカンぐれば、旅行社がダウン・タウンへのナイト・ツアーで、がっばり、もうけようと、ことさら観光客の一人歩きを禁じ、恐怖心をあふりたてているのではないかと思いたくなくらいです。

ちなみに一人のなら、日本人相手の豪華なホテルが建ち並ぶワイキキのカラカウア・アベニューからバスを利用して(25セント)ダウン・タウンへ行き、実演と映画を楽しんでも8ドル程度で済むのに、旅行社のナイト・ツアーに申し込むと20ドルも、とられます。

ライブ・ショーは数軒の劇場でやっていますが、昨年も紹介しましたように、どれもこれもお粗末で、お話になりません。夕方の六時から夜中の十二時まで、毎日六回、年中無休で同じカプルが出演しているのですから、中味を期待する方が無理というものです。むしろ本格的なインサートは行われず、いろいろな体位をとるだけのものです。昨夏、ストックホルムで観たものとは比較になりません。もっともポルノ・ショップで売られている8ミリ映画は、かなり充実していました。昨年一月、妻にせがまれて当地へきたときは、北欧の複写物が、はん乱していて、がっかりさせられたものですが、今回はアメリカ本土で製作されたニュープリントが山積みされていました。

ある店の主人(中国人)と30分ばかり話しましたが、これらの映画のプロダクションのほとんどが、ポルノのメッカといわれるロサンゼルス周辺にあり、太平洋岸の各都市の厩舎(売春宿)へ牝馬(女)を送り込んでいる組織と密接な関係があること。厩舎へ送られ

て、まだ日の浅いピチピチした美しい牝馬をピックアップして出演させていること。とくに「アダルト・シネマ・コーポレーション」(ACC)の作品が群を抜いていること——などを教わりました。

ACCは、いかにもアメリカ人好みのハデな美貌のプロポーションのいい牝馬を使っています。人気の秘密は、これらの牝馬たちを御す調教師(男優)のものが想像を絶するほど偉大な点にあるようです。

この男優はジョン・ホームズというアメリカポルノ界きっての名物男で、通称「ビッグ・ジョン」と呼ばれています。

ACCにスカウトされ、専属? で出演している、牝馬たちを、さんざん鞭り抜いています。なにしろ作品のメインタイトルが「ビッグ・ジョンNO1」とか「ビッグ・ジョンNO7」とかいうように主演男優の名前になっており、肝心の映画の内容は「ザ・バージン・ネックス・ドア」(隣のドアの処女)「ハリウッド・スターレット」(ハリウッドの若手女優)「ウェスタン・ラースト」(西部の欲情)「ラージ・アスホール」(大きな尻の穴)など、小さくサブタイトルで現わされているのです。

まさに主客転倒、いかにジョン・ホームズの名前が売り物になっていくかが、うかがえます。ビッグ・ジョンのものは、正真正銘、

「伝言板」○本誌へ寄稿された方、投稿された方、モデルに志願された方、読者通信を寄せられた方々、住所氏名は絶対他へ洩らすようなことは致しません。故に安心の上、通信をお寄せ下さい。尚、手紙の転送や郵送などはお断りしております。まい限りの原則として取扱いは致しておりません。御用件は電話による理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。電話連絡が必ず必要の際は、当方からその旨を記してお返事申し上げます。

長さ約40センチ、ヒザ頭付近にまで達しており、太さもピースの缶くらいは、じゅうぶんにあります。アメリカの肉屋の店頭に、ぶら下っているブローニ・ソーセージそっくりです。

これを見て驚かない人は、おそらくいないでしょう。この化物の相手をさせられる牝馬たちの苦痛は推して知るべしで、牝馬は、のた打ち回っていました。見るからに痛々しい感じでした。

それに、これくらいになりますと、インサートしたままポーズを変えることなど、お茶の子さいさいで、アクロバットのような極端な姿勢をとっても逸脱するようなことはありません。

このビッグ・ジョンの、いま一つの特長はフィニッシュは必ず牝馬にブロージョブを強制し、その口の中へイジャキュレイトするこ

女 相 撲 ノ ー ト

(2)

雄 松 比 良 彦

文 と 画



民俗女相撲の分布

中山太郎氏が早く指摘しているように、民俗女相撲の地理的分布は注目すべきものといえる。わたくしの知見の範囲では、三重県下において一種の仮装行列のようなものが催された記録をのぞいては、すべて東北と九州に限られている。この二地方は本邦の北辺と南

辺であり、中間地帯には知られていない。

今井・明石両氏の扇田の報告以来女相撲は民俗学の方でも一応は注意されているので、昨今のように日本全土にわたっての民俗調査が多数、公刊される状況のなかでは、何らかの形で（もしあるのなら）出て来てもよさそうなものだが、民俗学界から報告されているのは上記、扇田及び、その附近（S七）、その東北方の毛馬内（S十八瀬川清子氏）、それからるか九州にとんで背振山麓のもの（S四十六北九州大学民俗研究会）、及び、佐賀県杵島郡東松浦郡一帯に分布するとする市場直次郎氏の報告（「日本の民俗」佐賀）のみである。その他の地誌、報道などで他の例を補ってみても、最終的には秋田、山形、岩手の東北地方と、佐賀、長崎の九州地方に限られてくる。もっ

とも民俗報告にも、いろいろあり、ある習俗が、その地方の報告書にのっていないからないのだ、とはいえず、報告者によって関心のもち方が、ちがう。

各県教委の「緊急報告書」は大体、全部出ている様だが、中央で指示した公式的なパターンで報告されており、細かいニュアンスを全く伝えていないものが多い。もちろん「女相撲」という、民俗調査項目は指定されている筈もない。「日本中を聞いてまわらなくて」というような事を、かつて小文に書いたのは、こんな事情であるが、一方「この地方に女の相撲があります（した）か？」というしらべ方は「誘導的」で、民俗学者は、やらない方法であろう。結局、報告者・調査者が女相撲という特別の民俗に関心をもってしらべたかどうかにもよる。この点「雨乞い」という、民俗学上の重要項目に、さいわいにして関連しているのだから、かなり注意されて

はいると思われのだが、その雨乞い自体にしても、各地方の民俗報告の諸書の内容は精粗バラバラである。民俗文献を全部、集めても、日本全国の雨乞い習俗地図は出来ないように思う。報告されていない地方には、特記すべき雨乞い習俗がないのかというと、そうではなく、その後のくわしい報告が出ると、きわめて面白い風習が報告されたりする。この点、「日本の民俗・福島」の岩崎敏夫氏が、雨乞いには女相撲もあること、しかし当県では、その事例がないことを明確にのべていられるのはクリアである。こんな次第で、東北九州以外の地になくとも、なかったとも、断定は出来る筈もないが、現在の資料から考えてゆく他、方法はない。公的な報告書以外にもあらゆる情報をしらべて行けば、女相撲などは、どこかに顔を出している筈で、やはり実際、この二地方にしか知られていないとみてよからう。

さて、これを見とめるとして、

一、なぜ本邦の北辺と南辺のみにあるか

二、その起源や関係はどうか

などがある。民俗学の方面では、このタイプ、つまり、東北と九州のみにあって中間にない、という習俗や方言が、かなり多く知られているらしい。有名な柳田氏の「蝸牛考」以来、方言や文化の「周圏説」が論じられ、賛成も批判もあるが、ある中心（京、大阪、

江戸などが多い）から同心円的に波及、又は存在しているというパターンであって、その要因のひとつとしては中心から放射的に（水面の波のように）伝播してゆきながら、いろいろの局所変形をうけている、というものである。日常、親しまれている事物の名詞などは、日本全国すべての土地で、今でも採集出来、その異同を分布図にして、しらべうる。全体に、くまなく存在している同一物の名の異同などには有力な考え方だが、こういった同心円の波及が、本土の北辺と南辺に行きついて、その両端のみに、その習俗が保存され、中間は皆、消えてしまうという状況を考えうるためには、なぜ端には残り、中間は残らぬかということに關する考察がある。民俗学の方では、この中間消滅、周端保存のケースが、いくつあるらしいが、われわれシロウトに理解しやすい話ではない様である。赤い泥絵具を水にといて、和紙の上に一滴、落すと、にじみひろがって、乾いた水滴のあとには色がなく、跡のフチのみ、赤く染まっているような感じかもしれぬが、人間のいとなみにも、こんな事が、あるのだろうか。かりに民俗女相撲が、このパターンで東北と九州にあるのなら、その発生中心は、やはり京、大阪ということであろう。あるいは



江戸かもしれない。嘉永年間の職業女力士団は尾張からも出ているから、中心はどここと、細かくいわなくてもよい。この周辺残存、中間消滅の理由附けのひとつとして「行きどまり説」とでもいうようなものがある。たとえば

ば日本のように、西方から、つぎつぎと文化が伝わって来るが、それを更に東へ受け渡してゆくことのないアジアの最東辺では、いろいろの文化が消滅せずに（変形はするが）保存されやすい、というような事らしく、これを、いささか狭いが日本国内にあてはめると上記のようなパターンになるらしい。伝わって来たものを又、隣へ受け渡し出来る内陸部には残らない、という理由が今一つ、よく判らぬが、帰納的な学説かもしれない。女相撲などは、柳田氏のいう東北と九州の女性の氣質の相似点ということで、特にその辺にキャッチされているかもしれぬ。北海道は、やや異境とみての話。

ある種の伝播者、いわば文化搬送者としての、いろいろの職業の男女の旅人たちによって大小の文化現象が運ばれるのが多く、土地の地元の人々が局所的に隣地へ隣地へと伝えてゆくよりも重視されている。周囲説をとるなら、女相撲習俗の搬送者は何者か。菅江真澄の文などにも現れる法師たちか、又は他の男女の旅人たちか。あるいは、もっと直接に女相撲興行そのものの地方巡業があったか。

江戸期の女相撲団が地方巡業したという資料はない。ある本に寛政度にあったとかいっているが、根拠は示されていない。そもそも女相撲のような趣味的なものを、わたくしのように、あまりマツトウに調べるのはボクネン

ジンの所作であって、各大人たちは悠々とホラもまじえて書いておられる記事も多いにちがいない。しかし、いくら趣味的といっても喜多村信節をはじめ、客観的なものがないと困る。はじめから時も処も内容も、自由なイメージで創作する小説とは、ちがうからである。嘉永度の女相撲団は尾張から大阪、江戸とまわっているらしいので、地方へ出た例もあるかもしれない。

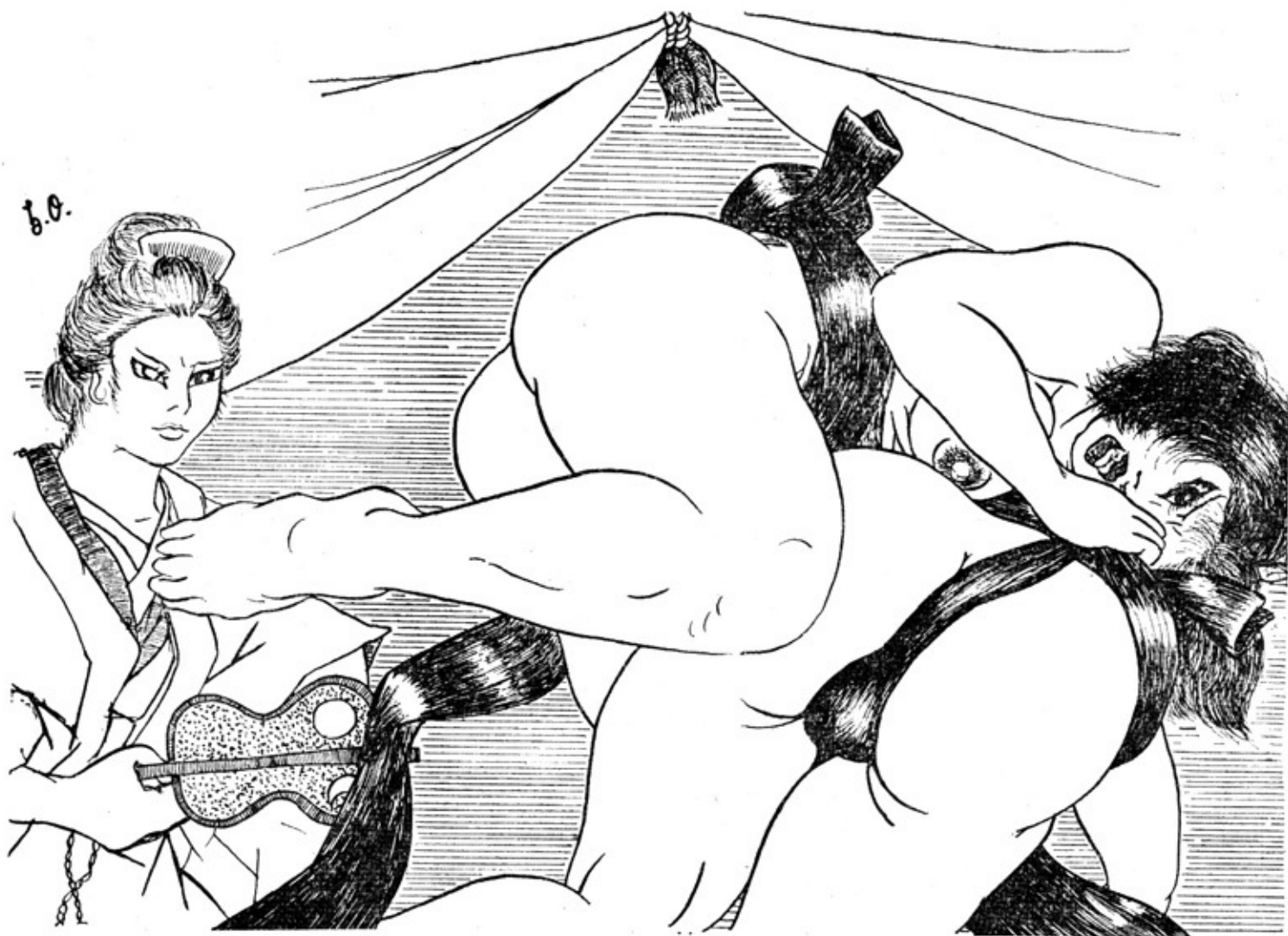
以上のような周囲説的な見方は、その帰結として、女相撲は古代や中世から各地にあったものではないこと、その発生は近世であり大都會での興行女相撲をモデルとしたものであるというような方向にゆくと思われる。

雨乞い女相撲が、その起原由緒を全く持つていないのに、それ以外の催しものとしての民俗女相撲のほとんどが、起原の説明や伝説を、ともなっている。しかし、これらの説明や言い伝えと称するものは、近頃、注目されたり行事の余興に出たりする上で、必要に応じて作られたものもあると思う。雨乞いはマスコミにのらぬ生活上の行事であるから、起源など考える場面もないであろう。民俗調査は何しろ地元の方々に語っていたのだから、せつかく、してくれた話を「最近、作られたもの」とか「古伝ではない」とかは、資料の上で結論される場合でも公表しにくい。語り手は古伝と信じているのだから。作られ

たなら作られたで（太子や和泉式部や平家落人の諸国嘶のように）いつごろ、どういう動機で作られた話かということも大切だが。

東北のものは今のところ、そういう由緒はなく、九州のものに多い。どこのはどうと詳しくあげるのは伏せさせていたでいて（資料を調べていただければ判る）、神功皇后以来とか、豊太閤、加藤清正以来とか、あるいは藩主の上覧に供したのが、はじまりとか、その年代設定も新旧がある。波多津のように「藩政時代からあった」という表現もあるが、これは当然ありうることで、事実であろう。秋田県下、とくに扇田附近の報告にあるような南部・仙台地方の職業女相撲団が、雨乞い行事に呼ばれて各地をまわったというのは、記録にのこる明治以後の高玉・石川系統とも思われ、かならずしも江戸期とはいえない。

周囲説的な見方に対して別の二つの見方が当然ある。ひとつは東北か九州の一方に起源があり、それが中間を飛び越して伝わったとする考え方。今一つは、もっとも素朴自然な考え方だが、東北は東北、九州は九州と無関係に別個に発生、伝承されているとする考え方である。前者については今、述べるべき何らの資料も仮説もない。後者については、民俗学では（公式的にはいえぬが）大体、注目すべき同じ習俗が遠隔して存在する場合、それらは個別発生とは見ないで調査を要するも



のとされている様である。
雨乞いの目的の女相撲が東北にも九州にもある反面それ以外の、いわば娯楽的催しとしての、それも双方にある。その他、お座敷芸的なものも双方にあるらしい。東北の特色（九州にな）は、はっきりした職業女相撲団を誕生させていることであろう。このように多様化して存在していることは、両地方での歴史的時間の経過や変遷も、大体、似たようなものなのではないかと思わせる。つい昨年（S四十八）の秋にも、婦人会の女相撲踊りが人気をよんだ、と佐賀新聞は報じている。

記の黄表紙のことなどから、ここまでは下らないと思っているし、読売新聞の例の記事にもあるように明治の中頃、斎藤氏が組織した女相撲団は、「女相撲に似た興行」をM十六に山形で見てヒントをえたというのだから、すくなくとも明治初年に東北地方では「女相撲に似た」興行があったらしい。この似たというのがいろいろ意味をもっていると思うのだが、維新政府のやかましい干渉をのがれてこの辺を興行していた本当の女相撲団のことなのか、又は見世物女力持などの変化したものなのか、明治時代の仙台あたりの興行メモは、しらべたことがあるが全くわからない。とにかく江戸・幕末から明治の初年にかけて職業女相撲団が地方をまわっていたことは十分、考えられることである。他の一般的な興行物、見世物などの巡業の実態が今少し、わからないと何ともいえない。

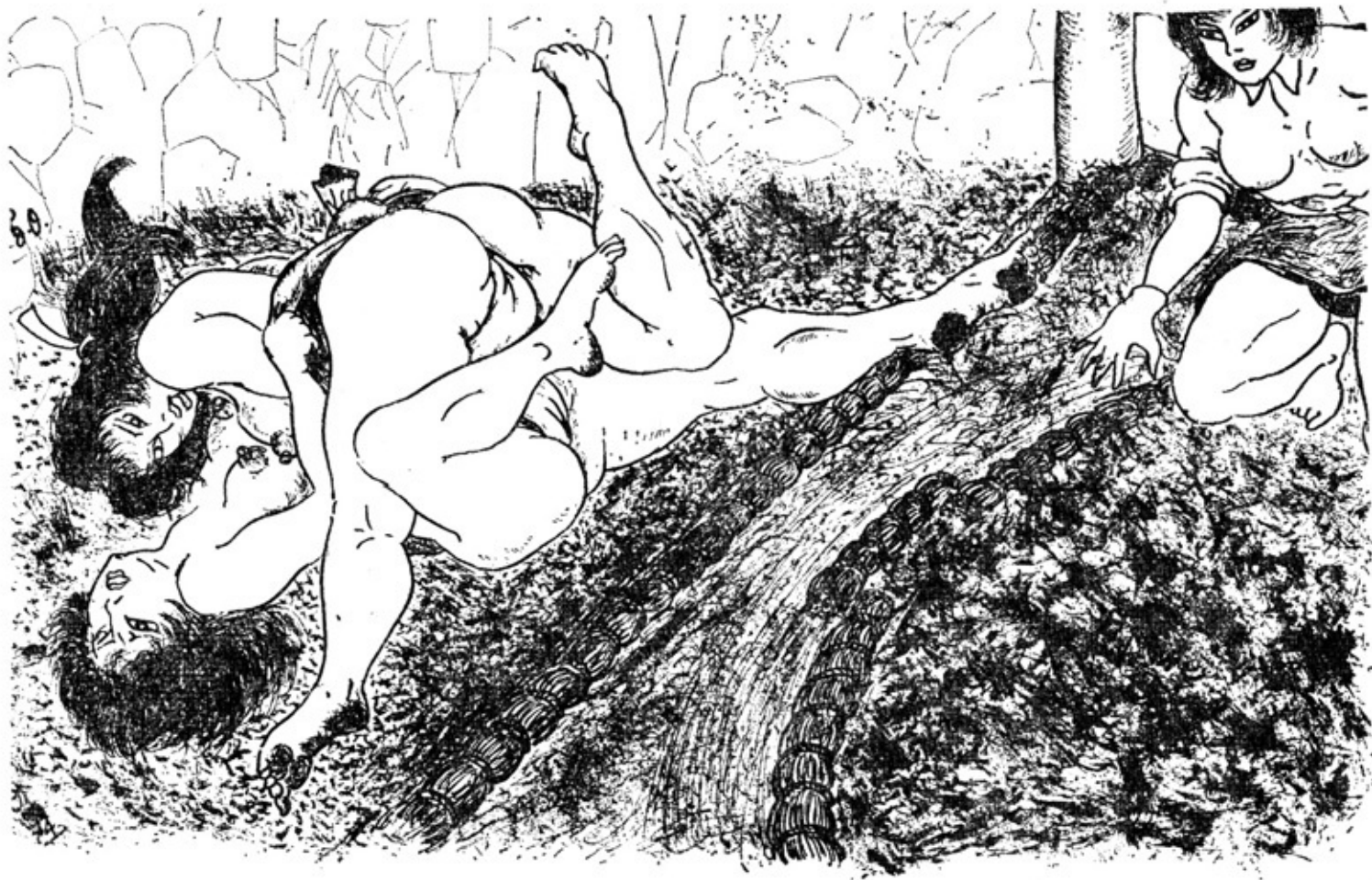
扇田の報告なども今井・明石両氏のものが繰り返し繰り返し引用、孫引きされるだけであって、現地で新規に調べたのは瀬川氏の一文のみである。九州のものが佐賀県下に集中しているのは特徴的だが、此処は近年、北九州大学の学生OBの人びとが背振山麓を調べた報告が出て、従来、知られていたよりも、はるかに多くの村々に雨乞い女相撲のあったことが明らかにされた。東北についても、こういう調査が欲しい。

前記の高玉・石川巡業起源説の根拠として各地の民俗女相撲の女力士のいでたちが半シヤツ、パンツに相撲褌というものが多いという見方もある。明治以後の職業女力士のそれと一致しているというのである。しかし、これについては、各地に伝承される女相撲の力士のいでたちを、もっとくわしく述べねばならぬが、要するに、いろいろであったのが、明治以後、近年の文明開化と人びとの感じ方の変遷に応じて自然に考えのおちつくところがシヤツ、パンツ、褌となるというだけのことともいえるのであり、報告されている民俗の中には、全裸に前かけだけだったものが着衣にかわったとか、上半身シヤツ、下半身褌だけとか、上半身も下半身も長いシヤツやパツチ様のものをつけ、足袋まで、はいて褌をしめるとか、褌はなく帯のようなものを着衣の上にまくとか、いろいろであって、これはしかも密接した隣の地区と全く異なっている様に見える（話者の年代のちがいかもしれぬが）。見物も男は、みとめないとか、みとめるとか、娯楽的とか儀式的とか、いろいろである。先般の拙文でも申したように、江戸期興行女力士のいでたちの変遷も、ズバリとは判っていないのである。わたくしの想像では江戸期興行女相撲は、幕末まで全裸に褌一本であった。それが明治に入ってから施政者や社会の風潮で都会地ではマズくなり、地方では

この姿で興行を続けた。そこへ例の斎藤氏が、着衣に褌という新着想で都会へも乗り込める形にして、いわば再興を試み、このいでたちが以後百年、昭和の戦後まで生きのこったのだろうと思う。民俗女相撲の方については、こういった事は、まだわからない。

なお、個別発生説は採用されないと上に述べたが、女相撲のようなものは、いろいろ特殊な要因もあるから、東北と九州のような（男の）相撲のさかんであった土地に、何らかのヒントがあれば局所的に発生、伝承されたという考え方も、これらの地方の相撲一般史、常民生活史、武家の生活などを、もっとくわしく総合すれば、ありうることはある。

女子が褌をしめる（女性の腰巻も褌というが、ここでは、本当の男の褌）という風俗は、海女の古俗にあり、炭坑に働いた女性たちも（知られていないが私的な記録がある）太目の褌を、がっしりとしめていた。半ズボンのようなものにかわったのは後のことである。這う姿勢のためうしろだけおった時代もあるという。何しろ高温多湿の重労働であっ





たから。女性の禪というのは特別な風俗ではあるが、このように一部の仕事に従う人びとには用いられていたものである。

秋田経済大学雪国民俗研究所の井上隆明氏編の「秋田民俗事典」(S四十)の扇田の雨乞い女相撲は「興行」という語が使われていて、瀬川氏の報告のような地元の主婦たちの

ものではないようにみえる。これは明石・今井両氏の文にも、すでに見えている。男は見られないとも記してあり、昭和十五年ごろ、この相撲には「猫また」という極手をふくめ四十九手あった由。「猫また」は人気力士の名前で、この女力士が相手のまたに首を入れたつぎ上げて倒したのが由来、とある。この

「猫又」というのは高玉組の女力士のシコ名である。従って高玉組を雨乞いに呼んだとも考えうる。「猫又」は、しかし高玉組のみではなく、他にもあったかもしれぬが。同事典はこの女相撲は戦争中は曲芸に転向し、以後はすたれた、とあるので、石川、高玉等の職業女相撲団をさしていると考えてよいと思う。女相撲団の変遷のこういった面は、小沢昭一氏の著作にも見えている。

そ の 他

民俗女相撲に間接に関係あるものとしては古今著聞集の高島大井子が田の水に関係した話であることや、日本霊異記の小女大女の格闘、日本書紀のそれなど、問題は、まだあるが、たとえば雄略紀には采女相撲の他に、小女と大女の格闘があり、それに接して鬪鶏つがねがあり、どちらも小女の方、又は禿つがね鶏の方が勝つのは何

かあるにちがいない。その発想は日本霊異記にひきつがれているわけだ。この辺は従来の校訂者は注意を払わず「小女と大女の対照の妙」などといったっているが、わたくしは、とてもそんな単なるレトリックではなく、古代日本人の、ある忘れられた発想か、又は、何らかの典拠があると考えている。又、今昔物語以後、大井子をはじめ海津のかね女、大井光遠の妹などの大力女が、しばしばあらわれて巴・板額となり、江戸期の女力持となつてゆく一連のつながりについても、もちろん、そういう実例があれば世人は注目するのは当然だが、やはり、われわれ日本人のひとつの関心のあり方という点から歴史学や民俗学の識者の御意見を、ききたいものである。大井子は田の水争いの話を伴う他、その名がオホイコ―ダイシ、例の諸国伝説? となつてるのが注目されるし、「大井」子と「大井」光遠の妹とは何か関係があるのかないのか、これは判らない。江戸期のいろいろの相撲文献には、大井子や、かね女が登場している。大井子の方は氏長という節会相撲人とのいきさつだから当然だが、かね女は単なる大力でなおかつ、相撲書に引かれるのは、やはり力女に対する関心のあらわれであろう。

このノートに述べたような、いろいろの問題が今後、解明されてゆけば、女闘美愛好者にとってもイメージが明確になり、面白いことと思われる。

僕に絵筆を執らして呉れた菊子さんへ

深田菊子さんに捧げるバラード

水 江 伸

文と画

深田菊子さん。

そう呼び掛けただけで、もう何故か、切ない思いがする。

長い間、捨てていた絵筆を僕に取らせてくれたのは君だ。少年の頃より絵は好きであったが、社会に出れば用がなかった。いや、目まぐるしい社会の波の中で生きるために泳いで行くのが精一杯だった故かも知れぬ。

それが奇クのグラビアで君の姿を見て僕はその美しさに息を呑んだ。僕の好むタイプの君が、乳房を背を、すらりと延びた長い足を緊縛され、見事な美しさを持って息づいていたのだ。君は頬に髪を垂らし、髪に隠れた下

の目で僕を見ていた。しばし僕は我を忘れ、本屋の店頭に立ちつくした。

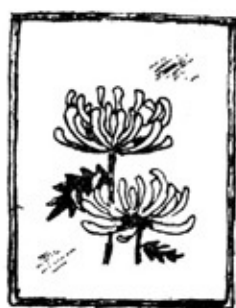
君の求める責めが塚本先生に依って開眼され、優雅な菊の咲き乱れる如く華麗に美の極致をもつて花開いたのでは、ないだろうか。

グラビアの写真が若し単なる君のヌードであつたならば、僕は君を知らずして通り過ぎたであろう。君の乳房、腰、足に緊縛の縄目が柔らかき肉を歪め、形作る曲線は、悩ましく妖しく僕の心を捉えて放さなかった。

僕は奇クのグラビアの君から吸収した美をイメージにして、僕には独自の君が欲しかった。僕は自分の部屋に籠り、君のイメージの

生き続ける中で絵筆を執った。何枚も描いては破り、僕の脳裡の中に灼きついて離れぬ君を描き続けようとした。僕は机の前に君の写真の載っている奇クを置き、何冊も繰ってはそのイメージを確かめようとした。だが、塚本先生のカメラのように緊縛の愉悦の中にある君の姿を、あのように厳しいまでも冷徹に捉える事は出来なかった。

僕は机の前でグラビアの中の君に話しかけ君を見つめていると、不思議に次々とイメージが浮んでくるのだ。そして生れて初めて投稿するための画稿を描いた。だが、的確な画法も判らぬ僕は、奇クの数多いイラストを見



……菊子のSイメー……

……ジ——貴男も責めて欲しいの？……



るうち、すっかり自信を失い、自分が恥かしくすらなってきた。こんなものを投稿したら一笑に付されるだろうと思った。
僕は一時、筆を折った。描いていたものも全部、破り棄てた。何日かの徹夜もした。一

心に描いていると、もう窓の外は朝の陽が差しているのだった。会社への出勤時刻が、来る。僕は満員の電車の中に詰め込まれ、眠らずに会社へ行った。でもグラビアの君と夜を共にし、僕は君を描いた。僕は君を描くこと

で総てを忘れていたのだ。だが実に楽しかった。寝静まった闇の中で僕の部屋だけ灯りが点き、僕はせっせと絵筆を運んでいた。イメージはテレビのシーンを頭の中に思い浮かべているようなものだ。それを現実の紙の上に描く訳だ。イメージは絵となり、その絵のヒロインは君だ。君が僕に絵を描かしてくれたのだ。有難う。でも、それらの日々が何となく楽しく充実しきったものであったか。

朝の訪れは僕をして、また社会の一員とする。満員の電車に揺られ、せかせかと会社への道を、ひたすらに歩く。仕事をしていても時々君の顔が浮ぶ。まるで初恋の日が還ってきたような気がした。僕は、また自分の部屋に入り、君との夜を過す。絵筆を動かしながら君のイメージを絵にしている時、暑さも忘れ汗の拭うのも忘れ、画用紙の上に汗が落ちて絵を滲ませた事もあった。

僕は君のイメージを絵に描き上げてしまうまで禁慾する。それは君との間に他の女が入って来ると君のイメージが毀れるからだ。テレビも見なかった。会社で眠い日もあった。寝不足だし、暑い最中だもの。だが描いたものを、みんな破いた。——駄目なんだ——。

自信をなくしていた日々、僕は、ふと奇ク

のページを繰っていた。こんな字が今時、残っていたのかと思える程、まるで国語辞典なみの難しい字が並んでいた。一、二頁、繰って書き抜いただけでも、——翻弄怯挿収縮蚯蚓痴猥凌膨蠢羞痺較虐嵌喚穿鞭——ああ何と一字一字の持つ淫靡な連想。猥虐な文字の羅列であろうと思ったが、それらの字から又しても君へのイメージが湧くのだ。

僕は君のイメージに、ここには書けないような淫らでゾクゾクするような事を思い巡らせながら耐えられなくなり、少年の悪習とされる行為に耽ってしまった事もあった。僕は諦めようとしていた心が動き出すのを、どうにも抑える事が出来なかった。グラビアの写真から君が抜け出て来て画用紙の上に貼りつく。君の誘惑と、この素晴らしい奇巧の活字に負けて僕はまた、君との対話を始めるのだ。僕はまた、絵筆を執った。ああ君との、あの総てを忘れる楽しき夕べが復活されたのだ。こうして描いた僕の絵を、一枚だけでも君に見て貰いたかったのだ。

君をして尽きる事のないイメージは次々に浮んでくる。それは絵以外に文章でも書き留めて置きたい。

× × ×

膨——

君に大きい茶瓶に満たした水を飲ませるのだ。前日から絶食していて、それに既に君の胃の中も腸の中も綺麗に浣腸で掃除しておくのだ。君はもう呻いて飲み切れず茶瓶の口を唇の中に咥えたまま、君の唇の横から水を洩らしてる。流れる水は君の乳房を伝って、乳首の先からポタリポタリ。君の腹は赤ちゃんを生む時のように大きく膨らみ、君は苦しうに肩で息をする。

そんな君を全裸で立たせて腰の後ろ、脊椎の辺りを擦ってやる。それでも駄目なら脇の下。君は「クククッ」と笑いを耐える声を洩らしながら尿意を催す。君は耐えられなくなつてトイレへ走る。トイレは開かぬ。内側から釘を打っているのだ。お隣のトイレ拝借とはゆかぬ。君は全裸だもの。又それまで持たない。僕に

「あなた、何とかしてよッ」

もう半泣きの声だ。だが君の、もう耐えられぬばかりの表情に、今そのまま、その座敷へ放水し兼ねない有様だ。

「もう駄目よ。あぁ、駄目だわ」

「何っ、もう駄目だって。そこへ？ 駄目だお座敷なんかへ」

君は転がるようにウロウロする。苦悶の色が顔に現われ、尻をぶりぶり振って。馬鹿だな、お尻、振ったって尿の量、減る訳ではないし。

「玄関へ行け。玄関のタタキへ」

君は大腹抱え、転がるようにして走る。もうお座敷へ少し洩らしながら君はハアハア息をついて玄関のタタキへ転がり込むと同時に始めた。健康な君は、それに、女盛りだからな。景気のいい音を立てて繁吹く。ついでに昨日の浣腸の影響か、後ろの口から少し伴奏も入れて。僕は黙って見ていやしない。君が如何にも快げに音立ててる時、玄関の戸をガラッと開け放してやる。僕の家は表通りだ。折柄の通行人共、思わぬ不意のストリップに立ち止まり、

「それにしても量の多いナンだな」

とか話し合ってる。あれだけの水、飲んでるのを知らないのだから無理もない。

何だって、君。自分の奥様の見れば良いつて。馬鹿だな。僕はウチの奥様の覗きに行つてトイレの床掃除するモップで顔を拭かれ、もう少しで顔に穴でも開けられる所だったもの。駄目だよ。

収縮。——

君の嫌いな物、何だい。蛇とか蜘蛛、とか
 げ、蚯蚓、すっぱん。そうだ。守宮も嫌いだ
 ろ。壁やガラス戸に、よく吸いついていてト
 カゲに似た、あれだ。背は暗い灰色で沢山の
 黒茶色の斑点があり、細かいうろこがあつて
 その腹も、また気味が悪い。白い透き通る皮
 膚を透して無数の赤い血管が見え、それが凝
 集して淡いピンク色に見えるのだ。捕えよう
 として尻尾を掴むと、守宮は尻尾だけ残して
 逃げる。自ら尻尾を切りとるのだ。

君は全裸で開股縛りにされている。両手も
 背で、きつく縛りあげられてる。守宮——こ
 の気味悪い爬虫類を一匹、君の白く円い肩に
 置く。守宮の平たく丸い指先は、君の滑かな
 肌を肩から胸へ、そろそろと這い降りる。君
 は、この冷たい爬虫が這う感触に全身、総毛
 立ち、思わず身震いする。円い乳房を這い、
 腹を這い、君の縦長の可愛い臍の辺りで止っ
 ている。君は見るのも嫌だが、やはり気にな
 る。ちらりと顔を向けた。そのグロテスクな
 形の物は君の白い腹の上にあつた。君は見る
 なり「キャッ」と悲鳴をあげる。だが守宮は
 更に動き、君の下腹部のあたりでは休み、や
 がて、おもむろに湿った処に首を納めた。君
 は、もう守宮の這う、蛇の腹のような冷たい

感触に、ピクピクと身体を動かす。

「あつ、私の身体に入ってきて来る」

それは、もう声にならぬ。どうしよう。あ
 っと思う間に守宮は急に暗い闇に入り込んで
 慌てるのだ。釣り上げた瞬間の魚が跳ねるよ
 うに。

あつ、私の中でピクピク動いている。あつ
 奥に入り出したわ。もう身震いも出来ぬうち
 にその気味悪さが、守宮の細かい、うろこに
 触れて蠢く肌から伝わってくる。

「もうお願いだから、とってよ。とって」

君は開股にした内腿をピクピクと動かしな
 がら、喘ぎ喘ぎ言う。

「ねえ、もう死にそう。捕ってよオ」

僕は脂汗の滲んだ君の息たえだえの姿を見
 て困る。どうして捕えるんだ。僕は狼狽に変
 った。明りを向けると、明りの方に這い出し
 て来る。耳に入った虫を取る事をヒントに、
 僕は懐中電燈で奥を覗いた。やっと守宮は顔
 を出して這い出して来た。守宮は、ぬるぬる
 と濡れ、懐中電燈の光に光って見えた。

「やつ、尻尾がないっ」

「何よ。どうしたの。尻尾がないなんてエ。

私の中へ残してっただわ」

君は悶絶してしまった。奴が入り込んだ時

君は驚きの余り、収縮したんだ。奴は、きつ
 と捕えられると思って、自ら尻尾を切り離し
 たのだ。尻尾が、どうなったか知らないよ。
 そのまま残ってるかもね。

凌。

銀杏の枯葉が一葉、二葉、音もなく舞う御
 堂筋の一角に、僕は多くの人が群がっている
 のを見た。人垣かきわけ前に進むと、君が地
 面に打ち込んだ杭に、右左の片足ずつ縛りつ
 けられ、乳房を幾重にも巻いた荒縄が、後手
 にした君を立札の杭に繋いでいる。開股にさ
 れた股間に、僅かハンケチ位の白布を掛けら
 れ、その上に、縄で股間縛りを施してある。

立札には

『刑法改正に基づき恥部を衆目に曝したる、
 この女を三日間の白昼曝に処する。揭示庁』
 墨痕鮮やかな大書である。

「まあ、きゃわーそうに。こんな所へ括られ
 て。揭示庁も、おもー切った事するでよオ。
 なんだアならんわ」

「おッ母の尻も見せやせんにイ。こげーな娘
 が曝されて、おえんのう」

人々は口々に、お国訛り、まる出しで囁き
 あい、見れば君の澄んだ瞳、平然として物珍
 しげに眺め入る群衆の一人一人を見ながら、

菊子のMイメージはあ恥かしがらずに浮気の相手にお前のパンティを舐めさせてやりな



悪びれる様子もない。

「揭示庁は、あの前覆いも取って曝すつもり
やったらしわ。それすると幫助罪ちゅうて、
連中も罪になるし。第一、揭示庁の連中、黒
い棒並べて曝し者になって見い、グロテスク

で見られたもんじゃないぜ」

群衆は総て今から百五十年も前の江戸時代
の町人の服装である。僕も気付けば着流しの
風采上らぬ絵師といった姿。半纏に褌ひとつ
の籠かき、着流し角帯、前掛け姿の商家の手

代、深編笠の虚無僧。でも一人として両刀差

しの武士は見えぬのは、戦争放棄の故かも知
れぬ。しかし舗道に駐車してる黒と白のツー

トンカラーの揭示庁の車。群集整理の役人、

曝し者の君を立番する役人。役人は総て制服

制帽、腰のベルトに黒革のピストルケース光

らせ半長革靴。現在の姿と何の変わりもない。

御堂筋の両側埋めるビルディング。淀屋橋辺

りの信号も今の姿と少しも変わらぬ。ただ役人

以外は江戸町人の姿となっているのだ。

やがて、三日の刻も過ぎたと見え一匹の黒

馬、これも制服制帽の馬丁に曳かれて着く。

馬は瘦せたものと相場が決まっているが、こ

の馬はそれに輪をかける。何せ野党が揭示庁

の予算削ったとかで、馬の飼料にも事欠く有

様、重ねて同じ予算の不足。手入する馬丁も

足らず、馬の皮膚かさかさに乾き、尻など毛

禿げて所々円い模様描く。

役人達は君の足、胴の縛りを解き、後手縛

りだけにしたまま、この裸馬の背に乗せ、こ

れより市中引廻しとなる。馬に跨がった右の

片手縛った縄を馬の腹通して更に片足に縛り

つけ、馬の首に廻した縄は君の首に、君の胴

巻いた縄は馬の尻尾の根に繋ぐ。やがてパト

ーカ先導し、君載せた馬、君の臀の、いかに

も重たげに、よろよと歩き出す。馬の後に付く役人一人。細い青竹一本、手にし、歩行緩めれば馬の尻を打つが、その音はピシリと鳴らずコチンと鳴る。馬の尻に肉なく骨に当るのであった。君は柔らかき太腿、裸馬の背に跨がったのは良いが、馬の絞肌ざらざらと君の肌に馴染まぬばかりか、瘦馬の背骨、あばら骨、ごつごつとして、乗り心地の悪い事この上もない。

御堂筋進めば道路一杯に群衆は後を追ひ、両側の舗道埋める人の波。皇太子殿下、妃殿下の御行列の如し。舗道には主婦連、ヒステリックな声挙げ

「刑法改正反対のご署名、お願いします」

片方では女子学生、鼻水吸りながら

「刑法改悪反対の署名してエ」

両側のビルの窓々から鈴成りの人々顔を出し、投げるテープの紙吹雪。絢爛豪華の花模様。中之島に差し掛かれれば折柄アベック達、肩組み合いながら君の姿見て、

「まあ可哀そうに。私だったらどうしよう」

「いいや。俺に見せる分には罪には、ならへん」

野郎の方は、もっともらしく言う。

やがて中之島から大手前に差しかかる。大

阪のお殿様や、お付きの人々見守る前を、馬は空腹と周囲のざわめきに長き頭を下に垂れのそのそ歩く。馬上に引かれる君の姿。花恥かしき白肌の折からの夕陽に、茜色に輝くのを、拳法学者で名高き殿様、御覧になり、忽然と立ち上り、

「このような人権蹂躪の姿、日本国憲法の精神に反す事、甚だし。かかる刑法ならば、余も改正に反対の所存でござるぞ！」

その声、待っていた如く、曳馬の後に続く群衆、ビル街の道路埋めた群衆、口々に「刑法改正反対」と叫び、シュプレヒコールの波は轟きとなって群衆の中を圧した。

そこへ、曳馬の後続く群衆押し分け、陣笠を冠り角棒持った学生の一団、襲来し、君乗る馬を取り囲み、中には、この機会逃すなどばかり君の乳房や臀、太腿いじくり、撫で廻す者もいるが、見るまに君の縄解き、馬より降ろす。

既にテレビの中継、始まっていて、ゲストの洋行居市市さんが、アナウンサーのインタビュに答えていた。

「どうって事ありませんが。戦争中には、まだまだ、ひどい事があったわな。それに比べ」と、今の者は贅沢でいかん。ホレ、あの馬

も我々の税金を使うとるのじゃろう。馬は、いらん。わしが曳いたるでな」

続く大野田広王さんは、大いにテレテ「女の事は僕よう知りませんので。へへへ、恥かしゅうてへへへ。もう聞かんといて下さいよ」

やがて記者団の一行、君を取り巻き、もうどうにも止らない僕の心を知る由もなく、思わせぶりの形のマイク、君の口もとに差し出し、

「お嬢さん。ご感想を」

君は澄んだ瞳を向け、ケロリとして言う。

「私は、ごく自然に振舞っただけで、何も悪い事をした覚えはないの。心の乾ききった、いや身体まで乾いてンじゃないかと思うような奥サマに毎日、虐げられている殿方のために慰めてあげたかったのよ。それを掲示庁の方々は私を裸で曝すだの、市中を引廻すとかおっしゃるでしょ。私は掲示庁の方々も、その趣味がお有りと思って。それに皆さん、好きな顔してらっしゃるでしょ。だから、したいようにさせてあげたの。だから感想なんて全然ないのですわ」

虐。――

これは、僕の体験に依る実話である。今ま

で書いた僕の馬鹿さ加減から嘘だと思ふ人もあるかも知れない。信じ難ければ止むを得ないが、決して嘘ではないのだ。

僕の子供の頃、僕の家の前に大きい塀を巡らせた邸があって、沢山の木が植込まれ中にはメルヘンの絵で見るような洋館建て（その頃はそう言った）が建っていた。

その家に僕より二級ばかり下の菊子という少女がいた。まだ僕が幼稚園にも上らぬ頃だったと思うから、菊子も二つ三つの頃であつたろう。色白の黒目勝ちの少女を見てみると幼い僕は、何か悪戯をしたくなつたに違いない。地面に這っていた蚯蚓みみずを取って少女の肩に、そっと置いた。少女は泣きもせず、じつと僕を見ていた。その頃の感覚の記憶は全くないのだが、多分いじらしい、この少女を泣かしたかったのだろう。

僕は次に少女に小便を掛けたのである。僕はそのまま家に飛んで帰ったが、菊子の家から、お叱りを受けた事はなかった。今から思えばお手伝いさんか、菊子のお母さんが処理したのか知らないが、勿論、幼い頃の事で、大人のように汚くなかったに違いないが、向うでも小便掛けられたとは思ってなかったのかも知れぬ。

そんな菊子の家へ僕が遊びに行き、奥まった部屋で絵本を見たり積木を並べて遊んだりしていたところ、菊子はお母さんのらしい赤い腰紐を持ってきて縛つてと言うのである。

僕は彼女の小さな手を僕のまた小さな手で縛つてやると、少女は自分の股にクレヨンを差してくれと言った。既に穿いていたのか脱いでいたのか今なら最初に気の付く事だが、その頃は性の意識、全くない。

僕はクレヨンの折れた短いものを挟んでやめた。それを挟むと少女のそれはゴムマリのような弾力を持ってクレヨンを、むくむくとして押し返したような記憶がある。何故か幼い頃のこの少女にある記憶は今でも蚯蚓みみずと小便とクレヨンの三つが、遠い昔の日の事を昨日のように鮮明に思い起させる。幼いなりに、何か強烈な性の意識があつて、今もその記憶を残させているのではないか。そんな気がするのだ。

やがて戦争は激しくなつて、防火演習などが日毎、繰り返され、僕の母などモンペにバケツ持って男みたいに手拭いを腰に吊り、町の辻々に設けたコンクリート水槽の水を汲み替えたり、バケツリレーの消火演習に余念がなかった。でも菊子のお母さんは、いつも見

えなかった。

「ええし（関西で上流家庭を指す言葉）の奥様に、こんな事させられしまへん」

母のみならず近所の人は、そう決めていたに違いない。母がモンペの時も夫人は、銘仙か何かの目立たぬ物を着ていたが、モンペの穿いていたのを遂ぞ見た事がなかった。その頃あった回覧板を届けに母に付いて行くと、菊子のように色白で細面での切れ長の目の優しく、今にも、なよなよと崩れそうな感じの夫人は、

「私から、お隣へお廻し致しますわ」

優しく美しい声で絶え入るように言った。

「とんでも御座居ません。配給の回覧でございますから今一寸、御覧下されば、私の方で持つて参ります」

「あら、そうですか。いつも御迷惑、お掛けしますわ。ご免なさいね」

夫人は、そう言ったものだ。子供心に僕はああいう母に抱かれたら、どんな匂いがするんだろう。考えると、甘く優雅な香りの今にも漂って来て、僕を包んでしまふような気がした。

菊子の父は職業軍人であつた。いつも姿の見えぬのは戦地に出ていたに違いない。今、

私は幼い菊子が縛ってくれと言った蔭に、彼女、いつか父と母の、そうした姿を垣間見たのではなかったかと思うのである。

昭和二十年七月。僕の住む市は、ある夜の

大空襲で灰燼に期した。僕は空襲で焼夷弾の炸裂する中を火に追われ逃げる途中で母とはぐれた。僕は見渡す限りの火の海を、とある空地に避難した。折柄の食糧増産に空地は



菊子の排泄イメージ＝二〇〇〇〇の浣腸で早く晩の美食を作っておくれ。

諸畑と化していた。市の中心の天守閣が形なく焼け落ち、市の中心部に近いその空地も、諸畑のうねの間に身を潜めるようにして沢山の人が逃れて来ていた。畑の四方は燃えさかる火の海で焼けただれ、火を噴きながら建物の木材の破片や柱がボンボンと畑の中にまで飛んでくるのだった。B 29は真紅に燃える空の下で金色に光り、キラキラとビラでも撒くように焼夷弾を次々と投下した。僕は燃える火の海の中で、昼間より明るいそこに、菊子とその夫人が居るのを見た。食糧難から多く居たお手伝いさんも、それぞれ引揚げたのか今は菊子と夫人の二人だったのだろう。

夫人は菊子を庇うように抱きながら持ってきていた夏布団を背に掛け、畦の間に伏していた。僕は何か、菊子に声掛けられるのも躊躇し、じっと菊子を見ていた。菊子も母の胸に縋りながら僕を見ていた。

やがて燃えた丸太棒の飛来と、四方の火勢ますます盛り、動かずとも肌灼く熱さが襲って来た。が、その辺りに水はなかった。熱さの故に人々は我を競い、中央へ中央へと集まり、僕は耐えきれぬ炎熱に手にした頭巾を諸畑の所々に配した肥だめに浸して被った。水と名の付くものは、それしかなかった。や

がて、僕の目の前の菊子の布団が、くすぶり初め、黒く綿の焦げるのが見えた。夫人は立ち上り布団を肥だめに浸した。焦げた辺りから湯気が昇った。火の粉は絶え間なく飛んでき、手元に濡れたものを置かぬと危険であった。しかし布団は、すぐに熱気に乾くのである。

夫人は再び、それを濡らし菊子を抱えるようにして、畦の間に身を伏せる。僕は白い細い夫人の指先が、肥だめに浸す布団の汚水に濡れるのを我を忘れて、うっとりとして眺めた。夫人のその時の心理を想像して今ここに書くならば、次のようなものであったろう。

夫人は灼熱の炎の中であって手にした布団の、絶え間なく降りかかる火の粉舞い降りてくすぶるのを、黄土色の水面に周囲の熱気のせいか泡の漂う汚水に、ざんぶと浸すのであった。一瞬、悪臭の立つを嫌わず彼女は愛児菊子を抱き、かさかさとした鳴る藨の蔓の、うねの間に身を臥せるのであった。

黒髪が垂れて額を覆い、その白きうなじの後れ毛も、灼熱の空気の震えに微かになびくのであった。深窓に生れ育ち、女の貞淑を学び、育はまれた彼女は、今ここに汚水にまみれた布団に身を包みながらも、女の臥する姿

の他人に見られまいとする、ゆかしき心の他の何ものでもない。やがて汚液は夫人の着衣透して、その白き肌に滲みるであろう。あふれる涙は頬伝う暇もなく既に渴れ果て、艶やかな黒髪に耐え間なく振りかかる火の粉と、めらめら火焰を吹いて落ち来る木柱におののきながら、夫人は火炎責めの渦中に、その美しき身を置くのであった。

汚濁の液の悪臭を身に浸しながら夫人は飢餓と弾丸の嵐の中で戦う夫を想っていた。この汚辱と炎熱の火の責めの中で、たとえ顔中水泡に満つるとも、赤き火傷に醜く脹れるとも、愛児菊子を守り、母として、また軍人の妻として耐える事が夫への愛の証しであると思う。

あなたへの愛の証しのために、私はこの苛酷な火責めの中に耐えるのでございます。あなただけに捧げた肌を、今、汚濁の水は乳房を腹を浸して参ります。でも、いいのでございます。あなたへの愛の証しのために私は生きるのです。

夫人の白き頬が輝き、神々しいまでの美しさが漂うのであった。

夫人は瞳を閉じ炎焦の責めに耐えた。も早髪にかかる火の粉も、身を浸す汚濁も、すべ

て苦痛ではなかった。むしろ愛の証しのための、愉悦へと変ってゆくのであった。

× × ×

歴史は人類の加虐と被虐の繰り返しの中で造られたと僕は思う。目撃した火責めの場面は今尚、コールドタールの焼けるような一種独特の強烈な匂いを伴って蘇ってくる。また僕が同じ小学生の頃、尊敬していた女先生の背に、戦争直後の蔓延していた虱の這うのを見て愕然とし、僕は正視出来ずに、その場から逃れた事を思い出す。運命の辱しめか天の虐げか、力なき人々は常に運命の虐げに責められる。しかし僕達は求めぬ責めに応じる事はないのだ。

楽しき被虐と加虐は性の快楽追究の延長線であると先般の本誌に誰かが書いた。全く、その通りであると思う。

僕はまた、君をしてイメージの中で責めるであろう。

編集部のお許しがあれば毎号イラストでの責めを君に捧げたい。この文を書いている間も、ふつふつとイメージの場面が浮ぶのだ。

変な文章を書いているよりも、僕には絵筆の方が合っているのかも知れぬ。

では、元気でいろよ。

(了)